

白百合女子大学博士(文学)学位請求論文

トマス・ハーディの小説世界—登場人物たちに描き込まれた
国際事情と「グレート・ブリテン島」的世界

橋本史帆

2016 年度

目次

目次	i
序章	
第1節 本論文の目的と問題設定	1
第2節 先行研究と本論文の位置付け	9
第3節 本論文の構成	15
第1部 登場人物たちとヨーロッパ諸国及びイギリス植民地	
第1章 『狂乱の群れをはなれて』—バスシバの結婚とウェザベリ農場の行方	19
はじめに	19
第1節 ウェザベリ村と農場主バスシバについて	21
第2節 トロイの出自	26
第3節 トロイとオウクとボールドウッドの農場への関わり方	28
第4節 ふたつの農場の実権をめぐる	33
おわりに	36
第2章 『ラッパ隊長』と「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」—外国人兵士たちの意味するもの	38
はじめに	38
第1節 当時のイギリス軍の外国人兵士たちと作中の外国人兵士たち	39
第2節 『ラッパ隊長』におけるアンと外国人兵士たち	43
第3節 「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」におけるマテウスとクリストフ	46
第4節 グールドを選んだフィリスの決断をめぐる	50
おわりに	53
第3章 『日陰者ジュード』—ジュードとスーの「事実婚」を中心にして	57

はじめに	57
第1節 ジュードとアラベラの結婚と離別	58
第2節 アラベラとカートレットの結婚	63
第3節 ジュードとスーの「事実婚」とリトル・ファーザー・タイムをめぐって	65
第4節 リトル・ファーザー・タイムによる殺人事件の顛末	73
おわりに	75
第2部 登場人物たちとイギリス	
第4章 「運命と青いマント」ーインド高等文官とオズワルド	80
はじめに	80
第1節 作品のストーリー展開における矛盾点	81
第2節 インド高等文官としてのオズワルド	84
第3節 オズワルドに対するアガサとハンフリーの思惑	87
第4節 オズワルドの帰国の余波	89
おわりに	90
第5章 『カスターブリッジの町長』ー時代の変遷と町長の交代劇	93
はじめに	93
第1節 カスターブリッジにおけるヘンチャードとファーfrey	95
第2節 スーザン親子の遍歴	101
第3節 カスターブリッジにおけるルセッタ	107
第4節 ヘンチャードの没落	110
第5節 ファーfreyとエリザベス＝ジェインの結婚	113
おわりに	115
第3部 登場人物たちにおける「グレート・ブリテン島」的世界	
第6章 『帰郷』ークリムとユーステイシアのエグドン・ヒースへの回帰をめぐって	120
はじめに	120

第1節	エグドン・ヒースとその住人たち	121
第2節	クリムのエグドン・ヒースへの帰郷と改心	125
第3節	エグドン・ヒースとユーステイシア	132
第4節	エグドン・ヒースにおけるユーステイシアの死と再生	138
	おわりに	141
第7章	『ダーバヴィル家のテス』—テスとエンジェルの和解	145
	はじめに	145
第1節	アレックの家系とテスの子ソロー:ユダヤ人の血	146
第2節	テスと「グレート・ブリテン島」的世界	152
第3節	エンジェルにとってのブラジル	156
	おわりに	163
	結章	166
	主要参考文献一覧	174
	初出一覧	187

序 章

第 1 節 本論文の目的と問題設定

イングランド南部に位置するドーセット州(Dorset)出身のトマス・ハーディ(Thomas Hardy, 1840-1928)は、1871年に『窮余の策』(*Desperate Remedies*)¹で小説家としてデビューした。これ以降、彼は順調に作家活動を続けたが、1895年にオズグッド、マキルヴェイン社(Osgood, McIlvain & Co.)から出版した1巻本『日陰者ジュード』(*Jude the Obscure*)が、世間から厳しい批判を受ける。その理由は、この小説が、一般的に受け入れられていた当時の結婚制度や性道徳などをめぐり、物議を醸しだす内容を含んでいたからである。この抗議にも等しい批判を受けたハーディは、1892年10月から12月まで『イラストレイティッド・ロンドン・ニュース』(*Illustrated London News*)紙に掲載した“The Pursuit of the Well-Beloved”と題する小説に大幅な修正を施し、それを1897年3月に『恋の霊』(*The Well-Beloved*)と改題して出版したあと、小説家としての経歴に終止符を打った。そのあと、1928年に世を去るまで、彼はもっぱら詩だけを書くことになる。

ハーディの小説の時代設定は、主に、ナポレオン戦争(Napoleonic Wars, 1799-1815)期からヴィクトリア女王(Queen Victoria, 即位期間: 1837-1901)の治世であるヴィクトリア朝期までの約1世紀にわたっており、登場人物たちのほとんどは、農場経営者、自作農民、農業労働者、商人や職人といった一般庶民である。小説の舞台は、ハーディの出身地ドーセット州とその周辺地域の町や村である。作者はその舞台の土地を、5世紀半ば頃に大陸から渡来してきたアングロ・サクソン人たちによって建国された「7王国」(Heptarchy)²のひとつであり、イングランド南部に6世紀初め頃出現し、9世紀頃に「7王国」を統一した「ウェセックス王国」(Kingdom of Wessex)にちなみ、「ウェセックス」と名付けた。そして、その「ウェセックス」を舞台にしたハーディの14の長編小説と4つの短編集が、1912年から1914年の間にマクミラン(Macmillan)社からウェセックス版(Wessex Edition)全集として出版されて以降、それらは「ウェセックス小説」(Wessex Novels)と呼ばれるようになった。

ハーディは、生まれ育った故郷の自然やそこに住む人々の生活や文化に強いこだわりを持ち、それを反映した「ウェセックス」の世界をその小説世界に構築した。彼が2作目の長編小説『狂乱の群れをはなれて』(*Far From the Madding Crowd*, 1874)のウェセックス

版序文で、「ウェセックス」は「半ば現実で、半ば理想の郷」(“partly real, partly dream-country”)(3)³であると断っている通り、実在しない町や村やその地で生計を営む人々が、彼の故郷特有の習慣や行事や古い迷信、そしてその土地固有の方言と共に描きあげられている。さらにまた、ハーディは故郷とその近隣地域に実在した建物や遺跡を作品中に描き入れた。例えば、6世紀末にキリスト教が伝来する以前、異教徒たちが太陽を崇拜するために使用した神殿やドルイド教の礼拝堂として使用されていたと考えられているストーンヘンジ、紀元前にグレート・ブリテン島にやって来たローマ帝国の人々が建設した道路や円形競技場、中世に建設された大聖堂や修道院、ナポレオン戦争時にフランス皇帝ナポレオン・ボナパルト(Napoléon Bonaparte)率いるフランス軍の侵攻に備えるために造られた見張り台などである。ハーディが彼の故郷にあえて「ウェセックス」という固有名詞を与えたのも、彼の故郷がグレート・ブリテン島の歴史と伝統を受け継いでいるとみなしていたからである。

「ウェセックス」を舞台とするハーディの小説では、偶然としか思われぬ出来事が次々と発生し、それによってストーリーが展開する。とりわけ、ある人物が突然海外に渡って物語から姿を消してしまったり、長い間消息不明であった人物が外地から何の前触れもなく戻ってきたり、その場にいるはずのない人物がそこに偶然居合わせる等という例が印象に残る。例えば、結婚間もなく、夫が兵士として外地に行ってしまう。何年か経った頃、夫の戦死を知らされた妻は、その時まで彼女を支え続けてくれた男性との再婚を決意する。ところが結婚式直前、当の夫が突然戻ってくる。妻は夫にこれから別の男性と結婚しようとしていると告げると、それを聞いた夫は大きなショックを受けて死んでしまう。また、ある場合には、口論の末、妻と別居した男性が別の女性と夫婦同然の生活をしている時、外国に住んでいる妻から手紙を受け取る。そこには、彼と別れたあと、現在住んでいる国で彼との間にできていた子供を生んだことや、今では少年に成長したその子供を引き取ってほしいという内容がしたためられている。そして、その手紙を受け取るとすぐに、男性の家の前に外地の植民地からひとりでやって来た少年が現れる。こうして、男性とその彼と同棲している女性は、法的に結婚していないにもかかわらず、その子を息子として育てていくことになる。さらにまた、もうひとつの例としては、ある女性は、昔の恋人が植民地から故郷の村に戻ってきたことを知る。夫が外国に出かけ、それきり音信不通になっていたことから、女性は元恋人とよりを戻して再婚する準備をする。ところが突然、彼女は夫から家に戻ることを告げる手紙と荷物を受け取る。そこで女性は元恋人との結婚を

断念するが、当の夫はなかなか姿を現さない。そのあと何年も経ち、近くの川の堰で夫の遺体が見つかり、女性と元恋人は、ふたりの結婚式の当日に夫が誤って川に落ち、亡くなっていたことを知るのである。

以上のように、ハーディの小説のストーリーは、主として、不自然とか偶然としか言いようのない出来事によって織りなされている。そして、こうしたエピソードはそれぞれストーリー展開に新たな流れを作り出し、それまでのストーリーの行き詰まりを打開するかのように、テキストの中に組み込まれているように見える。この観点からハーディの小説世界を俯瞰すれば、彼の作品には、ギリシア悲劇における「デウス・エクス・マキナ」(Deus ex machina)を想起させる仕掛けが使用されていると言わざるをえない。

しかし、外国へ旅立ったり、そこから戻ってきたり、植民地が出身地であったりするこれらの登場人物たちは、単に「デウス・エクス・マキナ」として登場させられているだけなのだろうか。作者が、彼らをストーリー展開の中でそう思わせるような行動を取るのには、単に話を複雑にしたり、面白おかしくしたり、拡大したりすることだけにあるとするなら、その作品世界は作者の思い付きに左右されていて、文学作品としてあまりにも恣意的なストーリー展開になっていると批判されてもおかしくはない。しかしそうではなくて、作中人物がストーリー展開で、例えばオーストラリアへ旅立ったり、ブラジルに渡ったり、あるいはカナダからやってきたりするように書かれているのは、彼らとそれらの国や地域が、作者の作品構想の中で何らかの役割を担っているからと考える方が妥当なのではないだろうか。

実際、ハーディ小説の登場人物たちは、彼らが生まれた国や、彼らに関わる諸外国や植民地や地域などの属性を持つように造型されている。例えば彼らの中には、イギリスのイングランドで生活しているにもかかわらず、生まれ育った国や地域の言語を使用したり、移住や仕事のために移り住んだ国の文化や風習を受け入れ、実践していたりしている。こうしたところから、登場人物たちを、彼らは何らかの関わりを持つ国や地域と結び付けて読むことができると思えるのである。こうした関係性を本論文は重要視し、そこに修辞学で使用される「メトニミー」との類似性を認め、それを「メトニミー的關係」と呼ぶ。ヘイデン・ホワイト(Hayden White)は『メタ・ヒストリー』(*Metahistory: The Historical Imagination in Nineteenth-Century Europe*, 1975)で、「メトニミー」の言語的規約として「付帯性」(“extrinsicality”)(36)を挙げているが、本論文で使用する「メトニミー的關係」は、まさにこの「付帯性」に呼応するものである。また、デイヴィッド・ロッジ(David Lodge)

は『現代の記述の諸相』(*The Modes of Modern Writing: Metaphor, Metonymy, and Typology of Modern Literature*, 1977)で、「ロマン派と象徴主義の記述はメタファー的であり、リアリズムの記述はメトニミー的である」(“Romantic and symbolic writing is metaphoric, and realist writing is metonymic.”)(79)と述べている。リアリズム文学と言われる作品と同様に、時代の歴史的・社会的現実を描いたハーディの小説もまた、メトニミー的特性を持っているのである。

本論文著者の知る限り、こうした観点からハーディの小説群を読もうとした前例はない。「ウェセックス」から植民地やその他の外国に移住し、それらの土地で一定の期間生活体験を積んだあと、再び戻ってくることになる登場人物たちや、植民地や外国で生まれ育ったあと、「ウェセックス」にやってくる人物たちの言動や人物造型をとらえるには、この視点が必要であると言えよう。そして、この視点からハーディの小説群を分析すると、作中で植民地や外国に向けて登場人物たちが旅立っていたり、そこから帰ってきたり、外国人が唐突に登場したりするというストーリー展開には、19世紀のイギリス本国と、イギリス植民地や諸外国との国際的な関わり合いが反映されていると思われる。

しかし、登場人物たちの中には、単に国際事情からではなく、イギリス本国そのものの国内状況からみることによって、適切に理解することのできる人物たちがいる。例えば『帰郷』(*The Return of the Native*, 1878)に登場する村人たちや、『ダーバヴィル家のテス』(*Tess of the D'Urbervilles*, 1891)の主人公テス・ダーベイフィールド(Tess Durbeyfield)などがそうである。彼らは、「グレート・ブリテン島」という国内の歴史的事情と結びつけて解釈しなくてはならない。ちなみに、ここで言う「グレート・ブリテン島」とは、有史以前にイベリア半島から伝播した巨石文化の時代から、9世紀頃に建国された「ウェセックス王国」が1066年に「ノルマン征服」(Norman Conquest)と呼ばれるノルマン人による征服を受けて消滅し、ノルマン王朝が成立するまでの、いわば「イギリス」発祥の地と言ってもよい世界のことである。そして本論文では、この世界を今日言うところのグレート・ブリテン島と区別するために、「グレート・ブリテン島」と表記してある。

以上の点からすると、小説群の登場人物たちの人間模様は、以下のふたつのタイプの世界とからんでいる。ひとつは、ハーディがみた19世紀イギリスと、その植民地や諸外国との間で成立している世界で、もうひとつは、「ウェセックス」の中にみられる彼の祖国の原型と目される「グレート・ブリテン島」と通底する世界である。この点を検証するため、はじめに、ハーディが主に小説家として健筆をふるっていた時期、つまり1870年代から

1890年代までのおよそ30年間にわたり、イギリスが展開した対外政策の主なものについて展望しておく。

この時期は、イギリスがその軍事力、経済力に物を言わせて、他国を威圧するような外交政策を取った帝国主義の時代にあたる。その象徴的な出来事のひとつは、首相ベンジャミン・ディズレーリ(Benjamin Disraeli)が1875年にスエズ運河株を買収し、大英帝国の要となる「エンパイア・ルート」(Empire-route)を確保するという外交政策を打ち出したことである。また、彼が1876年にヴィクトリア女王に「インド女帝」(Empress of India)の称号を贈ったことも、インドが大英帝国の傘下に入っていることを世界に向かってアピールすることになった。1890年代に入ると、イギリスはエジプトのカイロとケープ植民地のケープタウン間に鉄道を敷設し、両都市間の国々を植民地化していくアフリカ縦断政策を実行した。加えて、イギリスはこの政策を推し進めるうえで、いわゆるボーア戦争(Boer War, 1899-1902)を起し、オランダ人移民の子孫であるボーア人によって作られたオレンジ自由国とトランスバール共和国を征服した。その一方で、イギリスの強引な植民地拡大政策に対する抵抗も各国で起こっていた。例えば1881年9月に、イギリスとフランスの共同管理下にあったエジプトでは、この状況に反発したエジプト人軍人アラビー・パシヤ(Arābī Pasha)により組織された抵抗運動が起き、親英政権が倒されている。

イギリス国内に目を向けると、ヴィクトリア朝期に急激な人口増加という問題を抱えていたイギリス政府は、その解決策のひとつとして、帝国の拡大と共に膨大な数の移民を植民地などの海外に送り出した。イギリスは、特に他のヨーロッパの国々に比べて、多くの移民をアメリカや白人入植地であったカナダ、オーストラリア、ニュージーランド、またはアフリカやインドなどに国策として移住させている(Marjory Harper and Stephen Constantine 3)。イギリスから海外に渡った移民の多くが、国内において貧困層に属する者や孤児といった社会的弱者であり、移住先の過酷な環境に適応できずに命を落とす者も少なくなかった。そして、1870年から第1次世界大戦が始まった1914年までの間に、移住者のおよそ40%がイギリスに戻ってきているという数字もあげられている(Dudley Baines 39-42)。

ハーディがこのようなイギリスの植民地政策や移民事情に関心を示していたことは、その作品からも窺い知ることができる。例えば、この時期に書かれた「運命と青いマント」("Destiny and a Blue Cloak", 1874)には、大学に進学することなく、インドの高級官僚であるインド高等文官(Indian Civil Service)、通称ICSを目指して勉学に励み、ついにその

資格を取得した一般庶民のオズワルド・ウィンウッド(Oswald Winwood)という人物が登場する。いわば彼は、植民地支配に便乗して立身出世を成し遂げることを夢見ていた一般イギリス人の表象となっている。さらに、本論文で取り上げる作品には、移住や仕事のために渡った先の海外の土地からイギリスに戻ってくるイギリス人や、植民地で生まれ育った人物、外国人の血をひく人物などが多数登場してくる。

ハーディがこうした現実の社会情勢に素材を求めたのは小説だけではなく、彼の多くの反戦詩でもそうだと言える。例えば、詩集『過去と現在の詩』(*Poems of the Past and the Present*, 1901)に収められた「乗船」(“Embarcation”)には、ボーア戦争の戦場に向かうために船に乗り込む兵士と、涙を流しながら彼を見送る家族の情景が描かれている。この詩には、19世紀末のイギリスが推進した植民地拡大と覇権主義に対するハーディの反発が明白に描かれており、この点で、パトリシア・インガム(Patricia Ingham)が指摘しているように、ハーディは「反帝国主義者」(“anti-imperialist”)(33)の立場に立っているとと言える。このように、ハーディの小説と詩は、主として、イギリスを取り巻く国際事情とその影響下にあるイギリス本国の内情を描出しており、個々の作品の意味の表層下に、19世紀のイギリス本国と、それと関わりを持つ諸地域との関係性に対する彼の見解を表出しているといえることができるのである。

以上のことに加え、ハーディの小説には外国諸地域ではなく、「グレート・ブリテン島」を彷彿とさせる世界を舞台にしているものもある。例えば、本論文第6章と第7章で取り上げる『帰郷』と『ダーバヴィル家のテス』の登場人物たちは、「グレート・ブリテン島」時代を思わせる文化的風土の中で日常生活を送っている。そして、彼らが織り成す人間模様を検証すると、当時のイギリスがすでに失っていた古き良き「グレート・ブリテン島」を想起させる世界が構築されているとすることができる。

これらの展望を踏まえ、本論文は、当時の政治的・経済的・社会的状況を念頭に置きながら、登場人物たちの言動に焦点を当て、イギリスと、その植民地と諸外国との国際的力学の在り様を追究する。さらにまた、「ウェセックス」の地にみられる「グレート・ブリテン島」と通底するところのある風土を「グレート・ブリテン島」的世界と呼び、ハーディがそのような世界をどのように解釈し、同時代のイギリスを小説世界でいかに描出しているかを明らかにしていく。

本論文で取り上げる作品には、概略すると、「ウェセックス」の町や村に住むイギリス人以外に、以下のような登場人物が出てくる。

- (1) 故郷の地を離れて植民地や外国に渡り、再び故郷に戻ってくるイギリス人
- (2) 植民地や外国から「ウェセックス」にある町や村にやって来た外国人
- (3) 「ウェセックス」の町にやって来たスコットランド人
- (4) 外国籍の親を持つイギリス人、あるいは外国人の血を引いていると思われるイギリス人

これらの登場人物たちには、それぞれが生まれ育った国や地域、または経済的により豊かな暮らしや人生の理想を追い求めて渡った国、あるいは親や祖先の出身国などが抱えていた諸事情が、何らかの形で反映されていると思われる。例えば、(1)の登場人物たちには、移住や仕事のために渡った国に希望や共感を抱き、その地に同化して新たな自己を形成しようとする登場人物たちがいる。『帰郷』のクレメント・ヨーブライト(Clement Yeobright)、通称クリム(Clym)の場合、彼は生地のエグドン・ヒース(Egdon Heath) (以下、エグドンと略記)からパリに渡り、そこで何年か仕事に従事したのち、故郷に戻ってくる。彼はフランスで学んだ思想を基に、生地に住む人々を教育しようと野望を抱いている。また、『ダーバヴィル家のテス』では、エンジェル・クレア(Angel Clare)という人物が、結婚当日の夜、妻となったテスから過去に未婚のまま子供を出産したことがあると知らされる。これにショックを受けたエンジェルは、彼女を置き去りにしてブラジルに移住してしまう。しかし、その地で新たな体験を積むことにより己の非を悟り、改心して彼女の所に戻る。

(2)の例としては、『ラッパ隊長』(*The Trumpet-Major*, 1880)に登場するスウェーデンやハノーヴァーなどの出身者をあげることができる。彼らはイギリス軍に所属することになった外国人兵士たちで、ナポレオン戦争期に生じたそれぞれの出身地の政治的事情を背負っている。さらにまた、『カスターブリッジの町長』(*The Mayor of Casterbridge*, 1886)の主人公マイケル・ヘンチャード(Michael Henchard)の娘で、植民地カナダ生まれのエリザベス＝ジェイン(Elizabeth-Jane)もこの部類に入る。彼女はカナダ文化の影響下で成長したあと、カスターブリッジに移住してくる。そして彼女は、カナダとイギリスの狭間にあって、文化的差異から生じる諸問題を露呈する人物でもある。

同じく、『カスターブリッジの町長』に登場するドナルド・ファーフレイ(Donald Farfrae)は(3)の例であり、旅の途中、カスターブリッジにやってきたスコットランド人で、国籍上イギリス人ではあるが、スコットランドの地域性を多分に身に付けている。

(4)の例として、『狂乱の群れをはなれて』のフランシス・トロイ(Francis Troy)をあげることができる。イギリス人貴族を父に、パリ出身のフランス人を母に持つ混血児トロイは、

流暢にフランス語を操る、はなはだしくフランスかぶれした人物である。

以上、本論文で取りあげる作品の主要な登場人物たちと、彼らは何らかの関わりを持つ国や地域などを一覧表にまとめると、次のようになる。ただし、「運命と青いマント」の場合、オズワルドはインドの高級官僚としてインドに赴任することになっていた人物であるが、実際は病気のためにインド行きを断念し、イギリスに留まり、しばらく療養したあと、インドに出発することになる。しかし、作中では、彼の婚約者アガサ・ポリン(Agatha Pollin)からみて、彼は初めからインドに滞在しているものとしてストーリーが展開されている。したがって、オズワルドは植民地インドと宗主国イギリスとの関わりにおいて論じることができる人物であるため、表に加えてある。

作品名(出版年)	「ウェセックス」の故郷を離れて植民地や外国に渡り、再び故郷に戻ってくるイギリス人	植民地や外国から「ウェセックス」にやって来た外国人	「ウェセックス」にやって来たスコットランド人	外国籍の親を持つイギリス人、あるいは外国人の血を引いていると思われるイギリス人
『狂乱の群れをはなれて』(1874)				トロイ
『ラッパ隊長』(1880)		外国人兵士たち		
「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」(1890)		マテウス、クリストフ		
『日陰者ジェード』(1895)	アラベラ	リトル・ファーザー・タイム、カートレット		
「運命と青いマント」(1874)	オズワルド			
『カスターブリッジの町長』(1886)	スーザン	2代目エリザベス＝ジェイン	ファーフレイ	ルセッタ

『帰郷』(1878)	クリム			初代ユーステイシア
『ダーバヴィル家のテス』(1891)	エンジェル			

* 作品題名は、本論文で取り上げる順番に従った。

本論文は、植民地を含めた諸外国に出ていったが、結局、故郷の「ウェセックス」に戻ってきたり、外地から渡英してくる人物たちが登場する作品を取り上げることになる。したがって、全体で 14 編あるハーディの長編小説の内、『狂乱の群れをはなれて』、『ラップ隊長』、『日陰者ジュード』、『カスターブリッジの町長』、『帰郷』、『ダーバヴィル家のテス』の 6 編が論述の対象となる。さらに、短編小説の場合、46 編ある内の「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」(“The Melancholy Hussar of the German Legion”, 1890)と「運命と青いマント」の 2 編を取りあげる。作品の登場人物たちの出自や、彼らが生まれ育った場所、移住した先の地域や国、祖先や両親がやってきた元の国の事情などに言及しながら、彼らの言動を中心に分析していく。そして、登場人物たちが繰り広げる人間模様を解明することで、ハーディが、ヨーロッパ諸国や植民地インド、オーストラリア、そしてカナダに関する国際事情と、「ウェセックス」にみられる「グレート・ブリテン島」的世界を、同時代の視点からどのように小説化しているか明らかにすることができると期待される。

第 2 節 先行研究と本論文の位置付け

従来のハーディ研究の典型は、作品の社会性や同時代性に着目したダグラス・ブラウン(Douglas Brown)の *Thomas Hardy*(1954)や、アーノルド・ケトル(Arnold Kettle)の *An Introduction to the English Novel*(1954)にみることができる。これらは、ハーディの小説の舞台となったイングランド農村社会に台頭してきた新しい動向に注目している。中でもブラウンは、19 世紀イングランド社会全体の変化と農村共同体自体の変貌という脈絡からハーディの小説を分析し、それは「農村の生活様式と都市の生活様式のぶつかり合い」(“a clash between agricultural and urban mode of life”)(30)を描出していると述べている。その一方で、レイモンド・ウィリアムズ(Raymond Williams)の『田舎と都会』(*The Country and the City*, 1973)と、彼の娘であるメリン・ウィリアムズ(Merryn Williams)による *Thomas Hardy and Rural England*(1972)は、ブラウンとケトルの研究はハーディを社会

情勢との関係から論じた優れた研究業績であるとしつつも、それより詳細にハーディの小説をめぐり、経済的・社会的実情の観点から持説を展開している。ハーディ文学の主題を都会の田舎への越境とみるブラウン説に異論を唱えた R.ウィリアムズは、当時の農村社会には、土地所有権を失うことで家や職まで失い、その結果、貧しくなる者もいれば、土地を相続して豊かになる者もいたこと、そしてそのような経済的変動に伴って起きた階級移動にみられるように、「農村生活が変化しつつあった」(“the changing nature of country living”)(200)と指摘している。そのうえで、ハーディの小説は、単に、「都会化」(“urbanism”)(209)の影響を受けて崩壊していく農村社会を描いた悲劇物語として読むことはできないと結論付けている。M.ウィリアムズは、イングランド南西部の経済状況、農業や酪農の実態、労働者の労働環境と労働組合の成立、人口変動など、経済学的・社会的調査を綿密に行い、ハーディが農村地域の人々や彼らの生活に小説家として鋭い反応を示していたと評価している。また彼女は、特に階級に注目し、ハーディの描いた社会は財力や結婚や教育を通じて、階級間の移動が可能な資本主義化された社会であったと述べている(115)。これらブラウンを筆頭とする研究者たちは、ハーディの小説が牧歌的な田舎生活を描いているのではなく、当時の農村社会の現実をそのまま描出しているとする点では見解が一致している。

さらに、ハーディの小説作品を当時の社会的現実と関連させて分析した研究者として、ピーター・ウィドウソン(Peter Widdowson)とジョージ・ウォットン(George Wotton)がいる。ウィドウソンは *Hardy in History: A Study in Literary Sociology*(1989)において、「弱者であろうと強者であろうと、彼ら(登場人物たち)を支配しているのは、……社会的・経済的権力の変動を「不条理で」、恣意的で、分裂的に再生産する階級制度である」(“What controls them [characters], weak or powerful, . . . is a class system which reproduces the dynamics of social and economic power in an ‘absurd’, arbitrary, and divisive way.”)(213-14)と言い、登場人物たちの織り成す人生模様は、彼らの属する階級によって大きく左右されていると指摘している。他方、ウォットンは、*Thomas Hardy: Towards a Materialist Criticism*(1985)の中で、『カスターブリッジの町長』で言及されている「スキミティライド」(“skimmity-ride”)(256)⁴と呼ばれる、不貞を犯した男女の姿をかたどった人形を担いで町中を練り歩く民衆の風習に注目し、庶民のたくましさについて論じている。そして、ハーディの小説では、経済的・社会的弱者である一般人が、時には、彼らより経済力があり、高い地位にある人々の人生をも左右するほどの力を発揮することがある点に

注目している(60-73)。

本論文は、経済的・社会的視点からハーディの小説作品を論じている点で、ブラウンらの先行研究の系譜に入る。しかし、本論文著者にとっての不満は、上述した先行研究が、階級、結婚、ジェンダーなどの問題や、農村社会が直面していた経済的・社会的変化をイギリス国内の出来事として論じるにとどまり、グローバルな視点から考察していないことにある。実際、19世紀イギリスでは、その植民地や外国から戻ってきたり、渡ってきた人々が、仕事やイギリス人との結婚などを通じて、異なる文化や価値観をイギリス社会に持ち込んでいた。また、植民地や外国経済がイギリス本国経済を支えたり、ある場合には、イギリス本国経済に依存したりすることもあった。しかし、ハーディの小説世界に組み込まれているこのようなグローバルな情勢は、先にあげた先行研究においてはほとんど触れられていないのである。そこで本論文では、テキストを同時代のイギリスの植民地の実情や国際事情と関連付けて読み解き、ハーディの国際感覚がどのようなものとして描出されているかにも言及する。

以上の研究動向に対して、これらとは異なる視点からハーディ作品を検証しようとする試みもなされている。そのひとつが、文学批評・研究の主流のひとつになったポストコロニアル批評である。この批評は、1970年代以降、エドワード・サイード(Edward Said)による『オリエンタリズム』(*Orientalism*, 1978)や『文化と帝国主義』(*Culture and Imperialism*, 1993)といった著作の影響を通して、その潮流を強めていった。なお、ウィドウソンがポストコロニアル批評の立場からのハーディ研究が進んでいないと指摘しているように、従来、ハーディの作品は、植民地や帝国主義に視座を据えて論じられることは少なかった(“Hardy and Critical Theory” 89)。しかし、2012年に刊行されたジェイン・L.ボウナス(Jane L. Bownas)による *Thomas Hardy and Empire: The Representation of Imperial Theme in the Work of Thomas Hardy* は、ハーディの小説・詩・詩劇を当時の社会的・文化的・歴史的状況と結びつけて論じた研究書である。この著書でボウナスは、昔ながらの異教的な風習を留めている「開発の遅れた」(“primitive”)(89)イングランド農村社会と、政治的・経済的な影響力を持ち、知性豊かで「文明化された」(“civilized”)(89)ロンドンを中心とした都市社会との間の相克や、ジェンダー問題、階級や人種間の対立などを、イギリス国内の植民地主義と捉えて論述している。さらに近年、日本においても、鈴木淳「魔女は溺死するか?—『帰郷』を政治的視点から再読する」(2009)、野村京子「『テス』におけるブラジル表象—破壊と再生—」(2010)、そして坂田薫子「『微熱の人』と大英

帝国—ポストコロニアル批評で読むトマス・ハーディ」(2012)といった、ハーディの小説を人種や植民地の問題と結びつけて分析する論考がみられるようになってきた。本論文も、ヴィクトリア朝時代の植民地に対する見方を分析し、小説に登場する植民地出身の人物の描かれ方について追及していくことにもなる。

また、小説の舞台とされる村や町が、異教的な伝統や風習を保持しているように描かれている点に着目し、作中に描きこまれたそのような風土に対するハーディの見解を分析している論考がある。まず、シャーリー・A.ステイヴ(Shirley A. Stave)の *The Decline of the Goddess: Nature, Culture, and Women in Thomas Hardy's Fiction*(1995)は、ハーディの5つの長編小説を主に取り上げ、それぞれの作品の舞台となった町や村が異教的な伝統を受け継いでいる点に着目し、そこに住む人々の生き様を分析している。ステイヴは『帰郷』を論じた章で、小説の舞台であるエグドンにおいて、異教的な風習に囚われている住民の価値観と、キリスト教思想を基準にして培われたヴィクトリア朝の価値観との間の相克を論じている(62-63)。さらに、先述のボウナスは、*Thomas Hardy and Empire: The Representation of Imperial Theme in the Work of Thomas Hardy*で、ハーディの小説では、自然や異教の神々への信仰から形成された風習を実践している村の住民たちを、「本能」(“instinctiveness”)(94)に従って生きる人々であるとしている。そして、ハーディがそのような人々に対して、「共感的」(“sympathetic”)(98)な反応を示しているとも言う。こうした成果を踏まえ、本論文では、小説に登場する異教的な伝統文化を引き継いでいる「ウェセックス」の村などを、「グレート・ブリテン島」の名残を留める土地として捉えていく。そして、そのような村などで日々の生活を営んでいる人々や、それらとの関わりを持つ人々の生き方や人間的交流を通じて、「グレート・ブリテン島」の面影を残した土地が、作品の意味世界の構築においてどのような役割を果たしているかを考察する。

本論文では、課題遂行のために、作中に登場する人物たちの出自と、出身地や移住先の国に着目することになるが、その際に注意しなければならないことがある。それは、テキストがしばしば改訂されていることである。ハーディの作品では、初め雑誌に掲載され、次いで単行本として出版され、さらに全集になるまでの間に、テキストに何回か修正が施されていることがある。中でも、『帰郷』に登場するユーステイシア・ヴァイ(Eustacia Vye)の出自は、たびたび変更されている。このようなハーディの小説の改訂のプロセスについて精査したのが、サイモン・ギャトレル(Simon Gatrell)による *Hardy the Creator: A Textual Biography*(1988)である。ギャトレルは、ハーディの原稿が全集として刊行される

までの過程で生じた改訂の経緯を丹念に辿っている。そして、出版に関する経済問題や作品内容の道徳的問題をめぐり、ハーディと編集者と読者との間に繰り広げられた攻防を詳述し、ハーディが自作にかけられた圧力にどのように抵抗し、己の構想する作品を書き上げることに徹しながらも、現実にはどのように妥協していったかを検証している。また、マーティン・レイ(Martin Ray)による *Thomas Hardy: A Textual Study of the Short Stories*(1997)は、ハーディの4つの短編集、つまり、『ウェセックス物語』(*Wessex Tales*, 1888)、『貴婦人たちの物語』(*A Group of Noble Dames*, 1891)、『人生の小さな皮肉』(*Life's Little Ironies*, 1894)、『変わりてはた男とほかの物語』(*A Changed Man and Other Tales*, 1913)の改訂の経緯について精査している。レイは、短編小説の原稿や雑誌に掲載されたテキスト、さらに全集としてまとめられる過程で施された細かい修正を追跡調査し、ハーディと編集者とのやり取りの経緯を論じている。ローズマリー・モーガン(Rosemary Morgan)は *Cancelled Words: Rediscovering Thomas Hardy*(1992)において、中流階級の読者層を持ち、道徳的で教育的なメッセージを届けることを目的とした『コーンヒル』(*Cornhill*)誌に掲載されることになった『狂乱の群れをはなれて』を執筆するうえで、ハーディが編集者レズリー・スティーヴン(Leslie Stephen)の指示に従い、中流階級の価値観や道徳観に抵触しないようにテキストを書き換えたことを実証している。

ギャトレル、レイ、そしてモーガンらによるテキスト改訂過程の分析によって明らかになったことは、ハーディが行った階級社会批判や男女の性愛などの表現内容が編集者たちの検閲対象になり、そのためハーディは、表現や場面設定に様々な修正を加えていったということである。このような改訂に関する詳細な情報は、本論文が対象とする作品の登場人物たちが関わっている国や地域に関する変更を確認する際に有用な基礎資料となり、作品理解の大きな助けとなっている。

本論文の特徴のひとつは、第1節で述べた追究課題に答えるために、長編小説だけでなく短篇小説も論考の対象としている点にある。これは本論文のテーマと連動しているのだが、従来のハーディ研究からすれば多少異例のことと言える。なぜなら、ハーディ研究はあくまで長編小説が中心であり、短編小説に対する研究はそれほど進んではいないうえ、それらに対する評価も低いからである。例えば、代表的なハーディ研究者のひとりであるアービング・ハウ(Irving Howe)は“A Note on Hardy’s Stories”(1966)で、ハーディは短編小説を「生活の糧を得るために」(“to earn living”)(260)書いていて、「大勢の読者を喜ばせたいとする目的や欲望がおざなり」(“the casualness of purpose and desire to please a

large audience”)(260)になっていると酷評している。さらに、「近代短編小説の研究からハーディの名前を省くとしても、それは妥当なことであろう」(“to omit his name from a study of the modern short story would be plausible.”)(259)とまで言っている。

一方で、ハーディの全短編小説を初めて体系的に論じ、短編小説家としてのハーディの一面を評価しようとしたのが、クリスティン・ブラディ(Kristin Brady)による *The Short Stories of Thomas Hardy: Tales of the Past and Present* (1982)である。ブラディはその自著の中で、本論文でも取り上げる「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」が収められた短編集『ウェセックス物語』を「牧歌的な歴史物」(“Pastoral Histories”)(2)であり、この短編集は「農村の過去を垣間見たいという読者の郷愁」(“the reader’s nostalgic impulse for a glimpse of the rural past”)(5)を満たしてくれると述べている。

このように、ハーディの短編小説は従来研究に値しないと評されたり、読みごたえのないものだと軽視されたり、あるいは、単に自然豊かな農村社会を描いただけの牧歌的な作品群にすぎないとされてきた。しかし、本論文で取り上げる2編の短編小説に注目すると、それらは19世紀イギリスが行っていたインド支配をはじめ、植民地への移住、外国人に対するイギリス人の警戒心など、植民地を拡大させるイギリスの覇権主義や外国に対するイギリス人の心理状態を描出しており、本論文のテーマを論じるためには不可欠な作品であることが判明する。

最後に、ハーディの小説世界に係わる周辺資料として、以下の研究書に言及しておく。イギリス植民地への移住の実際、海外に渡ったイギリス人の当地での生活、彼らが帰国せざるを得なくなった諸事情などを論じたものである。まず、マジョリィ・ハーパー(Marjory Harper)とステファン・コンスタンティン(Stephan Constantine)による *Migration and Empire*(2010)には、19世紀から20世紀にかけて、イギリス本国からその植民地カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、アフリカ諸国に向かった移民の数や、彼らの職業や階層、年齢や性別、移住の理由、そして移住後の彼らの生活状況などを地域別に精査した結果が報告されている。また、著者のひとりハーパーが編集した *Emigrant Homecomings: The Return Movement of Emigrants, 1600-2000*(2005)は、移民研究でそれほど追究が進んでいない、海外から戻ってきた移民者たちの実情について紹介した著書である。ここには、1600年から2000年にわたり、オーストラリアやカナダから戻ってきたイングランド人やアイルランド人、スコットランド人の帰国理由や植民地での生活状況、帰国してきた彼らを受け入れることになった家族の反応などについての調査結果が示されている。以上

の研究は、オーストラリアやカナダに移住することになった人々の移住理由や、政府が積極的に移住推進政策をとっていたこと、さらに、移住の現実や植民地からイギリスに戻ってきた人々についての諸々の情報を提供してくれる有益な資料である。

本論文は、上述した先行研究や、その周辺領域である歴史的視点からの研究成果を踏まえつつ、ハーディ研究史でそれほど論じられることのなかった植民地を視野に入れた研究に触れながら、ハーディ小説の読み直しを図るものである。とりわけ、登場人物たちとある国や地域がメトニミ的な関係にあるという読みのもとに、彼らの行う人間的営みを検証することで、ハーディの国際感覚が捉えた国際事情と、「グレート・ブリテン島」と通底する風土を持った同時代の祖国世界が、作中でどのように意味づけられ、小説世界を構築しているかを解明する。この追究を通して、本論文は、ハーディ研究の系譜に新たな一石を投じることができるのではないかと期待される。

第3節 本論文の構成

本論文は3部構成になっている。第1部第1章、第2章、第3章では、『狂乱の群れをはなれて』、『ラッパ隊長』、『憂鬱なドイツ軍軽騎兵』、『日陰者ジュード』の3つの長編小説と、ひとつの短編作品を取り上げる。この部では、登場人物たちの人物造型のあり方の実際を分析し、フランスを中心としたヨーロッパ諸国や植民地オーストラリアを、ハーディがどのようにみていたかを明らかにする。第1章では、『狂乱の群れをはなれて』の舞台ウェザベリ(Weatherbury)村で農場を営んでいるバスシバ・エヴァディーン(Bathsheba Everdene)と、彼女を恋い慕う羊飼いでイブリエル・オウク(Gabriel Oak)、ウェザベリに住むもうひとりの農場経営者ウィリアム・ボールドウッド(William Boldwood)、さらに、イギリス人兵士トロイの4人が繰り広げる恋愛模様を、本論文の研究課題を視野に入れながら分析する。特に、バスシバの結婚相手トロイの出自に着眼し、フランス人の血が流れているトロイに対するウェザベリの人々の反応について検討し、ウェザベリで起きる人間ドラマには、ハーディが捉えていたイギリスとフランスの関係性が反映されていることを論じていく。第2章では、ナポレオン戦争期を背景にした『ラッパ隊長』と『憂鬱なドイツ軍軽騎兵』を取りあげる。両作品には、ヨーロッパ各地出身でイギリス軍所属の外国人兵士たちが登場することから、彼らとイギリス人であるアン・ガーランド(Anne Garland)やフィリス・グローヴ(Phyllis Grove)の描かれ方に着目する。上記2作品に登場する外国

人兵士たちの出身国の事情を精査し、そのような外国人兵士たちとアン、あるいはフィリスとの関係を考察し、ハーディがイギリスとヨーロッパ諸国の関係をどのように作品化していたかを検討する。第3章では、『日陰者ジュード』の石工ジュード・フォーレイ(Jude Fawley)と彼の従妹スー・ブライドヘッド(Sue Bridehead)の「事実婚」や、ジュードと彼の最初の妻アラベラ・ドン(Arabella Donn)との結婚と別離、さらにまたアラベラとオーストラリア人カートレット(Cartlett)との結婚生活に着目する。イギリスとオーストラリアの間で展開される登場人物たちの出会いと別れ、結婚や離婚の経緯を分析し、宗主国イギリスと植民地オーストラリアの政治的主従関係において、ハーディがオーストラリアをどのように受け取っていたかを探る。そして、イギリスとオーストラリアに対する彼の見方が、人物造型の中にどのように反映されているかを論証する。

第2部第4章と第5章では、ハーディ自身が母国イギリスをどのように受け取っていたかを、植民地インドとカナダなどの諸外国との関係から明らかにしていく。第4章では短編「運命と青いマント」を取りあげ、主人公アガサの婚約者である一般庶民のオズワルドが資格試験に合格した、インド高等文官という職種について考察する。そして、アガサと結婚の約束をしたにもかかわらず、一向にインドからイギリスに戻ってこないオズワルドの帰郷の遅れと、ふたりが迎える破局について言及する。ふたりの関係を分析することで、イギリスという祖国が作中においてどのように捉えられているかを、インドとの関係と絡めて検証していく。第5章では、『カスターブリッジの町長』の舞台カスターブリッジにおける、ヘンチャード、ファーfrey、エリザベス＝ジェイン、ルセッタ・テンプルマン(Lucetta Templeman)の4人が織り成す人生模様について検討する。豪商であり、カスターブリッジの町長であったヘンチャードの事業の失敗と町長辞任、ヘンチャードに代わって町長に就任するファーfreyの社会的成功、その彼と結婚するエリザベス＝ジェインの言動、ヘンチャードの元恋人で、ファーfreyの最初の妻になるルセッタに対してみせた町の人々の態度などが、イングランド、スコットランド、カナダ、フランスという国内外の政治的・経済的・文化的力関係の表出であると読む。そして、ハーディがカスターブリッジという町を介して、大英帝国をこの作品にいかにか描きこんでいるかを論じる。

第3部第6章、第7章では、『帰郷』と『ダーバヴィル家のテス』において、登場人物たちが歩む人生を分析することで、彼らの生き方を左右する「ウェセックス」の村や、彼らが生活の基盤を置いている土地が、どのような場所として描かれているか考察する。まず第6章では、「グレート・ブリテン島」時代の歴史なども念頭に入れながら、『帰郷』の

舞台エグドンがいかなる場所かについて分析する。そして、エグドンの住民のひとりであり、フランスのパリでの生活に憧れるユーステイシア・ヴァイ(Eustacia Vye)と、フランス帰りのクリムのふたりが、近代文明の先端の地パリと、未文明の地エグドンとの間にあ
る大きな文化的距離をどのように縮めていくかを解明し、「グレート・ブリテン島」を彷彿
とさせる世界が広がるエグドンが、彼らにどのような影響を及ぼすかについて論述してい
く。第7章では、『ダーバヴィル家のテス』の主人公テスの雇用者であったアレック・ダー
バヴィル(Alec D'Urberville)の家系を精査し、彼の一家がユダヤ系であることを論証して
いく。またさらに、テスを取り巻く社会的環境とテスという人物像を、「グレート・ブリテ
ン島」時代から受け継がれてきた文化との関わりから分析していく。その後、結婚初夜に、
テスとアレックとの結婚前の諸事情を知ったため、彼女をイギリスに残したまま単身ブラ
ジルに移住してしまったエンジェル・クレア(Angel Clare)と、彼の人間的成長を、彼がブ
ラジルでの生活体験を通して得た人間観の見直しという視点から論じる。これを通じて、
ハーディのブラジルと、当時であって、未だ「グレート・ブリテン島」の風土を残した土
地に対する受け取り方を読み取っていくことで、ハーディがそれらの土地に込めた思いを
明らかにしていく。以上が、本論文の構成の骨子である。

注

1 ハーディの作品の題名に関する邦訳には、幾通りかのものがあるが、本論文で取り上げ
るすべての作品の邦訳は、日本ハーディ協会編『トマス・ハーディ全貌』(東京：音羽書房
鶴見書店、2007)において使用されているものに従った。

2 5世紀から9世紀に存在した、アングロ・サクソン人による7つの王国(ノーサンブリア、
マーシャ、エセックス、イースト・アングリア、サセックス、ケント、ウェセックス)のこ
とである。

3 本論文における引用は、Thomas Hardy, *Far From the Madding Crowd* (Oxford: Oxford
UP, 1998)によるものである。また、本論文で取りあげるすべての引用の邦訳に関しては、
断らない限り、拙訳である。

4 本論文における引用は、Thomas Hardy, *The Mayor of Casterbridge: The Life and
Death of a Man of Character* (London: Penguin, 2003)によるものである。

第 1 部 登場人物たちとヨーロッパ諸国及びイギリス植 民地

第1章 『狂乱の群れをはなれて』

ーバスシバの結婚とウェザベリ農場の行方

はじめに

『狂乱の群れをはなれて』(*Far from the Madding Crowd*)は、1874年1月から12月にかけて、主に中流階級の人々を読者対象としていた雑誌『コーンヒル』に掲載されたハーディ初期の代表作である。ハーディが、2作目の長編小説である『緑の木陰』(*Under the Greenwood Tree*, 1872)でみせた自然描写の見事さを高く評価した『コーンヒル』誌の編集者レズリー・スティーヴンが、ハーディに新作の執筆を依頼し、彼はこれを受けてこの作品を書くことになった。ハーディの2番目の妻フロレンス・ハーディ(Florence Hardy)が著者とされているものの、実際はハーディ自身が執筆・編集を行っていた伝記『トマス・ハーディ伝』(*The Life of Thomas Hardy*)(以下、*Life*と略記)によると、スティーヴンの執筆要請を受けた彼は、『狂乱の群れをはなれて』というタイトルで、牧歌的な物語を創作することを考えていた(“He had thought of making it a pastoral tale with the title of *Far from the Madding Crowd.*”)(95)ということである。

さらにまた、当時のハーディは、恋人でのちに妻となるエマ・ラヴィニア・ギフォード(Emma Lavinia Gifford)との結婚を控え、作家としての社会的地位と経済的安定を確立しようと努力していた。そのため、この作品を書いた時、ハーディは読者や編集者スティーヴンの編集方針を念頭に入れ、作品として受入れられるように執筆する必要があった(*Life* 100)。このことについては、モーガンが詳しく述べているように、ハーディは『コーンヒル』誌の読者層であった中流階級の道徳観に沿うように、つまり、男女関係の色恋沙汰が過度にならないように、スティーヴンの指示に従って作品内容を削除したり、修正したりしている(*Cancelled Words* 14)。

このような経緯を経て完成した『狂乱の群れをはなれて』は、自然豊かなウェザベリ村を舞台に、主人公の羊飼いやゲイブリエル・オウク(Gabriel Oak)の高邁な精神性と、彼を農場の羊飼いやとして雇う農場経営者バスシバ・エヴァディーン(Bathsheba Everdene)に対する彼の献身的な愛を描いた、素朴で道徳的秩序を保った作品となった。そして小説が出版された時、『サタデイ・レビュー』(*Saturday Review*)誌はそれを、「地方色豊か」(“rustic”)(R.G.Cox 39)で「牧歌的な」(“pastoral”)(Cox 39)作品であると評した。また、『ウ

エストミンスター・レビュー』(*Westminster Review*)誌も「牧歌的な素朴さ」(“*idyllic simplicity*”)(Cox 32)の描出にみられる秀逸さを称賛した。さらに『スペクテイター』(*Spectator*)誌も、ハーディの自然描写の素晴らしさに対して感嘆の弁を惜しまなかった(Cox 21)。このように、出版当初、この作品は自然と共存する農民たちの暮らしを題材としたパストラル小説として、各雑誌から高い評価を受けたのである。

『狂乱の群れをはなれて』というタイトルは、当時の教養のある人々にはよく知られていた18世紀の大学教授兼詩人トマス・グレイ(Thomas Gray, 1716-71)の「田舎の墓地で詠んだ挽歌」(“*Elegy Written in a Country Churchyard*”, 1751)の詩行から借用したものであった。

Far from the madding crowd's ignoble strife,
Their sober wishes never learn'd to stray;
Along the cool sequester'd vale of life
They kept the noiseless tenor of their way. (73-76)

あさましく争い狂う群れをはなれて、
彼らの真摯な願いは道から外れることはなかった。
穏やかで、辺鄙な人生の谷に
彼らは静かな人生の航路を守ったのだ。

この詩は、人間の欲望や醜い争いが繰り広げられている都会から離れた、農民の諦念と農村社会の安寧をうたったエレジーである。さらにまた、死を通じて他人や社会との不和から解放された農民たちが眠る墓地の静寂が、俗世界と対照的に描かれている。ある農村を訪れた詩人はそこにある粗末な墓を見て、そこで眠る名もなき農民たちが貧しさのため、あるいは、機会に恵まれなかったり、学問がなかったことから、名誉や富を得ることができなかったことに同情の念を吐露している。その一方で、詩人はそのような農民たちの素朴な一生もまた尊いものだとしているのである。引用詩行の1行目から取られたこの小説のタイトルは、農村に住む民衆の生き様を描こうとするハーディの意図を、まるでエピソードでもあるかのように明らかにしていると言えよう。

しかし、ここで浮かんでくるのは、『狂乱の群れをはなれて』は果たしてスティーヴン

の助言や編集者も含めた読者の意向に沿うように書かれた、農村世界を単純に描いただけの牧歌的な小説として読むだけでいいのかという疑問である。例えば、作中に登場するイギリス人兵士フランシス・トロイ(Francis Troy)の出自を辿ると、彼はフランス系の人物であり、そのような彼には、ハーディが読み取った同時代のイギリス人が持っていたフランスに対する意識や感情が反映されているものと思われるのである。

本章ではまずはじめに、ウェザベリ村とその村に住むバスシバの屋敷について分析し、彼女が村にとってどのような人物であるか考察していく。そして、彼女が惚れ込むトロイの人物像に迫り、トロイの出自を明らかにすることで、彼がフランスという外国を連想させるように人物造型されていることを検証する。次に、トロイ、オウク、ウィリアム・ボールドウッド(William Boldwood)の3人が、ウェザベリにあるふたつの農場に対して示す態度を考察し、それらの農場の実権を持つことの意味について考えていく。そして最後に、これらの登場人物たちがウェザベリの地で繰り広げる人間ドラマの分析から、ハーディという小説家が、イギリスとフランスの国際的関わりをどのようにみていたかを探ることにしたい。

第1節 ウェザベリ村と農場主バスシバについて

『狂乱の群れをはなれて』の時代設定は、ウェザベリ村が豊かで繁栄しているように描出されている点から、イギリス農業の繁栄期にあたる1850年代前後であると考えられる。序章で述べたように、ハーディはイングランド南部を自作の小説群の中で、「7王国」のひとつであった「ウェセックス王国」にちなんで「ウェセックス」と名付けた。そしてウェザベリは、イングランドのドチェスター北東部にあるパドルタウン(Puddletown)村をモデルにしたとされている(深澤俊 28)。

ウェザベリには、バスシバが所有するウェザベリ農場と、裕福な農場経営者ボールドウッドが管理しているリトル・ウェザベリ農場のふたつがあり、バスシバの農場の羊飼いで、後に土地代理人に昇進するオウクをはじめ、各農場で働く農業労働者たちなどが生活している。村では季節の変化に応じて、羊の出産の世話、羊洗い、羊毛刈り、干し草刈りや、大麦小麦の収穫といった作業が行われている。麦芽や麦の香りが漂うこの村には、「聖書とカギを使った占いの習慣や、ヴァレンタインをまじめな意味を持ったものと考え、羊毛刈りの時の宴会、長い野良着、収穫祭」(“The practice of divination by Bible and key,

the regarding of valentines as things of serious import, the shearing-supper, the long smockfrocks and the harvest-home”(4)など、昔からの伝統や習慣が未だに受け継がれている。中でも、バスシバが管理するウェザベリ農場の敷地には、4世紀も前に建てられ、羊の剪毛が現在も行われている大きな納屋が建っている。

One could say about this barn, what could hardly be said of either the church or the castle, akin to it in age and style, that the purpose which had dictated its original erection was the same with that to which it was still applied. Unlike and superior to either of those two typical remnants of medievalism, the old barn embodied practices which had suffered no mutilation at the hands of time. Here at least the spirit of the ancient builders was at one with the spirit of the modern beholder. (150)

この納屋については次のように言えるだろう。つまり、時代や様式の点で、教会や城のどちらにも似ているとはほとんど言えないのであるが、はじめにこれが建てられることになった目的が、今、これが用いられている目的と同じであったということである。教会と城という中世の例のふたつの典型的遺物のどちらとも異なり、そしてまた、そのどちらよりも優れて、その古い納屋は、時の手によって葬り去られることのなかった慣習を具現していた。少なくとも、ここにおいては、昔の匠たちの精神はそれを眺める現代人の精神と一致していた。

古い教会や城が中世の遺物として捉えられているだけであるのに対し、農場にある納屋はその目的と機能を約4世紀の間、変わることなく保持し続けているのである。つまり、納屋には過去と現在が調和し、そこでは時間が凝縮されているのである(鮎沢乗光 86)。そして、この納屋が不変性を有しているのと同じように、ウェザベリもまた、悠久の時の流れの中にある村である。

In comparison with cities, Weatherbury was immutable. The citizens' *Then* is the rustics' *Now*. In London twenty or thirty years ago are old times; in Paris ten years or five. In Weatherbury three or four score years were included in the mere present,

and nothing less than a century set a mark on its face or tone. Five decades hardly modified the cut of a gaiter, the embroidery of a smockfrock, by the breadth of a hair. The generations failed to alter the turn of a single phrase. In these Wessex nooks the busy outsider's ancient times are only old, his old times are still new; his present is futurity. (151)

都会に比べて、ウェザベリは恒常不変であった。都会の人たちの「あの時」が、田舎の人たちには「今」なのである。ロンドンでは 20、30 年前はひと昔であり、パリでは 10 年か 5 年がひと昔であった。ウェザベリでは 60 年か 80 年は単なる現在に含まれていて、1 世紀も経たないものは、どんなものもその表面と風格には表れ出てこないものであった。50 年経っても、ゲートルの断ち方や野良着の縫い取り法は、ほんの髪の毛 1 本ほども変わらなかった。何世代が過ぎても、たったひとつの言葉の言い回しさえ変わることはなかった。このようなウェセックスの片田舎では、村外からやって来た時間に追われている人の大昔がほんのひと昔のことであり、そんな人のひと昔はこのあたりではまだ新しいことであり、その今というのはまだ先のことなのである。

都会と比較すると、ウェザベリでは時間はゆっくりと流れ、そこに住む人々の暮らしは昔ながらの慣習に根差したものであり、彼らの仕事もまた自然の理法に逆らわないものである。総じてウェザベリは、古い昔のイングランドにみられた要素を多分に留めている村であると言えよう。

バスシバの農場には、少なくとも 12 人の従業員とその家族が働いていることから、この農場は、村の人々の暮らしを支える経済的に重要な場所のひとつとすることができる。次に、そのような農場を経営しているバスシバの住まいに注目し、それが意味するものについて考えていくことにする。

バスシバの住居は、「その建築様式について言えば、古典的ルネサンス様式の初期段階の古めかしい建物」(“a hoary building of the early stage of Classic Renaissance as regards its architecture”)(75)であり、かつては「小さな領地にあるマナー・ハウス」(“the manorial hall upon small state”)(75)であった。マナー・ハウスとは貴族やジェントリの屋敷のことであるが、さらに身分の高い貴族が住み、マナー・ハウスよりも規模が大きい壮麗な邸宅になると、それはカントリー・ハウスと呼ばれる(田中亮三 4)。そして、マーク・

ジルアード(Mark Girouard)によれば、カントリー・ハウスとそれが建っている土地は、持ち主の政治的・経済的・社会的権力を周囲に誇示するものであった(2)。ハーディよりも半世紀以上前に生まれた小説家ジェイン・オースティン(Jane Austen, 1775-1817)の作品には、多くのカントリー・ハウスが舞台となっている。例えば、『高慢と偏見』(*Pride and Prejudice*, 1813)においては、主人公エリザベス・ベネット(Elizabeth Bennet)に好意を寄せるフィッツウィリアム・ダーシー(Fitzwilliam Darcy)が、ペンバリー(Pemberley)に土地とカントリー・ハウスを所有している設定になっている。エリザベスはこのカントリー・ハウスから、理想的な領主、家父長、兄、夫としてのダーシーの姿を読み取るが、理想の領主としてのダーシー像は、イギリスという国家の理想の姿を仄めかすものでもあった(坂田、「ハーディとカントリーハウス」2)。つまり、カントリー・ハウスは上流階級の財力のみならず、その価値観を具現しているとみることができ、この意味において、イギリスのミニチュア版と言えるのである。そして、そのようなカントリー・ハウスよりも邸宅としての規模は小さいものの、その系譜に属するマナー・ハウスもまた、イギリスそのものを具現化していると言えるだろう。

ハーディの小説に描かれたカントリー・ハウスの場合、時代的にみて、それらは貴族たちの邸宅としての役割を終え、廃墟となっていたり、屋敷の所有者が変わっていたりしている。例えば『エセルバータの手』(*The Hand of Ethelberta*, 1876)では、主人公であるエセルバータ・ペザウイン(Ethelberta Petherwine)に言い寄るアルフレッド・ネイ(Alfred Neigh)が、ヘアフィールド・エステート(Harefield Estate)という地所を所有している。ネイ家は皮なめし業で財を成した豪商であり、一家が管理するヘアフィールドには建物は建てられておらず、馬の屠殺場があるだけである。『森林地の人々』(*The Woodlanders*, 1887)で言及されているカントリー・ハウスであるヒントック・ハウス(Hintock House)は、鉄鋼業で成功した豪商チャーモンド氏(Mr. Charmond)と、その妻フェリス・チャーモンド(Felice Charmond)に売却されている。さらにまた、『狂乱の群れをはなれて』では、バスシバが所有している屋敷もまた、マナー・ハウスとしての役割を終えている。したがって、ハーディの作品では、カントリー・ハウスとそれを含んだ土地は上流階級の人々の価値観を表出していたり、彼らが持っていた伝統を受け継ぐ場所としては機能していないのである(坂田、「ハーディとカントリーハウス」3)。しかしながら、カントリー・ハウスはイギリスの歴史を継承してきた空間であることから、それはある意味で、イギリスに置き換えて解釈しなくてはならない。このような見解に立てば、貴族が住むマナー・ハウスであっ

たバスシバの住まいもまた、イギリスを具現するものとして読むことができる。

次に、そのようなマナー・ハウスに住むバスシバという登場人物の人物像について検討していくことにする。バスシバは作中、町で仕立て屋を営む両親のもと、比較的裕福な暮らしを送り、ある程度の教育を身に付けた女性とされている。両親が亡くなった後、彼女がどのように暮らしていたかは明記されていないが、ウェザベリからかなり離れたノーカム(Norcombe)にある伯母のハースト夫人(Mrs. Hurst)の農場で働いたあと、ウェザベリ農場の経営者であった叔父のエヴァディーン氏(Farmer Everdene)が亡くなったのをきっかけに、その農場を引き継ぐことになった。バスシバは結婚に消極的で、自立心あふれる女性である。そのノーカムの農場にいたバスシバに一目ぼれしたオウクは、結婚の意志を伝える。しかし、これに対して彼女は、「つまり、もし旦那様というものを持たないで花嫁になれるなら、結婚式で花嫁になっても構わないということなんです」(“what I mean is that I shouldn't mind being a bride at a wedding if I could be one without having a husband.”)(35)と言って、オウクのプロポーズをやんわりと断っている。また、作中で、「私、そんな風に男の方の持ち物みたいに思われたくないんです」(“I hate to be thought men's property in that way”)(34)と語るバスシバは、男性に従属することを拒否する言葉を口にしていく。バスシバが、女性は夫に従うべきという女性観や人が結婚することを当たり前と考える昔ながらの結婚観に囚われない人物であることは、農場経営者としての彼女の生き生きとした仕事ぶりからもわかる。農場を新たに運営するためにやってきた彼女は、従業員ひとりひとりの仕事を評価し、それに見合った給料を与える。穀物取引所では果敢に取引を行い、経営者としてのリーダーシップを発揮し、「値段について話し合う時には、卸売業者として当然のことながら、しっかりと自分自身の決めた値段を守り抜く」(“In arguing on prices, she held to her own firmly, as was natural in a dealer”)(94)とあるように、優れたビジネス感覚を持って農場経営にあたっている。仲間への気配りにも長けた彼女は、彼女の自宅から姿を消した下働きのファニー(Fanny)の行方を心配したり、また、収穫した小麦を火事から救った村人たちの努力をねぎらうことも忘れていない。このようなバスシバの言動をみて、農場の従業員であるビリー・スモールベリー(Billy Smallbury)が彼女を、「分別」(“sense”)(109)のある頭の良い女性と評するように、バスシバはウェザベリの外からやってきたよそ者ではあるものの、村の人々から敬愛され、認められているのである。ハーディがこの小説を執筆していた頃のイギリスには、メアリ・ウルストンクラフト(Mary Wollstonecraft, 1759-97)が著した『女性の権利の擁護』(*A Vindication of the*

Rights of Woman, 1792)が注目を浴びて、女性の地位向上を求めたり、男性と対等の権利を獲得することを目指したフェミニズム運動が台頭してきた。そして、世相的にこの気運が胎動する中で、作中のバスシバの言動を読み解くと、そこにはこの新しい女性観が反映されていると言えるのである。

以上の分析から、「穀物市場の女王様」(“Queen of the Corn-market”)(180)と呼ばれる彼女の農場経営は、「国家経営や企業経営のミニチュア」(福岡忠雄 31)とみることができるのである。男勝りの経営者としてその能力をいかんなく発揮するバスシバは、イングランドの「ミニチュア」と見立てられるウェザベリの中心的人物であると言える。政治的・経済的・社会的に男性が優位な当時の社会にあって、農場と村の繁栄に貢献するバスシバは、ウェザベリ村では、本来男性が果たすリーダーとしての役割を担っている人物として造型されている。彼女には、「家庭の天使」としての女性像ではなく、フェミニズム運動が目指すところの女性像が体現化されていると言うことができよう。

第2節 トロイの出自

バスシバは結婚には無関心であり、農場を経営することに生きがいを感じている。しかし、そのような彼女は、村近くに駐屯しているイギリス軍の部隊に所属する軍曹トロイと出会い、恋に落ち、それまでの彼女の言動に反すると思われるのであるが、唐突に彼と結婚してしまう。それでは、トロイというバスシバの結婚相手は、作中においてどのような人物として造型されているのだろうか。

トロイは両親が亡くなったあと、人から紹介された職を辞め、新しい仕事に就くが長続きせず、職を転々とする人物である。結局、入隊することに決めた彼は、イギリス軍の「第11近衛竜騎兵連隊」(the 11th Dragoon Guards)に属する一兵卒として、ウェザベリ村近くに駐屯することになる。トロイはこの村にやって来る前、バスシバの屋敷で下働きをしていたファニーと恋仲になり、彼女と結婚する約束をしていた。しかし、ファニーが式を挙げる教会を間違えたため、遅刻してきたことに怒った彼は、冷酷にも彼女との結婚をないことにしてしまう。そして、間もなく彼は、林の中で偶然言葉を交わしたバスシバを口説いたことをきっかけに彼女と親しくなり結婚し、除隊したあとは、彼女に代わってウェザベリ農場を管理するようになる。

トロイの暮らしぶりには、農作業に精を出し、仲間を思いやるウェザベリの村人たちの

それとは大いに異なるところがある。バスシバと結婚したあと、酒やギャンブルに溺れる自堕落な生活を送る彼は、この意味において、ウェザベリの農民たちとは対立する存在であり、土地の風習や秩序を乱しているという点で、田舎と対立する「都会的」(“urban”)(Michael Squires 128)な人物であると評されてきた¹。一方、イアン・グレガー(Ian Gregor)は、トロイがウェザベリで生まれ育っている点に着目し、彼を「内部の人たち」(“insiders”)(57)のひとりだとしている。

ここで注目したいのは、テキストに書き込まれた彼の両親についての記述である。この小説は『コーンヒル』誌に連載されたあと、1874年11月にスミス、エルダー社(Smith, Elder&Co.)から2巻本として出版され、翌年、再版された。さらにまた、1877年には、同社によって1巻本が売り出されている。トロイの出生については、小説の原稿が1巻本として出版される過程においていくつかの修正が加えられている。例えば原稿の段階では、トロイの父親について、「奇妙なことに、トロイの父親は町よりも田舎をよしとしていたので、数年前にこの地に住みついた医者だった」(“Strange to say his father was a medical man who settled here several years ago because he preferred country to town”)²と記されている。これに対し、母親についての言及は一切みられない。ところが、『コーンヒル』誌に掲載されたテキストでは、「フランス人家庭教師であった彼の母親は、貧しい医者と結婚した」(“His mother, a French governess, was married to a poor medical man”)³となっており、それに従えば、トロイはイギリス人とフランス人の混血児ということになる。本論文で使用しているスミス、エルダー社から1巻本として出版されたテキストの場合、トロイは亡きイギリス人貴族であるセヴァン卿(Lord Severn)を父に持ち、彼の母はパリ出身のフランス人家庭教師とされている。そして、ふたりは「人目を忍ぶ関係」(“a secret attachment”)(116)にあったが、のちにトロイの母となる女性はセヴァン卿ではなく、貧しい医者と結婚し、まもなくセヴァン卿との間にできたトロイを産んだとなっている。先行論では、モーガンを例にあげると、原稿と雑誌に連載されたテキストと、1巻本との違いとして、後者では、トロイが非嫡出子として描かれている点に言及しているものがある(“Notes”368)。しかし、『コーンヒル』誌や1巻本にあるように、トロイの母親がフランス人とされていることに着目するならば、トロイはフランス人の血を引いた登場人物ということになる。つまり、血筋の点を考慮すれば、ウェザベリにとってトロイは「内部の人たち」のひとりではなく、半分フランス人の血を引くという意味で「外部の人」であり、この点で、イギリスとフランスの両方の属性を合わせ持っていると言うことができる。

しかし、トロイがイギリスよりもフランスの属性の方を多分に持ち合わせている人物として造型されていることは、彼の立居振舞から読み取ることができる。彼はウェザベリ農場近くの林で偶然出会ったバスシバに、「別嬪さん」("Beauty")(143)と呼びかけて近づくことがあったあとのある日突然、彼女の農場で行われている干し草刈りの現場に姿を現す。それまでにバスシバの美しさを繰り返し褒めそやしたことが功を奏して、バスシバの気持ち自分が傾いていることに気付いた彼は、作中ではカッコの中に入れられているのだが、「私の母親はパリジェヌでした」("My mother was a Parisienne.")(184)と彼女に告げる。そしてバスシバに、「フランス語は読めますか？」("Do you read French?")(184)と尋ねるのである。そのあと、まるでフランス語に堪能であるかのような口ぶりで、トロイはバスシバに向かって、彼女が自分のことを愛しているのに、わざとつれなくしていることを暗示させる「十分に愛しているのであれば、十分に厳しくしなさい」("Qui anime bien, châtie bien")(184)というフランス語のことわざを口にしてみせたりする。そして、亡き父親以上にバスシバのことを愛していると伝え、父親の形見である時計を彼女に渡すのである。こうしてバスシバは、フランス語を操ってみせたトロイのドン・ファン振りに魅せられ、誰に相談することもなく、トロイと結婚することを決断する。ふたりの結婚祝いを兼ねて、農作物の収穫を祝うパーティーを開く場面では、オウクが空模様から暴風雨の前兆を察知し、農場に莫大な利益をもたらす収穫したばかりの小麦を守るようトロイに進言する。しかし、トロイは彼の警告に耳を傾けることはない。トロイはブランデーの水割りを飲んで酔いだすと、自分がすすめる酒を飲まなければ解雇すると従業員たちを脅して、彼らに飲みなれないブランデーの水割りを飲ませ、従業員たちと共に寝込んでしまう。ここで彼が強要したブランデーとは、ワインを蒸留した後、樽に入れて熟成させたものである。ブランデーはワインの生産国として有名であったフランスで製造され、そのあと、オランダを経由してイギリスに輸出されおり、それはフランスを象徴する飲み物であった。このように、フランス人の血を半分しか引いていないとはいうものの、トロイのバスシバや農場の人々に対する言動からみて、彼はフランスの属性を備えた登場人物として造型されており、この点でフランスと「メトニミー的關係」にあると思われるのである。

第3節 トロイとオウクとボールドウッドの農場への関わり方

本節では、バスシバを愛するトロイとオウクとボールドウッドら3人が、それぞれが関

わりを持っている農場に対して、どのような発言をし、どのような行動を取っているか明らかにしていく。

バスシバと結婚したことにより、除隊に必要な金を彼女に払ってもらったトロイは、彼女の屋敷と農場を管理するようになるが、間もなく様々な問題を引き起こすようになっていく。バスシバとの結婚と農作物の収穫を祝うパーティーで酔い潰れてしまったトロイは、農作物を嵐から守る作業を怠り、農場を危機にさらす。彼はまた、農場経営で稼いだ金を競馬につき込んで遊び暮らし、バスシバを困惑させる。人々から、「彼(トロイ)が来てからは、ウェザベリにはろくでもないことしか起こっていない」(“Nothing has prospered in Weatherbury since he [Troy] came.”)(383)と批判されるトロイは、羊の世話や農業を生業とするウェザベリの人々の平穏な暮らしを脅かす、農村社会への理解と配慮に欠けている人物であり(Geoffrey Harvey 62)、そのような社会の破壊者でもある。

ここで、前節で述べたように、トロイがフランスと「メトニミー的關係」を持つ人物であるとする観点から、彼の農場とそこで働く人々とバスシバに対する彼の不誠実な言動は、新たな角度から読み直さなければならないことになる。そして、この点を追究するためには、イギリスとフランスの国際事情についてみていかなければならない。

イギリスとフランスは、1689年に始まった9年戦争(Nine Years' War, 1689-97)から1815年にイギリスの勝利で終わるナポレオン戦争までの間、ヨーロッパにおける覇権と王位継承権、そして植民地の争奪をめぐって、ヨーロッパ、北アメリカ、南アジア、アフリカの地で、総じて第2次100年戦争と呼ばれる戦争状態にあった。リンダ・コリー(Linda Colley)は、これらの地域との抗争はイギリスの国家としての安全を脅かし、フランスによる侵略の脅威にさらすものであったと述べている(4)。ナポレオン戦争後の約40年間、イギリスが関わった戦争はヨーロッパ以外の地域で行われたものであったため、国内的には比較的平穏な期間を過ごすことができた。しかしながら、ヴィクトリア朝期に入っても、フランスは依然、イギリスの人々の平穏な生活を脅かす国とみられていた。1840年代あたりから、一部の政治家や軍事専門家が、蒸気船が発明されたことにより、英仏海峡の持っていた国防力としての意味が弱まったことを懸念し、軍備再編成の必要性を強調するようになる(丹治愛 38)。1851年に刊行された、フランスに侵略される恐怖を描いた作者不詳の小説『フランス軍による突然の恐ろしいイングランド侵略の歴史』(*The History of the Sudden and Terrible Invasion of England by the French*)には、蒸気船の戦闘能力がフランスによるイギリス侵略の脅威を高めたため、イギリスはより強力な常備軍を持つ必要が

あるという内容が記されていた(I. F. Clark 12)。つまり、イギリスがフランスによって攻撃されるのではないかという危機感が、当時のイギリスの間に広まっていたというわけである。1852年になると、ナポレオン3世(Napoléon III)がクーデターによって政権を掌握し、フランス第2帝政(1852-70)が始まる。1870年の普仏戦争(Franco-Prussian War, 1870-71)でフランスが敗北するまで、22年間政権の座に付いていたナポレオン3世の存在は、イギリス国民にとって、ナポレオン戦争期のフランスによるイギリス侵攻の恐怖を思い起こさせるものであった。例えば、『エコノミスト』(*Economist*)誌の編集長であったウォルター・バジョット(Walter Bagehot)は、『インクワイアラー』(*Inquirer*)紙に宛てた手紙の中で、当時のフランス政権によって、「ナポレオンの侵略」(“a Napoleonic invasion”)(Georgios Varouxakis 152)の危機が再びイギリスにもたらされるかもしれないと記し、フランスの存在を危惧している。1853年に帝政ロシアとの間でクリミア戦争(Crimean War, 1853-56)が始まると、イギリス国民はフランス以外の外国からの侵略に対する恐怖心をも強めるようになる。このような外国に対する警戒心は、イギリスを軍事力強化へとむかわせることになる。その1例として、1860年代の義勇軍の数は11万人以上にのぼっていたが、その数は19世紀末までに2倍に膨れあがっていたことをあげることができる(Edward M. Spiers 88)。1870年になると、フランスとプロシアによる普仏戦争が始まる。イギリス国内には、強力な国力を持つようになったプロシアと戦うフランスに同情を示す意見さえ出てくる。その一方で、社会思想家で経済学者であったジョン・スチュアート・ミル(John Stuart Mill)のように、ナポレオン3世がプロシアに勝利した場合、フランスがイギリスを攻撃する可能性が高まることを指摘し、徴兵制度や民兵制度を導入することに賛同する者もいた(Varouxakis 162)。イギリス人はナポレオン戦争が終わったあとも、継続的にフランスに恐怖心を抱いていた。そして、フランス軍の軍事力の増強と大陸での戦争勃発に伴い、国防に対する意識が国民レベルまで広がっていった。換言すれば、フランスをはじめとする諸外国に対するイギリスの施政者や知識人の危機感が、一般国民をも巻き込むものであったことがわかる。

以上の分析に基づくと、フランスの属性を多分に持つトロイが、ウェザベリ農場とバスシバとそこで働く人々に対して取った行動は、イギリスとフランスの関係に読み替えることができる。トロイはバスシバとの結婚を通して、一時期のイギリスを具現していたマナー・ハウスであった彼女の屋敷を手に入れるばかりか、イングランドの縮図とされるウェザベリ村にある農場までも手に入れ、そこを管理するようになっていった。しかし、間も

なくして彼は、ブランデーを従業員たちに飲ませて農場経営や管理を蔑に、それを破滅させるような行動を取ったのは前述したとおりである。したがって、トロイのバスシバと農場に対する振る舞いは、政治的に緊張状態にあったフランスによるイギリス侵略を思い起こさせるものである。さらにまた、フランス・ノルマンディー公国のノルマンディー公(Duke of Normandy)ギョーム(Guillaume)は、イングランドのウェセックス王朝のエドワード懺悔王(Edward the Confessor, 即位期間:1042-66)が逝去すると、国王の義弟ハロルド2世(Harold II)とイングランドの王位継承権をめぐる対立した。そして、イングランド南部の丘陵地帯ヘイスティングズ(Hastings)近郊でハロルドと戦ったギョームは、この戦いに勝利し、1066年に「ノルマン征服」と呼ばれるイングランド征服を成し遂げた。このような歴史的事実を考慮すると、村でのトロイの言動はいわば、小さな「ノルマン征服」に通じるものがあると言える。

これに対し、オウクはバスシバに思いを寄せ続け、彼女の農場を度重なる窮状から救い、村の経済的安定を図り、その繁栄に尽力する人物である。彼はかつて、羊を飼う小さな牧場主であり、ノークームのハースト夫人の農場で働くバスシバにプロポーズすることができほどの経済力を誇っていた。しかし、飼っていた羊が崖から転落し、そのほとんどを失うという災難に見舞われたあと、たまたま通りかかったバスシバの農場で起きた火事の延焼を食い止めたことから、そこの羊飼いとして雇われることになった。オウクは、農作物や家畜の管理に臨機応変に対応できる知恵と技術力を持っていたことから、彼に対する村人たちの信頼は高く、オウクはウェザベリにはなくてはならない人物となっていく。農場の羊たちがクローバーを食べて死にかけるといった事件が起きた際も、彼は獣医学に関する確かな知識によって、苦しんでいるほとんどの羊たちの命を救うことに成功する。トロイとバスシバの結婚と、作物の収穫を祝うパーティーが開かれた夜には、オウクは誰よりも早く天候の変化に気付く。嵐が迫っているにもかかわらず、酒を飲んで寝込んでしまうトロイと農場の労働者たちを見た彼は、刈り取った小麦や大麦がもたらす利益と、それを失った場合の損失額を計算し、そしてバスシバに対する無償の愛情から、彼は収穫物に防水布をかける。この場面では、ブラウンの指摘にあるように、自然を理解し、自然現象に対処できるオウクと、自然への理解が欠如したトロイが対照的に描かれている(52)。そして、オウクはトロイの怠慢に起因する問題を解決し、バスシバの農場を守ることに成功した。さらにまた、このことはウェザベリ農場によって支えられていたウェザベリ村が、危機的状況から脱したことも意味しているのである。オウクの経歴から考えて、彼はバスシ

バ同様に、ウェザベリ村にとっては部外者である。しかしながら、彼の知識と行動力は、昔からの伝統や習慣に盲従しているだけの村に、新しい風を吹き込むものなのである(Roy Morrell 126)。

一方で、トロイに代わってオウクが嵐から収穫物を死守した場面を、イギリスとフランスの国家的対立になぞらえて解釈すると、オウクと、彼によって救われる農場と村に、新たな読みが付与される。オウク(Oak)という人物の人名で思い出されるのは、古代ケルト人たちの間で信仰されていたドルイド教において神聖視されていた「オーク」(Oak)の木である。この木ではドルイド(druid)と呼ばれる祭司が祭儀を行っていたが、“druid”という名前の語源はケルト語の“druidae”であり、これは「オーク」の木を意味するギリシア語の“drus”と、「知る」という意味の“wid”が結びついてできあがったものである⁴。このようなところから、祭事を司るドルイドには、「オークの賢者」という意味もあった。ケルト人によって神の宿る木と考えられた「オーク」は、以後、イングランドにおいて聖なる木とみなされるようになっていった。さらにまた、「オーク」の木は森の王様と呼ばれ、イングランドを象徴するものでもある。ピーター・ミルワード(Peter Milward)によると、「オーク」が持つ「いかつさ」(“raggedness”)(39)や「力強さ」(“strength”)(39)、そして、枝の「ねじ曲がり」(“contortions”)(39)は、頑固で粘り強いイングランド人の性格を表している。さらにまた、1660年の王政復古(The Restoration)時に戴冠したチャールズ2世(Charles II, 即位期間:1660-85)は、皇太子であった頃、ピューリタン革命(The Revolution, 1640-60)の最中である1651年に行われたウスターの戦い(the Battle of Worcester)に敗れ、フランスに亡命することを余儀なくされる。この時彼は、敵である議会派軍の追手をやり過ごすために「オーク」の木に一晩中身を隠したと言われており、チャールズの命を救ったこの木は、そのあと、「ロイヤル・オーク」(Royal Oak)と呼ばれた(Milward 39)。「オーク」の木に込められた意味合いや歴史をオウクという登場人物に重ね合わせて考えると、彼が、トロイの無知と怠慢によって失われかけていたバスシバや村人たちの仕事と暮らしを守ろうと奮闘する姿や、彼の努力によって守られる農場と村は、フランスと政治的に対立し、それとの抗争に巻き込まれながらも、フランスの脅威を免れたイギリスに読み替えることができる。

最後に、ウェザベリ村にあるもうひとつの農場であるリトル・ウェザベリの経営者ボールドウッドが、自分の農場に対して取った行動について考察する。「ボールドウッドはいわゆるリトル・ウェザベリ農場の借地人で、彼の外見は上流階級に最も近いものであって、

それは教区内のこの辺鄙な地域では自慢できるものであった」(“BOLDWOOD was tenant of what was called Little Weatherbury Farm, and his person was the nearest approach to aristocracy that his remoter quarter of the parish could boast of.”)(125)と記されるほど、彼は中流階級の上層部に属する人物である。作中には、彼についての詳しい経歴は書かれていない。しかし、ボールドウッドがジェントルマン気取りの借地人であることから、彼は何らかの幸運に恵まれて経済的に成功し、裕福な借地人にまで成り上がったスノップであると言える。このようなボールドウッドについての村での評判は悪いものではない。彼は、幼い頃に家族を失ったファニーの世話をするなど、ウェザベリの住民たちに配慮や愛情を示しているからである。しかし、その反面、ボールドウッドはその直情的な性格から、村の中で孤立するようになる。『オックスフォード英語辞典』(*Oxford English Dictionary*)(以下、*OED* と略記)によると、ボールドウッド(Boldwood)という名の“wood”という言葉には、形容詞として「ひどく怒った」(“violently angry”)、あるいは「狂気の」(“insane”)という意味がある。そして、ハワード・バブ(Howard Babb)が、「ボールドウッド」という人名が彼の人間性を物語っていると指摘しているように、彼は怒りや悲しみをコントロールできず、極端な行動を取るような人物として造型されている(151)。例えばボールドウッドは、バスシバが送った「結婚して」(MARRY ME)(87)という言葉が添えられたバレンタイン・カードを受け取ることで、彼女への思いをエスカレートさせ、バスシバに熱烈なプロポーズをし、早急に彼女からの返事をもらおうとする。彼のこの一方的な振る舞いはバスシバを困惑させ、彼女はボールドウッドの求婚に恐怖さえ感じるほどである。さらにまた、彼は有能な農場経営者であるにもかかわらず、バスシバがトロイと結婚してしまったことに深く傷つくと、バスシバたちの結婚を祝うパーティーが開かれた夜に、ウェザベリを襲った嵐から自分の農場の作物を保護することを怠ってしまう。つまり、理性を失ったボールドウッドは、借地人としての責任を放棄してしまったのである。そしてまた、彼の農場経営の失敗から出る赤字は、ウェザベリ村全体の損失につながっていく。この意味において、ボールドウッドはウェザベリの住民ではあるものの、トロイと同様に、村人たちを生活困窮に陥らせる人物と解することができる。

第4節 ふたつの農場の実権をめぐって

バスシバを愛するトロイとオウクとボールドウッドの3人は、経済的にウェザベリ村を

支えるふたつの農場に対して、それぞれ異なる態度を示した。本節では、ボールドウッドが引き起こすトロイ射殺事件と、トロイと死別したバスシバとオウクの再婚を通して、ウェザベリにふたつある農場の実権の行方をめぐって論を展開することになる。

ボールドウッドがトロイを銃殺するという凶行に出た原因は、彼とバスシバの結婚が不可能になってしまったからである。バスシバと結婚したあと、トロイは、元恋人ファニーが自分の赤ん坊を生んで亡くなったことを知り、ファニーをまだ愛していると言ってバスシバの元を去る。数日たって、海岸にトロイの服が見つかったことから、人々は、彼は海で溺死したと思い込み、この知らせを受けたボールドウッドは、バスシバと再婚できると考えるのである。ところが、ボールドウッドが村の人々を屋敷に招いて開いたクリスマス・イヴを祝うパーティーに、突然、溺死したと思われていたトロイが姿を現す。これを見たボールドウッドは、バスシバとの結婚が叶わないことを知って逆上し、近くにあった猟銃を手に取り、トロイを撃ち殺す暴挙に出るのである。

ボールドウッドが起こしたこの事件は、彼とトロイに自滅をもたらす。そのあと、殺人の容疑で逮捕され、裁判にかけられたボールドウッドは、無期懲役刑を受ける。裁判の間、村人たちは彼の刑が軽減されるよう嘆願し、彼が死刑を免れたことを知ると大喜びする。このことから、彼はウェザベリにおいて全くの悪人とみられていないことは明らかである。しかし、ボールドウッドは風雨から作物を守ることを怠り、農場を管理する責務を放棄するばかりか、トロイに対する嫉妬心から彼を射殺するという反社会的行為を犯した。したがって、村に破滅的な打撃を及ぼした彼がウェザベリに戻ることはない。さらにまた、ウェザベリ農場を傾かせたトロイも射殺される。かくして、ボールドウッドによるトロイ殺人事件は、農場の運営資金をギャンブルに浪費したり、その管理に手を抜くなどして、農場と村に経済的損害を与えるような行動を取った人物たちを、ウェザベリ村から排除したことを意味している。

では、ボールドウッドとトロイがいなくなった各農場の実権は、誰の手に委ねられるのであろうか。オウクは、トロイによってもたらされた数々の困難に直面するバスシバにアドバイスを与え、援助し続けてきた。トロイとの不幸な結婚生活と彼の死を経験し、再び農場主となったバスシバは、そのようなオウクを「自分より強靱な人」(“some one stronger than herself”)(305)であり、「よき助言者」(“mentor”)(407)として認めるようになっていく。彼女の信頼と好意を獲得していったオウクは、トロイの死から約1年経った頃、バスシバと結婚する。そのうえ彼は、無期懲役の刑に服したボールドウッドのリトル・ウェザベリ

農場の所有権も手に入れることになる。こうして、バスシバの農場で一介の羊飼いに過ぎなかったオウクは、彼女との結婚を通じて、彼女やボールドウッドの農場や屋敷を手に入れ、経済的・社会的成功者となり、村の中心的人物になっていく。一方、オウクとの結婚を機に、村を経済的に支えてきたバスシバの役割は終わりを迎える。フェミニズム運動が目指すところの女性像を具現していたバスシバが、オウクのことを「よき助言者」と呼んでいるように、この小説では、彼女が従来男性のものとみなされてきたリーダーとしての役目を最後まで果たすことはできないのである。つまりハーディの小説では、女性が男性に頼ることなく、自立して生活しようとする意欲に溢れている一方で、経済的・社会的に独立し、ひとりで生活していくことは現実社会で難しいことが描き出されている。

それでは、ボールドウッドによってトロイが殺害され、最終的にトロイと死別したバスシバがオウクと結婚し、彼が村にある主要なふたつの農場を運営する立場に就くという結末は、どのように解したらよいであろうか。メトニミー的視点から、トロイの死とオウクの経済的・社会的成功をみていくと、作者ハーディは、フランスと反目していたイギリスの安泰を作品に描き込みたかったのではないかと考えられる。このことは、ウェザベリ村の人々がバスシバとオウクの結婚を祝福する場面からも明らかであろう。農場で働く人々はバスシバとトロイの結婚に反対し、バスシバの身を案じていた。それに対して、トロイの死後、バスシバがオウクとの結婚を決めたことを知ると、彼らはふたりを祝福する。バスシバとオウクの結婚式が終わったあと、村人たちは彼らによって構成されたウェザベリ音楽隊の音楽にのせて歌い踊りながら、ふたりの門出を祝福する。この時、ウェザベリ音楽隊が使用する太鼓やクラリネット、タンバリンなどの楽器は、「マルボロ公の戦勝」(“the Victories of Marlborough”)(414)を祝った時に使われたものとされている。1701年に始まったスペイン継承戦争(War of the Spanish Succession, 1701-14)では、スペインの王位継承権をめぐる、イギリスとオーストリアなどがフランスやスペインなどの国々を相手に戦い、前者が勝利した。「マルボロ公の戦勝」は、戦争中に即位したアン女王(Queen Ann, 即位期間:1702-14)によって軍総司令官に任命され、女王の篤い信頼を得たマルボロ公ジョン・チャーチル(Duke of Marlborough, John Churchill)が、大陸遠征中に収めた勝利のことを指している。マルボロ公が勝利した戦いをあげると、1704年に行われたドイツのドナウ河畔にあるブレンハイムでの戦い、1706年のベルギー中部にあるラミリーでの戦い、1708年のベルギー・アウデナールデにおける戦い、そして1709年にフランスのマルプラケで行われた戦いがある。ブレンハイムで行われた戦いについては、1813年にイギリスの

桂冠詩人となったロバート・サウジー(Robert Southey, 1774-1843)が、当地での戦闘を題材にした反戦詩「ブレンハイムの戦い」(“The Battle of Blenheim”)を 1796 年に発表し、その中で市民を巻き込んだ戦いの悲惨さをうたっている。また、ブレンハイム以外の戦地でも、数万人の死傷者が出るほど人的被害は甚大であった。しかし、いずれの戦闘においてもフランス軍を破った「マルボロ公の戦勝」により、イギリスはヨーロッパにおける主要国としての地位を確立したのであった。そして、これらの戦いのあと、フランス軍は防戦にまわるようになっていったのである。村人たちが、そのフランス軍を破り、イギリスがヨーロッパにおける覇権を手に入れた「マルボロ公の戦勝」を称えた音楽を奏した楽器を使い、トロイの死後、結婚することになったバスシバとオウクを祝福する場面は、フランスよりもイギリスの方が勝っているということが暗に仄めかされていると読むことができる。すなわち、作者ハーディはイギリス人の対フランス意識を読み取り、それを若いふたりの結婚を祝う村人たちの場面に反映させたと考えられるのである。

おわりに

以上から、昔ながらの風習を踏襲しているウェザベリ村は、イギリスの「ミニチュア」として読むことができた。そして、そこで、かつてマナー・ハウスであった屋敷を所有し、ウェザベリ農場を経営する有能なバスシバは、村の住民たちの暮らしを支える農場経営者であり、ウェザベリは一時、女性がリーダーシップを握る村であった。バスシバが恋するトロイの出自を探ってみると、彼がフランス人の血を引いていることがわかり、その上、フランス語が堪能で、立居振舞においてフランスを思い起こさせる彼は、フランスと「メトニミー的關係」に置かれている人物として造型されていることが明らかとなった。この点を踏まえ、バスシバを巡るオウクとトロイの3角関係を分析すると、それは、同時代のイギリスとフランスの国際的対立に対応するものであった。

ボールドウッドの場合、バスシバに恋をした彼は、彼女の気持ちを見向きもせず結婚を迫ったり、経営している農場の運営を投げ出すという無責任な行動を取った。ウェザベリ農場の収穫物の管理を放棄したトロイと同様に、ボールドウッドは村の人々の暮らしを脅かすような人物であった。そして、バスシバとトロイの結婚が短期間で破綻し、農場の管理と運営を怠るボールドウッドが、トロイを射殺した罪で村を去る。すなわち、村に経済的なダメージをもたらしたトロイとボールドウッドのふたりは、村から姿を消すことになった

のである。とりわけ、トロイが死んだあと、バスシバがオウクと結婚することになるという結末は、当時のイギリス人読者に、対フランス感情という点である種のカタルシスを与えたのではないだろうか。

このようなところから、ウェザベリとは単に牧歌的な農村社会を指しているだけではないことが明らかである。グレイの詩の1行から取られた「あさましく争い狂う群れをはなれて」いるウェザベリという農村社会は、当時のイギリス国民が持っていた対フランス意識を絡めて構築された世界なのである。つまり、『狂乱の群れをはなれて』という小説は、ウェザベリで繰り返されたオウクとトロイの恋愛模様や、トロイの死とバスシバとオウクの結婚を通じて、イギリスとフランスの国際的対立に由来する、フランスに対する脅威と反感とイギリスの繁栄への期待が、作品の意味世界の深層部に描き込まれていたとすることができる。

注

¹ トロイを都会的な人物とみる見方としては、その他に、マリーン・スプリンガー(Marline Springer)をあげることができる。スプリンガーは、「トロイは軍人の雰囲気をもった退廃的な都会性をあらわしている」(“Troy represents decadent urbanity with a military air.”)(56)と指摘している。

² *Far from the Madding Crowd* (London: Penguin, 2003)100.

³ Morgan, “Notes,” *Far from the Madding Crowd*, by Thomas Hardy(London: Penguin, 2003)367.

⁴ “Earth Mysteries.” *Britannia*. 12 Feb. 2016

〈<http://www.britannia.com/wonder/druids.html>〉

第2章 『ラッパ隊長』と「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」

—外国人兵士たちの意味するもの¹

はじめに

1880年に『グッド・ワーズ』(*Good Words*)誌に連載された『ラッパ隊長』(*The Trumpet-Major*)は、英仏海峡を臨むイングランド南部に実在する町ウェイマス(Weymouth)と、その近くにあるサットン・ポインツ(Sutton Poyntz)村をモデルにしたオーバクーム(Overcombe)という村を舞台としている²。年代的には、ナポレオン戦争中の、1804年から1805年頃のナポレオンによるイングランド侵略が懸念されていた時代に設定されている。また、1890年に『ブリストル・タイムズ・アンド・ミラー』(*Bristol Times and Mirror*)誌に、はじめ「憂鬱な軽騎兵」(“The Melancholy Hussar”)という題名で掲載された短編小説「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」(“The Melancholy Hussar of the German Legion”)もウェイマス近くの村を舞台にし、1800年から1801年に起きた出来事が物語の中核を成している。このように、両作品とも、イギリスがフランスと交戦状態にあり、ナポレオンの侵攻に脅かされていた時代背景の中で、「ウェセックス」に住む人々とそこに駐屯する兵士たちの間で繰り広げられる人間模様を描いている。

ナポレオン戦争がヨーロッパの多くの国々を巻き込むものであったため、ハーディはこれらの作品の中にイギリス軍に属する外国人兵士たちを登場させ、より広い視野に立って当時の国際事情を作中に織り込んでいる。例えば『ラッパ隊長』は、風景画家であった父親が亡くなった後、母親と共に村の粉屋に間借りをしている若い娘アン・ガーランド(Anne Garland)と、その粉屋の長男で、彼女に思いを寄せるイギリス軍に所属するラッパ隊長のジョン・ラブディー(John Loveday)や、ジョンの弟で水夫のロバート・ラブディー(Robert Loveday)らの色恋沙汰を中心に、「ウェセックス」に住む市井の人々の生き様を描いた作品である。なお、作品に登場する外国人兵士たちは、ストーリーの展開にほとんど絡むことはない。しかし、「ドイツ部隊」(the German Legion)がイギリスの国王一家の行幸を先導する場面などは、ハーディが『ラッパ隊長』を執筆するに当たり、大英博物館でナポレオン戦争期の風俗や軍隊の実情などを調べ記したメモ集“Trumpet-Major Notebook”³の情報をもとにしていると思われる。このようなところから、ハーディは、彼自身が理解した当時の国際事情やイギリス軍の実情を念頭に入れて、イギリス軍の一部を構成していた外

国人兵士たちに関心を示し、彼らをこの作品の1場面に盛り込んだと考えられる。

さらにまた、「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」は、イギリス人ハンフリー・グールド(Humphrey Gould)と婚約しているにもかかわらず、ザールブリュック(Saarbrück)出身の外国人兵士マテウス・ティーナ(Matthäus Tina)と恋に落ちる主人公フィリス・グローヴ(Phyllis Grove)の悲恋を中心に描いた作品である。ハーヴェイやブラディは、結婚に際して婚約者のグールドを選ぶかマテウスを選ぶかで悩むフィリスを、結婚による社会的地位向上への願望と性的感情の間に挟まれて苦しむ女性であると指摘している(Harvey 116:Brady, *The Short Stories of Thomas Hardy* 18-19)。しかし、フィリスのこの内なる葛藤はそれだけでなく、イギリス人をとるか、外国人をとるかに関わる国際問題にリンクしている。

そこで本章では、まず、『ラッパ隊長』と「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」に登場する外国人兵士たちが、実際のイギリス軍に帰属していた外国人兵士たちをどのように反映するものであるかを、部隊の成立時期やその編制、従軍目的や軍服などの点から検証していく。それに続き、『ラッパ隊長』に登場するヨーロッパ大陸からやって来た外国人兵士たちの出身国の諸事情を精査する。そして、ナポレオン戦争期に、彼らの国々とイギリスが同盟国であったことを考慮に入れながら、ハーディが、その国際事情をどのように外国人兵士たちとアンの間人間関係に絡めて描いているかを考察していく。

また、「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」では、フィリスとグールドとマテウスの3角関係について論じていく。その中で、マテウスと、彼と同じ部隊に所属しているクリストフ・ブレス(Christoph Bless)の出身地について言及したあと、フィリスが結婚相手としてマテウスの方に心が傾いていく過程を追っていく。そして、結婚相手としてグールドを選ぶかマテウスを選ぶかで悩むフィリスが下した決断について考察する。

第1節 当時のイギリス軍の外国人兵士たちと作中の外国人兵士たち

本節では、『ラッパ隊長』と「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」に登場する外国人兵士たちが、実際の史実に照らして、どのように描出されているかについて考察する。

まずはじめに、実際にイギリス軍に所属していた外国人兵士たちについて言及したい。外国人兵士たちの存在はイギリス軍では珍しいものではなく、例えば17世紀や18世紀の戦争において、イギリスが外国人傭兵を雇うことは一般的なことであった。また、イギリスでは平時に外国人傭兵を雇用することは違法であったが、戦時には、神聖ローマ帝国内

にあった小国ブランシュヴィックやヘッセン・カッセルなどから傭兵を雇ってもある(C. T. Atkinson 291)。しかし、イギリス陸軍についていえば、陸軍が18世紀後半まで、外国人兵士たちによって構成された大きな軍隊を持つことはなかったし、また、陸軍は外国人兵士たちに対して懐疑的なところがあった。ところが、フランス革命はその状況を一変させた。1794年4月、イギリス議会において、フランス人を兵士として軍隊に雇い入れることを認める法案が可決される(Mike Chappell 3-6)。これによって、イギリスはナポレオン軍に追い詰められた多くの王党派のフランス人将校や兵士のほか、傭兵や捕虜、逃亡者となった外国人兵士たちを自軍に取り込むことが可能となった。さらに、イギリスはフランス革命戦争(French Revolutionary Wars, 1792-99)からナポレオン戦争にかけての間、オーストリア、ロシア、スウェーデン、オスマン・トルコなどと、第1次から第5次にまで及ぶ対仏大同盟を結んでいる⁴。そして、これらの戦争がヨーロッパ諸国や植民地を巻き込むものであったため、イギリス軍は多くの外国人兵士たちを受け入れることになった。ちなみに、1804年から1818年までのイギリス軍に属していた外国人兵士たちの数をあげると、1804年時では約17,000人で、イギリス軍全体のおよそ11%を占めていたものが、1808年には約18%にあたるおよそ35,000人、1818年には20%以上の約54,000人へとその数を増やしていった(René Chartrand 3)。外国人兵士たちは、様々な国籍と事情を持ちながらもイギリス軍に帰属し、重要な戦力の一部となっていたのである。よって、ナポレオン戦争期を背景に持つ作品である『ラッパ隊長』と「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」は、同時代のイギリスの軍隊事情も踏まえて読まなければならないことになるだろう。

『ラッパ隊長』には、ドイツ人、ハンガリー人、スウェーデン人たちからなる「外国人軽騎兵隊」(the Foreign Hussars)、「ヨーク軽騎兵隊」(the York Hussars)、そしてハノーヴァー人、ザクソン人、プロシア人、スウェーデン人、ハンガリー人やその他の外国人からなる「ドイツ部隊」が登場する。また、「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」には「ヨーク軽騎兵隊」が登場する。そして、これらの部隊はイギリス軍に実在するものであった。例えば、外国人軽騎兵隊は1810年頃、武力によって獲得したシシリーにおいて、イギリス軍に従軍していた様々な外国人連隊の兵士たちから構成されていたが、そのほとんどがドイツ人であった(Chartrand 16-17)。ヨーク軽騎兵隊は1793年から1802年まで存在した傭兵部隊で、イギリス政府が1793年にフランス革命戦争の勃発と共に設けた外国人部隊のひとつであった。そのほとんどはハノーヴァー人で構成されていたが、部隊を率いる将校はイギリス人やドイツ人など様々であり、ヨーク軽騎兵隊のイギリスに対する忠誠心は希薄なもので

あったと言われている(George Lanning 70-71)。さらに、小説の中で言及されている「ドイツ部隊」は、「イギリス国王のドイツ部隊」(the King's German Legion)、通称 KGL にあたるものと考えられる。「イギリス国王のドイツ部隊」は 1803 年、フランスによるハノーヴァー侵攻を機に、旧ハノーヴァー軍の兵士たちをイングランドに移動させて編制されたものであり、イギリス陸軍の中でも高い専門性を持った少人数の部隊であった。なお、イギリスは 1714 年にハノーヴァーからジョージ 1 世(George I, 即位期間:1714-27)を国王として迎え、ハノーヴァー朝を成立させたため、イギリスとハノーヴァーは同一の君主を持つ同君連合の関係となり、その結びつきは深いものとなった。そして、「イギリス国王のドイツ部隊」の騎兵隊のほとんどが、このハノーヴァー出身の兵士たちにより編制されており、その将校たちは国王一家に名前や顔が知られた貴族やジェントリー出身者であり、母国をフランスから取り返したいという対仏感情から、イギリス軍に進んで志願するものも多かったとされている(Chappell 3-8; Lanning 70-72)。

しかし、本章で取り上げる 2 作品に登場する部隊は、その活動期間や編制の点で、実在した部隊のように描かれているわけではない。例えば『ラッパ隊長』は、1804 年と 1805 年の出来事を素材としているところから、外国人軽騎兵隊とヨーク軽騎兵隊が同時に登場するのは時期的にみて不可能である。そのうえ、両方とも実在した部隊とは異なる編制となっている。『ラッパ隊長』に登場する「ドイツ部隊」は、様々な国からやって来た外国人兵士たちにより編制されている一方で、実際の「イギリス国王のドイツ部隊」は、主にハノーヴァー出身の兵士たちによって占められていたのである。また、ハーディ自身はこれらの作品において、ヨーク軽騎兵隊と「イギリス国王のドイツ部隊」が異なる部隊であることをはっきり確信していなかったようである。というのも、“Trumpet-Major Notebook”には「ヨーク軽騎兵隊はドイツ部隊と同じか」(“Are they [York Hussars] same as German Legion”)(*The Personal Notebooks of Thomas Hardy* 156)(以下、*Personal Notebooks* と略記)と、クエスチョンマークなしの疑問形で記されているからである。これにより、ハーディはヨーク軽騎兵隊と「イギリス国王のドイツ部隊」を混同していたのではないかと思われる⁵。この推察は、『ラッパ隊長』の第 1 章に登場する「ヨーク軽騎兵隊」の軍服が、実際の「イギリス国王のドイツ部隊」が身に付けていたものと同じであるとされているところから生じてくる。本文中、「ヨーク軽騎兵隊」に所属する兵士たちが着ている軍服は、「白いバックスキンのズボンに、7 分丈のブーツ、レースの飾りで引きたった真紅の軍帽、蠟で先端まで針のように固めた髭、そしてとりわけ、昔ながらの毛皮がついた外套の下に

着こんだ豪華に飾り立てられた青いジャケット」(“white buckskin pantaloons, three-quarter boots, scarlet shakos set off with lace, mustachios waxed to a needle point; and above all, those richly ornamented blue jackets mantled with the historic pelisse”)(16)⁶と描写されている。しかし、本来のヨーク軽騎兵隊の兵士たちは、赤いジャケットに緑のマント、赤い色のズボンとポーランド製のブーツ、赤と白の羽飾りがついた黒色のフェルトでできた細長い帽子を着用していた(Lanning 72)。また、実際の「イギリス国王のドイツ部隊」の第1軽騎兵隊は、濃紺のジャケットに茶色の毛皮の付いた濃紺のマントを着用していた(Lanning 72)。このことから、本文の中では、実際は「ヨーク軽騎兵隊」が「イギリス国王のドイツ部隊」の第1軽騎兵隊の軍服を着用しているように書かれていることがわかり、その結果、ハーディが両部隊を混同していたと結論付けることができる。

これに類似したハーディの誤解は、「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」にも見受けられる。作中では、マテウスが所属しているのは「ヨーク軽騎兵隊」であるが、それは「イギリス国王のドイツ部隊の連隊のひとつ」(“one of the regiments of the King’s German Legion”)(6-7)⁷であるとされている。さらに、両部隊を混同していたことは、作品のタイトル変更にもあらわれている。1890年に『ブリストル・タイムズ・アンド・ミラー』誌に初めてこの作品が掲載された時、タイトルは“The Melancholy Hussar”であった。ところが、1894年、オズグッド、マキルヴェイン社から刊行された短編集『人生の小さな皮肉』や、1896年のウェセックス小説版(Wessex Novels Edition)の同題名短編集に収められた時のタイトルは、“The Melancholy Hussar of the German Legion”へと変えられている。しかし、1912年のウェセックス版では、タイトルは“the German Legion”が外された“The Melancholy Hussar”へと変更され、もうひとつの短編集『ウェセックス物語』へと移された (Ray 25)⁸。つまりハーディは、ウェセックス小説版の『人生の小さな皮肉』が刊行された1896年以降に、ヨーク軽騎兵隊と「イギリス国王のドイツ部隊」が異なることに気づき、“The Melancholy Hussar”へとタイトルを改めたものと考えられる。

このような誤解は、ハーディがそれらについて調査していたにもかかわらず、両作品の内容が、老人たちの回想や証言に基づくものであるため生じたとも考えられる。なぜなら、『ラッパ隊長』はその序文で述べられているように、ハーディと直接面識のある老人たちが実際に見聞きしたことをもとに書き上げられているからである⁹。ハーディはまた、これらの情報をできる限り正確なものにするために、退役軍人たちからの聞き取り調査も行っ

ている(Michael Millgate 183)。「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」の場合も、ハーディの知り合いであった老人たちが記憶していた出来事を作品の骨子にしている。例えば、マテウスと、彼と同じ部隊に所属する友人クリストフが軍隊から脱走し、逮捕された結果、銃殺されることになった場面は、いくつかの情報源をもとに描出されている。そのひとつが、1801年、ヨーク軽騎兵隊に所属するドイツ人兵士たちがビンクーム丘陵で射殺されるのを目撃したという、ジェームズ・ブッシュロッド(James Bushrod)という人物による証言である(Life 116)。またハーディは、当時 90 歳であった女性から、銃殺された兵士たちが埋葬された塚の話を知っているが、それは作品の中において、逃亡罪のために銃殺されたマテウスとクリストフが埋葬される塚の場面に再現されている(*Thomas Hardy's Personal Writings* 30)(以下、*Personal Writings* と略記)¹⁰。このように、『ラッパ隊長』と「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」の作品世界は、一般人からの情報や記憶をもとに構築されたため、ヨーク軽騎兵隊と「イギリス国王のドイツ部隊」が混同されることになったのではないかと考えられる。

以上のことから、作中に登場する部隊と実在した部隊との間には、上記したような齟齬がみられるものの、実際のイギリス軍の外国人兵士たちをめぐる情報は、両作品をより深く理解するうえで必要不可欠であると思われる。

第 2 節 『ラッパ隊長』におけるアンと外国人兵士たち

この節では、『ラッパ隊長』の舞台とされるウェイマスとオーバクーム村のモデルとなった周辺地域が、どのような土地であったかについてみていく。そしてその後、小説の中のふたつの場面に着目し、ハーディが登場人物たちの言動を通して表出した国際事情を読み取っていくことにしたい。

ウェイマスはナポレオン戦争中、ジョージ 3 世(George III, 即位期間:1760-1820)が夏の間、別荘グロスター・ロッジ(Gloucester Lodge)で保養するために訪れた町である。そのため、ウェイマスとその近隣地域には、国王を警護するために多くのイギリス軍隊が駐留していた。さらに戦争中、フランス軍が上陸する可能性の高い土地のひとつが、ウェイマスとその周辺地域と考えられていた。当時、ナポレオンは遠浅の浜辺に侵入しやすい平底船を約 2000 隻用意していたとされており、ウェイマス近辺には、その平底船が着岸しやすく、人目に付きにくい入江があったのである¹¹。そしてまた、フランスの私掠船がしば

しば外海に出没し、イギリス船を襲ったという記録も残されている¹²。このような状況を危惧して、イングランド南部には、政府が徴募・組織したものではなく、自発的に戦闘に参加する意思を持った兵士である「義勇兵」(the volunteer)が何千人も集まり、戦いに備えていた¹³。このような状況からみて、この土地はフランス軍による侵略の脅威に怯えていた場所であり、したがって、そこに住む人々のフランスに対する警戒心はより一層強かったと言える。

それでは、このようなウェイマスとその近辺を舞台にした『ラッパ隊長』で、ハーディは、アンと外国人兵士たちの関わりをどのように描いているのか検証する。次に取り上げる場面は、イギリス軍が駐屯するために村近くの丘陵地にやって来た翌朝、自室の外から聞こえる騒音に気付いたアンが、自宅前の広場に集結している「ドイツ部隊」の様子を部屋窓から見下ろす場面である。

Then dragoons and horses wheeled off as the others had done; and troops of German Legion next came down and entered in panoramic procession the space below Anne's eyes, as if on purpose to gratify her.... They were charmed . . . by the head and neck of Miss Garland [Anne] in the little square window overlooking the scene of operations, and saluted her with devoted foreign civility.
(27)

それから竜騎兵とその馬たちは、他の者たちがしたのと同じように向きを変えて去ってしまった。そして次に、ドイツ部隊がやってきて、まるでアンを喜ばせる目的を持っているかのように、堂々と列をなして彼女の眼下の広場に入ってきた……。彼らは……軍事行動を見下ろす小さな四角い窓の内側にいるガーランド嬢(アン)の頭や首に魅了されて、忠誠を誓うような異国風の丁寧な仕草で彼女に挨拶した。

ここで注目したいのは、窓から「ドイツ部隊」を見下ろしているアンと、広場から彼女を見上げて、丁寧に挨拶を送る「ドイツ部隊」の行動である。アンと「ドイツ部隊」の間で交わされる視線は、中世ヨーロッパから続く、女性を守り崇拝する騎士道精神を想起させるところがあるが、これを国家間の関係に置き換えてみるとどうなるであろうか。前述したように、『ラッパ隊長』を執筆していた頃のハーディは、ヨーク軽騎兵隊と「イギリス国

王のドイツ部隊」を混同していたと思われる。しかし、アンに恭しい仕草で挨拶を送る「ドイツ部隊」の動作は、イギリスと歴史的・政治的に結びつき、イギリスに親近感を持っていたハノーヴァー出身の兵士たちを中心に構成されていた「イギリス国王のドイツ部隊」を思い起こさせるところがある。したがって、ここでアンに向かって敬礼する「ドイツ部隊」の兵士たちとハノーヴァーは、「メトニミー的關係」にあると言えよう。つまり、ハーディはこの場面によって、同君連合の關係にあったイギリスに対するハノーヴァーの忠誠心を表出しようとしたと言えるのではなかろうか。

さらに、第 5 章に描かれている、ラブディー家で開かれたイギリス人兵士たちと、「外国人軽騎兵隊」に属する外国人兵士たちが集うパーティーの場面にみられる、アンと外国人兵士たちとの間に築かれた關係性に目を向けてみることにしたい。パーティーに姿を見せたアンは、彼らから「一座の花」(“the flower of the whole company”)(36)ともてはやされ、彼女の前ではハンガリー人の兵士が自国の踊りを披露する。このハンガリー人兵士は「特定の国には属していなかった」(“belonged to no definite country”)(36)のだが、これは現在のハンガリーにあたる地域が、文化的・政治的独立を維持していたものの、長らくオーストリアに拠点を置いていて、神聖ローマ帝国の名門ハプスブルク家に支配されていたからである。そして、このハプスブルク家はイギリスと共に対仏大同盟に加わっていた。また、「外国人軽騎兵隊」にはドイツ人の兵士も加わっているが、ドイツ人は当時、ハプスブルク家、プロイセン、ザクセン、バイエルンなど多数の公領、地方伯領、辺境伯領、王国領などから構成されていた神聖ローマ帝国を中心にした地域に住んでいた。なお、この帝国内でのフランスに対する態度は時期や地域によって異なるが、ハプスブルク家とプロイセンの立場からみるならば、このドイツ人兵士を反フランス的な人物として読むことが可能であろう。また、パーティーに参加していたスウェーデン人の兵士の場合、スウェーデンも第 1 次、第 4 次、第 5 次の対仏大同盟に参加し、イギリスと共にフランスを相手に戦った歴史的背景がある。

「外国人軽騎兵隊」の兵士たちはイギリス軍に属しているものの、彼らはそれぞれの出身国や出身地域と「メトニミー的關係」に置かれている人物たちと言える。そして、そのような外国人兵士たちと、彼らによって「一座の花」として称えられたアンの間には、イギリス、及びフランスと対立する国や地域の連帯感が読み取れる。そしてまた、アンに対して踊りを披露し、彼女に敬意を示す「外国人軽騎兵隊」の外国人兵士たちは、そこに描出された構図からみて、イギリスに従属する立場に置かれていると捉えることができる。

言い換えれば、この場面には、ナポレオン戦争中に同盟国として戦ったヨーロッパ諸国に対する、イギリスの優越性が描出されているとも読むことができるということである。

以上の分析から、当時のウェイマスとその周辺が、地理的にフランス軍によって攻撃され易い地域であり、フランス軍による侵略への危機意識が高かった土地であることに着目して、ハーディはそこに住むとされる登場人物を通じて、フランスと戦う諸地域とイギリスの関係性を描出したと想定される。このような舞台設定を通して、作品にイギリスと同盟国との関わり合いを表出させるところから、当時のイギリスにあった対フランス意識をハーディは注視していたことが理解できる。

第3節 「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」におけるマテウスとクリストフ

「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」は、エミリー・ブロンテ(Emily Brontë, 1818-48)の『嵐が丘』(*Wuthering Heights*, 1847)と同様に、第3者の語り手が語る形式を持った短編小説である。前者の語り手は家政婦ネリー・ディーン(Nelly Dean)であったが、この作品の語り手は47歳の男性で、その内容は、彼が32年前の15歳の時に、当時75歳だったフィリスから伝え聞いた、彼女と彼女の婚約者グールドと、彼女が住む村近くに駐屯していた「ヨーク軽騎兵隊」の伍長マテウスとの間に繰り広げられた3角関係の恋物語である。

まずはじめに、作品に登場する外国人兵士マテウスと彼の仲間であるクリストフが、どのような人物であるか明らかにしておきたい。マテウスは、フィリスの自宅の前で彼女と言葉を交わしたことをきっかけに、彼女と恋に落ちる兵士である。この彼が属する部隊は、「イギリス国王のドイツ部隊」(“the King’s German Legion”)(3)や「ヨーク軽騎兵隊」(“the York Hussars”)(4)と記されている。しかし、軍における兵士たちの態度からみて、マテウスの部隊は、イギリスへの忠誠心が薄かった傭兵部隊であるヨーク軽騎兵隊を思い起こさせるところがある。というのも、彼が属する部隊には、兵士たちが駐屯するイングランドへの不満や嫌悪感が広がっているように描かれているからである。マテウスが所属する部隊の兵士たちの心理状態は、次の通りである。

So far from being as gay as its uniform, the regiment was pervaded by a dreadful melancholy, a chronic home-sickness, which depressed many of the men to such an extent that they could hardly attend to their drill. (8)

その軍服と同じように陽気であるどころか、連隊にはひどい憂鬱、慢性的なホームシックが蔓延しており、兵士たちの多くは訓練にほとんど出られないほど打ちひしがれていた。

さらにまた、「彼らはイングランドとイングランドの生活を嫌っており、誰も国王ジョージとその島の王国のことなんて全く興味がなかった」(“They hated England and English life; they took no interest whatever in King George and his island kingdom”)(9)と続けられているように、マテウスが所属する部隊の兵士たちはイギリスに関心もなければ、忠誠心も持っていないとされる。マテウスについて言えば、彼もまたフィリスに向かって、「僕はここに自分の意志に反してきたんだ。なぜ逃げ出してはいけないんだい？」(“I came here against my will; why should I not escape?”)(12)と語り、のちに彼は同じ部隊のクリストフやそのほかの仲間と共に、故郷に戻るために部隊から脱走する計画を立て、愛するフィリスに彼の出身地であるザールブリュックに同行するよう誘うのである。このように、マテウスとクリストフは、イギリスの部隊の一員として戦う意志のないことは明らかである。そして実際、イギリス軍内の外国人たちが属していた部隊は、傭兵や亡命者、逃亡者、捕虜などから編制されており、彼らの中には意にそぐわない軍隊生活を送り、イギリスに対して忠誠心を持たない者も数多くいたとされている(Lanning 70)。つまり、作者ハーディは作中で描出されたマテウスと彼が属する部隊の内情に、このような現実のイギリス軍に所属する外国人兵士たちの心情を投影させていたのである。

それでは、軍隊暮らしに馴染むことができず、故郷に帰ることを切望するマテウスとクリストフの出身地について検証していく。まず、マテウスについて言えば、「彼の名前はマテウス・ティーナで、ザールブリュックが彼の故郷で、彼の母親がまだそこに住んでいた」(“His name was Matthäus Tina, and Saarbrück his native town, where his mother was still living.”)(8)と記されている。ザールブリュックは現在ドイツの一部になっているザール川周辺地域にあり、そこは長らくフランス領と神聖ローマ帝国領の境界に位置していたため、その時々によって、どちらかの国に支配される歴史を繰り返してきた。そして、1792年、フランス軍に占領されるまでは、ザール川周辺は神聖ローマ帝国領であった。しかしマテウスが、「僕の故郷はザール川のそばにあって、フランスとは仲良くやっている」(“my country is by the Saar, and is at peace with France”)(12)と語っているように、フランス

革命後の 1792 年からナポレオンが敗退する 1815 年まで、ザール川周辺はフランスに占領されていた。かくして、イギリスに対する忠誠心がなく、戦うどころか、生まれ故郷に帰ることしか念頭にないマテウスは、ザールブリュックと「メトニミー的關係」を持つ人物として読むことができる。

次に、マテウスの友人で、のちに彼と共に部隊を脱走するクリストフの出身地についてはどうであろうか。クリストフの故郷はアルザスとされている。アルザスをめぐっては、神聖ローマ帝国とフランスとの間で長い間争奪戦が繰り広げられており、17 世紀になって徐々にフランスに侵食され、1681 年に、正式にフランスのアルザス州となる。そして、ドイツとの国境上にあったアルザスは、これ以降フランスにとって戦略上の要地となり、1793 年、フランス軍が同盟軍と戦った際には、下アルザスの住民 3 万人から 5 万人がドイツに逃亡するという事態も起きている。一方で、アルザスはナポレオン人気が高く、地元出身の将軍を数多く輩出している地域であった。そして、このような故郷アルザスを懐かしく思い、イギリス軍から脱走を図るクリストフは、アルザスと「メトニミー的關係」にある人物として造型されている。

ここで、マテウスの出身地が、本作品の原稿の段階と、1890 年の『ブリストル・タイムズ・アンド・ミラー』誌に掲載されたものと、本論文で使用している 1894 年に『人生の小さな皮肉』に収められた時のものとは異なる点に注目したい。詳しくみていくと、マテウスの出身地は、原稿では「プロイセン」とされ、『ブリストル・タイムズ・アンド・ミラー』誌掲載時には、「バイエルン」に変更されている(Keith Wilson and Kristin Brady, “Notes” 279)。そして、『人生の小さな皮肉』に収められた時には、「ザールブリュック」になった。このようなマテウスの出身地についての 2 度の変更は、ハーディが彼をどのような人物として造型したらよいかという点で、迷いがあったことを表しているのだろう。

次に、マテウスら外国人兵士たちに対して、フィリスの父親で医者グローヴ氏(Dr. Grove)がみせる反応について言及しておきたい。フィリスは当初、村近くのグロスター・ロッジに居を構えている国王を見物するために村にやって来た「地元の旧家」(“an old local family”)(5)出身のグールドと婚約していた。しかし、彼が父親の世話をしなければならぬという理由でバース(Bath)に行ってしまったので、結婚は長い間叶わないままであった。そのような状況の中、娘のフィリスが、自宅近くで外国人兵士マテウスと親しく語り合っていることを知ったグローヴ氏は、それを強く憂慮し、両者を距離的に引き離しておこうと考える。

‘It is useless for you to attempt to cloak your actions in that way. You have been meeting one of those fellows [the York Hussars]; you have been seen walking with him—foreign barbarians, not much better than the French themselves! I have made up my mind—don’t speak a word till I have done, please!—I have made up my mind that you shall stay here no longer while they are on the spot. You shall go to your aunt’s.’ (13)

「そんな風にお前の行動を知られないようにしておこうとしても無駄だよ。お前は、あいつら(ヨーク軽騎兵隊)のひとりと会っているな。お前は彼と歩いているところを見られているんだよ。—フランス人の連中と大して変わらない、異国の野蛮人め！わしは決めた。わしがしゃべり終わるまでひと言もしゃべらんじやないぞ、いいかい！わしは、奴らがあそこにいる間は、お前をもはやここには置かないと決めたぞ。お前はおばさんのうちに行くんだ。」

ここでグローヴ氏がマテウスだけでなく、彼が所属している部隊の外国人兵士たちを、「フランス人の連中と大して変わらない、異国の野蛮人」と罵倒している点に注目したい。グローヴ氏は、フィリスがその行動によって婚約者を裏切っているということや、マテウスが娘をたぶらかした気に食わない男だからというだけでなく、彼も含めた外国人兵士たちの存在そのものを嫌悪しているのである。グローヴ氏にとって、たとえイギリス軍に所属していても、外国人は外国人で、フランス人同様、敵対する国の人間であるということには変わらないのである。このようなグローヴ氏の外国人兵士たちに対する反感には、同時代のイギリス人が抱いていた「ゼノフォビア」(xenophobia)と呼ばれる、外国や外国人に対する理由なき嫌悪感が表出されていると思われる¹⁴。T.A.ブリーン(T.A.Breen)は、18世紀にイングランドを訪れたある外国人旅行者たちが、そこで「驚くほど強いゼノフォビア」(“astonishing strength of xenophobia”)(46)を経験し、不快な思いをしたと記している。ナポレオン戦争中のイギリス陸軍と海軍の状況について分析したカトリオナ・ケネディー(Catriona Kennedy)は、「ゼノフォビア」という感情が、イギリス人指揮官たちと兵士たちに浸透していると記している(61)。彼女はイギリス海軍の船に乗っていたある水兵が残した日記を例にあげ、その中でその船員が仲間の外国人水兵たちを軽蔑して、「ならず者」

（“scoundrel”）(61)と書き記していたと述べている。そしてまたケネディーは、ナポリ大使として活躍したウィリアム・ハミルトン(William Hamilton)が、彼の船に乗っている船員たちの乱暴な振る舞いを嘆き、とりわけ船内のトラブルが、外国人船員たちによって引き起こされていると一方的に考えている点にも言及している(61)。このような外国人を不快に思う風潮は、移住や亡命のために、海外や植民地から多くの人々が移住してきたヴィクトリア朝期のイギリスにもみられるものであった。

以上から、イギリス社会が外国や外国人に対して抱いていた不安症を念頭に入れると、そのような世間の風潮がマテウスを毛嫌いするグローヴ氏の態度に描き込まれていたと考えられ、ハーディはグローヴ氏を、イギリスのナショナリズムに凝り固まった人物として造型したと言える。

第4節 グールドを選んだフィリスの決断をめぐって

フィリスはウェイマスと想定される町から父親のグローヴ氏と共に、今住んでいる村に移ってきたアウトサイダーである。フィリスとグローヴ氏との暮らしについては、「父親の家での彼女はこの上なく退屈で、辛い立場に陥っていた。その上、父親としての愛情は全く枯れ果てているようだった」(“Her position in her father’s house was irksome and painful in the extreme; his parental affection seemed to be quite dried up.”)(12)と記されているように、フィリスは家族愛を味わう家庭環境にはない独身女性である。しかし彼女は、自宅近くで知り合い、言葉を交わすようになったマテウスから身の上話を聞かされると、彼女の孤独な心は癒されていく。そこで次に、マテウスの話の内容と、それを聞いたことによって生じたフィリスの心中の波紋について検討する。

マテウスがフィリスに語った話は、イングランドにおける彼と彼の部隊の過酷な駐屯生活の様子その他、「彼の生まれた土地についての興味深い詳しい情報と、子供時代の出来事」(“interesting details of his native place, and incidents of his childhood”)(11)や、ザールブリュックから彼に手紙をよこす母親のことなど、主にザールブリュックの魅力を強調するものである。「まるでデズデモーナのように、彼女は彼を気の毒に思い、彼の身の上話に耳を傾けた」(“Like Desdemona, she pitied him, and learnt his history.”)(8)とあるように、フィリスはマテウスの話に聞き入るのである。ここで明喩を用いて言及されている「デズデモーナ」とは、ウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)の4

大悲劇のひとつ『オセロー』(*Othello*, 1604)に登場するヴェネツィアの貴族の娘のことである。第1幕第3場において彼女は、ヴェネツィア共和国軍の指揮官のひとりで、傭兵部隊の隊長であったオセローが語る「わが人生の物語」(“the story of my life”)(130)を聞いているうちに彼に強く魅了され、彼と結婚するに至る人物である。そのデズデモーナに例えられているように、フィリスはもうひとりのデズデモーナとなり、次第にマテウスの話に深入りすることで彼に好意を抱き始め、彼は彼女にとって「魅惑的な夢の中の人物」(“the subject of a fascinating dream”)(10)となっていく。また、「マテウス・ティーナは自分の故郷、母、そして家庭を情熱的に慕う思いで、彼女を感化してしまっていた」(“Matthäus Tina had infected her with his own passionate longing for his country, and mother, and home.”)(12)と記されているように、アウトサイダーであり、孤独で家族愛に飢えていたフィリスは、マテウスの語る家族や故郷の話に共感するようになっていく。マテウスの郷愁に満ちた話は彼女の心を捉え、彼女にイギリスでは味わうことのできない家族愛や幸福を、ザールブリュックで手に入れることができるという希望を抱かせるものであったと言えよう。そしてその結果、マテウスから一緒にザールブリュックに来て欲しいと頼まれたフィリスは、イギリス人であるにもかかわらず、敵国フランス領下にあったザールブリュックへ、マテウスと共に駆け落ちする決心を固めてしまうのである。

ここまでの展開は、フィリスとマテウスとの心理的関係を、前出のデズデモーナとオセローの関係に置き換えて読むことができる。しかし、両者の決定的相違は、デズデモーナがオセローを選んだのに対して、フィリスは結局、マテウスから離れて別の男性を結婚相手として選ぶことになるという点である。

では、マテウスと共にザールブリュック行きを決めたフィリスが、最終的に駆け落ちを断念するに至る心境の変化は何であったのだろうか。駆け落ちを決行する日の夜、マテウスと待ち合わせをしていた場所にすでに来ていたフィリスは、偶然その場所で、婚約者グールドがそれまでの態度の非を詫びるために、友人と共に村に戻ってきていたことを知る。そしてその時、彼女はそれまで固めていた決心を実行直前で突然覆し、グールドとの結婚を選び取るのである。この時、フィリスは、「彼女は誰が彼女の愛を勝ち取ったか十分に承知していた。マテウスなしでは、彼女の人生の前途は侘しいものに思われた」(“she knew well enough who had won her love. Without him her life seemed a dreary prospect”)(15)と、マテウスが彼女の人生を生き生きとしたものにしてくれる存在であることを実感していた。しかし、一方で、「マテウスの申し出を考えれば考えるほど、彼女はますますそれを

受け入れるのが怖かった。それは実際、とても無謀で、先の見通しの立たない、向う見ずなものであった」(“yet the more she looked at his proposal the more she feared to accept it—so wild as it was, so vague, so venturesome.”)(15)と、彼女は駆け落ちという行為が思慮を欠いた選択であるとも気付いている。そして、次の引用にあるように、グールドがフィリスとの婚約を反古にするつもりでいるのだという世間の噂を信じて、自分がグールドを誤解してしまっていたことを知った時、彼女は良心の呵責を強く感じるのである。

She bitterly reproached herself for having believed reports which represented Humphrey Gould as false to his engagement, when, from what she now heard from his own lips, she gathered that he had been living full trust in her. (15)

彼女がハンフリー自身の口を通して今聞いたことから判断して、彼女は、彼が自分を完全に信用して暮らしていたことがわかった時、ハンフリー・グールドが婚約の約束を守らないとするうわさを信じてしまったことで、彼女は激しく自分自身を責めた。

その結果、フィリスはグールドとの結婚の「約束は守らなければならない」(“her promise must be kept”)(15)と、一転して彼との結婚を道義上の義務と考えるに至るのである。

フィリスは現実的観点と道義的観点から、グールドとの結婚に踏み切るという結論を出す。そして、彼女をこのような決断に至らせるストーリー展開からは、ハーディの国際感覚を窺い知ることができると思われる。つまり、作者はフィリスの決断に、国籍上の問題を絡ませようと考えていたということである。フィリスがマテウスと出会った時に感じた気持ちを表している次の引用は、そのことを物語っている。

She no longer checked her fancy for the Hussar, though she was far from regarding him as her lover in the serious sense in which an Englishman might have been regarded as such. (10)

彼女はもはや、この軽騎兵に対する恋慕を抑えられなかった。もっとも、彼を真の意味での恋人とみなすことは決してなかった。もし相手がイングランド人なら、そうしていた可能性はあったのだが。

注目すべき点は、フィリスは心情的にはマテウスに惹かれていたが、現実的観点に立てば、マテウスが国籍上イギリス人ではないため、彼を結婚相手としてはみていなかったということである。ハーディは、フィリスが彼女の意識のどこかで、マテウスが外国籍の人間であることを気にかけている人物に仕立て上げていると思われる。先述したように、戦中やヴィクトリア朝期のイギリス人全般にみられた「ゼノフォビア」を考えれば、ハーディは世相に合わせて、外国人であるマテウスではなく、同国人であるグールドとの結婚に落ち着くように筋書きを展開させたと考えられるだろう。

最後に、フィリスがマテウスと別れたあとに、彼とマテウスの身に起こった事件について考察しておきたい。フィリスがマテウスと共に、彼の故郷に行くことを拒否してから数日後、脱走兵として捕えられたマテウスは、彼と共に脱走を図ったクリストフと共に、フィリスが遠くから見ている場所で銃殺刑に処せられる。ザールブリュックの属性を持つマテウスと、アルザスの属性を留めているクリストフの処刑には、単にストーリーを波乱にとんだものにするだけでなく、フランスをはじめとする諸外国を警戒する当時のイギリス人の心理が反映されていると読めるのである。

おわりに

以上の考察から、本章で扱ったふたつの作品には、登場人物たちの言動による文字通りの物語世界を読み取ることができると同時に、その下にもうひとつの意味の層が隠されていたことが明らかになった。『ラッパ隊長』のイギリス人アンと、当地に駐屯していた外国人兵士たちとの交流が描出されているいくつかの場面は、一見、読者に微笑ましい情景を想起させるところがある。しかし、既述したように、アンはハノーヴァーやその他のヨーロッパ諸国の外国人兵士たちより空間的に高い位置に置かれ、さらに、彼らの憧れと称賛の対象となっていた。このような構図の下にハーディがこれらの場面を描出した背景には、イギリスとハノーヴァーの同君連合の関係性や、国際事情を反映した上下関係が暗示されていたと思われる。

『ラッパ隊長』にみられる作品構造が、より複雑な様相を呈しているのが「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」であった。フィリスをめぐるグールドとマテウスの3角関係は、字義通りには悲恋に終わっている。最終的には、フィリスは結婚相手としてグールドを選び、マテウ

スは彼女と共に故郷に帰還するという思惑が外れてしまい、それどころかクリストフと共に処刑されることになってしまった。そして、このストーリー展開からわかることは、作者ハーディは作品世界の表層下に、イギリス社会には一般的に対フランス意識のみならず、外国に対する不信感が根深くあったことを示唆していたということなのである。

注

¹ 本章は、日本ハーディ協会第 55 回大会(2012 年 10 月 13 日、於：武庫川女子大学)における口頭発表『『ラッパ隊長』と「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」における意味の 2 重構造—主に外国人兵士たちを中心にして』と、『ハーディ研究』第 39 号(日本ハーディ協会、2013 年 9 月 15 日発行)に掲載された論文『『ラッパ隊長』と「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」における意味の 2 重構造—主に外国人兵士たちを中心にして』に、大幅な加筆修正を施したものである。

² ハーディは、建築家ジョージ・R.クリック(George R. Crick)のもとで助手として働いていた頃に、教会を修復する仕事のため、1869 年と、1871 年から 1872 年の間、ウェイマスに滞在していた。彼の原稿や 1880 年の『グッド・ワーズ』誌の連載、そして 1880 年のスミス、エルダー社からの初版では、作品舞台はウェイマスとされている。しかし、1895 年に出版された初のハーディ全集となるウェセックス小説版(Wessex Novels Edition)以降、ウェイマスはバドマス(Budmouth)という架空の地名に変更されている。これは、ハーディの小説世界を構成するウェセックスが徐々に形作られる中で、ウェセックス世界に一貫性を与えるために生じたためである。このような地名変更の経緯に関しては、Simon Gatrell, *Hardy the Creator: A Textual Biography* (Oxford: Clarendon Press, 1988)130 を参照。また、サットン・ポイント村については、Clive Holland, *Thomas Hardy's Wessex Scene* (New York: Haskell House Pub Ltd, 1948)222 を参照。

³ “Trumpet-Major Notebook”は、リチャード・H.テイラー(Richard H. Taylor)がハーディのメモ類を集めてまとめた *The Personal Notebooks of Thomas Hardy*(1978)に収められている。

⁴ 第 1 次から第 5 次にわたる対仏大同盟の時期と、イギリス以外の同盟国は以下のようになっている。第 1 次対仏大同盟(1793-97)：ロシア、オランダ、スペイン、ポルトガル、スウェーデン、ナポリ、サルデーニャ、オーストリア、プロイセンなど。第 2 次対仏大同盟(1799-1802)：ロシア、オーストリア、オスマン・トルコ、ポルトガル、ナポリなど。第 3 次対仏大同盟(1804-05)：オーストリア、ロシアなど。第 4 次対仏大同盟(1808-09)：スウ

エーデン、ナポリ、オーストリアなど。第 5 次対仏大同盟(1813-15)：ロシア、オーストリア、プロイセン、スウェーデンなど。

⁵ Lanning もこれと同様のことを指摘している(70)。

⁶ 本章における引用は、Thomas Hardy, *The Trumpet-Major: A Tale* (London: Penguin, 1997)によるものである。

⁷ 本章における引用は、Thomas Hardy, “The Melancholy Hussar of the German Legion.” *The Fiddler of the Reels and Other Stories* (London: Penguin, 2003) によるものである。

⁸ 「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」が最初に収められた『人生の小さな皮肉』は、「人生は運命的な、小さな、皮肉なめぐり合わせからできている」という世界観を描いた作品を集めた短編集であった(内田能嗣 317)。しかし、ハーディは 1912 年に刊行したウェセックス版の『人生の小さな皮肉』の序文で、「1804 年の言い伝え」と「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」と呼ばれるふたつの物語は、以前、この作品集に収められたものだったが、それよりももっと相応しい『ウェセックス物語』に移された”(“The two stories named ‘A Tradition of Eighteen Hundred and Four’ and ‘The Melancholy Hussar of the German Legion,’ which were formerly printed in this series, have been transferred to *Wessex Tales*, where they more naturally belong.”)(Thomas Hardy’s *Personal Writings* 31)(以下、*Personal Writings* と略記)と述べている。それは、時代背景が 19 世紀初期に設定されている『ウェセックス物語』の特徴と合致するものであったからである(Keith Wilson and Kristin Brady, “Introduction” xxi)。

⁹ 1895 年にオズグッド、マキルヴェイン社から出版されたウェセックス小説版序文で、ハーディは次のように述べている。「この物語は、同シリーズの他のどの物語よりも大いに証言一口述及び記述による一に基づいている。話の進行を左右する外的出来事は、子供の頃著者がよく知っていたが、今はとうに故人となった、それらの場面の目撃者であった老人たちの思い出をおおむね誇張せず再現したものである”(“The present tale is founded more largely on testimony—oral and written—than any other in this series. The external incidents which direct its course are mostly an unexaggerated reproduction of recollections of old persons well known to the author in childhood, but now long dead, who were eye-witnesses of those scenes.”)(*The Trumpet-Major* 3)。

¹⁰ ハーディは処刑場面を描くにあたり、1801 年 7 月 4 日付の『モーニング・クロニクル』

紙(*Morning Chronicle*)に掲載されていたヨーク軽騎兵の処刑場面の記事も参考にしている(*Personal Writings* 124-25)。

11 ハーディの短編小説「1804年の言い伝え」(“A Tradition of Eighteen Hundred and Four”, 1882)には、フランス軍がウェイマス近くにあるラルワース入江(Lulworth Cove)に上陸するという噂が広まっていたと書かれている。フランス軍の上陸にまつわる噂については、“The Invasion That Wasn’t.” *Dorsetlife.co.uk*. 23 Mar. 2015.

〈<http://www.dorsetlife.co.uk/2007/01/the-invasion-that-wasnt/>〉を参照。

12 “Georgian Walk.” *Weymouthwalks.co.uk*. 20 Mar. 2015.

〈<http://www.weymouthwalks.co.uk/sample-page/georgian-walk-part-two/>〉を参照。

13 当時の南イングランドに集まった「義勇兵」については、“The Invasion That Wasn’t.” *Dorsetlife.co.uk*. 23 Mar 2015.

〈<http://www.dorsetlife.co.uk/2007/01/the-invasion-that-wasnt/>〉を参照。

14 当時のイギリス人が抵抗感を抱いていた国としてよく知られているものは、まず、フランスである。イギリス人のフランス、あるいはフランス人への反発は、彼らのローマ・カトリックに対する敵意と結びついてもいた。さらにイギリス人は、17世紀に、ヨーロッパの覇権を争ったオランダ人に対しても不快感を示すところもあった。Geoffrey Hughes, *Political Correctness: A History of Semantics and Culture* (West Sussex: Wiley-Blackwell, 2009)、及び、Colin Haydon, “‘I love my King and my Country, but a Roman Catholic I hate’: Anti-Catholicism, Xenophobia and National Identity in Eighteenth-Century England.” Eds. Tony Claydon and Ian McBride. *Protestantism and National Identity: Britain and Ireland, 1650-1850* (Cambridge: Cambridge UP, 2007)34-35 を参照。

第3章 『日陰者ジュード』

—ジュードとスーの「事実婚」を中心にして¹

はじめに

『日陰者ジュード』(*Jude the Obscure*)は当初、“The Simpletons”というタイトルで、1894年12月に『ハーパース・ニュー・マンズリー・マガジン』(*Harper's New Monthly Magazine*)誌で連載が開始された。しかし、その翌月から同誌におけるタイトルは“*Hearts Insurgent*”に変更され、標記の題名になったのは1895年に1巻本として、オズグッド、マキルヴェイン社から出版された時であった。最終的には改題されたけれども、“*Hearts Insurgent*”というタイトルが示すように、『日陰者ジュード』は、主として、主人公で石工のジュード・フォーレイ(Jude Fawley)と従妹のスー・ブライドヘッド(Sue Bridehead)が彼らの生き方を通じて、ヴィクトリア朝社会の上流・中流階級に支持されていた閉鎖的なキリスト教世界観や結婚制度に疑問を呈し、それに代わるべき男女の新しい結びつきの在り方を模索した小説である。実際、スーは「法的な結婚」(“legal marriage”)(271)²について、「法的義務は、無償であることを本質とする熱情を壊すものです」(“it [legal obligation] is destructive to a passion whose essence is its gratuitousness”)(272)と述べて、制度としての結婚を批判している。さらにまた、現実の結婚の在り方に否定的な考えを持つスーは、ジュードと共に法的な手順を踏まずに、愛し合うならば一緒に暮らすことが自然とする「自然婚」(“natural marriage”)(270)を主張し、非合法的ではあるけれども、家庭を築き子供たちを育てていくことにする。つまり彼らは、今日言われているところの「事実婚」を選んだことを意味している。そして多くの批評家は、ジュードとスーの生き方が、結婚制度の問題点や女性の社会における役割の見直しを説き、新たな家族形態を提示していると解釈してきた³。

しかしここで、ジュードとスーが、植民地オーストラリア⁴生まれのリトル・ファーザー・タイム(Little Father Time)(以下、ファーザー・タイムと略記)を息子として引き取り、育てている点に注目すると、ふたりの「事実婚」には新たな解釈が生まれてくる。ファーザー・タイムは、ジュードの最初の妻であるアラベラ・ドン(Arabella Donn)がジュードと別れたあとに、彼女の移住先オーストラリアで産んだジュードとの間の子供である。アラベラはファーザー・タイムの養育を一緒に移住してきた自分の両親に任せていたが、当地で

出会ったカートレット(Cartlett)との結婚を機に、その子をイギリスにいるジュードの元に彼の意向を確かめることなしに送り出すのである。その結果、ジュードとスーはファーザー・タイムを息子として引き取ることになる。この国籍の異なる子供を家族として迎え入れるふたりの「事実婚」は、宗主国イギリスと植民地オーストラリアの関係を暗示するものと理解できる。また、アラベラはジュードと別れ、移住先のオーストラリアで出会ったカートレットと結婚し、その後帰国しジュードとよりを戻すというように、結婚や別れを繰り返す人物である。彼女の奔放な生き方を非難して、デズモンド・ホーキンス(Desmond Hawkins)は、彼女を「下品な欲望の表象」(“the representation of gross appetite”)(69)であり、「怪物」(“monster”)(77)へと「墮落している」(“degenerating”)(77)と評している。また、H.C.ダフィン(H.C.Duffin)は、彼女を「下品」(“coarseness”)(155)な女性だと批判している。この評に何ら異論はないが、それと同時に、アラベラがジュードやカートレットとの間で繰り返す結婚や別離には、アラベラを通して、当時のイギリス本国と、オーストラリアという植民地に対する作者の見方が示されていることを見逃してはならない。この点を明らかにするために、本章でははじめに、アラベラが繰り返すジュードとカートレットとの結婚と別離についてみていく。その後、ファーザー・タイムを息子に迎えたジュードとスーの「事実婚」について考察し、彼らに対する周囲の反応と、ジュードたちの同居生活に亀裂が生じていく経緯を追っていくことにする。

第1節 ジュードとアラベラの結婚と離別

ジュードは両親を幼い頃に亡くし、貧しさの中、彼の父親の伯母にあたり、パン屋を営むドルシラ(Drusilla)によって育てられた。「ジュード」(Jude)という固有名詞は当然のこと、「ユダ」(Judah)を連想させるかもしれない。彼はユダヤ人男性の特徴でもある黒い髪と黒い瞳の持ち主であり、黒い顎鬚をたくわえてえている⁵。また、ユダ王国が滅ぼされてから、ユダヤ人が世界に離散し、流民となって放浪生活を余儀なくされたように、ジュードもまた、職や住む家を探して転々と生活の場を変えている。これらの事例を踏まえ、森田由香は、ジュードという人物にユダヤ性を読み取っている(68)。加えて、「ドルシラ」というジュードの大叔母の名は、新約聖書の「使徒言行録」第24章第24節の中で、ローマ提督フェリックス(Felix)と共に、パウロを呼び出し、信仰について尋ねるユダヤ人女性ドルシラを連想させるところがある。ジュードの場合、「事実婚」を選択した彼は世間の人々

から差別されたり、白眼視されたため、家族と共に住む場所を何回か変えている。しかし、独身時代の彼が転居を繰り返す理由は、夢を実現させるためのプロセスのひとつであったり、新生活を始めるためのものであったとも言える。そしてまた、たとえドルシラがユダヤ人であったとしても、ジュードと彼女は遠縁の親戚であることから、ジュードが必ずしも直系のユダヤ人とは言い切れない。加えて、本論文の第7章第1節で詳しく述べるが、作者は『ダーバヴィル家のテス』に登場するアレックの父親が、ユダヤ人であると思わせるために意図的な書き込みをしている。ところが、ジュードに関してはそれをほのめかず言及はない。これらの点から、本論文では、ジュードをユダヤ人と捉えることはせず、彼がどのような考えを持ち、どのように生きたかを分析することで、ジュードという人物について考察していく。

貧しい暮らしの中、彼の故郷であるメアリーグリーン(Marygreen)で成長したジュードは、社会に貢献できる価値のある人間になろうという高邁な目的を持ち、石工の仕事に励みながらオクスフォードを想定した架空の都市クライストミンスター(Christminster)にある大学に入学し、そこで学問を修め、聖職者となることを夢見るようになる。労働者階級の出身でありながら、聖職者を目指し勉学に打ち込むジュードの向上心は、ヴィクトリア朝期の作家であり医者でもあったサミュエル・スマイルズ(Samuel Smiles, 1812-1904)が、『自助論』(*Self-Help*, 1859)の中で説いた考えに触発されているところがある。スマイルズは300人以上の欧米人の成功談を集めた『自助論』の中で、独立独行と勤勉さが社会的成功をもたらすと説いた(Ingham 44-45)。しかし、ジュードの場合、聖職者になって社会に尽くしたいという彼の考えはあくまでも建前であって、ジュードの本音はそんな単純なものではないことが次の引用からわかる。

I must save money, and I will; and one of those colleges shall open its door to me— shall welcome whom it now would spurn, if I wait twenty years for the welcome.... And then he continued to dream, and thought he might become even a bishop by leading a pure, energetic, wise, Christian life. And what an example he would set! If his income were £5000 a year, he would give away £4500 in one form and another, and live sumptuously (for him) on the remainder.(37)

僕はお金を貯めなければならないので、やるぞ。そうすれば、ああしたカレッジのひ

とつが、自分に門戸を開いてくれるだろう。もし入学に 20 年待つとしても、今なら門前払いされる者をきつと受け入れるだろう。……そしてそれから、彼は夢にふけり続け、清らかで、ひたむきで、賢いキリスト教徒の生活を送ることで、主教にさえなれるかもしれないと考えた。そうなれば、なんと素晴らしい手本を示すことになるのか！もし年 5,000 ポンドの収入があれば、4,500 ポンドをあちこちに寄付し、残りで(彼にとっては)贅沢に暮らしていけるというものだ。

つまりジュードは、大学教育を受け学問を身に付け、キリスト教会に奉仕することを立身出世や経済的安定のためと考えているのであり、このようなジュードの将来に対する見通しは、彼の屈折した価値観を露呈するものである。このようにみれば、ジュードは必ずしも『自助論』で紹介されているスマイルズが推奨する立派な人物の範疇に入るとは言えない。作品のタイトルである *Jude the Obscure* に付けられている“obscure”という語には、いくつかの意味がある。OED によれば、“obscure”は人の地位や身分や家柄が「低い」(“humble”)という意味や、「目立たない」(“inconspicuous”)という意味がある。このようなところから、定訳となっている邦訳の「日陰者」(“the obscure”)は、下層階級出身で日陰の人生を歩んだジュードの人生を表していると思われる。しかし、“obscure”には「はっきりしない」(“not clear or plain”)、「あいまいな」(“vague”)という意味もあり、その意味で考えれば、作品タイトルにある“obscure”は、社会に貢献したいという理想を持ちながら、立身出世の野心に燃えるジュードの矛盾したもうひとつの価値観の表出とも取れるだろう。

ところが、ジュードが憧れるクライストミンスター大学は、彼のような出自のものにとっては閉鎖的な世界であった。リチャード・D.オールティック(Richard D. Altick)は、宗教的・社会的な理由から、オクスフォードとケンブリッジ両大学から排除された人々のために、ロンドン大学を含むユニバーシティ・カレッジが 1828 年に開校されたことに触れながら、下層階級の人々が大学教育を受けることの限界について、次のように述べている。

The university [University College] soon made its presence felt, but even when allowance is made for the number of middle-class students it served, the fact remains that in Victorian England higher education, wherever provided, was reserved for a tiny minority. It was from the upper and upper-middle classes, who

alone had access to it—not the obscure, rustic Jude of hopeless ambition—that the learned professions, notably the clergy and the law, were recruited. (254)

その大学(ユニバーシティー・カレッジ)は間もなくその存在が感じ取られるようになったが、大学に便宜を与えられた中流階級の学生数を酌量しても、ヴィクトリア朝のイングランドでは、高等教育はどこで提供されようとも、ほんの少数の人々のためのものであったという事実には変わりはない。唯一高等教育に与ることができたのは、叶わぬ野心を抱いた名もなき田舎者のジュードではなく、上流階級と中流階級上層の出身者から、学問を要する専門職、特に聖職者や弁護士が採用されたのである。

さらに、限られた階級の人々だけが通うことを許された大学は、「苗床でラディッシュを栽培するようにそこでは教区牧師らを育てる」(“They raised pa’sons there like radishes in a bed”)(24)所でもあり、よって、英国国教会はこのような大学教育を受けた者たちによって支配されていたのである。加えて、大学や教会の高い地位を独占していた支配者層の力は、植民地においてもイギリスの支配者層を頂点とした社会構造を作り上げていった。つまり、ジュードが憧れるクライストミンスターや、そこでの学問と英国国教会は、下層階級、女性、植民地の人々に権力をふるう、イギリスの国家体制を具現するものであると言えるのである。すると、石工という職人でありながら立身出世を目指し、クライストミンスターが「自分自身が下等な人非人に勝る存在であることを示す男子唯一の機会」(“a man’s one opportunity of showing himself superior to the lower animals”)(62)を与える所と受け取って、その点に価値を見出し、それに向かって努力を重ねるジュードは、イギリス社会体制に共感を抱く人物として造型されているということになる。

このようなジュードの価値観は、彼がメアリーグリーンで石工として働いている時に出会った、養豚業を家業としている家の娘アラベラとの交際や、彼女との結婚生活にも顕著に表れている。下宿先から大叔母ドルシラの家に向かう途中で、女友達とふざけ合っていたアラベラと知り合ったジュードは、彼女の肉体的魅力の虜になり、彼女との付き合いを深めていく。その一方で彼は、アラベラのことを「彼が何の尊敬も抱かなかったような女であり、そして、その彼女の生活は郷里が同じという以外、彼の生活とはなんの共通点もなかった」(“a woman for whom he had no respect, and whose life had nothing in common with his own except locality.”)(44)女性だと見下してもいるのである。つまりジ

ユードは、自分自身が下層階級にあるにもかかわらず、その階級を蔑み、肉体労働者との間に心理的距離を置こうとしている。そして、このような彼の態度は、アラベラとの結婚生活の中でも同様である。生活のために豚を殺してその血を抜き、豚の脂を溶かす作業を行うことになったユードとアラベラは、その仕事をめぐり激しく口喧嘩をする。豚の屠殺を残酷な行いと非難し嫌悪するユードを見たアラベラは、彼をなじり、ユードが大切にしていた古典の書物を豚の脂がついた手でつかんで放り投げる。このようなアラベラに対し、ユードは、「僕の本に手を出すな！」(“Leave my books alone!”)(68)、「投げつけたいならしたって構わなかったが、そんな風に本を汚すなんて我慢ならないよ」(“You might have thrown them aside if you had liked, but as to soiling them like that, it is disgusting!”)(68)と、激怒の言葉を発している。本を投げつけられたことよりも、本を汚されたことに怒るユードは、労働よりも学問を重んじており、この点で彼は、クライストミンスター大学の象徴される学問と権威を重視するイギリス国家体制の中に心理的に組み込まれている人物として、粗野なアラベラと対峙させられていると言えよう。

ユードに対するアラベラの反応をみていくと、彼女はユードに魅了され、彼の気を引くために、切り取った豚の性器を投げつけたり、胸の谷間にコーチンの卵を挟んで見せるなどして、ユードを性的に誘惑して結婚するに至った。ところが結婚後、読書ばかりしていて、経済的に生活を向上させようとしない彼に対し、彼女は不満を募らせていく。そして、ついにユードと大喧嘩したアラベラは、彼に別れ話を切り出し、イギリスを捨てて、両親と共にオーストラリアへの移住を決心する。アラベラがユードに宛てた別れの手紙には、「彼(ユード)が出世する見込みも、あるいは、彼女の生活をよくしてくれる見込みもなかった」(“There was no prospect of his [Jude’s] ever bettering himself or her.”)(71)と書き留められていた。さらにアラベラは、「彼は全く時代遅れの人間で、彼女(アラベラ)は彼が送っているような生活は好きになれなかった」(“He was such a slow old coach, and she [Arabella] did not care for the sort of life he led.”)(71)と、学問ばかりに没頭していて、経済力のないユードに反発していたこともわかる。つまり、アラベラのユードに対する落胆は、現実の困窮を脱するには何の役にも立たない学問に対する批判の表れである。さらにまた、大学に進学することに固執するユードに対する彼女の不満は、結果的に、学問の府であるクライストミンスターの大学とそのような大学から輩出された人材が占めている支配者層と彼らが手にする特権、及び支配者層を頂点にしたイギリス国家体制に対する批判に、ユード批判を経由して、間接的に結び付いていると解釈す

ることができよう。以上のことから、アラベラのオーストラリアへの移住とそれに伴うジュードとの別居生活は、彼女がイギリス本国の体制と権威に見切りをつけるために取った行為として読むことができよう。

第2節 アラベラとカートレットの結婚

オーストラリアへ移住したあとのアラベラの生活に注目すると、法的にはジュードと結婚している状態にありながら、彼女はシドニーにあるシドニーホテルの支配人で、彼女よりかなり年上のカートレットという人物と結婚する。ところが、間もなくアラベラは、カートレットと口論の末、イギリスに帰国してしまう。そして、彼女を追ってイギリスにやって来たカートレットとよりを戻したアラベラは、ジュードと正式に離婚して、カートレットと結婚する。それでは、オーストラリアとイギリスの間で繰り広げられるアラベラのカートレットとの生活は、どのように解釈することができるのだろうか。

まず、アラベラがオーストラリアでカートレットと結婚した理由として、彼女は自分に惚れ込んだカートレットに結婚をせまられたことのほかに、オーストラリアという植民地で経済的に困窮していたことをあげている。『日陰者ジュード』の出版時期にあたる1890年代のオーストラリア経済は、それ以前のようには繁栄しておらず、この時期にオーストラリアにやってきた移民たちが職を得ることは難しくなっていた(Geoffrey Sherington 109)。このオーストラリアの経済的状况を考えると、ハーディは移民たちが直面していた実際の生活苦を、彼女のカートレットとの結婚の経緯に描きこんだと思われる。

しかし、移住先にオーストラリアを選び、オーストラリア在住のカートレットとの結婚の道を選んだからには、アラベラは一応、オーストラリアに対して何らかの期待を寄せ、少なからず親近感を抱いていたものと考えられる。アラベラはオーストラリアに移住してきたものの、既述したように、イギリスにおけるジュードとの結婚は法的には未だ継続していた。しかし彼女は、オーストラリアでカートレットと「本式に一法律に基づいて一教会で」(“Regularly—legally—in church”)(185)結婚しており、彼女はイギリスの法律ではなく、オーストラリアの法律を尊重し遵守している。カートレットと結婚したあと、アラベラは先述のように、彼との口喧嘩がもとでイギリスにひとりで戻ってしまう。そして、クライストミンスターの酒場でバーメイドとして働いていた時に、ジュードと再会する。アラベラからカートレットという人物とオーストラリアで結婚したことを知らされたジュー

ードは、ふたりの結婚を「犯罪」(“crime”)(185)とみなす。これは、ジュードがアラベラとの間で、法的にも教会法的においても正式に離婚していなかったからである⁶。これに対しアラベラは、「犯罪だって！へん！あっちじゃそんなようなことなんとも思っちゃいないわ！そんなことしている人はたくさんいるからね」(“Crime! Pooh. They don’t think much of such as that over there! Lots of ’em do it”)(185)と、オーストラリアでの結婚について自己弁護するのである。彼女のこの言葉は、オーストラリアでは、人々がイギリスの法律や教会法に縛られずに生活しており、アラベラのカートレットとの結婚は、イギリスの法律や制度や規則がオーストラリアでは通用しないことを物語っている。ボウナスが指摘するように、アラベラの生き方は、植民地にはイギリスとは異なる生き方があり、それが正当化されるべきであることを読者に伝えるものと言えよう(18)。これらの点に留意すれば、イギリスでは結婚した状態にあることを気にも留めないアラベラのオーストラリアでの結婚は、現実社会における宗主国イギリスの持つ優位性を反転させる行為として読むことができる。以上のように、移住先としてオーストラリアを選び、オーストラリアの法律に則って結婚し、それを正当なものであるとするアラベラは、オーストラリアと「メトニミー的關係」にある人物として造型されていると言えるだろう。

ところが、アラベラは結婚状態にあるままで、上述したように、再び母国イギリスに戻ることになる。この理由は作中では詳述されておらず、単にカートレットと口論した結果、家を飛び出したことが記述されているだけである。さらにまた、母国に戻ったアラベラは、彼女のあとを追ってやって来て、ロンドンのラムベス(Lambeth)でパブを経営することになったカートレットと、今度はイギリスの法律に基づいて結婚する。では、イギリスに失望し、オーストラリアに向かったアラベラは、なぜ再びカートレットとイギリスで結婚したのであるか。その理由についてアラベラはジュード宛の手紙の中で、カートレットから彼女に対する愛情のこもった手紙を受け取ったこと、そして、彼からパブの営業の手伝いを頼まれたことをあげている。さらに、カートレットとの結婚で、「彼女は境遇を良くし、お上品な生活を送る見込みができた」(“she had a chance of improving her circumstances and leading a genteel life.”)(192)からであり、結局、アラベラは苦しい生活状況から抜け出すために、カートレットとの結婚を選んだのである。そしてこのあと、彼女はジュードと正式に離婚し、カートレットと正式に結婚することになる⁷。

しかし、上記にあげられたアラベラとカートレットの結婚理由は、作品の意味の表層であって、その下には、植民地から戻ってきた人々が直面するイギリスでの厳しい生活状況

が示唆されている。当時の海外移住の動向について目を向けてみると、1870年から1914年のイングランドとウェールズでは、海外に移住した人々のうち40%が母国に戻って来たと言われている(Harper 2)。そして、イギリス社会は植民地から戻ってきた人々を卑下するようなどころがあり、さらにまた、植民地から帰国してきた人々がイギリスで再び職を得て、安定した生活を送ることは難しかった(Kathleen Burke 184)。すると、実際に海外生活を送って戻ってきた人々と同様に、小説世界においてオーストラリアから戻ってきたアラベラが、イギリスで生きていくためにカートレットと結婚するように設定されているのは、現実社会の動向をフィクションの中に反映してのものであるとすることができるだろう。

さらに注目すべき点は、彼女の生まれたイギリスに戻ってきたアラベラが、オーストラリア人を夫にしているということである。作中では、イギリスにおけるアラベラとカートレットの結婚生活については詳しく述べられていない。しかし、結婚後のふたりの関係はカートレットが亡くなるまで続いており、先述のように、アラベラはカートレットとの結婚によって、「彼女は境遇を良くし、お上品な生活を送る見込みができた」のである。アラベラはオーストラリア人のカートレットを信頼し、カートレットはアラベラに満足な暮らしを享受させることができたと考えられ、ふたりの結婚生活はこの点ではそれなりに充実していたと思われる。以上のことから、ハーディは、ふたりが「メトニミー的關係」を持つ植民地オーストラリアに対し、好意的であったと推測できるのである。

第3節 ジュードとスーの「事実婚」とリトル・ファーザー・タイムをめぐる

この節では、ジュードとスー、そして彼らが自分たち家族の一員として迎え入れるファーザー・タイムから成る家族の関係について論じていく。まずはじめに、ジュードとスーが同棲するまでの経緯と、ふたりの結婚観について考察する。

ジュードの妻アラベラがオーストラリアに渡ったのち、大学進学を目指し、クライストミンスターに移り住み、石工として働き始めたジュードは、従妹のスーが同地に住んでいることを知る。スーがキリスト教関係の商品を売る店で働いていることがわかり、彼女を訪ねたジュードは、ギリシア語やラテン語で書かれた古典を読む知的な彼女に思いを寄せるようになる。一方スーも、純粹で知的なジュードに好意を持つようになり、ふたりは頻繁に連絡を取り合うようになる。間もなくスーは、ジュードの子供時代の学校の先生で、

彼女よりも 18 歳年上のリチャード・フィロットソン(Richard Phillotson)が校長を務めている学校の助教師の職を見つけ、そこで働き始める。その間、ジュードからアラベラと未だ婚姻関係にあることを知らされた彼女は、アラベラに嫉妬して、唐突に、彼女に熱い思いを寄せていたフィロットソンと結婚してしまう。

しかしながら、スーは結婚制度に対して否定的な意見の持ち主である。例えば、彼女は結婚について、ジュードに向かって次のように述べる。

Fewer women like marriage than you suppose, only they enter into it for the dignity it is assumed to confer, and the social advantages it gains them sometimes—a dignity and an advantage that I am quite willing to do without. (260)

結婚が好きな女性って、あなたが想像しているよりは少ないのよ。ただ、彼女たちが結婚に踏み切るのは、結婚が授けてくれるはずの品位と、時には彼女たちが手にする社会的利点のためだけなのよ—私が全くなくていいと思っている品位と利点を。

ここからは、スーが結婚制度を社会的な体面を守る実利主義的な契約とみなし、法的な結婚に否定的な考えを持っていることがわかる。さらにまた、彼女は本章の「はじめに」で引用した文言にもあるように、「法的義務は、無償であることを本質とする熱情を壊すものです」と言って、結婚制度を「俗悪」(“vulgar”)(271)なものともみなす。このスーの結婚観からもわかるように、彼女は法的な男女の結びつきに疑問を抱いている。しかし、実際の彼女はジュードが妻帯者であることを知ると、衝動的に愛情を感じるができないフィロットソンと結婚してしまう。スーの思いと思考は矛盾しているため、彼女は自己分裂を起こしていると考えてよい。

結婚制度を疑問視しながら、フィロットソンと結婚したスーの結婚生活は、すぐに破綻を来すことになる。彼女にとって、フィロットソンとの結婚生活が反面教師となって、彼女は一層ジュードへの思いを強めていく。そして、結婚してから数カ月も経たないうちに、スーはフィロットソンに離婚を申し出て、自らが理想と考える男女の結びつきを实践すべく、法律ではなく愛情と信頼に基づいて、ジュードと共に夫婦生活を送ることになる。

これに対し、ジュードの場合、彼の結婚に対する考えはスーのものとは異なっていた。スーとフィロットソンの離婚が成立したのと同じ頃に、ジュードはアラベラと離婚する。

それから間もなくして、彼はスーに、「さあ、僕らは腕を組んで堂々と歩こう」(“Now we’ll strut arm in arm”)(258)と言い、「他の婚約者たちのようにね。そうする法律上の権利を僕は持っているんだ」(“like any other engaged couple. We’ve a legal right to.”)(258)と、「法律上の権利」という文言を楯にスーを説得する。そして、この関係を拒むスーに対し、「僕は時々、君は愛することができないんじゃないかって本当に思うんだ」(“I really fear sometimes that you cannot [love].”)(260)と苛立ちを隠せないでいる。したがって、結婚という形式に執着するジュードは、スーとは対照的に、イギリス社会の制度や慣習にこだわりを持っている人物と言える。

しかし、時が経つにつれて、ジュードはスーの考えに感化されていく。世間体を考えて、ジュードとスーは結婚するために登録所に向かう。そこで結婚の手続きをする直前になって躊躇するスーを見たジュードは、彼女を悲しませたくないと思い、法的手続きを取りやめにする。さらに彼は、世間から非難されても、彼女に「スー、君は法律以外のあらゆる点で、間違いなく僕の妻なんだよ」(“You certainly are my wife, Sue, in all but law.”)(346)と言って、「事実婚」を肯定的にとらえる発言をしている。これと並行して、ジュードはクライストミンスターの大学に進学することや聖職者になる夢を捨てており、ついには、「私たちの社会的形式には、どこか間違ったところがあるように思える」(“I perceive there is something wrong somewhere in our social formulas”)(327)と、社会の現状を批判の目で見られるようになる。つまりジュードは、スーとの「事実婚」を通じて、かつて憧れていた権威を尊重している社会の規範を疑問視する立場に転じるのである。

ジュードとスーの「事実婚」は、結婚制度と因習に縛られない男女の新しい結びつきを模索するものである。つまり彼らは、パートナーの自由を拘束せず、愛そのものに基づいた共同生活があれば、それが夫婦であるという立場に立っている。そして、このような彼らの結婚観は、共同生活を始めたふたりが、ファーザー・タイムという少年を息子に迎えるところにもあらわれている。次に、ファーザー・タイムも含めたジュードとスーの家族像を明らかにするために、ファーザー・タイムがどのような人物であるか検討していくことにする。

ファーザー・タイムという少年は、アラベラがジュードにあてた手紙によると、彼女がジュードと別れてから8ヶ月目に、オーストラリアのシドニーで生んだ子供ということになっている。そして、このオーストラリア生まれで、オーストラリア育ちのファーザー・タイムが、当時、当地に移住していたアラベラの両親の元から、イギリスに住んでいるジ

ュードとスーの元にひとりやってきたのである。この少年の容姿について注目すると、彼は「少年の姿を装った老人だった」(“He was Age masquerading as Juvenility”)(276)と評されるほど、奇妙な風貌の持ち主とされている。ファーザー・タイムの容姿が醜いものになった原因について、エレイン・ショーウォルター(Elaine Showalter)は、奔放な男性関係を持つアラベラが、梅毒に感染していたことを示唆しているのではないかと述べている(108)。さらにまた、デイヴィッド・セシル(David Cecil)は、ファーザー・タイムが「現代生活の悲劇の象徴」(“a symbol of the tragedy of modern life”)(119)であるとしている。小説が執筆・出版された19世紀後半、イギリスの人々は、伝統的な価値観と、階級や結婚制度といった既成の社会制度に疑問を呈する新しい価値観が交錯する、流動的な社会に生きていた。セシルは、そのような人々が抱える不安が、生まれながら自分が生きる世界に幻滅しているファーザー・タイムの姿に具象されていると指摘している(25)。美しい花を見せられても、「お花が、数日で枯れてしまうことを考え続けなくて済むならば、僕はお花がとても好きになれるのに」(“I should like the flowers very very much, if I didn't keep on thinking they'd be all withered in a few days!”)(297)と言うファーザー・タイムは、少年であるにもかかわらず、既に生きることに絶望している。彼は、自分がジュードとスーの間に生まれた子供ではないことを知った近所の人々の冷淡な態度に傷つき、「生まれてこなければよかった」(“I wish I hadn't been born!”)(333)と嘆く。ファーザー・タイムとジュードとスーの家族関係を批判する世間の無理解に苦しみ、人生を悲観的にしかみることのできない少年の容姿は、確立されていた価値観や社会制度を疑問視する時代の不安を体現していると言えるのである。

しかし、本論文が注目するのは、ファーザー・タイムを初めて見た時のスーの言葉である。彼女は、「不思議ね、ジュード。こういう異常に老けた子たちは、ほとんど決まって新開拓地出身なのよ」(“It is strange, Jude, that these preternaturally old boys almost always come from new countries?”)(280)と言って、少年の異様な外見とオーストラリアという入植地を結びつけている。植民地を蔑視するヴィクトリア朝期のイギリス人の態度は、イギリス人白人男性と植民地の現地人である女性との間に誕生した子供に対する見方によく表れている。アン・ローラ・ストーラー(Ann Laura Stoler)は、当時の人々がそのような子供には、「彼らの母親の怠慢と凡庸な特質が……肉体的に刻まれていた」(“were physically marked with . . . defaults and mediocre qualities of their mothers”)(68)のだという考えを持っていたことをあげている。混血児には、生物的に劣性と見下されていた

現地人である母親から受け継いだ特質が、肉体的な特徴となって残っているというわけである。このような考えを根拠に、『嵐が丘』に登場するヒースクリフ(Heathcliff)を論じたスーザン・マイヤー(Susan Meyer)は、ヒースクリフは出生地のわからない孤児ではあるものの、彼の浅黒い肌は、彼が植民地からやって来た人物であることを示唆していると述べている(98)。さらにまた、マヤ＝リサ・フォン・スナイダーン(Maja-Lisa von Sneidern)も、ヒースクリフの肌の色から、彼が植民地生まれの可能性が高いことを指摘している(184)。『日陰者ジュード』のファーザー・タイムの場合、彼の父親はジュードで、母親はアラベラであるところから、両親共にイギリス人である。しかし、植民地で生まれた混血児には身体的な欠陥があるという見方だけでなく、植民地で生まれたという事実だけで、作者ハーディは、ファーザー・タイムを外見的に見劣りする少年として描出したと推察することもできるのである。さらにまた、パメラ・K.ギルバート(Pamela K. Gilbert)によると、ヴィクトリア朝時代の人々は、イギリス人の両親の間に生まれた子供であっても、インド生まれであれば、その子をイギリス人とはみなさなかったと記している(112)。つまり、当時のイギリス人は、生まれた場所がどこであるかということを重視していたというわけである。以上の見解に基づけば、ファーザー・タイムが老人のような容姿をしているのは、彼がオーストラリア生まれであるからであり、この点で、ファーザー・タイムはオーストラリアと「メトニミー的關係」に位置づけられている人物だと言える。

次に、ファーザー・タイムが実際に渡航してくる前に、アラベラの手紙からファーザー・タイムの存在を知らされたジュードとスーの彼に対する反応に言及しておきたい。スーはまだ見たこともないこの少年について、「その子の母親になるために、私、できるだけのことをするわ」(“I’ll do the best I can to be a mother to him”)(275)と言って、迷うことなくファーザー・タイムの母親になる意志があることを表明している。そして、彼を見てすぐに、「この子にやさしくしてあげて、母親になってあげたいわ」(“I do want to be kind to his child, and to be a mother to him.”)(279)と、少年に対する母親としての愛情を口にする。このことは、スーがファーザー・タイムとの血のつながりにこだわることなく、彼を息子として受け入れる度量の大きな人間であることを明らかにするものである。

ジュードの場合、彼はファーザー・タイムの存在を知らせるアラベラの手紙を読んで、「彼女の言う通りかもしれない。僕にはわからないよ」(“It may be true! I can’t make it out.”)(274)と、その少年が本当に自分の子供であるかどうか疑いを持っている。しかし、その発言のあと、彼は次のように語っている。

That excessive regard of parents for their own children, and their dislike for other people's, is, like class-feeling, patriotism, save-your-own-soulism, and other virtues, a mean exclusiveness at bottom. (274-75)

親が自分の子供だけを過剰なほどかわいがって、他人の子供を嫌うのは、階級意識や愛国心や、自己の靈魂救済主義やそのほかの徳行のように、根本にあるのはいやしい排他性なんだよ。

このジュードの考えは、ファーザー・タイムが彼の本当の子供であるかどうかという疑問を越えて、彼を息子として育てるジュードの決断に反映されていく。この点でジュードも、スー同様に、世間一般の見方にこだわらない寛大な人道主義に立っていると理解できる。

ジュードとスーのファーザー・タイムに対する態度から、彼らが血縁を度外視して、オーストラリアからやって来たファーザー・タイムを家族の一員として迎え入れる柔軟な家族観を持っていることがわかる。そして、オーストラリアの属性を持つファーザー・タイムを息子として受け入れるふたりは、イギリスとオーストラリアの間にある宗主国と植民地という政治上の力学にとらわれない、新しいタイプの人物として造型されている可能性がある。

次に、ファーザー・タイムの心情を読み解いていくことにしたい。彼はジュードとスーのもとに到着すると、すぐにスーに対して「お母さんって呼んでもいい？」(“Can I call you mother?”)(279)と尋ねるのだが、これはファーザー・タイムがスーの息子になろうとしている意志表示であり、また、そのような自分を息子として受け止めてもらえるかどうかを彼女に確認している問い掛けでもある。さらにまた、彼がジュードとスーのもとに引き取られてから数年後、ケネットブリッジ(Kennetbridge)の市場で生みの母親であるアラベラと再会したファーザー・タイムは、アラベラに対し「あんたが僕のお母さんじゃないってわかるまで、ちょっとの間、あんたをお母さんだと思っていたよ」(“You be the woman I thought wer my mother for a bit, till I found you wasn't”)(311)と、厳しい皮肉たっぷりの言葉をぶつけている。このファーザー・タイムの発言は、現在は彼が育ての親であるスーを本当の母親とみなしていることを明言するものであり、彼はジュードとスーの家庭に居場所を見出し、家族の一員としての自覚を持っているのである。そして、このようなジ

ユードたち家族は、イギリスとオーストラリアの理想的な国際関係の表出するものと読むことができるのではないだろうか。

それでは、ファーザー・タイムを家族に加えて共同生活を始めたユードたち一家は、どのように暮らし、周囲の人々は彼らにどのような反応を示すのであろうか。当初、オールドブリッカム(Aldbrickham)にふたりだけで暮らしていたユードとスーは、その時点では自分たちの過去を隠して、人目につかない生活を送ることができていた。しかし、はた目には出生不明の子供が彼らと同居を始めてから、この3人の関係は人々の口の端に上ることになる。ふたりが法的に結婚していないことが明らかになると、スーは近所の人々から無視され始める。石工として働いていたユードが加入する組合の仲間たちは、「疑わしい目で彼(ユード)を見て、彼にほとんど挨拶の言葉も発しなかった」(“looked dubiously at him[Jude], and hardly uttered a word of greeting”)(305)。ユードとスーが教会の装飾を補修する仕事を請け負った時には、子供を育てながら同棲生活を送るふたりを見かけた人々は、彼らを「奇妙なふたり」(“A strange pair”)(302)だと噂する。そして、家族に対する悪口雑言が広がったため、ユードとスーは職場を解雇されてしまう。また、ファーザー・タイムは学校でいじめを受けることになる。彼が受けたいじめの内容は、「彼の名前だけのお母さんのことで彼を馬鹿にする者がいた」(“some boys had taunted him about his nominal mother”)(301)というものである。学友たちは、スーとファーザー・タイムが血のつながらない親子であることを揶揄するのである。そして世間の人々は、血縁関係がないと思われていたファーザー・タイムを息子として迎えるユードとスーの「事実婚」を問題視するようになる。

同棲を始めてからおよそ3年の間に、スーはユードとの間にふたりの子供を生む。幼い子供たちを連れて、ユードとスーとファーザー・タイムたち家族は、ユードの失業による貧困と、世間の目を避けるために、転々と住まいを変える生活を余儀なくされる。そして、最後に落ち着いたクライストミンスターで、ユード一家に変化が起きる。

クライストミンスターにやって来たスーは、町に到着するとすぐに、大学の創立記念日を祝うために通りを練り歩くガウン姿の教授たちや学生たちの荘厳な行列を目にし、「私は弱いよ。私たちのやり方は正しいと思うけど、……信じてもない慣習に畏れとか恐怖を感じたの」(“I am weak. Although I know it is all right with our plans, I felt . . . an awe, or terror, of conventions I don't believe in.”)(329)と、自分の感情を吐露する。この時、スーが口にする言葉は、クライストミンスターが意味するイギリスの伝統的な価値観や社

会規範を目の当たりにして、これからの自分たち家族のあり方を正当化する自信が揺らいでいることを示唆するものである。

ファーザー・タイムの場合、クライストミンスターに到着したジュードとスーが住む家を探している間、彼はジュードとスーが結婚していないことや、自分と両親の間に生まれた幼い異母弟妹がいることで、彼らが間借りを断られてしまう厳しい現実を知る。そのため少年は、特に自分がいるために、家族が世間から受け入れられないのだという疎外感を味わう。スーと子供たちだけが、ひと晩だけ泊まることを許された部屋で、ファーザー・タイムはスーとの母子関係を見直し始める。

‘And what makes it worse with me is that you are not my real mother, and you needn’t have had me unless you liked. I oughtn’t to have come to ’ee—that’s the real truth!’ (333)

「僕にとってさらにつらいのは、あなたが僕の本当のお母さんでなくて、もしあなたが嫌だったなら、僕を引き取る必要はなかったということです。僕はお母さんのところに来るべきでなかったんだーそれが実際正しいことなんだ！」

ここでファーザー・タイムは、スーと血がつながっていないことを懸念している。つまり彼は、自分が他の家族の者たちとは違うよそ者であることを痛感し、自分の家族内における存在理由を強く疑問視しているのである。このあとファーザー・タイムは、スーが出掛けている間に異母弟妹を殺害した上に、自分自身も自殺してしまう。そして、この子供たちの死をきっかけに、ジュードとスーは同棲を解消することになる。

世間の人々は、血がつながらないファーザー・タイムとスー母子の関係や、ジュードとスーたち家族の共同生活を批判する。解雇されたり、周囲の人々から白眼視されるなどの試練を体験する中で、スーとファーザー・タイムもまた、自分たち家族のあり方に自信を失ったり、血縁関係のない母子関係を問題視するようになっていく。そして、皮肉にも、ファーザー・タイムは自分を受け入れてくれた家庭を自らの手で壊してしまう。さらに、ファーザー・タイムを含む3人の死で終わりを迎えるジュードたちの「事実婚」は、彼らが「メトニミー的關係」にあるイギリスとオーストラリアの共生の難しさを示唆するものとして読むことができるだろう。つまり、このような登場人物たちの描き方に、イギリス

とオーストラリアが対等なパートナーになることは理想ではあるが、現実的には難しいとする作者ハーディの考えが描きこまれていると考えられる。

第4節 リトル・ファーザー・タイムによる殺人事件の顛末

ファーザー・タイムの起こした殺人事件は、ジュードとスーのその後の人生に決定的な衝撃を与えるものとなる。事件後、子供たちの悲惨な死に対してスーは、「あなたの一私たちの一愛は間違っただけだったのよ」(“yours[your love]—ours[our love]—is the wrong”)(345)、「私、体中をピンでついて、私の中にある悪しきものを血といっしょに外に出したいの！」(“I should like to prick myself all over with pins and bleed out the badness that’s in me!”)(345)と嘆き悲しむ。彼女はジュードと同棲しながら、ファーザー・タイムを息子として受け入れた家族形態は間違っただけだと痛感し、それに固執したことへの罪の意識に苦しむ。そして、「私の子供たちは一死にました—そうになったことは良かったことだったのです！」(“My children—are dead—and it is right that they should be!”)(363)と子供たちの死を受け止め、彼女はジュードと別れて最初の夫フィロットソンの元に戻り、再婚するようにストーリーは展開していく。

スーの再婚相手であるフィロットソンは、かつては大きな小学校の校長であったが、スーと離婚したために名誉や校長職としての地位を失い、貧しい生活を強いられていた。そのため、フィロットソンはスーとの離婚によって、「私は自分で取り返しがつかないほど体面を傷つけてしまった」(“I did myself irreparable damage”)(366)と考え、「スーとの再婚によって、牧師たちや因習にこだわる俗人たちの目にも私は正しく映るだろう」(“it [marriage] will set me right in the eyes of the clergy and orthodox laity”)(365)と期待し、失った教師の地位や名誉が回復されると踏んでいる。つまり、社会的立場を挽回したいフィロットソンと教会法に従ってスーが再婚するという事は、スーが伝統的な結婚観や社会制度に屈したことになる。

しかし見逃せないのは、フィロットソンと再婚したスーの様変わりである。フィロットソンとの再婚後、彼女は「怯えたような嫌悪の表情」(“a wild look of aversion”)(398)を浮かべながらフィロットソンのキスを受けることになり、「今や全く冴えない、やつれた女」(“Quite a staid, worn woman now”)(398)に成り下がってしまう。そして、このようなスーについて、ジュードとスーの生活を見守り続けてきたエドリン寡婦(Widow Edlin)が、「今

でも彼女はあの男に我慢できないんじゃないじゃ」(“’Tis the man;—she can’t stomach un, even now!”)(408)と敏感にスーの本音を指摘しているように、他人からみてもスーの再婚は本心からのものではないと思われる。実際スーは、再婚した彼女を訪ねてきたジュードの「僕のことをまだ愛してくれているの？」(“You do love me still?”)(389)という問い掛けに、「愛しているわ！わかりすぎているくらいわかっているのに！」(“I do! You know it too well!”)(389)と言って彼にキスをしており、内心、ジュードとの「事実婚」が自分に対して正直な結婚形態であったということを暗に認めている。

一方、ジュードはというと、彼もまたスーと同じように「事実婚」に満足している。スーの再婚にショックを受けたジュードは、カートレットと死別して未亡人となっていたアラベラの誘いに乗って、酒に酔った勢いでアラベラとよりを戻すことになる。しかしジュードは、フィロトソンと結婚式を挙げてしまったスーに向かい、「僕たちはその文字に従って行動しているけど、『文字は殺します』なんだよ」(“we are acting by the letter; and ‘the letter killeth!’”)(388)と言って、形式だけで内実の伴わない結婚制度に異議を唱えている。なお、「文字は殺します」は作品の巻頭にエピグラフとして掲げられており、これは新約聖書の「コリントの信徒への手紙 2」の第 3 章第 6 節にある「文字は殺しますが、霊はいかします」の前半部から引いてきたものであり、使徒パウロがギリシアの都コリントにある教会とそこに住む人々に、自分とその仲間について紹介した手紙の文面の一部からのものである。「文字」は炭によって書かれた文字や、石碑に刻まれた文字を指しており、「文字は殺します」は、精神を伴わない形式的で中身のない文字だけの教えは、人の英気を挫いてしまうという意味である。つまり「文字」とは、スーがかつて「俗悪な」ものと批判した結婚制度を定めている条文のことである。そして、「僕たちは文字に従って行動しているけど、『文字は殺します』なんだよ」というジュードは、ここでいう「文字」に相当する結婚ではなく、ファーザー・タイムを息子に迎えたスーとの「事実婚」を実質的な結婚の在り方として受け取っているのである。

結果的に、ジュードとスーの「事実婚」は長くは続かなかった。しかし、それは法律に囚われない、異なる国籍を持つ者を家族の一員とする新しいタイプの家族のあり方を模索する「事実婚」であった。つまりハーディは、植民地の拡大に伴って家族形態に変化が生じていたイギリスの実情を、ファーザー・タイムもまじえたジュードとスーの同棲生活に描きこんでいたと言える。さらにまた、ジュードとスーは、それぞれが意に沿わない相手と再婚したあとも、オーストラリアと「メトニミー的關係」を持つファーザー・タイムを

息子として心から迎え入れた家族のあり方を認めている。ここに、イギリスとオーストラリアの共存は、現実的国際事情を考慮すると難しいものの、結局は、両国はお互いの結びつきを断ち切ることができない関係にあるという作者ハーディの見解が表出されていると言えるであろう。

このことは、ジュードとアラベラの再婚についても言うことができる。カートレットが亡くなって未亡人となったアラベラは、スーとの「事実婚」を解消し、自暴自棄になっていたジュードに再び目を付ける。そして彼女は、ジュードに酒を飲ませて彼を自宅に連れ込んだあと、目が覚めたジュードにひと晩一緒に過ごした責任を取るように迫り、彼と2度目の結婚を果たす。アラベラがジュードとの再婚を考えたのは、夫を亡くしたあと、彼女が住む家を失い、イギリスに戻ってきた両親の自宅からも追い出され、生活に困っていたからという打算に基づくものであった。アラベラはスーと別れてひとり暮らしをしているジュードに再会すると、彼の経済力を当てに、結婚しようと策を練ったのである。ジュードはアラベラと再婚後、体調を崩し衰弱していく。働くことができなくなったジュードに苛立つアラベラは、時折彼をなじり、彼らの結婚生活は事実上破綻を来すことになる。しかし、ここで注目しておきたいのは、作者がかつて価値観の違いから別れたジュードとアラベラを、ストーリー展開の結末で再び結婚させていることである。彼らが「メトニミー的關係」にあるイギリスとオーストラリアが、国際事情を踏まえれば、必要不可欠な関係にあるという作者の考えが表明されていると解釈することができるのではないか。

おわりに

以上、ハーディが宗主国イギリスとその植民地オーストラリアの間にみられる国際事情を、登場人物の言動を通して作中にいかに描出しているかについて論じてきた。海を越えてオーストラリアに移住したあと、再び母国に帰ってくるアラベラの人生には、イギリスからオーストラリアに渡った移住者たちや、オーストラリアからイギリスに戻ってきた人々が経験した様々な苦難が反映されていた。そして、イギリスでジュードと結婚していたにもかかわらず、オーストラリアの法律に則ってカートレットと結婚した彼女の生き方は、本国イギリスの覇権主義に揺さぶりをかける行為として読むことができた。オーストラリアへの移住を決意し、オーストラリアの法律を遵守するアラベラは、オーストラリアと「メトニミー的關係」に置かれた人物と解することができた。そのような彼女とオース

トラリア人カートレットとの夫婦関係は、作者ハーディが、オーストラリアに対して好印象を持っていることを示唆していたと考えられる。

オーストラリア出身のファーザー・タイムは、ヴィクトリア朝期の人々が持っていた、イギリス白人男性と植民地の現地人である女性との間に生まれた子供に対する見方を反映させて人物造型されていることが明らかとなった。さらにまた、当時の人々には、両親がイギリス人であっても、生誕地がイギリスでなければイギリス人とはみなさないところがあった。このような事情を考慮すると、オーストラリアで生まれ育ち、奇妙な容姿のファーザー・タイムも、オーストラリアと「メトニミー的關係」を持っていると解釈することができた。そのようなファーザー・タイムとジュードとスーの家族が辿る軌跡は、オーストラリアとイギリスの人的交流に伴い、出自の異なった者から成る家族が誕生し、生活する現実を描出するものであった。かつて肉体労働を軽蔑し、大学進学や学問を重んじて立身出世を目指したジュードは、スーとの出会いを通じて、イギリスの社会規範に縛られない生き方を選ぶようになる。ジュードとスーは、世間の偏見や法的結びつきや血縁を重視する考えに囚われることなく、人道的な立場に立って家庭を築き上げようとした。しかし、彼らに対する世間の冷ややかな反応と、ファーザー・タイムと彼の異母弟妹の死、そしてジュードとスーの別れを通じて、作中には、愛情で結ばれた家族が崩壊するという、理想とは相反する状況が描かれていた。オーストラリアとイギリスと「メトニミー的關係」にあるジュードたち一家の離散は、オーストラリアがイギリスと同等視され、両国が植民地と宗主国の関係を乗り越え、共生することは実際には難しいとするハーディの見方を表明するものであった。

しかし、ジュードたちは現実には「事実婚」に徹し、また、その「事実婚」を解消したあとも、彼らが築いた家族のあり方を互いに尊重し合っていた。さらにまた、紆余曲折を経て再婚したジュードとアラベラは、お互いに依存し合いながら暮らしていくのであった。

『日陰者ジュード』における、いくつかの経緯を経て構築されるに至った複雑な家族関係には、イギリスとオーストラリアは互いに不可欠なパートナーであり、切り離すことのできない関係にあるのだという作者の考えが示されていたと思われる。

注

¹ 本章は、第 114 回 19 世紀英文学研究会(2013 年 12 月 21 日、於:同志社女子大学)における口頭発表『日陰者ジュード』にみられるトマス・ハーディの国際感覚—イギリスとオーストラリアを巡って」と、『研究論集』第 99 号(関西外国語大学・関西外国語短期大学部、

2014年3月15日発行)に掲載された論文「トマス・ハーディの『日陰者ジュード』—登場人物を通して見るイギリスとオーストラリア」に、大幅な加筆修正を施したものである。

² 本章における引用は、Thomas Hardy, *Jude the Obscure* (London: Penguin, 1998)によるものである。

³ 例えばインガムは、ジュードとスーが、お互いへの愛情や信頼を生涯抱き続けることを誓わなければならない一夫一婦制をとる結婚制度の問題点を挙げ、社会が女性に押し付けている役割を批判していると指摘している(149)。さらにまた、現行の結婚制度の欠陥をつくすスーの思想と行動を根拠に、ゲイル・カニンガム(Gail Cunningham)は結婚や性道德の2重規範を批判し、女性の知性や性の目覚めを描くニュー・ウーマン小説のヒロインとしてスーの言動を分析している。なお、ニュー・ウーマン小説の特徴についてカニンガムは、結婚を自己実現の手段とはみなさない点や、母性の再検討などもあげている(106)。

⁴ 1901年にオーストラリア連邦(The Commonwealth of Australia)が成立するまで、オーストラリアには、タスマニア、ビクトリア、クイーンズランド、ニュー・サウス・ウェールズ、サウス・オーストラリア、ウェスタン・オーストラリアの6つの入植地があった。なお、本論文ではこれら全地域を総じてオーストラリアと呼ぶことにした。

⁵ ユダヤ人の身体的特徴については、Maurice Fishberg, “Physical Anthropology of the Jews II.--Pigmentation.” *American Anthropologist*. 5.1(1903): 89-106を参照。

⁶ イギリスの英国国教会は1857年の「離婚法」(Divorce Act)によって、夫もしくは妻の不貞や暴力があれば離婚を認めているが、それ以外については認めていない。

“Obtaining a Divorce.” *Parliament. uk*. 16 Oct. 2013.

〈<http://www.parliament.uk/about/living-heritage/transformingsociety/private-lives/relationships/overview/divorce/>〉を参照。

⁷ ジュードとアラベラの離婚は、法律と英国国教会において許可されたものと考えられる。第5部第1章で、ジュードとアラベラの離婚と、スーとフィロットソンの離婚が同時に許可される判決が下りている。これは、夫もしくは妻の不貞や暴力があれば離婚を認める「離婚法」に基づいて、ジュードとスーの不適切な関係を根拠として認められたものと思われる。なお「離婚法」は、夫もしくは妻の不貞や暴力によって離婚した場合に限り、再婚することを認めている。第6部5章で、スーはフィロットソンと教会で再婚をしており、第6部第7章でも、ジュードとアラベラは牧師の立会いのもとに再婚している。よって、ジ

ユードとアラベラ、スーとフィロットソンの離婚は、法律と英国国教会によっても認められたものであると考えられる。

第2部 登場人物たちとイギリス

第4章 「運命と青いマント」

—インド高等文官とオズワルド¹

はじめに

ハーディは1874年、彼にとっては4番目になる長編小説『狂乱の群れをはなれて』の最終原稿を、8月初めにコーンヒル・マガジン社に送った。そのあと、『ニューヨーク・タイムズ』(*New York Times*)紙から執筆依頼を受けて、約1ヶ月かけて書きあげたのが、1874年10月4日に同紙に掲載された短編小説「運命と青いマント」(“*Destiny and a Blue Cloak*”)である。しかしこの作品は、ほかの短編小説のように、彼の短編集に収められることはなかった。

この短編を取り上げ論じる研究者は少ないが、その中でもソフィー・ジルマーティン(Sophie Gilmartin)とロッド・メンガム(Rod Mengham)は、インドの高級官僚であるインド高等文官を目指す青年オズワルド・ウィンウッド(Oswald Winwood)を慕っていたものの、主人公アガサ・ポリン(Agatha Pollin)に彼を奪われてしまったフランシス(Francis)に注目し、論じている。この1編は、アガサとオズワルドの結婚を妨害しようとする彼女の悪意にみちた、アガサに対する嫉妬心を描いていると言う(41)。また、ハーディの短編集を体系的に論じたブラディは、19歳のアガサと結婚したいと考えるおよそ65歳の農場主ラヴィル(Lovill)が、白い下着を川で洗うアガサに興味を示す場面が描かれている点に着目し、初期の作品であるこの小説の中に、のちのハーディの作品において頻繁に描きこまれるようになるセクシュアリティの問題が、すでに垣間見えると指摘している(“Introduction” xix)。

しかし、本章の読みはこれら先行研究とは異なる。インド高等文官になり、少なくとも当時の植民地インドにおいて出世し、社会的・経済的に成功を収めるというイギリスでは実現することのできない夢を抱いていたオズワルドの野心や、彼に対する恋人アガサの思いを分析すると、作品に描かれた彼女とオズワルドの関係からは、ハーディが理解していた同時代の宗主国イギリスと植民地インドとの間の国際情勢を読み取ることができる。

本章ではまずはじめに、この短編のストーリー展開にみられる瑕疵をいくつか指摘することにする。そのあとで、オズワルドがどのような人物として造型されているかを、彼が目指すインド高等文官という職種と関連付けて論じていく。次に、そのようなオズワルド

に対するアガサと彼女の叔父で、製粉業を営んでいるハンフリー(Humphrey)の反応を考察する。さらに、官僚試験に合格したものの、病気のためイギリスに留まっていることをアガサに告げないまま、今頃オズワルドはインドで活躍していると思込んでいるアガサの手紙に返事を書き続けるオズワルドの行為が、どのようにアガサらに影響を及ぼすかを検討する。

第1節 作品のストーリー展開における矛盾点

本章冒頭で言及したように、この作品を短編集に収めなかった理由について、ハーディは何も述べていない。しかし、本短編に対する彼自身の評価に関しては、亡くなる数カ月前に「運命と青いマント」を再版する話を持ちかけられた時、彼はこれを「とるに足りない」(“trivial”)、「文学的価値がない」(“no literary value”)(Richard Little Purdy 294)駄作だとして、その申し出を断ったと言われている。なるほど、この作品を論じる数少ない研究者のひとりパメラ・ダルジエル(Pamela Dalziel)は、この短編のストーリーの構成には「雑なところ」(“crudity”)(41)があると指摘している。ダルジエルは、この点についてそれ以上詳しく説明していない。しかし、この作品には、彼女が指摘するような物語の展開上不自然な箇所が散見されることから、ハーディ自身もこの点に気付いていて、短編集に入れないという判断を下し、再版の申し出を辞退したのではないかと推測できる。それでは、小説のストーリー展開において、「雑なところ」と思われる主な点について明らかにするために、作品全体の要旨を述べることから始める。

この短編は、クロトン村(Cloton village)で叔父のハンフリーが経営する粉屋で働く19歳のアガサが、ある時、同じ村に住む美しい娘フランシスが身に付けていた青いマントとよく似たマントを羽織って外出したところ、フランシスに恋心を抱いていたオズワルドが、アガサをフランシスと間違えて声をかけるところから始まる。すぐに人違いであったことが明らかになるものの、意気投合したふたりは親密な交際を始める。そしてインド高等文官を目指していたオズワルドは、その試験に合格しインドに赴任できた暁には、アガサと結婚するためにイギリスに戻ってくると約束する。こうして翌年の春、彼は見事にインド高等文官の資格試験に合格する。その後、オズワルドがいつインドに出発したかわからないが、作中には、彼が当地に到着したと記される。オズワルドと手紙のやり取りをしながら彼の帰りを待っていたアガサは、叔父から彼女に好意を寄せるラヴィルとの結婚を迫ら

れる。アガサはラヴィルとの結婚話が進んでいることをしたためた手紙をオズワルドに送り、これに対しオズワルドは、11月1日に行われることになった彼女とラヴィルの結婚式までに彼女を迎えに行くことと返信する。しかしながら、結局、彼の到着は間に合わず、オズワルドがクロトン村にやってきたのは、アガサがラヴィルと共に式へ向かった後であった。さらにまた、式を終え自宅に戻ってきたアガサは、叔父の後妻になっていたフランシスから驚くべき話を聞かされる。その内容は、アガサとの約束を守るためにあわてて村に戻って来たオズワルドが、「この12カ月、ひどい病気に罹ったせいで、約束し、そのつもりでいた時に出航できなかったというようなことを言いながら」(“saying something about having been prevented by severe illness from sailing at the time he had promised and intended for the last twelvemonth.”)(26)²、再び村を立ち去ったということであった。この話を聞いたアガサは、彼女のライバルであったフランシスに弱い所をみせまいと、気丈に振る舞いながらも、慌てて外に停めてあった馬車に飛び乗り、自宅を飛び出して行くのであった。

それでは、この作品のストーリー展開の問題点のひとつとして、アガサとの約束を果たすために村に駆け付けてきたオズワルドが、フランシスに言った言葉に注目したい。「この12カ月、ひどい病気に罹ったせいで、約束し、そのつもりでいた時に出航できなかった」という彼の言葉が意味するのは、つい最近まで、オズワルドがイギリスに留まっていたということである。しかしこの記述の5行前には、オズワルドは「サウサンプトンに上陸した」(“landed at Southampton”)(26)あと、村に急いで戻ってきたと書かれている。オズワルドがサウサンプトンに到着したということは、つまり彼はインドから戻って来たということである。しかし、この1年間、病気のためにイギリスに留まっていたという彼が、突然インドから戻ってきたというのはつじつまが合わない。仮にイギリスで過ごしていた彼が、病気を治したあとインドに出発し、そのあとアガサとの結婚のために帰国したと考えても、このような行動は時間的にみて不可能である。なぜなら19世紀半ば、イギリスからインドに向かう場合、帆船を使ってアフリカの喜望峰を経由するのが一般的な移動方法であり、それには約6カ月を要するのであった³。一方で1842年、イギリス政府はペニンシュラー・アンド・オリエント汽船会社(Peninsular and Oriental Steam Navigation Company)、通称P&Oに、イギリスとインド間の郵便、及び貨客の輸送を任すことを決定した。P&Oの運行方法は、イギリスとエジプト・アレクサンドリア間は蒸気船を使用し、アレクサンドリアとスエズ間の陸路は列車でつなぎ、スエズとインド間の輸送は再び蒸気

船によるというものであった⁴。しかし、帆船で喜望峰を経由してインドに向かう代わりに、蒸気船と列車を使ってエジプトを抜けるルートを取っても、イギリスとインド間は片道100日以上を要したと言われている(星名定雄 86)。1869年にスエズ運河が完成すると、エジプトで列車に乗り換えることなく、イギリスからインドへの船旅が可能になる。1871年にイギリスからスエズ運河を通過してシンガポールに向かった蒸気船は42日かかったことから、インドに到着するまでの所要日数はこれより少ないと思われる。それにしても、イギリスとインド間の船旅は最低でも1カ月を要したのである。このことを踏まえると、最速、最短ルートを取ったとしても、オズワルドがイギリスとインドを往復するには最低2カ月かかるはずである。したがって、「この12カ月」の間イギリスで過ごしていたオズワルドが、サウサンプトンの港に到着することは物理的にできない。

次に、オズワルドが病気のためにインドに赴いていなかった点に着目し、その間、彼とアガサの間で交わされる手紙に言及していく。オズワルドは自分の身に起こったことをアガサに伝えないでいるため、事情を知らないアガサは、彼が予定通りインドの官僚として現地に着任しているものと思込み、彼に手紙を送り続ける。そして「オズワルドの側も、きちんと便りをよこした」(“Oswald, on his part, corresponded very regularly.”)(9)とあるように、彼もそれにあわせて彼女に返信していることがわかる。このふたりの間で交わされる手紙の内容やその回数を正確に知ることはできないが、オズワルドがインドに赴任していると信じているアガサがオズワルドに宛てて出した手紙が、実際はイギリスにいるオズワルドの元に届けられているのはおかしな話である。加えて、インドから投函されたという彼の手紙に通常押されているはずの消印をみれば、アガサが受け取った手紙がインドからのものでないことはすぐにわかるはずである。それにもかかわらず、アガサはそのことに気付くことなく、オズワルドがインドにいると信じ込んでいるというようにストーリーは展開している。

以上の点に着目しただけでも、この短編のストーリー展開には不可解なところがみられる。しかし本章では、インド高等文官の試験に合格したオズワルドが1年間はインドに赴任していなかった点と、そのあたりの事情を知らないアガサが、彼はインドにいると思込んでいることに注目しながら論を展開していくことにする。なぜなら、このような前提に立って論を進めても、本論文の全体的テーマから逸脱することはないと考えられるからである。

第2節 インド高等文官としてのオズワルド

イングランド南部のドーセット州には、ビーミンスター(Beaminster)と呼ばれる小さな町がある。ハーディはその町から南に少し離れた所にあるネザベリー(Netherbury)という村を、本作品の舞台クロトン村のモデルにしたとされる(Denys Kay-Robinson 145-46)。そのクロトン村に住むアガサは、既述したようにオズワルドと親密な交際を始め、結婚の約束をする。そしてオズワルドは、その翌年の春にインド高等文官になるための試験に合格し、作中ではインドに旅立って行ったと記されている。

ここでまずはじめに、インド高等文官の資格試験と合わせ、オズワルドという人物について考察していくことにしたい。テキストにはオズワルドの家庭環境や家族に関する説明はなされていないため、彼の出自を正確に知ることはできない。しかしオズワルドが、「ある無名の小さな専門学校」(“some obscure little academy”)(8)の出身であることから、彼は中流階級の下層に属している人物であると思われる。そのような彼は、「競争試験」(“competitive examination”)(7)と呼ばれている、「マコーリー卿のおかげで」(“Thanks to Macaulay”)(7)導入されたインド高等文官になるための試験に合格した。それ以前、インドの高級官僚は縁故によって採用されるのが一般的だった。しかし、マコーリー卿(Thomas Babington Macaulay)は1833年、議会でインド高等文官の採用試験改革を支持する演説を行い、インド官僚の縁故制を廃止し、能力試験を導入すべしと主張した(Brady, “Notes”359)。こうして、一般の人々にも門戸を開放したインド高等文官の試験制度が、1855年に施行された。

実際にインド高等文官に採用された人々の所属階層についてみると、ブラッドフォード・スパンゲンバーグ(Bradford Spangenberg)の統計によれば、1855年から1874年の間に採用された人々のうち、貴族10%、プロフェッショナル・ミドルクラス57%、中流階級の下層以下14%となっている(343)。この中でも、中流階級の下層以下の者が占める14%という数字は、決して大きいものではない。しかしスパンゲンバーグは、少なくともその数字はインド高等文官になるための試験が、支配者層以外の人々にもインドのエリート官僚になる門戸を開き、被支配者層の若者が、高級官僚として出世するチャンスを手にすることができたことを明らかにするものだと指摘している(344)。さらにまた、村岡健次と木畑洋一は、階級にとらわれることなく実力を重視する採用試験は、イギリスでは1850年代からインド高等文官以外にも、国内の高級官僚職や陸軍士官職などに対しても実施され

ていたとし、一般庶民にそれらの門戸を開く制度改革が実施されていたと述べている(151-52)。このような現実社会の動向からみて、フィクションの世界に登場する人物オズワルドは、イギリス国内に広がりつつあった縁故や身分にとらわれない、新しい官僚制度を反映させて造型された人物と受け取ることができよう。

さらにまた、オズワルドがインドの高級官僚の資格試験に合格する文脈には、第1部第3章で言及したような、スマイルズが『自助論』で述べた主張と通じるところがある。目標に向かい勤勉に努力することの必要性を説くスマイルズの主張は、社会的に低い地位にありながらも、エリート集団であるインド高等文官になる資格を手にするオズワルドという登場人物の挑戦にフィクション化されていると思われる。

オズワルドの経歴は、ハーディがドーセット州の州都ドチェスター(Dorchester)で建築助手をしていた時、友人であったフーパー・トルボート(Hooper Tolbort)のそれを下敷きにしていっているとされている。『トマス・ハーディ伝』には、トルボートについて簡単な言及がなされている。それによると、両親を子供の頃に亡くしたトルボートが、機械技師の事務所を営む叔父のもとで育ったことや、語学にたけていた彼がインドの高級官僚になることを目指し、1862年のインド高等文官の試験に首席で合格したというものである(32; 161-62)。

ここで、インド高等文官という職種がどのようなものであったかについて触れておく。インド高等文官の公開試験導入に尽力した教育改革者のひとりベンジャミン・ジョウエット(Benjamin Jowett)は、大蔵大臣であったウイリアム・グラッドストーン(William Gladstone)宛ての手紙で、インド高等文官の試験に受かったあとの2年間の教育課程に、ジェントルマンになるための教養や道徳性を養うことを目的としたエリート教育を組み込む必要性を述べている(村岡健次 145)。これはつまり、インドの高級官僚になった者たちが、イギリス社会の牽引者になることを期待されていたということである。したがって、インド高等文官職に就くということは、イギリス社会に従来からある支配/被支配の体制に身を投ずることであると言えるだろう。さらに、インド高等文官の別名は「ガーディアン(守護者)」(Guardian)であり、インドの福祉に尽力する役人という意味であった(浜渦哲雄 67)。しかし、これはインド高等文官職を美化した言い方であり、その役割はインド人からの徴税とインド人支配を継続させるための治安維持であった(浜渦 67)。インド高等文官の仕事は、イギリス人とインド人の間にある支配/被支配の関係性を保持することにあり、この点で、インドにおけるイギリス人の統治体制の要を成すものであった。

以上のインド高等文官の実態を念頭に置くと、オズワルドとはどのような人物として読むことができるのだろうか。オズワルドはパブリック・スクールやカレッジ出身の受験者たちを抑え、首席でインド高等文官の試験に合格した。社会的に低い地位にありながら、高級官僚になる資格を得た彼は、高等文官の能力重視の試験制度を次のように称賛する。

‘What a great thing competitive examination is: it will put good men in good places, and make inferior men move lower down.’ (7)

「競争試験ってなんとすばらしいのだろう。なぜなら、それによって優れた人間は良い地位につき、劣った人間は下の地位に落ちるんだから。」

このように、新たに導入された試験制度を高く評価するオズワルドは、国内の階級差別に対して反感を抱いている。ところが彼は、「こちらでうだつが上がらないよりは、インドで成功するほうがまだだよ」(“It is better to do well in India than badly here.”)(7)と、当然、植民地インドで官僚として出世することをよしとしている。これに加え、インド高等文官がイギリスの植民地主義を誇示するための職種であることを念頭に入れると、このオズワルドの発言は、彼がイギリスによるインド支配に便乗していることを明らかにするものでもある。つまりオズワルドは、イギリス国内の社会的な不平等を批判する一方で、その不平等は自分がインドを支配する立場に立つことで解消しようとしている人物なのである。さらにまた、インドの高級官僚になる以前の彼が、一般庶民にすぎなかったことを考えれば、彼のインドに対する言動は、現実のイギリス国内に住む一般庶民の中には、インド支配を肯定的に捉える風潮があったことを暗示するものと言える。

以上のことから、オズワルドはイギリスの植民地インドにおいて、社会的ヒエラルキーの頂点に立っていたエリート官僚となり、インドにおいて、祖国では達成不可能な夢の実現を目指そうとする意図を持っていた。そのような彼は、インドの政治体制を支えるイギリス側の立場に立つことによって、人生の成功を治めようとしている意味において、イギリスの覇権主義の一翼を担う人物として造型されているとすることができるだろう。したがって、オズワルドという登場人物は、インドとイギリスの間であって、インドにおけるイギリスの権力構造を維持する人物であるという点において、イギリスと「メトニミー的關係」にある人物として読むことができる。

第3節 オズワルドに対するアガサとハンフリーの思惑

本節は、官僚試験に合格したオズワルドが、実際には1年間インドに赴任していなかったことと、アガサとハンフリーが、彼の身の上で起こったことを知らされていない点を念頭に置いて論を展開する。オズワルドが官僚としてインドで職務についていると信じているアガサとハンフリーは、オズワルドに対して様々な空想をめぐらし、彼の帰国を待ち望むことになる。そこでまず、彼らのオズワルドに対するそれぞれの考えを精査してみる。

アガサは、オズワルドがやがて帰国して自分と結婚してくれると信じているところから、一見、健気で無垢な少女であるようにみえる。しかし、アガサの思いには、愛情以外の打算が含まれている。例えば彼女は、前に引用したように、オズワルドに対し、「それであるあなたが金持ちになったら、きっと私のところへ帰ってきてくださる？」(“And will you be sure to come to me when you are rich?”)(8)と問いかけている。この言葉はオズワルドの彼女に対する愛情と経済力と、そして、自分と間違いなく結婚してくれることを確かめたい彼女の思いを表している。

このアガサに対して、金持ちの農場主ラヴィルから借金をしていた叔父のハンフリーは、借金返済のために、彼女に思いを寄せているラヴィルと結婚するよう迫る。ハンフリーからオズワルドとの結婚を諦めてラヴィルのプロポーズを受け入れるよう説得されたアガサは、「でも、彼(オズワルド)は帰ってくるわ。もうすぐよ、1,100ポンドの年収などをお土産にして」(“But he [Oswald] will come, and soon, with eleven hundred a year and all.”)(14)と言って、叔父の頼みを断る。アガサは明らかに、帰国すればオズワルドが自分と結婚し、自分を裕福にしてくれるものと思込んでいる。彼女のオズワルドへの愛情の深層部には、彼に対する経済的な期待が潜んでいるのは明らかである。

次に、ハンフリーが、クロトン村でいかなる立場に置かれているかを考察していく。彼が、「ここではうだつが上がらない。商売がこれからどうなるかわからない」(“There’s nothing to be done here. I don’t know what business is coming to”)(13)と嘆いているように、家業である製粉業の経営は上手くいっていない。さらにハンフリーは、ラヴィルへの借金を払い終わったらより良い暮らしをするために、一家でオーストラリアに移住したいと考えている。彼が置かれているこの状況と彼の移住計画は、当時のイングランドの農業経営状態と移民事情を反映したものと思われる。例えば、「ウェセックス」の舞台となっ

た実際のイングランド南部では、1876年頃までは農業が繁栄し、農場経営者はそこから大きな利益を得ていた。しかし、一方で、多くの農業労働者は低賃金で働くことを余儀なくされてもいた。そのような状況の中、1870年代のイングランド南部では、多くの人々が移民として海外へと移住していった(M. Williams 5)。既述したように、オズワルドのモデルとなった人物がハーディの友人で、1862年にインド高等文官の試験に合格したトルボートであることを考慮すると、「運命と青いマント」の時代設定は1860年代あたりと考えられる。さらに、この小説は1874年に出版されていることから、ハーディは1860年代から1870年代頃のイングランドの農業事情や移民事情を、生活苦から移住を考えるハンフリーの生活実態の中に描き込んでいるとみられる。

クロトン村で経営不振に苦しむハンフリーにとって、オズワルドは彼の借金を自分に代わってラヴィルに払ってくれるかもしれない存在である。しかし彼は、オズワルドに対してアガサとは対照的な考えを持っている。まずハンフリーは、アガサが話すオズワルドの帰国と彼との結婚話に対して、「彼は今では立派な紳士になって、お前さんのような小娘になびくとは思わないだろうよ」(“he’s a fine gentleman by this time, and won’t think of stooping to a girl like you.”)(14)と言って、インド高等文官として業績をあげて帰国してくるであろうオズワルドと、製粉業を営む自分の店で働く身分違いのアガサとの結婚の非現実性を指摘している。また彼は、オズワルドがインドで経済的に成功し、アガサと結婚するつもりがあるならば、彼が手紙の中でそのことについて言及していないことを不審に思っている。次の引用は、オズワルドが一財産築いてイギリスに戻ってきて、アガサと結婚し、ハンフリーの借金を彼に代わって返してくれるかもしれないというアガサの思惑を聞いた時、ハンフリーの反応である。

But it is rather a cock-and-bull story, and since he didn’t make up his mind before now, I can’t say I be much in his favour. . . . Oswald won’t hold water, I’m afraid.
(20)

しかし、それはまゆつば物で、彼はこれまでに決心してはいないのだから、私はあまり彼の肩を持つわけにはいかないね。……オズワルドが言葉通りにするものか、私は危ぶんでいるのだがな。

オズワルドのインドからの帰国や、インドで稼いだ金で借金を返済し、アガサと結婚するという話を「まゆつば物」だとするハンフリーは、オズワルドを信じ込むアガサに呆れるばかりか、彼が当てにできない人間だと直感している。

それでは、アガサからは帰国を心待ちにされているものの、ハンフリーからは不信感を持たれているオズワルドの人物造型に迫るために、はじめに、イギリスとインドとの国際事情について検証しておくことにしたい。

当時の両国の経済上の交易において、インドは 19 世紀半ばからイギリスの工業製品のために安価な原料を提供すると同時に、食料を供給する国としての役割を果たしていた。例えばイギリスは、経済政策としてインドから綿花を輸入し、インドの貿易収支を黒字へと導いた一方で、インドをイギリスが生産する綿製品やその他の製品を買う市場にした(Barbara D. Metcalf and Thomas R. Metcalf 186)。さらにその上、インドにイギリス綿製品の輸入関税率を引き下げさせて、イギリス製品の輸出を有利にし、インドにイギリスの生産品を買わせる仕組みを作り上げた(B.D.Metcalf and T.R.Metcalf 186)。また、19 世紀半ばから、イギリスはインドでの鉄道建設を積極的に推し進め、それに便乗して、イギリスの資本財をインドに輸出することで莫大な利益を獲得した(村岡、木畑 170)。そして、イギリスのインドに対するこのような経済的支配は、イギリスがインド貿易を通じて得た黒字によって、自国の貿易赤字全体を補填するというものであった(村岡、木畑 170)。

経済面におけるインドのイギリスに対するこの従属的な立場は、軍事面にまで及んでいる。イギリスは、大半はインド人により構成されていた東インド会社所有の軍隊を、アジア、中東、アフリカへと派遣し、帝国の拡大のためにそれを利用したのである。そして、「運命と青いマント」が『ニューヨーク・タイムズ』紙に掲載された 2 年後の 1876 年、ヴィクトリア女王が「インド女帝」の称号を得て、イギリスは名実ともにインドの宗主国となった。

このようなイギリスとインドの国際事情から、アガサに経済的に期待されたり、ハンフリーには疑いの目で見られたオズワルドには、インドを搾取することでその経済力を高め、国家の繁栄の礎を築いた宗主国イギリスの国家としての体質が描出されていると解釈できるだろう。

第 4 節 オズワルドの帰国の余波

病気のため、予定した日にインドに赴任できず、1年間をイギリスで過ごしていたオズワルドは、アガサやハンフリーが彼に対して抱いていた思惑や疑いを強める一方で、アガサやその他の人々の人生にも様々な影響を及ぼすことになる。次に、オズワルドの行動によってもたらされた、彼と彼を取り巻く人々との人間関係の変化について考察していく。

オズワルドの帰国を信じて待つアガサであったが、ハンフリーからオズワルドとの結婚を断念して、ラヴィルと結婚するように強く迫られ、11月1日までに彼が戻ってこなければ、ラヴィルと結婚するという約束をさせられるはめに陥る。そして、ラヴィルとの結婚を何とか回避しようと策を練った彼女は、結婚式の前日に、ハンフリーの経営する粉屋で働く従業員で、耳の不自由な青年ジョン(John)に頼み、結婚式当日の朝に、内緒で彼女を自宅から近くの駅まで荷馬車に乗せて連れて行ってくれるよう頼む。しかし、あろうことか翌朝アガサは、自分をのせた荷馬車を走らせているのがジョンではなく、実はラヴィルであることに気付くのである。こうなったのは、かつてオズワルドを慕っていたものの、結局ハンフリーと結婚していたフランシスが、結婚式前日にアガサとジョンの話を盗み聞きし、アガサの計画をラヴィルに伝え、それを聞いたラヴィルが、ジョンと入れ替わって荷馬車に乗り込んでいたからである。

フランシスの告げ口によって、アガサはオズワルドではなく、ラヴィルと結婚しなくてはならなくなってしまう。これはフランシスがアガサに仕組んだ謀略であり、アガサとオズワルドの破局はジルマーティンとメンガムの指摘にあったように、彼女のアガサへの嫉妬心によってもたらされたものと解釈することができる(41)。小説の最後では、既に述べたように、アガサを迎えにきたオズワルドがラヴィルと共に結婚式に向かったアガサと行き違いになり、彼女と会うことができないまま村を去ってしまう。そして、オズワルドが病気のために、1年間インドに赴任していなかった事実が明らかとなる。イギリスとインドの不平等な政治的・経済的結びつきは、歴史が明らかにしているように、やがて両国の関係に亀裂や対立をもたらしことになる。このような両国の国際事情を考えると、小説の中で、アガサに対するオズワルドの裏切りを描出することにより、作者はイギリスとインドの関係性が危ういものであることを、それぞれの人物造型によって示唆していると思われる。

おわりに

「運命と青いマント」では、オズワルドが偶然、フランシスが普段身に付けていた青いマントと同様のマント姿のアガサを、フランシスと間違えて声をかけてしまったことからふたりの交際が始まっていた。しかし最後には、アガサとの結婚の約束を果たそうと村に戻って来たオズワルドが、ラヴィルとの結婚式に向かったアガサと行き違いになってしまふという運命の皮肉や、フランシスの奸計により、ふたりの交際には終止符が打たれた。この作品では、つい最近まで、病気のためにイギリスに留まっていたはずのオズワルドが、インドから戻ってきたと言及されていたり、アガサが出したインド宛ての手紙がイギリスにいるオズワルドの元に届けられたりするなど、ストーリー構成面での欠点が目立っていた。しかし、オズワルドのインド高等文官の資格試験の合格を通じて、この小説から、19世紀半ばに導入された官僚制度改革、能力のある中流階級の下層の人々の台頭、イギリス社会を成り立たせていた階級の壁のひとつが取り払われていく社会の変革を読み取ることができた。一方で、小説世界において、社会的には低い階級に属しているオズワルドのインド高等文官として成功したいという野望は、イギリスとインドの間に成立している支配/被支配の構図を浮かびあがらせていた。そしてまた、彼の出世願望は、イギリスの一般庶民の中には、イギリスとインドの間にあるイギリス優位の国際的力関係を当然のこととしていた人々がいたことを物語っていた。

オズワルドが高級官僚として赴任する予定地がインドであったことを考えると、先ほど言及したこの作品の意味の表層下には、同時代のイギリスの植民地支配の実情と、宗主国イギリスと植民地インドの国際事情の一端が描き込まれていたとみることができる。インド高等文官となってインドで成功する野心を持っていたオズワルドは、インドを政治的・経済的・文化的に支配していたイギリスと「メトニミー的關係」にあった。さらにまた、アガサが帰国を信じ、ハンフリーが不信感を募らせるオズワルドには、インドを植民地化して繁栄を築いたイギリスの帝国主義的な体質を読み取ることができた。そして、オズワルドからイギリスに滞在していたことを知らされず、試験に合格した彼がインドに勤務していると信じ続けていたアガサとオズワルドのふたりが迎える破局には、本国イギリスと植民地インドの結びつきの脆さが暗示されていると解釈することができたのである。

以上の考察から、この小説のストーリー展開にいくつか不自然さがあるものの、小説には、大英帝国拡大の最中にあるイギリスによるインドを従属国とする国際的政治力学の状況が、アガサ、オズワルドなどの登場人物たちの言動を通して描出されていたと言える。

注

¹ 本章は、シルフェ英語英米文学会年次大会(2011年6月11日、於：明治学院大学)における口頭発表「トマス・ハーディの短編小説「運命と青いマント」—オズワルドとインド高等文官」と、『シルフェ』第51号(シルフェ英語英米文学会、2012年2月1日発行)に掲載された論文「トマス・ハーディの短編小説「運命と青いマント」—オズワルドとインド高等文官」に、大幅な加筆修正を施したものである。

² 本章における引用は、Thomas Hardy, “Destiny and a Blue Cloak.” *The Withered Arm and Other Stories* (London: Penguin, 1999)によるものである。

³ “Indian Mail.” *Ships-worldwide.com*. 25 July. 2015.

〈<http://www.trains-worldexpresses.com/webships/400/402.htm>〉

⁴ “P&O History.” *P&O Heritage.com*. 25. July. 2015.

〈<http://www.poheritage.com/our-history/timeline>〉

⁵ プロフェッショナル・ミドルクラスとは、医者や弁護士といった専門職に従事している階層のことを指している。

第5章 『カスターブリッジの町長』

一時代の変遷と町長の交代劇¹

はじめに

『カスターブリッジの町長』(*The Mayor of Casterbridge*)は、かつて干草束ね職人であった頃、酒に酔った勢いで自分の妻子を、その場に居合わせた見ず知らずの男に奴隷同様に売り飛ばした過去を持つ主人公マイケル・ヘンチャード(Michael Henchard)の人生を綴った作品である。妻子を金に換えたことを後悔した彼はその非を悟り、努力を積み重ね、商才を発揮したりしてカスターブリッジの町長の座にまで登りつめる。しかし、やがて彼は、自分の使用人であったドナルド・ファーfrey(Donald Farfrae)にその座を譲り渡さざるをえなくなる。

この作品は1886年に『グラフィック』(*Graphic*)誌に連載され、同年、スミス、エルダー社から単行本としての初版が出版された。この時、小説の副題は“The Life and Death of a Man of Character”であった。そして、1895年にオズグッド、マキルヴェイン社からウェセックス小説版が出版された時、その副題は“A Story of a Man of Character”へと変更された。“a man of character”には「人格者」という意味がある。しかし、カスターブリッジの町長で、豪商でもあるヘンチャードは、彼が営んでいた穀物商店を繁盛させて、町民から絶大な信頼を得るようになったファーfreyを妬んで、彼を店から追い出したり、他の従業員に暴言を吐いたりする。さらにまた、元恋人で、自分とのつきあいをかたくなに拒否するルセッタにせまり、脅迫したりもする。このようなヘンチャードの振る舞いを考えると、彼を「人格者」とみることは難しい。しかしヘンチャードは、一介の貧しい職人から商売で成功を収め、町長にまで出世するほどのバイタリティの持ち主である。彼は従業員の家族を経済的に援助したり、出会った頃は、弟のようにファーfreyを可愛がったこともあることから、ヘンチャードは本質的には男気のある人物であると言えるのである。これらの点を考慮すると、北脇徳子が述べるように、この小説の副題となっている“a man of character”は、「気骨のある人」を意味していると考えられる(216)。

『カスターブリッジの町長』に関する先行論で主流を占めるものとして、作中に「性格は運命だ」(“Character is Fate”)(112)と記されているところから、シェイクスピアの『ハムレット』(*Hamlet*, 1603)の主人公ハムレットと同様に、ヘンチャードの身に起きた悲劇

の原因のひとつは、感情的な彼の性格にあるとする見解もある。その先行論者のひとり、F.R.サザリントン(F.R. Southerington)は、ヘンチャードのこの激情タイプの性格が、彼の人生に破滅をもたらしたと分析している(97)。また、ジョン・パターソン(John Paterson)は、ヘンチャードは妻子を競売に掛けるという「道德規範の侵害」(“the violation of a moral scheme”)(*The Mayor of Casterbridge as Tragedy* 344)を犯し、結果的に、そのような粗暴な性格が報いを受けることになったと述べている。

一方、ヘンチャードの没落を性格以外の原因に帰する読み方をする先行論もある。ブラウンは、ヘンチャードとかつての彼の雇人ファーフレイとの間に、新旧農業技術上の、また、商業経営上のやり方の対立があつて、その抗争にヘンチャードが敗北したことにその要因があると指摘している。そして、技術を身に付け、ヘンチャードの店から独立したあと、自分の店を合理的に経営したファーフレイは成功していき、一方、旧来の方法に固執し、新しい変化に対応できなかったヘンチャードは没落していったのだと論じている(63-66)。

しかし、作品に登場する人物たちの人間関係に着目すると、この小説世界には、単にヘンチャードの辿る破滅的な人生が描かれているだけではなく、作者ハーディが読み取った、19世紀のイギリス国内外の事情に関する見解が表出されていると考えられる。

『カスターブリッジの町長』が『グラフィック』誌に連載された時、イギリスは帝国主義時代の全盛期を迎えていた。物語が設定されている期間は1820年代後半から1840年代終わり頃までに及んでおり、これはイギリスが植民地の拡大を国策としていた時期と重なっている。そして、このイギリスの時代精神を反映していると思われる作中人物たちの人間模様について検討していくと、ヘンチャードの妻スーザン・ヘンチャード(Susan Henchard)と娘エリザベス＝ジェイン(Elizabeth-Jane)は、ヘンチャードによって売られたあと、買主に連れられてイギリスの自治領カナダに渡るが、結局、再びイギリスに戻ることになる。ヘンチャードに代わってカスターブリッジの町長となるファーフレイは、1707年に「グレート・ブリテン王国」(Kingdom of Great Britain)が成立した時に、イングランドと合同したスコットランドの出身である。そして、ヘンチャードの愛人であるルセッタ・テンプルマン(Lucetta Templeman)、旧名、ルセッタ・ル・シュール(Lucetta Le Sueur)は、フランス系とイングランド系住民が共に居住しているジャージー島出身である。このような人物設定は、植民地を拡大した結果、様々な文化的背景をもつ人々から構成された大英帝国の文化的多様性と地理上の広がりをもつ、作中に取り込むことがその目的であつ

たのではないだろうか。

本章では、小説の舞台カスターブリッジの町長を務めていたヘンチャードが人望を失い、彼に代わってファーfreyがその主導権を握るようになっていく、いわば町長の交代劇とも言えるストーリー展開に注目する。そして、彼らがイングランドとスコットランドというそれぞれの出身地域と「メトニミー的關係」にあるという立場から、このふたりが辿る人生から、ハーディがイングランドとスコットランドをどのように作中に描き込んでいるかを検討していく。さらにまた、カナダからカスターブリッジに戻って来たスーザンとエリザベス＝ジェインのカナダとイギリスにおける生活体験と、ジャージー島出身のルセッタが受ける町の人々からの反発に、同時代の植民地への移住問題や、対フランス意識が表出されていることを明らかにする。

第1節 カスターブリッジにおけるヘンチャードとファーfrey

物語は、干草束ね職人だったヘンチャードが妻スーザンと赤ん坊のエリザベス＝ジェインを連れ、職探しの旅の途上にあるところから始まる。みすぼらしい格好と疲労困憊した3人の外見から、彼らが長くて惨めな旅をしてきたことがわかる。職探しの途中で立ち寄った市場で、強いラム酒を粥に入れたファーマティーを飲み過ぎ、酔っ払ったヘンチャードは、このあと、こともあろうに酔った勢いで妻子を古代ローマに見られた奴隷売買のように競売に掛け、初対面の水夫ニューソン(Newson)に5ギニーで売り渡してしまう²。そのあと、ニューソンはスーザンとエリザベス＝ジェインを連れてカナダに向かう。一方、酔いから醒めたヘンチャードは、後悔の念に駆られて3人の後を追いかけるものの、見つけることができず、落胆した彼は禁酒を固く決意して、カスターブリッジに向かうのである。このような酒に酔ったヘンチャードの蛮行に着目すると、彼の「ヘンチャード」(Henchard)という名前は、酔っ払いを意味する“drunkard”という語と結びつけられて生み出されたものなのかもしれない。

小説の舞台とされるカスターブリッジとは、どのような町なのであろうか。本論文の序章で述べたように、ハーディは自分の故郷であるイングランド南部を自作の中で「ウェセックス」と名付けた。そしてカスターブリッジは、そのイングランド南部にあるドチェスターをモデルにした町であるとされている(深澤 30)。衝撃的な内容の本作品の序章のあと、その第3章では約18年の時が流れ、ニューソンと死別して経済的に困窮しているスーザ

ンが、別れた夫ヘンチャードを探すために娘のエリザベス＝ジェインと共に、1840年代終わり頃のカスターブリッジを訪れることになる。その町に対するエリザベス＝ジェインの「なんて時代遅れな場所に見えること」(“What an old-fashioned place it seems to be!”)(27)という感想にあるように、その土地は時代の移り変わりから取り残された町である。例えば19世紀半ばのイングランドでは、種をまく際に、18世紀にジェスロ・タル(Jethro Tull)によって開発されたすじ蒔き機が使用されていた。しかしながら、農業を中心としているカスターブリッジでは、未だに人の手で種がまかれている。さらにまた、農作物の取引の場合にも、商人たちは書面によらず、口頭によって契約を結んでいる。そのような中、スーザンとエリザベス＝ジェインが、ヘンチャードを探しに町へやって来た時の場面に注目したい。彼女たちは通りかかった町1番のホテル、ゴールデン・クラウン(Golden Crown)の前で、町の楽団によって「なつかしきイングランドのローストビーフ」(“The Roast Beef of Old England”)(31)が演奏されているのを耳にする。これはヘンリー・フィールディング(Henry Fielding, 1707-54)の劇作品『グラブ街オペラ』(*The Grub-Street Opera*, 1731)の中で演奏された歌曲であり、フィールディングが詞を書き、リチャード・レヴァリッジ(Richard Leveridge)が作曲を担当した。「なつかしきイングランドのローストビーフ」(“The Roast Beef of Old England”)の最初の5行は次の通りである。

When mighty Roast Beef was the Englishman's food,
It ennobled our brains and enriched our blood.
Our soldiers were brave and our courtiers were good
Oh! the Roast Beef of old England,
And old English Roast Beef! (259)

大きなローストビーフがイングランド人の食べ物であった頃、
それは我々の知性を気高くし、我々の血をたぎらしてくれた。
我が兵士たちは勇敢で、我が延臣たちは優秀であった、
ああ、なつかしきイングランドのローストビーフよ、
なつかしきイングランドのローストビーフよ！

この歌曲に出てくる「ローストビーフ」には、古き良き時代のイングランドに対する郷愁

と愛国心が表されているところから、この1節がイングランド人の高潔な精神を称えていることがわかる。したがって、伝統的な農業方法と商慣習を残し、「なつかしきイングランドのローストビーフ」の1節を享受しているカスターブリッジは、古色蒼然としたイングランドの雰囲気留着している町であることがわかる。

このようなカスターブリッジという町において、ヘンチャードは穀物商人として成功を収め、ついに町長の地位にまで上り詰める。彼の商売の方法は、目の子勘定で店の業績を判断し、口約束だけで農作物の取引をするという経験や勘に頼るものである。しかし、そのやり方が昔から引き継がれてきた伝統や商慣習に合致しているため、当地方の営業方針にたけているヘンチャードは、思いのままにその能力を発揮し、独占的に穀物を商うことができる立場を獲得している。ゴールデン・クラウンでヘンチャードが町の有力者を集めて開いた晩餐会の場面は、町長になった彼が、町での繁栄を誇示していることを明らかにするものである。かつて市場で別れたきり消息不明のヘンチャードを探しに来たスーザンは、彼がホテルにいることを教えられ、そこに向かう。ホテルの会場で久しぶりに別れた夫の姿を目にしたスーザンは、粗野な性格は変わっていないというものの、宝石入りの飾りボタンと重そうな金鎖を身につけたヘンチャードの姿を見て、彼が財力と権力を手に入れたことを察知する。さらにまた、スーザンは「威厳のある声」(“commanding voice”)(32)と彼の笑い声から、ヘンチャードが「弱さに対しては同情せず、偉さや強さに対して称賛を惜しまぬような性格」(“a temperament which would have no pity for weakness, but would be ready to yield ungrudging admiration to greatness and strength”)(32)の持ち主になっていることを見抜く。実際、彼女は、ヘンチャードが周囲の者たちに対して高圧的に振る舞っているのを目にするのである。

次に、スコットランドからやって来たファーフレイが、本作品の意味世界においてどのような役割を果たしているか分析する。アメリカでの成功を夢見て生地を離れ、移動する途中でカスターブリッジに立ち寄った彼は、芽の出た小麦を取引先に売ってしまい、苦情を受けた穀物商ヘンチャードに出会う。そして彼は、品質の良くない小麦を改良する方法をヘンチャードに紹介することで、その技量を評価され、ヘンチャードが営む穀物商店の支配人として雇われるようになる。このあとファーフレイは、「数字の霧を晴らす器用さ」(“dexterity in clearing up the numerical fogs”)(74)をもって、「帳簿をつけることによって商店の管理作業を始めよう」(“initiating himself into the managerial work of the house by overhauling the books”)(74)と記されているように、管理能力を発揮して、ヘンチャー

ドの店を繁盛させることに成功し、ヘンチャードの片腕となる。

ハーディは、1895年にオズグッド、マキルヴェイン社から出版した3巻本と、1912年のウェセックス版の序文で、ファーフレイという人物について次のように述べている。

It must be remembered that the Scotchman of the tale is represented not as he would appear to other Scotchmen, but as he would appear to people of outer regions. (*Personal Writings* 19)

この話に登場する例のスコットランド人は、他のスコットランド人の目ではなく、その外の地域の人々の目に映じるように描出されているということを忘れてはならない。

つまりハーディは、スコットランド人がスコットランド以外の地域の人々にどのように見られているかを意識して、ファーフレイという人物を造型したと記しているのである。実際ハーディは、スコットランド出身の友人のアドバイスを受けながら、ファーフレイにスコットランド訛りの言葉をしゃべらせている(Wilson 330)。例えばファーフレイが遣う言葉を表記する時、スコットランド方言の発音にならって、「世の中」を意味する“world”の代わりに“warrld”(48)という綴り字を使い、「穀物」を意味する“corn”は“corren”(46)、「広告」を意味する“advertisement”は“advarrtishment”(46)と表記している。この点からだけでも、ファーフレイはスコットランドと「メトニミー的關係」を持つ人物として捉えることができる。

それでは、町長であるヘンチャードとファーフレイの力関係をみるために、国家的行事の祝賀日³に、ふたりが企画した催し物と、その行事が終わった後のふたりの立場の変化について考察する。当日ヘンチャードは、入場無料で紅茶のサービスを受けながら、芝居やゲームを楽しむことができる催しを町の人々のために計画する。ところが、途中で雨が降り出してしまったため、屋根のないヘンチャードの行事に集まった人々は、あわてて雨の当たらない場所の方に移動してしまう。こうして、遊びにやって来た町の人々を楽しませようとしたヘンチャードの企画は失敗に終わる。一方、ファーフレイは入場料を徴収し、悪天候でも催し物を続けることが可能な「パビリオン」(“the pavilion”)(103)と呼ばれる「巨大テント」(“a gigantic tent”)(103)を張り、人々がバンドの音楽に合わせてダンスを踊って楽しめるように立案していた。さらにまた、ヘンチャードが担当する会場から流れて来

た客を集めることができたおかげで、ファーフレイの企画は大盛況のうちに終わる。つまり、ファーフレイの商人としての才覚は、ヘンチャードのそれよりも優れたものであることが、この行事の成功・不成功によって証明されたわけである。

では、行事が終わったあとのヘンチャードとファーフレイの町での立場は、どのように変化していったのであろうか。催しの成功後、カスターブリッジの人々はファーフレイの実践的な力を評価し、ヘンチャードに代わってファーフレイが「主人」(“master”)(99)になることを望むようになる。しかし、人々の人気を得たファーフレイは、彼の能力と人気に嫉妬したヘンチャードによって店を解雇されてしまう。このあと、ヘンチャードと同じ穀物商店を開くことにした彼は、ヘンチャードの顧客を奪うまいと気配りしながら商いを始める。彼はまた、従業員に対して真摯な態度で接する。そして、優れた経営方針で店を次第に繁盛させ、すじ蒔き機の導入を試みるなどして、地元の農業の発展に努める。こうして、優れた経営手腕を発揮し、近代的農業方法を実践するファーフレイは、地元の「改革者」(“the innovator”)(166)と呼ばれるようになり、カスターブリッジという古くさい町に新しい胎動と発展をもたらす人物となる。そして間もなくして、町の有力者たちはファーフレイを町長に推薦し、町議会の多数がそれを承認して、彼は正式に町長に就任する。

一方で、新しく商いを始めたファーフレイに顧客を奪われてしまったヘンチャードは、「天気予報士、つまり、天気占い師」(“a forecaster or weather-prophet”)(184)として知られたフォール氏(Mr. Fall)に農作物の収穫時期を占ってもらう。しかし、占いが外れたことで、彼はすべての農作物を失うことになり、その損失を補てんしなければならなくなる。こうして、店舗と住む家を売ることになった「彼(ヘンチャード)は、繁栄と名声の尾根を通り過ぎて、急速に反対側に下り始めた」(“he [Henchard] passed the ridge of prosperity and honour, and began to descend rapidly on the other side.”)(217)。それに加えて、彼の町長職の任期も終わってしまったことから、ヘンチャードの生活状況がますます厳しくなる。ファーフレイに嫉妬を募らせたヘンチャードは、落ちぶれた彼を心配して自分の店で働けるように気遣ってくれたファーフレイを、倉庫の階の上から突き落とそうとする。この一件により、ファーフレイはヘンチャードへの不信感を強め、彼と口を利かなくなる。かくして、親身になって仕事や住居の世話してくれたファーフレイを失ってしまったヘンチャードは、貧しい暮らしを余儀なくされるのである。

ヘンチャードとファーフレイがカスターブリッジで迎える対照的な人生には、先述したブラウンの指摘にあるような、新旧の商業活動上の対立を読み取ることができる(65)。さら

にまた、使用人はもとより、かつての主人であったヘンチャードにまで配慮と気遣いができるファーフレイと、自分の店の繁栄に貢献してくれたファーフレイの成功に嫉妬し、彼に暴力を振るうヘンチャードとの人間性の違いも、ふたりの立場を大きく左右することになる。しかしながら、この意味の表層を形成するヘンチャードが没落し、ファーフレイが台頭するというストーリー展開は、深層部において、作者ハーディが、イングランドとスコットランドの力関係において、スコットランドが力を付けつつある実情を暗に示唆していると解釈することができる。

両地域の歴史的背景をみると、第1章第3節で述べたように、フランス・ノルマンディー公国のノルマンディー公ギョームは、イングランド・ウェセックス王朝のハロルド2世とイングランドの王位継承権をめぐる戦い勝利した。こうして1066年に「ノルマン征服」を成し遂げたギョームは、ウィリアム1世(William I)、通称ウィリアム征服王(William Conqueror)として戴冠した。このあと、イングランドはグレート・ブリテン島の北部に位置していたスコットランドに度々侵攻するようになる。これに対し、スコットランドはフランスと同盟を結ぶことでイングランドに対抗した。この両地域の対立関係は、1707年の「連合法」(Acts of Union)によってスコットランドとイングランドが法律的に統合してからも続くことになる。

このようなイングランドとの抗争の中にあって、18世紀後半、スコットランド人のジェームズ・ワット(James Watt)が新式の蒸気機関を発明し、イギリスの産業革命の推進に大きく寄与した。また、19世紀後半になると、スコットランドは技術革新と機械工業の進展により、ヨーロッパにおいてイングランドに次ぐ経済発展を遂げるようになった(K. Theodore Hoppen 523)。さらにまた、世界経済を牽引するようになっていたスコットランドは、様々な分野において大英帝国の発展にも大いに貢献していく。例えば18世紀半ばあたりから、スコットランド人はイギリス政府によって軍や国家の要職に登用され、彼らの活躍は本国イギリスのみならず、植民地でも目覚ましいものであった(Linda Colley 120)。産業革命をきっかけに世界有数の造船竣工地域となった当地では、多くの蒸気船が製造され、それらは大英帝国内の人々の経済活動を支えるようになっていった(R.H.Campbell 168)。金融業に目を向けると、1884年の外国・植民地対象の投資会社の4分の3は、スコットランド人により経営されていたとも言われている(木畑洋一 171-72)。つまり、19世紀の植民地争奪期に、スコットランドは帝国の拡大と繁栄に軍事・産業・商業・金融各方面で協力し、大英帝国の富や権力の拡大に寄与していたのである。

以上のような、イギリス国内におけるイングランドとスコットランドの関係性を考慮すると、両地域の競い合いは、ヘンチャードとファーフレイが主催した催事や、その後にふたりが辿る人生模様を表出されていると解することができるであろう。つまり、イングランドと対等か、それ以上の力量を発揮するスコットランドの躍進が、ファーフレイが商店経営を合理的に行ったり、パピリオンにおける出し物を大成功に導いたり、農業用機械を導入して農業の発展に努めるなど、機をみるに敏であるファーフレイの言動に読み取ることができるのである。そして、行事を成功させた後、商店を繁盛させ町長にまで出世するファーフレイの成功と、店を失い、町長の地位から退くヘンチャードの衰亡は、スコットランドとイングランドがイギリスというひとつの国において共存する中で、前者が後者を凌ぐ実力を発揮していると作者が感じ取っていたことを物語っていると言うことができる。

第2節 スーザン親子の遍歴

ヘンチャードによってニューソンに売り渡されたあと、ニューソンと共にカナダに渡ったスーザンは、およそ12年間を娘のエリザベス＝ジェインと共にカナダで過ごすことになる。この節では、ふたりが長く滞在していたカナダからイギリスに戻り、暮らし始めたカスターブリッジで味わう苦悩や、ヘンチャードと町の人々との不和について論じていく。

ニューソンに連れられてカナダに向かったスーザンとエリザベス＝ジェインの足取りを辿ると、イギリスを出発して3カ月目に、赤ん坊であったエリザベス＝ジェインは病気で亡くなってしまう。その後、間もなくして、カナダでニューソンとスーザンとの間に娘が生まれる。そしてスーザンは、この赤ん坊に亡き娘と同じエリザベス＝ジェインという名前を付ける。つまり、スーザンと共にカスターブリッジにやってきたエリザベス＝ジェインは、ニューソンとの間に生まれた娘というわけである。

スーザンと2代目のエリザベス＝ジェインにとって、カナダでの生活は過酷なものであった。貧しさに苦しむそこでの生活は、スーザンの心身を蝕み、エリザベス＝ジェインは内気な性格の持ち主になってしまった。エリザベス＝ジェインが12歳頃になって家族はカナダから戻り、イギリスのファルマス(Falmouth)⁴に住み始めるが、相変わらず貧しさからは抜け出せない。そして、ニューファウンドランドへ商用のため出かけたニューソンが溺死したという知らせを受け、スーザンは娘に今よりもましな暮らしをさせようと決意し、行方がわからなくなっているヘンチャードを探しに、18歳になったエリザベス＝ジェ

インを連れてカスターブリッジに向かった。ところが、スーザンとエリザベス＝ジェインは到着したカスターブリッジで、下層階級の人々が利用する宿屋、キング・オブ・プラッシャー(King of Prussia)⁵に宿泊する金すらなく、そこに泊まるために、エリザベス＝ジェインが宿の給仕の仕事をしなければならないほど困窮していた。

カナダとイギリスの両国で経済的に苦しい生活を余儀なくされてきたスーザンとエリザベス＝ジェインの暮らしぶりには、19世紀のイギリスの移民事情が反映されていると思われる。ナポレオン戦争後、イギリスは急激な人口増加による深刻な失業と貧困の問題を抱えていた。例えば1801年の国勢調査では、イギリスの人口はおよそ1,600万人であったが、1851年には2,700万人にまで膨らんでいる(井野瀬久美恵 113)。そこで、この人口増加問題を解決するためにイギリス政府が考えたのは、貧しい人々を移民として国外へ送り出すことで、人口過剰と、それに伴う国内の経済的・社会的窮状を解消しようとする政策であった。カナダを例に取るならば、ナポレオン戦争後に起こった農産物の不作と人口増加に伴う失業者と貧困者を救済するため、イギリス政府は1820年と1821年に、3,083人のスコットランド人や2,591人のアイルランド人を、渡航する際に、経済的援助を受けることのできる補助移民としてカナダに移住させている(Harper and Constantine 16-17)。ところが、序章で言及したように、ベインズによると、海外への移住者のおよそ40%は、そのあと間もなく本国イギリスに戻ってきている(39-42)。そして、その帰国者の中には、移住先の厳しい自然環境や貧しい暮らしを耐えしのぐことができず、帰国して来た者が多く含まれていた。さらに、本論文第3章第2節で取りあげたパークのコメントにあるように、彼らはイギリスに戻ってきても、職や住む所を見つけることができず、依然として極貧生活を強いられることもよくあったと言う(184)。このようなところから、カナダとイギリスで赤貧にあえぐスーザンとエリザベス＝ジェインの人生は、植民地での暮らしがうまくいかないため、イギリスに帰国して新しい生活をスタートさせようとしたものの、結局、本国でも満足のいく暮らしができないでいた移民の実情に対応していると言える。

それでは、移住先から帰国してきたスーザンに対し、カスターブリッジの人々はどのような反応を示しているのでしょうか。ヘンチャードと再会することができたスーザンは、間もなく彼とよりを戻す。しかし、過去の愚行が明らかになり、町長職を失うことを怖れたヘンチャードとスーザンのふたりは、最近知り合ったばかりであるふりをして結婚する。こうして町長の妻となったスーザンに対する町民の態度は、非常に冷淡なものである。彼らは生氣のない顔をしたスーザンを、口々に「幽霊」(“The Ghost”)(80)とか「ただの骸骨」

“a mere Skeleton”)(82)と呼び、「取るに足りない」(“so little”)(81)女だと軽蔑する。彼女がヘンチャードと結婚するという話が広がった時は、彼らの結婚は「不可解な」(“inexplicable”)(80)のものであるとして、カスターブリッジの住民たちはスーザンに不快感を示すのである。

ここで、スーザンがイギリスの植民地であったカナダで約 12 年間暮らしていた点に着目しながら、再び、イギリスの移民事情と絡めて、彼女に対する町の人々の反応に言及する。前述したように、イギリス政府は過度な人口増加を解消するために、貧民を植民地に移住させるような政策を展開した。その中で、カナダについて言えば、そこへ移住するイギリス人は、ジェド・マーティン(Ged Martin)によると、他国に向かう移民たちに比べ、渡航費を払うのに精一杯なほど、特に貧しかったという(528)。また、植民地から帰ってきた者の中には貧しい者が多かったため、人々の中にはそのような彼らに対して冷淡な態度を取る者もいた(Harper and Constantine 329-31)。さらにまた、移住者の中にも、移り住んだ地域の住民たちとなじめず、孤立する人々も多くいたということである(Harper and Constantine 329-31)。つまり、一般的風潮からみて、カナダへの移民はイギリス国内において貧困層に属する人々が多く、当地からの帰国者に対する印象も良くなかったというわけである。『カスターブリッジの町長』におけるスーザンの経歴に目を向けると、彼女はヘンチャードと別れたあと、ニューソンと共に幼い娘を連れてカナダに渡り、そこで長く暮らしていた。しかし、カナダでの過酷な生活はスーザンから体力と気力を奪っていった。作者ハーディは、スーザンという人物の半生に、現実社会において貧者が多かったカナダへの移民者や、そこからの帰国者に対する一般的悪評を描きこんでいたと考えられる。

次に、カナダ生まれで、カナダ育ちの 2 代目エリザベス＝ジェインが、イギリス人であるヘンチャードとの人間関係を築く中で味わう苦悩について検討していく。スーザンはカスターブリッジで町長として活躍するヘンチャードに再会した時、彼女の連れていたエリザベス＝ジェインが市場で生き別れになった娘であると説明する。そして、このスーザンの話を信じるヘンチャードは、赤ん坊の頃、黒髪であった娘の髪の色が明るい茶色になっていることを不思議に思いながらも、2 代目エリザベス＝ジェインを実際の娘と思い込み、深い愛情を注ぐことになる。そして、彼がかつて母親と自分を捨てた事実を彼女が知ったら、彼を憎むのではないかと心配し、父親であることは告げないままエリザベス＝ジェインとの暮らしを続けていく。間もなくスーザンが亡くなったのをきっかけに、ヘンチャードはエリザベス＝ジェインに彼が実父であることを告げ、ふたりは東の間の幸福を味わう

のである。ところが、スーザンの死後 3 週間経って、亡くなったスーザンの残した手紙を発見したヘンチャードは、エリザベス＝ジェインがニューソンの娘であることを知る。激昂した彼は、理不尽にも自分を実父であると信じるエリザベス＝ジェインにつらくあたるようになる。一方でエリザベス＝ジェインは、ヘンチャードの冷たい態度に困惑しながらも、そのような彼を愛し、町長の令嬢であっても質素な暮らしむきに徹し、他人に対する気遣いを忘れないように生きようと決心する。このヘンチャードとエリザベス＝ジェインの父娘関係は、彼女が彼の実子ではないという理由だけでなく、イギリスとカナダの文化の違いを物語るものと読むことができる。次の引用は、ヘンチャードとエリザベス＝ジェインとの間で交わされたやり取りを描いた箇所である。

Whenever she took upon herself any domestic duty that the servants could have done—which she often did—he [Henchard] set it down to her faults of breeding. She was, it must be admitted, sometimes provokingly and unnecessarily willing to saddle herself with manual labours. She would go to the kitchen instead of ringing, “Not to make Phoebe come up twice,” she went down on her knees, shovel in hand, when the cat overturned the coal-scuttle; moreover, she would persistently thank the parlourmaid for everything, till one day, as soon as the girl was gone from the room, Henchard broke out with, "Good God, why dostn't leave off thanking that girl as if she were a goddess-born! Don't I pay her a dozen pound a year to do things for 'ee?" (128)

彼女が、使用人たちがやるはずの家事を引き受けた時にはいつでも—彼女はしばしばそうしたのだが—彼(ヘンチャード)はそれを育ちの悪さだとした。彼女が、時々、腹立たしいほどに、また、不必要なほどに自分から進んで手仕事をしていたことは認めなくてはならない。彼女は「フィービーが 2 度も来なくてよいように」、呼び出しのベルを鳴らす代わりによく台所に足を運んだ。猫が石炭入れのバケツをひっくり返すと、彼女はシャベルを手に跪いた。さらに彼女は、何事につけ、小間使いに対してどんなことにも礼を言ったので、ついにある日、小間使いが部屋から出ていくなり、ヘンチャードは、「何だいったい、まるであの娘が女神さまであるかのように、彼女に向かって感謝をするのをやめたらどうだ！お前のために、あの娘に年 12 ポンドも支払ってい

るんじゃないか？」

エリザベス＝ジェインが使用人たちのすべき仕事を彼女自身が行ったり、周囲の人たちに感謝の弁を口にしたりするのは、これまでの貧しい生活と生まれ育った土地柄がそのような彼女の言動のもととなって作用しているのは確かである。したがって、エリザベス＝ジェインがイギリスに比べて階級への意識が希薄なカナダで幼少期を過ごしたからこそ、彼女はそのような振る舞いを本質的に身に付けたと考えることができる。ヘンチャードの場合、彼が“dostn’t”と“ee”という語を使ってエリザベス＝ジェインを非難しているように、ヘンチャードは町長という社会的地位を得たものの、彼が口にする言葉は依然として労働者が使用するままのものである。一方でヘンチャードは、エリザベス＝ジェインがこれまで置かれていた土地柄のせいで、彼女自らが使用人たちの仕事を好き好んで行っていると考え、主と従の社会的図式を破るものとみて彼女を叱責する。そしてこのことは、イギリス育ちのヘンチャードが階級を意識し、人物評価の尺度を階級に置いていることを意味している⁶。ここに、イギリスとカナダという異なる国の文化に由来する社会通念の違いが、人物造型の相違として表出されていると言えよう。

それでは次に、エリザベス＝ジェインが高価な衣服よりも、書物を買うことを優先させる場面を分析し、彼女が書物に関心を示す理由を探る。エリザベス＝ジェインは、ある日、ヘンチャードからプレゼントされた美しい手袋と、それに合う衣服を身に付けて外出した時、町の人々からその美しさを称賛される。しかし、高価なものを身に付けることに空しさを感じた彼女は、「こんな美しい服なんてみんな売り払って、文法書や辞書や、あらゆる哲学について記した歴史書などを買ったほうがいいわ！」(“Better sell all this finery and buy myself grammar-books, and dictionaries, and a history of all the philosophies!”)(95)と自戒の弁を口にする。このエリザベス＝ジェインの言葉から、彼女が物よりも、「文法書」や「辞書」⁷や「歴史書」の方を重視していることがわかる。特に文法書について言えば、この時代、一般的に文法書は学校での英語学習以外に、個人が英語を学ぶために使われていた⁸。19世紀によく知られていた文法書として、イギリス人のジョセフ・アンガス(Joseph Angus)が著した、*Handbook of the English Tongue for the Use of Students and Others*(1872)をあげることができる。アンガスはその序文で、自著が学習者たちにとって、「英語を正確に、はっきりと、適切に、そして、説得力を持って話し、書くこと」(“to speak and write English tongue with accuracy, clearness, propriety

and force”)(v)ができるようになるためのものであると説明している。特に興味深いところは、学習者たちがその文法書を通じて、「我が国のかつての著述家たちを知的に読むこと」(“to read intelligently our older writers”)(v)ができるようになるのと述べられている点である。そして、そういった著述家たちの「著作物は、言葉と思考の両方が豊かである」(“works are rich both in words and thought”)(v)と言っている。つまりアンガスによると、当時、文法書は学習者たちに正確な英語を書いたり、話したりする能力を身に付けさせるためだけのものでなく、イギリス人著述家たちの書物を正確に読めるようにするためのものであったというわけである。これは、文法書が学習者たちにとってイギリス英語そのものに精通するだけでなく、イギリス文化について正しい知識を広げる助けとなっているということの意味している。このような文法書が果たす役割を考慮すると、エリザベス＝ジェインが「文法書」に興味を示すところには、カナダで生まれ育った彼女の中に、正しいイギリス英語を身に付け、イギリス文化を学び、イギリス人として成長したいという意志があったからと言える。言い換えれば、彼女は自分がカナダの出身であることに負い目を感じていたからこそ、イギリス英語に習熟し、イギリスに関する知識を深めようとする向上心に駆り立てられ、「文法書」の購入について言及したと思われるのである。

次いで、エリザベス＝ジェインが 12 歳までカナダで育ったという点に注目したい。彼女が言語習得期をカナダで過ごしたということから、エリザベス＝ジェインは「カナダ英語」(Canadian English)を身に付けていたと思われる。「カナダ英語」という言葉がいつ市民権を得るようになったかは定かではないものの、すでに 19 世紀の半ば頃には、カナダ人が遣う英語は「カナダ英語」と呼ばれていた⁹。J.K.チェンバーズ(J.K.Chambers)は、*Canadian Oxford Dictionary* の“Canadian English 250 Years in the Making”の中で、「カナダ英語」は過去約 2 世紀の間に、主にふたつの地域からやって来た人々が使用していた英語をもとにして出来上がったものであると述べている(ix)。そのひとつ目は、アメリカ独立戦争に敗れ、アメリカのコネチカット州やマサチューセッツ州を含むニュー・イングランドや、ペンシルヴェニア州などの中部大西洋沿岸地域からカナダに移住した王党派の人々が使用していた英語である(x)。ふたつ目は、ナポレオン戦争後から 19 世紀半ば頃までに、グレート・ブリテン島とアイルランドからカナダに移住してきた人々の英語である(x)。そして、前者の英語の「音と統語法」(“sounds and syntax”)(x)に、前者のそれとは異なる後者の英語が混ざりあい、「カナダ英語」が形成されていったとされている。作中には、エリザベス＝ジェインが「カナダ英語」を遣っているとは記されていない。しかしな

がら、19世紀のカナダ人がイギリスで用いられていた英語とは異なる英語を遣っていたという歴史的事実から、カナダで生まれ育ったエリザベス＝ジェインの言語は、「カナダ英語」の影響を強く受けていたと推察するのが自然であろう。そして、そのような彼女が「文法書」や「辞書」に大きな関心を示したのは、彼女が「カナダ英語」から脱して、イギリス英語に精通することにより、イギリスに適応したいと思っていたからであると考えられる。

以上の考察から、エリザベス＝ジェインは12歳までカナダで育ったため、階級意識が低いと考えられる。彼女はまた、カナダで生まれたことに劣等感を抱き、「カナダ英語」から抜け出そうとしている。これは、エリザベス＝ジェインがカナダ人であることを意識していることを示唆するものであることから、彼女は本質的には、カナダと「メトニミー的關係」にある人物として造型されていると言える。

第3節 カスターブリッジにおけるルセッタ

次に、カスターブリッジの人々の間で評判が悪い登場人物のひとり、ルセッタに着目する。ルセッタは、ヘンチャードが仕事で時折訪れたジャージー島で出会った女性である。彼女は、当地で病気になったヘンチャードを献身的に看病した結果、彼と恋仲になり、結婚の約束をするが、ヘンチャードがスーザンとよりを戻してしまったため、ふたりの関係は終わってしまう。しかし、ルセッタはスーザンが亡くなったという噂を聞きつけると、カスターブリッジにやって来て、ヘンチャードに結婚を迫る。

ルセッタは、身勝手に高慢な振る舞いが目立つ女性である。ヘンチャードに近づくために、彼女はエリザベス＝ジェインを利用しようと考え、エリザベス＝ジェインを自宅に呼び寄せて住ませることで、ヘンチャードの心を自分に向けさせようとする。エリザベス＝ジェインとヘンチャードが不仲であることを知るとひどく落胆するが、その一方で、魅力的なファーフレイに出会い、彼に惹かれると、今度は彼女に何度となく会いに来るヘンチャードを遠ざけるために、同居しているエリザベス＝ジェインが「番犬」(“a watch dog”)(162)代わりになるのを喜ぶ。ルセッタは、彼女に利用されているエリザベス＝ジェインの気持ちを推し量ることもないし、エリザベス＝ジェインがファーフレイを慕っていることにも気づかない鈍感な人物である。さらに、ファーフレイと結婚し、町長夫人となった彼女は、ファーフレイの商店で働けるよう口添えを自分に頼みに来た最貧層の住民のひとりジョブ(Jobb)を冷たくあしらう。こうしてルセッタは、他人の気持ちを理解する

ことができない愚鈍さと、身分の低い者に対する高慢な態度から、住民たちの反感を買うことになる。

ルセッタに対する町民たちの嫌悪感は、彼らがヘンチャードとルセッタをかたどった人形を担ぎ、音楽を奏でながら町中を練り歩くところからもうかがい知れる。これは、序章で言及した「スキミティライド」と呼ばれる風習である。*OED*によると、この風習は「スキミントン」(skimmington)と呼ばれる不貞を犯した妻などを法に基づかず、地域の人々の手で罰する一種の私刑である。「スキミントン」と似たような風習は、イギリス以外のヨーロッパでも行われていた。例えばフランスでは、別の村からやって来た求婚者を拒絶したり、年齢差がある者同士の結婚を認めない場合に、村の人々がその人物たちに対して鍋を叩いて嫌がらせをすることがあり、このような行為は「シャリヴァリ」(charivari)と呼ばれていた(Frank W. Wadworth 64-65)。カスターブリッジで行われた「スキミティライド」は、町の最貧層の人々が住むミクスン・レーン(Mixen Lane)と呼ばれる通りにあるパブのセント・ピーターズ・フィンガー(Saint Peter's Finger)にたむろする人々によって実行されたものである。それが行われることになったのは、就職の世話を断られたことに腹を立てたジョップが、ルセッタがヘンチャードに送ったファーフレイと結婚する前の彼女とヘンチャードが恋仲であったことを証明するラブレターを、パブに集まる人々に見せたことに起因する。ルセッタとヘンチャードの反道徳的な交際を知った住民たちの反応をみていくと、ある者は、「私たち女のひとりがこんなことをするなんて、立派な女として恥ずかしいことだわ！それなのに、今は別の男に誓いを立ててしまっている！」(“ ’Tis a humbling thing for us, as respectable women, that one of the same sex could do it. And now she's vowed herself to another man!”)(256)と嘆き、ルセッタが結婚前に別の男性と親密な関係にあったことを問題視している。その他にも、ナンス・モックリッジ(Nance Mockridge)のように、ファーフレイとの結婚に有頂天になっている彼女を懲らしめたいという気持ちから、この古い風習に参加しようとする者もいる。かくして、その横柄な態度や町民たちの嫉妬心などから、ルセッタは町民たちに嫌われている存在として造型されている。

ここで、ルセッタの生い立ちと彼女の出身地ジャージー島の歴史について言及しながら、彼女とカスターブリッジの人々との間の不和について分析する。ルセッタはもともと教育を受けた良家の子女であり、彼女の両親もまたジャージー島とイングランドの良家の出身とされている。陸軍将校であった父親が亡くなったあと、イングランドからジャージー島

に戻ってきた彼女は、そこで貧しい暮らしを強いられることになる。ルセッタが育ったジャージー島は、現在のフランスの一地域であるブルターニュ公国の支配下にあったあと、933年にノルマンディー公国に併合された。そして、1066年にウィリアム1世による「ノルマン征服」によってイングランドの一部となったあとも、ジャージー島はノルマンの法律を遵守し、その習慣を留めることになる。1830年代以降は、主にイングランドやヨーロッパからの移民や亡命者が島に渡ってきたことから、島の住民の多くは、イングランド系の血とケルト系の祖先を持つブルトン人やノルマン人などのフランス系の血を受け継いでいる。さらにまた、19世紀のジャージー島では、使用言語は教会、議会、裁判所ではフランス語、商用や軍事関係の場合では英語であったとされる(Peter Hunt 45)。作中でルセッタが、「町の片方ではフランス語を、反対側では英語を話し、道の真ん中ではちゃんぽんといった具合」(“There they speak French on one side of the street and English on the other, and a mixed tongue in the middle of the road.”)(149)と語っているが、これは同時代のこの島の言語状況を反映してのものと考えられる。総括すれば、フランスとイギリス両方の文化的要素が、この土地の生活、文化、習慣を形成していたと言える。

ジャージー島で育ったルセッタは、どのような人物として造型されているのであろうか。ルセッタは、「まぎれもなく父方か母方にフランス人の血が混じっている、黒髪の、目の大きな、美しい女」(“dark-haired, large-eyed, pretty woman, of unmistakably French extraction on one side or the other.”)(147-48)と記されているところから、彼女にフランス系の血が流れていることがわかる。また、ルセッタはジャージー島で暮らしていた時、「ル・シュール」(Le Sueur)と名乗っていたことから、彼女のどちらかの親がフランス系であると推測できる。これに加えて、彼女の口からは英語よりフランス語が自然に出てくるのであり、ルセッタがフランス文化の影響下で育ったということが容易に想像できるのである。このような外見と言語事情からみて、フランス人の血を引き、フランス文化の属性を身に付けたルセッタは、フランスと「メトニミー的關係」にある人物と理解することができよう。

それでは、同時代のイギリスとフランスとの関係に言及しながら、ルセッタとカスターブリッジの人々のスタンスについてみていくことにする。イギリスとフランスは歴史上、長い間対立していたが、その関係は、この小説が出版された19世紀後半においても同じであった。植民地拡大をめぐるフランスとの争いで、アフリカ進出に先手を打つべく、イギリスは1875年にエジプトのスエズ運河を買収した。一方、露土戦争(Russo-Turkish War,

1877-78)が勃発すると、イギリスは、チュニジアを手中に収めたフランスの北アフリカ進出を懸念するようになっていった。これに対し、フランスもイギリスによるエジプト占領を警戒するなど、植民地をめぐる思惑が両国間の緊張を高めるものになっていた。そして、同時代のイギリスとフランスのこの緊迫した状態は、小説の世界では、カスターブリッジの人々とルセッタの関係に置き換えて読むことができる。カスターブリッジというイングランドの町に、フランスの属性を持つルセッタがやって来て、町の実力者ファーフレイと交際を始め、そして結婚するという経緯は、イングランドにおけるフランスの影響力の拡大を意味するのではないだろうか。現実社会におけるイギリスのフランスに向けられた嫌悪感、ルセッタに不快感を示す住民たちの態度に投影されていると考えられる。このように読むならば、ハーディはルセッタがカスターブリッジで辿る人生に、同時代のイギリスとフランスをめぐる不安定な国際情勢を反映させていることになる。

第4節 ヘンチャードの没落

この節では、国家的行事の祝賀日を境に、カスターブリッジで、経済的・社会的な力を失っていくヘンチャードの没落の意味を探る。

長い間経営していた穀物店を閉め、カスターブリッジの町長の座からも退くことになる古株のヘンチャードを、地元の人々はどのように思っているのだろうか。ファーフレイが現れるまで約20年間、ヘンチャードはカスターブリッジで町長として、そして商人として活躍していた。ヘンチャードを良く思わない人々がいたのは確かであるが、議員仲間は彼の能力とバイタリティを高く評価して彼を町長に選んでいる。次の引用は、先述のように、占いに頼って穀物の取引を行う「迷信深い」(“superstitious”)(184)ヘンチャードが破産に追い込まれ、所有していた不動産を失ってしまった時の町の雰囲気を描出している場面である。

When everything was ticketed that Henchard had owned, and the auctions were in progress, there was a sympathetic reaction in the town, which till then for some time past had done nothing but condemn him. Now that Henchard's whole career was pictured distinctly to his neighbours, and they could see how admirably he had used his one talent of energy to create a position of affluence out of absolutely

nothing—which was really all he could show when he came to the town as a journeyman hay-trusser, with his wimble and knife in his basket—they wondered, and regretted his fall.(218)

ヘンチャードの所有していたものにみな札が付けられ、競売が行われている間、しばらく前までは彼を非難する声しか聞こえなかった町に、同情的な反応が起こっていた。ヘンチャードの生涯の全貌が彼の隣人たちにはっきりと思い描がかれ、行動力という唯一の才能を見事に駆使して、完全な無一文から—彼が干し草刈りの渡り職人として、籠にきりと刀を入れてこの町にやって来た時、人に見せることのできるものとしてはこれしかなかったのだが—裕福な地位を築き上げたことがわかると、彼らは彼の没落を信じられず、悲しんだのだ。

ここには、干し草束ね職人から町長にまで出世したものの、全てを失って落ちぶれていくヘンチャードを気の毒に思う人々の気持ちが表れている。そして、このような昔日の栄光を享受するイングランドと「メトニミー的關係」にあるとみられるヘンチャードの衰亡には、古き良きイングランドの終焉を思わせるところがある。

カスターブリッジで経済的・社会的に苦しい状況に追い込まれていく中で、ヘンチャードは怒りと嫉妬を抑えられなくなり、人間性を失っていく。既述したように、彼は店を繁盛させていくフェアフレイに憎悪を募らせ、彼を倉庫の2階から突き落とそうとする。また、スーザンを亡くしたやもめのヘンチャードと結婚すると約束をしたにもかかわらず、フェアフレイと親しくしているルセッタに激高した彼は、ルセッタがかつて彼に送ったラブレターをフェアフレイや世間の人々に公表すると脅して、彼女に結婚を迫る。こうして、自暴自棄な振る舞いをするヘンチャードに対し、町の人々は先述した「スキミティライド」を行う。この見世物によって、彼は人々からルセッタとの情事をからかわれるのであるが、一方で、「スキミティライド」はそのような彼に人生をやり直すきっかけを与えている。亡くなったスーザンの手紙から、エリザベス＝ジェインが実の娘ではないことを知ったヘンチャードは、その事実を知らないままヘンチャードを実父と思い、彼に寄り添うエリザベス＝ジェインを冷たくあしらってきた。しかし、「スキミティライド」を見て倒れるルセッタを心配し、介抱するエリザベス＝ジェインの姿を見た彼は、優しい気持ちの持ち主である彼女を愛おしく思うのである。そのような時に、ニューファウンドランドへ商用で出か

け死んだと思われていた水夫ニューソンが、スーザンが亡くなったことを知り、娘エリザベス＝ジェインの安否を尋ねて、ヘンチャードの所へやって来る。この時ヘンチャードは、エリザベス＝ジェインが「彼の孤独な心の中に新たに沸き起こった希望」(“the new-sprung hope of his loneliness”)(289)であるため、ニューソンにその娘を奪われたくないと思う気持ちから、彼女は死んだとニューソンに嘘をつく。エリザベス＝ジェインへの愛情を強めるヘンチャードは、自分の嘘が明らかになり、その結果、娘が自分の元を離れていくのではないかと想像し絶望する。そのため彼は自殺まで思い立ち、町を流れる川の「十の水門」(Ten-Hatches)と呼ばれる場所に向かい、そこでコートと帽子を脱ぐ。死を決意した瞬間、彼が目にするのは、川の中を流れていく「スキミティライド」で使用された自分を模した人形であった。この「まるで死人のように浮いている」(“floating as if dead”)(293)人形を見たヘンチャードは、再び衣類を手にとって立ち上がる。ヘンチャードがなぜ自殺を思いとどまったかについて、テキストからは判断できない。しかし、「十の水門」での一件をきっかけに、彼はそれまで離れて暮らしていたエリザベス＝ジェインと再び暮らす決心をし、「ヘンチャードは何日かぶりにひげをそり、きれいな下着をつけて、髪に櫛を入れた」(“Henchard shaved for the first time during many days, and put on clean linen, and combed his hair”)(294)。そして、そのような彼を支援するファーfreyと町会議員は、彼とエリザベス＝ジェインのために種苗店を用意する。このようなヘンチャードの心境の変化からみて、「スキミティライド」で使用された自分の人形が、自殺しようとした彼自身の代替になったとみることができる(風間末起子 61)。さらにまた、「十の水門」(Ten-Hatches)の“hatch”という言葉には、動詞で「孵化する」、名詞で「孵化」という意味がある。つまり、「スキミティライド」というカスターブリッジの古い風習と「十の水門」が、ヘンチャードに人を愛する力を目覚めさせ、それまでの彼の殻を破って「孵化する」きっかけを与え、もう1度、新たな人生を始めようとする気力を奮い立たせることになったと言えよう。

しかし、ヘンチャードは間もなくして、その町を去る決心を固めるが、彼の旅立ちにどのような意味があるのだろうか。ヘンチャードがニューソンに、エリザベス＝ジェインが死んだという嘘をついてからおよそ1年後、彼女が生きているという情報を得たニューソンが、エリザベス＝ジェインを探しに再びカスターブリッジにやって来る。これを知ったヘンチャードは、エリザベス＝ジェインが彼女に会いに来たニューソンを自分が追い返してしまったことに気付き、さらに、自分と彼女が本当の親子ではなかったことを知って、彼女が自分を憎むのではないかと考える。また、エリザベス＝ジェインとファーfreyが

結婚することを知った「彼は、ふたりがどんな考えを持とうとも、彼らの行く道を邪魔立てせずに、好きなようにさせておこうと誓った」(“Henchard vowed that he would leave them to their own devices, put nothing in the way of their courses, whatever they might mean.”)(300)。こうして、エリザベス＝ジェインの前から姿を消す決心をしたヘンチャードは、カスターブリッジから立ち去っていく。次の引用は、かつて貧しい職人としてウェイドン＝プライアーズの市場にやって来た時と同じ風体で、町を去っていく彼の様子を描いた箇所である。

During the day he had bought a new tool-basket, cleaned up his old hay-knife and wimble, set himself up in fresh leggings, knee-naps and corduroys, and in other ways gone back to the working clothes of his young manhood, discarding for ever the shabby-genteel suit of cloth and rusty silk hat that since his decline had characterised him in the Casterbridge streets as a man who had been better days.
(306)

彼は、昼間のうちに新しい道具入れの籠を買い、古くなった干し草刈りのナイフときりを研ぎ上げ、真新しいレギンスや膝当てとコールテンのズボンに身を固め、それ以外の点では、彼が落ちぶれてからも、カスターブリッジの町で、かつては良い時もあった男として彼を際立たせていた着古した上品な服と色あせたシルクハットを永久に脱ぎ捨てて、彼の若い頃の作業着にまた戻っていったのであった。

カスターブリッジを去る決心したヘンチャードは、古いタイプの自分の時代が終わったことを自覚し、町の将来を若いファーフレイとエリザベス＝ジェインに託して、身を引いたと言えるのである。そして、このようなヘンチャードの旅立ちは、かつての栄光に輝くイングランドがひとつの役目を終えたことを示唆していると考えられる。

第5節 ファーフレイとエリザベス＝ジェインの結婚

最後に、カスターブリッジの住民たちは、エリザベス＝ジェインに対してどのような感情を抱き、ファーフレイとエリザベス＝ジェインの結婚をどのようにみているか明らかに

していく。

カスターブリッジにやって来て間もなく、エリザベス＝ジェインはヘンチャードの家族として裕福な暮らしができるようになるが、日常生活では目立たない存在であった。しかし、町民たちは少しずつ、彼女に興味を持ち始めるようになっていく。例えば、ルセッタとヘンチャードが昔交際していたことを揶揄するため、「スキミティライド」を執行することについてパブで議論がなされている最中、地元民バズフォード(Buzzford)はエリザベス＝ジェインとルセッタを比較し、「あの女(ルセッタ)よりもっと器量のいい娘がいるのに、誰も見向きもしねえ。あの偉がり屋のヘンチャードの身内であるばかりに」(“Now there’s a better looking woman than she [Lucetta] that nobody notices at all, because she’s [Elizabeth-Jane’s] akin to that mandy fellow Henchard.”)(264)と評して、エリザベス＝ジェインに同情を寄せつつも、彼女が魅力的な女性であると公言する。ルセッタの死後、独り身になったファーfreyは、ルセッタと出会う前に好意を寄せていたエリザベス＝ジェインの優しさと思慮深さを再認識し、彼女にプロポーズをする。こうして彼らの結婚が決まった時、最貧層の住人コーニー(Coney)はエリザベス＝ジェインについて、人から「好かれる」(“well-liked”)(302)、「若い読書家の女性」(“a young perusing woman”)(302)であると評価し、ファーfreyに相応しい女性だと褒めている。一方で、町民たちの中には、亡くなったルセッタの後釜の座を狙っていた支配者層の若い娘たちが、ふたりの交際を腹立たしく思っている。また、キング・オブ・ブラッシャーの女将スタニッジ(Mrs. Stannidge)のように、ファーfreyとエリザベス＝ジェインでは身分が釣り合わないと考え、ふたりの交際を心よく思わない者もいる。つまり、人々の中には、ふたりの結婚に対して批判的な反応をみせている者もいるのである。しかし、最終的にはファーfreyとエリザベス＝ジェインの結婚を満足 of いくものであるとみなし、それまで通りの日常生活を続けていく人々の態度から、ふたりの結婚は住民たちに受け入れられたと言える。

町民たちがエリザベス＝ジェインに対して良い印象を持っているのに対し、ルセッタに対する彼らが示した反応は、それとは正反対のものであった。ここで、住民たちがふたりの女性に対して異なる反応を示す理由について考察しておきたい。エリザベス＝ジェインとルセッタは、ふたりともカスターブリッジの外からやって来た、いわばよそ者である。前者が約 12 年間でカナダで過ごし、後者はジャージー島で暮らしていたという点で、両者はカスターブリッジの人々とは異なる文化的背景を持った人物であると言える。ところがこのふたりの違いは、町の人々に対する態度にみられるのである。ルセッタはファー

レイと結婚したことで居丈高に振舞う。一方、カスターブリッジに来た頃から、エリザベス＝ジェインは住民たちに思いやりの態度で臨み、親切に接していた。そして、町長であり、裕福な穀物商であるファーレイと結婚し、何不自由のない生活が約束される中でも、彼女が謙虚さを失うことはない。町長夫人になったエリザベス＝ジェインの人々に対する態度は次のようなものである。

She could perceive no great personal difference between being respected in the nether parts of Casterbridge, and glorified at the uppermost end of the social world.(322)

彼女はカスターブリッジの下層の人々から尊敬されることと、社交界の最上層で称賛されることの間大きな人間としての違いを認めることはできなかった。

この引用が明らかにしているように、彼女は身分や階級に左右されないカナダで身に付けた生き方を、カスターブリッジにおいても貫いている。つまり、エリザベス＝ジェインの人間観の根幹には、カナダの社会風土が生き続けていて、イギリスにおいてもそれに基づく生活態度を持ち続けているというわけである。こうしたところから、エリザベス＝ジェインの人間性を評価する町の人々は、彼女を受け入れるようになっていったと言えよう。

以上のことから、ファーレイとエリザベス＝ジェインの交際を温かい目で見つめ、結婚を祝福し、カスターブリッジの町長と町長夫人としてふたりを迎えるカスターブリッジは、ヘンチャードが去った後、ファーレイが持ち込んだ穀物栽培の技術と知識や、エリザベス＝ジェインが身に付けていた価値観に感化されて、新たな町として生まれ変わるであろうことを読者に予感させる。そして、ストーリー展開の表層から読み取れるこの町長交代劇とふたりの結婚の深層部には、イングランドの発展にスコットランドとカナダが大きく貢献していることが暗示されているのである。

おわりに

以上の考察から、かつてのイングランドを思わせるカスターブリッジにおいて、町の住民が現実を見据えて町長に選んだのは、経済的・社会的に過去の規範に囚われているヘン

チャードではなく、大英帝国の中で新たに台頭してきたスコットランドと「メトニミー的關係」に置かれているファーフレイであることが明らかとなった。ファーフレイがカスターブリッジの新町長として、そして穀物商として成功を享受するに至る経緯は、スコットランドが発展を遂げるプロセスを彷彿とさせるところがあった。一方で、カスターブリッジという町で、町長として、あるいは穀物商として存在感を誇っていたヘンチャードが、自ら町を去るシーンには、従来の因習に固執する古き良きイングランドの終焉が暗示されていた。したがって、この元町長と新町長の交代劇には、イングランドの覇権の弱体化とスコットランドの台頭が描出されていたと言えるのである。

これに加えて、この小説には、イギリスの移民事情や同時代のイギリスとフランスの政治的対立が描き込まれていた。カナダに移住したスーザンとエリザベス＝ジェインたちが経験する惨めな暮らしには、イギリスの移民事情の現実が反映されていた。そして、カナダで生まれ育ったエリザベス＝ジェインの階級意識の希薄さと、「文法書」や「辞書」に対する関心の高さから、彼女はカナダと「メトニミー的關係」を持つ人物として解することができた。ジャージー島出身のルセッタは、フランス的雰囲気の中で育ち、フランス語を流暢に話し、フランス人の血が流れていたところから、フランスと「メトニミー的關係」にある人物であった。そのような彼女に対するカスターブリッジの住民たちの冷淡な態度の裏には、当時のイギリスとフランスの政治的対立が投影されているとみることができるのであった。そして小説の最後で、カスターブリッジという町がファーフレイとエリザベス＝ジェインに大きく依存することになるところからは、スコットランドとカナダがイングランドを支える重要な地域であり、国であるとするハーディの国際感覚を読み取ることができた。

注

1 本章は、『英米文学の地平：W.ワーズワスから日系アメリカ人作家まで』（田村一男監修、金星堂、2012年3月30日発行）に掲載された拙論「トマス・ハーディの『カスターブリッジの町長』—カスターブリッジに投影された大英帝国」に、大幅な加筆修正を施したものである。

2 妻子を売り渡してしまうという出来事は、ハーディが1895年のウェセックス版の序文で断りを入れているように、『ドーセット・カントリー・クロニクル』（*Dorset Country Chronicle*）紙に掲載されていた記事にヒントを得たものである（*Personal Writings* 18）。ク

リスティン・ウィンフィールド(Christine Winfield)によると、ハーディが目にした記事とは、1826年5月25日付、1827年12月6日付、1829年10月16日付のものではないかと述べている(224-31)。

³ 都留信夫は、これがヴィクトリア女王の子供であるアリス王女(Princess Alice)の誕生か(1843年)、アルフレッド王子(Prince Alfred)の誕生(1844年)を指していると説明している(671)。

⁴ ファルマスは、1688年から1850年の間、海外からの郵便物を積んだ郵便船が寄港する町として知られていた。経済的に余裕のない人々が、通常の船よりも乗船料が安い郵便船を利用して海外へ出発したり、イギリスにやって来ることは珍しいことではなかった。作中には、カナダから帰って来たスーザンたちが、イングランドのどの町に到着したかは記されていない。しかし、貧しい暮らしを強いられていた彼女たちが、ファルマスに到着したと考えるならば、一家は旅費を節約するために、郵便船を利用して帰国したと推察できるだろう。“Falmouth Packet Service.” *Official Town Website Falmouth*. 4 Mar. 2015. 〈<http://www.falmouth.co.uk/discover-falmouth/history/packet-service>〉を参照。

⁵ 95年にウェセックス小説版が出た時、この宿屋の名前は「3人の水夫」(Three Mariners)へと変更された。“Three Mariners”は、カスターブリッジのモデルとなったドチェスターにあった宿屋であり、19世紀末に取り壊された。“The King's Arms, Dorchester.” *Victorianweb.org*. 6 Mar. 2015. 〈<http://www.victorianweb.org/photos/hardy/20.html>〉を参照。

⁶ 本論文では、スミス、エルダー社から出版された初版のテキストを使用しているが、1895年に刊行されたウェセックス小説版以降、本論引用箇所にある、“Whenever she took upon herself any domestic duty that the servants could have done—which she often did—he [Henchard] set it down to her faults of breeding.”は、“Her considerate disposition became a pitfall to her now.”(「彼女の思いやりのある性質が、今は落とし穴になった。’)へと変更されている。ハーディがなぜこのような変更を行ったかは明記されていないので、推測の域は出ないのであるが、エリザベス＝ジェインがカナダ育ちであることを踏まえると、初版の場合と同様に、階級に対する意識が低いことをアピールするために、彼女は使用人たちに対して気さくに接するように造型されていると考えられる。

⁷ 「辞書」についてだが、この作品の出版時を考慮すれば、まず想起されるのは、サミュ

エル・ジョンソン(Samuel Johnson)による、1755年出版の『英語辞典』(*A Dictionary of the English Language*)であろう。また、スコットランド出身ジョン・オーグルヴィー(John Ogilvie)の『帝国英語辞典』(*Imperial Dictionary of the English Language*)(1847-55)も指摘できる。加えて、チャールズ・リチャードソン(Charles Richardson)による、『新英語辞典』(*A New Dictionary of English Language*, 1836)もあげることができる。

⁸ 例えば、19世紀の学校で使用された最も優れた文法書として、17世紀末から出版されていて、圧倒的に需要のあったアメリカ人リンドレー・マレー(Lindley Murray)によって編まれた、*English Grammar Adapted to the Different Classes of Learners. With an Appendix, Containing Rules and Observations, for Assisting the More Advanced Students to Write with Perspicuity and Accuracy*(1795)があげられる。パトリック・ジョイス(Patrick Joyce)によると、マレーの文法書には、文法を厳密に教えること以外に、「道徳的、社会的義務の規範」(“the canons of moral and social duty”)(203)と「従順さと自制を習慣づけること」(“habituation of subordination and control”)(203)を積極的に教える事例が散りばめられているとされている。なお、アンドリュー・リン(Andrew Linn)は、19世紀前半、ほぼ900冊の英文法の新刊本が出たと述べている(78)。学校教育現場以外の場所で、幅広い階層の若者が英語を学ぶために使用していた文法書として、例えばエドワード・シェリー(Edward Shelley)の *The People's Grammar, or English Grammar without Difficulties for 'The Million'*(1848)が考えられる。これは、「独学で知識の習得に努力する若い勤勉な機械工」(“the mechanic and hard-working youth, in their solitary struggles for the acquirement of knowledge”)(Linn 76)向きに書かれたと銘打たれている。ジャーナリストで愛国者であったウィリアム・コベット(William Cobbett)のものは、表題が *A Grammar of the English Language, in a Series of Letters: Intended for the Use of Schools and of Young Persons in General, but More Especially for the Use of Soldiers, Sailors, Apprentices, and Plough-Boys*(1818)となっている。

⁹ 1857年にカナダ人のギーキー(Geikie)という聖職者が、その手紙の中で「カナダ英語」という言葉を用いていることから、19世紀半ばには、既に「カナダ英語」として区別されているものがあったと考えられる(Chambers ix)。

第 3 部 登場人物たちにおける「グレート・ブリテン島」 的世界

第6章 『帰郷』

ークリムとユーステイシアのエグドン・ヒースへの回帰をめぐる

はじめに

1874年に『狂乱の群れをはなれて』を『コーンヒル』誌に連載した時、「連載ものが上手な書き手」(“a good hand at a serial”) (*The Collected Letters of Thomas Hardy Vol. 1* 28)と評価されていたハーディが次に目指したのは、「まぎれもない芸術作品」(“an unmistakable work of art”)(Millgate 198)を書き上げることであった。こういう意気込みを抱いて執筆されたのが6番目の長編小説『帰郷』(*The Return of the Native*)であり、それはハーディにとって初めての本格的な悲劇的様相の漂う作品となる。

この小説には原稿以外に、1878年に雑誌『ベルグレイヴィア』(*Belgravia*)に連載された時のテキストと、同年に出版された初版本、1895年に刊行されたユニフォーム版(Uniform Edition)、1912年のウェセックス版という3つの版がある。パターソンはこれら一連の改訂を通じて、この作品には牧歌的な物語の中にギリシア悲劇の要素が多く取り入れられており、悲劇的色彩の濃い世界を描出することに成功した小説であると評している(*The Making of The Return of the Native* 167)。実際、作品にはギリシア神話の神々が登場したり、神話からの引用がちりばめられている。さらにまた、小説の舞台である荒野エグドンに住む「ヒースの人々」(“heathmen”)(20)¹と呼ばれる村人たちは、ギリシア悲劇における「合唱隊」(コロス)の役割を果たしている。そして、ソフォクレス(Sophocles, c.495BC-406BC)の『オイディプス王』(*Oedipus Tyrannus*, c.430BC)において、オイディプス王が、結婚した妻が自分の生母であるという真実を見抜くことができなかったことを悔いて両目を抉り取り、視力を失うことによってはじめて真実を知ることができたのと同様に、主要な登場人物のひとりであるクレメント・ヨーブライト(Clement Yeobright)、通称クリム(Clym)は、眼病のために視力の著しい低下を招くことによって、自分にとっての真実に目覚めることになる。

このようにみただけでも、『帰郷』にはギリシア悲劇を想起させる内容が散見される。しかし本章では、小説の舞台であるエグドンが、紀元前5世紀頃に今日のイギリスに渡来してきたケルト人や紀元前1世紀頃に侵入してきたローマ人、そして、約5世紀半ばに侵攻してきたアングロ・サクソン人の風習が引き継がれている土地であることに着目する。そ

して、そのようなエグドンに住む人々の出自や彼らの言動の分析から、エグドンが異国の文化や価値観と接触した時、どのような事態が生じるかをめぐって論を展開していく。

本章ではまずはじめに、エグドンがどのような土地であるかを、そこに暮らす住民たちの生活ぶりも視野に入れながら精査していく。それに続いて、成長してエグドンを出てフランスのパリに渡ったあと、そこで学んだ学問を生かして、故郷であるエグドンに学校教育を広めようと計画して戻ってきたクリムの人生に、エグドンの風土がどのような作用を及ぼしたかについて考察していく。そして次に、エグドンの風習に従ってはいるが、外国人としての祖先の血を引き継いでいることから、外見的には異国の雰囲気醸し出しているユーステイシア・ヴァイ(Eustacia Vye)が、当地でどのような人生を送るようになるかについてみていく。最終的には、以上の考察を踏まえて、クリムとユーステイシアがエグドンに対して取っているスタンスや言動を通して、エグドンがどのような村として描き出されているかを明らかにする。

第1節 エグドン・ヒースとその住人たち

エグドンとは、『帰郷』のウェセックス版の序文によると、ハーディの故郷であるイングランド南西部に実際に点在していたいくつもの荒野を統合して創りあげられた架空の土地であるとされている(*Personal Writings* 12)²。ヒースとハリエニシダが蔓延るエグドンは、常に陰鬱な雰囲気を漂わせている広大な「荒野」(“waste”)(9)である。土地がやせているため、そこに住む人々が取ることができるものと言え、ヒース・クローパーと呼ばれるポニーの飼料や、生活燃料と箒作りの原料となるハリエニシダや泥炭、芝土などであり、彼らはそれらを売って貧しい暮らしを立てている。そして、このような荒野エグドンは、その不毛性をもって、「文明はその地(エグドン)の敵だった」(“Civilization was its [Egdon’s] enemy.”)(12)と記されているように、文明と対立する状況にある土地である。

エグドンは、「農民にとってヒースの繁るこの土地の不毛性にこそ、歴史編纂者にとっての豊穡さが存した」(“In the heath’s barrenness to the farmer lay its [heath’s] fertility to the historian.”)(20)と書かれているように、「グレート・ブリテン島」の豊かな歴史を有する土地でもある。例えばエグドンには、「ローマ人が作った西大道から分岐してできた近隣の旧道、つまりヴィア・イケニアーナ、すなわちイケニルド街道」(“an old vicinal way, which branched from the great Western road of the Romans, the Via Iceniana, or

Ikenild Street”)(12)³があるところから、そこは、紀元前 55 年からおよそ 350 年続いたローマ帝国の属領としてその支配下にあった土地と想定されるのである。さらに、エグドンにはブラックバロウ(Blackbarrow)と呼ばれる場所がある。第 1 部「3 人の女」(The Three Women)、第 3 章「土地の風習」(The Custom of the Country)では、11 月 5 日、住民たちが暗闇の中、「古代ブリトン人の最初の火葬用の薪の燃え残った灰」(“The ashes of the original British pyre”)(20)が積もったブラックバロウの上で「火祭り」(bonfires)を催しているシーンがある。“Blackbarrow”の“barrow”は「丘」や「塚」を意味しているが、エグドンにあるブラックバロウはケルト人の火葬場であったことから、そこは「塚」であると考えられる。さらに、ゲイラ・R.スティー爾(Gayla R. Steel)によれば、“barrow”という言葉は、「丘」や「墓地」を意味するアングロ・サクソン語の“beorth”に由来したものである(60)。このようなどころから、ブラックバロウはアングロ・サクソン人の墓地跡であったと言える。またさらに、ロナルド・フットン(Ronald Hutton)は、ドーセット州によくみられる“barrow”が古代の人々が祭事を行った場所であったり、彼らの墓地であったりする可能性の高いことを指摘している(52;68)。つまりエグドンは、古代の人々や、ケルト人やローマ人、そしてアングロ・サクソン人が生活していた痕跡を残している土地なのである。

それでは、エグドンの風習のひとつであるブラックバロウの塚で行われる「火祭り」とは、どのような祭事なのであろうか。この祭りはもともと、1605 年 11 月 5 日、上院議場を爆破して、ジェイムズ 1 世(James I, 即位期間:1603-25)や議員を殺害しようとした「火薬陰謀事件」(the Gunpowder Plot)が失敗に終わったことを祝うためのものであった。この陰謀事件は、ヘンリー 8 世(Henry VIII, 即位期間:1509-47)によってとられたプロテスタントの宗教政策下にあつて、カトリックの復権を実現するためにガイ・フォークス(Guy Fawkes)が主犯格となつて行われたものであった。以来、11 月 5 日は「ガイ・フォークス・デイ」(Guy Fawkes Day)と呼ばれる記念日になり、人々はガイ・フォークスにかたどられた人形を町中で引きまわし、夜になってそれを火に投げ入れた。しかし、小説の「火祭り」は、「ガイ・フォークス・デイ」よりはるか昔の、「ドルイドの儀式とサクソン人の祭りが雑多に入り混じった」(“jumbled Druidical rites and Saxon ceremonies”)(20)土着の風習として描かれている。ここで「ドルイドの儀式」と記されているものは、ケルト人が篝火をたいて過ごした祭りのことを指している。ステイヴはこの行事が夏の始まりを祝い、豊穡を願って 5 月 1 日に行われた「ベルテー祭」(Beltane)であると指摘している(65)。

しかし、篝火をたいて祝うケルト人の祭りの中には、「サムハイン祭」(Samhain)がある。この祭りは11月1日頃に、冬の到来と新年を祝って催されたものである。したがって、その祭事の時期からみて、「ドルイドの儀式」は「サムハイン祭」のことを指していると思われる。さらに、「サクソン人の祭式」について言えば、ゲルマン人には夏至や冬至を祝って篝火をたく風習があった(Ruth. A. Firor 149)。以上のことから、エグドンの村人たちが行う「火祭り」は、ケルト人とゲルマン人が季節の変わり目を祝った祭事の名残りであると言える。

次に、エグドンで行われるもうひとつの祭事である「5月祭」(May Day)について検討していく。「5月祭」は、ローマ帝国の支配下にあった時にグレート・ブリテン島に持ち込まれた、花と豊穰と春の訪れを祝い、女神「フローラリア」(Floralia)に捧げるローマの「フローラ祭」(Floralia)が、ケルト人による「ベルテーン祭」と混ざり合ったものである⁴。「5月祭」では、村人たちは「メイポール」(Maypole)と呼ばれる柱を囲んでダンスに興じるが、「ベルテーン祭」でもまた、花や緑の枝葉が飾り付けられた木の柱が草地に立てられ、人々はその周りを時計回りに踊った。エグドンではこの「5月祭」とよく似た祭りとして、音楽隊が奏でる音楽に合わせて、村の男女がペアになってステップを踏み、円を描いて踊る「ジプシング」(“gypsyng”)(251)が催されている。これは8月に行われているが、この祭りでは、音楽隊の荷馬車にくくりつけられた木の柱の近くで、村人たちが円を描いて踊っていることから、「ジプシング」は「メイポール」を囲んで踊る「5月祭」の流れを汲んでいると言えるだろう。

このようなところから、小説の舞台となったエグドンの風習は、ケルト人の文化、ローマ人の文化、そしてアングロ・サクソン人のゲルマン文化が、作中において融合させられたものとなっている。この意味において、昔からある伝統的な行事を引き継いでいるエグドンは、「グレート・ブリテン島」の世界と通底している土地であると言えることができる。エグドンにおいて農業で細々と生計を立てている住民たちは、「ヒースの人々」と呼ばれているように、ヒースの生い茂るエグドンという土地と一体化している。ブラックバロウの塚の上で「火祭り」を行う人々の様子に着目してみると、彼らの中のひとりはその炎によって、「彼の中に元気が積み重ねられているようであった」(“seemed to breed in him a cumulative cheerfulness”)(21)。さらにまた、住民たちが「ジプシング」に参加する場面では、村の若者たちは「彼らの顔を火照らせ」(“with a flush on their faces”)、「興奮しながら」(“with the excitement”)(253)踊っている。「火祭り」の炎に興奮したかのように、

火の周りを囲んで次々と熱狂的に踊り始めたり、「ジプシング」の踊りに興じる村人たちは、ケルト人やローマ人、そしてアングロ・サクソン人たちの時代から続く風習を、今日も彼らの精神的・文化的生活の一部として、当然のここのように受け入れているのである。したがって、彼らもまた、「グレート・ブリテン島」に根付いていた異教の神々や自然に対する信仰や風習に従って今も生きる人々であると言える。

次に注目したいのが、2頭のヒース・クロッパーが引くばね付きの幌馬車に乗って、時折エグドンに姿を現し、羊に印をつけるための赤い顔料を農民たちに売る「紅殻売り」(Reddleman)ディゴリー・ヴェン(Diggory Venn)である。ヴェンはかつて、父から譲り受けた酪農場をエグドンで経営していた。しかし、裕福な農場主の未亡人であるヨーブライト夫人(Mrs. Yeobright)の姪であるトマシン・ヨーブライト(Thomasin Yeobright)にプロポーズして断られたショックから、彼は所有していた農場を売り払い、紅殻売りに転職した。紅殻売りとしてエグドンを中心に幌馬車に乗って行商して回るヴェンは、厳密にはエグドンの住民とは言えない。しかし、テキストでは、彼もまたエグドンと共生する人物として描かれている。ヴェンの姿をみていくと、彼の体や衣服、靴、靴下は紅色の顔料に染められており、その異様な外見は、未開の地に生きる人々のそれを想起させるところがある。そのような彼が、暗闇の中で行われる「火祭り」に興じる住民たちの前に、道を尋ねるために姿を現すシーンがある。「炎が燃えあがった時、その炎は、ぴったりとした服を着た、頭のとっぺんから足のつま先まで真っ赤な若者の姿を浮かび上がらせた」(“When the flame arose it revealed a young man in tight raiment, and red from top to toe.”)(35)とあるように、ヴェンは炎と間違えられてもおかしくないような様相を呈していることがわかる。したがって、全身、炎と同じような紅色に輝くヴェンもまた、エグドンの地に未だ消滅せずに残っている未文明的な世界と調和して生きている人物のひとりとして読むことができる。さらにまた、ヴェンは「血の色的人物」(“blood-coloured figure”)(79)と呼ばれ、「日光の中で燃える炎」(“a flame in sunlight”)(147)と暗喩的に描出されている点にも注目したい。これについてはフィリップ・V.マレット(Phillip V. Mallet)が、「血の色」の見た目をしていたり、「日光の中で燃える炎」に例えられるヴェンが、「ヒースの生い茂った荒野の表面上の閑静の背後に隠されたエネルギー」(“the energy hidden behind the apparent repose of the heath”)(25)を暗示する人物であると指摘している。つまりヴェンは、エグドンが発散している野性味豊かな生命力を象徴する人物であるとみなすことができるというわけだ。

エグドンの住民で、その土地と調和して生きるもうひとりの登場人物は、ヴェンにプロポーズされ、彼によって一途に愛されるトマシンという女性である。彼女はエグドンで生まれ育ったことから、エグドンの環境や気候を嫌ったり、そこでの侘しい暮らしを惨めだと感じることはない。彼女は、激しい雨風に煩わされることなく荒野を歩きまわることができるほどエグドンの地勢を知り尽くしており、故郷の過酷な風土をありのままに受け入れている。トマシンはエグドンを顔に見立て、「私はその険しい年老いた顔を賛美しています」(“I admire its grim old face.”)(340)と言っているように、彼女は陰気な雰囲気や漂わせる荒野を賛美さえしている。エグドンの自然に対して崇拜の念を抱いているトマシンもまた、ヴェンや村人たちと同様、その地に根を張ってたくましく生きている人物であると言える。

以上のことから、エグドンは古代人の墓地の遺跡を残し、ローマによる統治時代に建設された街道が走り、さらには異教的な伝統文化から逸脱することなく文明世界から置き去りにされている土地であることがわかる。つまり作者ハーディは、エグドンを「グレート・ブリテン島」の面影を残している土地として描き出していると考えられる。そして、そのエグドンに住む村人たちとトマシンや、エグドンで行商生活を送るヴェンらは、文明の洗礼を受けていないが故に、素朴で野性的な生命力のみなぎった異教的世界と融合している登場人物として捉えることができよう。

第2節 クリムのエグドン・ヒースへの帰郷と改心

エグドンは前節で述べたように、外の世界との交流がほとんどなく、時代から取り残された土地である。そしてその地に、洗練された文明の花咲くフランスのパリで働いていたクリムが帰郷してくる。彼はエグドンの一角にあるブルームズ・エンド(Blooms End)に住み、大きな農場を所有している「この地区唯一の上流階級の人たち」(“the only genteel people of the district”)(89)と呼ばれるヨーブライト家の末息子である。クリムはエグドンで生まれ育ったが、彼とエグドンとの関係は奇妙なものであった。「クリムは子供の頃、そのヒースの荒野にすっかり溶け込んでいたので、ほとんど誰もが荒野を見ると、彼のことを思い浮かべた」(“Clym had been so inwoven with the heath in his boyhood that hardly anybody could look upon it without thinking of him.”)(168)とあるように、幼い頃のクリムはほとんどエグドンの風物に同化していた。同時に彼は、神童と呼ばれるほど生まれな

がらの知的才能に恵まれていたため、エグドンの住人たちから、「彼(クリム)は、生まれた環境におとなしく留まっただけではないだろう」(“he [Clym] would not stand still in the circumstances amid which he was born.”)(168)とも思われていた。やがてその予感は一瞬の現実のことであり、彼はエグドンを「卑しむべき」(“contemptible”)(170)土地であると見下し、学校を出たあと、故郷を見捨てて外の世界へと羽ばたいていく。そして、バドマス⁵やロンドンなどの都会で仕事に就いたあと、パリに渡ったクリムは、「眩いばかりの立派な店」(“a blazing great shop”)(108)である宝石店の支配人にまで出世する⁶。結局、彼は皮肉にも、その優れた才能故に生地では孤立し、そこから離脱せざるを得ない存在になってしまった。

ところが、やがてクリムは、パリで貴族や富者相手に宝石を売る仕事に空しさを感じるようになる。そして、故郷の素晴らしさに気付くようになり、帰郷を決意する。エグドンに到着した彼は、「僕の考えでは、荒野は大変爽快で、力を与えてくれ、心を落ち着かせてくれるものです。世界の他のどこよりもこれらの丘に住みたいと思いますよ」(“To my mind it [the heath] is most exhilarating, and strengthening, and soothing. I would rather live on these hills than anywhere else in the world.”)(185)と言って、荒野が広がる景観の素晴らしさに感動し、エグドンを理想の地とみなすようになっていく。さらにまた、クリムは単に自然の風物に対してだけでなく、「ヨーブライト(クリム)は彼の同胞を愛していた」(“Yeobright[Clym] loved his kind.”)(171)とあるように、エグドンの人々に対しても深い愛情を持つようになる。クリムはパリでの生活体験が反面教師となって、故郷の自然と人々に対して、それまで感じ取ることがなかった素晴らしさに気付くようになっていったのである。

しかし、ここで見逃せないのは、帰郷してまもないクリムとエグドンの村人たちの間には隔たりがあったということである。クリムの言動をみると、彼はエグドンに住む「大半の人に欠けているものは富よりも知恵をもたらす類の知識である」(“the want of most men was knowledge of a sort which brings wisdom rather than affluence.”)(171)と言って、地元の人々に対する教育の必要性を唱える。そして、地域の将来のために学校を設立してその教師になることで、故郷に貢献しようとするようになる。つまりクリムは、故郷における教育の普及を介して、長い間蔑視していたエグドンと共生しようとするのである。

ところが、エグドンの住民たちはこのような彼の構想に疑念を抱いている。例えば住民のひとりであるフェアウェイ(Fairway)は、「まず金輪際そんなこたあ実行できめえ」(“He'll

never carry it out in the world”)(171)と批判している。別の農民は、「俺に言わせりゃ、今の仕事を気にかけてほうがよい」(“for my part, I think he had better mind his business.”)(171)と忠告して、クリムの考えには理解を示さず、彼にパリへ戻ることを勧めさえするのである。それでは、エグドンの人々はなぜクリムの考えに疑いの念を抱くのであろうか。その理由を探るために、彼がフランスで身に付けた考えとはどのようなものであるかを検証していく。

エグドンに学校を建て、その地で地元の人々に教育を施したいというクリムの夢は、彼がパリに住んでいた当時、一般的に支持されていた「倫理学の体系」(“ethical systems”)(172)から影響を受けたものであった。

Mentally he was in a provincial future, that is, he was in many points abreast with the central town thinkers of his date. Much of this development he may have owned to his studious life in Paris, where he had become acquainted with ethical systems popular at the time. (172)

彼の心は地方の将来にあった。すなわち、彼は多くの点で当時の中心的な都会の思想家たちに遅れをとってはいなかった。彼のこうした発展の大半は、パリで学問に精進した生活のおかげであり、そのパリで彼は、その頃評判の倫理学の体系に精通するようになっていた。

作中で「倫理学の体系」についての説明はされていないが、トニー・スレイド(Tony Slade)の指摘にあるように、それは、19世紀のフランスで知られるようになっていたフランス人哲学者オーギュスト・コント(Auguste Comte, 1798-1857)が提唱した実証主義のことであると思われる(416)。エグドンの住民たちを知的に導き、彼らを啓蒙しようというクリムの使命感は、コントによって唱えられた他人の幸福と利益を追求することを第1の目的とする「愛他主義」(altruism)に通じている。つまりクリムは、パリでの生活において、愛他主義という時代の先端を行くフランス思想を学び、それを実践するために、エグドンの人々に教育を受けさせたいと考えるようになっていったのである。しかし、彼の問題点は、故郷の人々が毎日の生活に忙殺されながらも、そこでの暮らしにそれなりに満足しているという実情を理解していないことである。そしてまた彼は、住民たちの幸せを考えて、どの

ように彼らを教え導くかという方法や内容については言及していない(森松健介 167)。すなわちクリムは、現実を無視した教育をエグドンの人々に押し付けようとしているのである。これらの意味において、村人たちの教育の普及に尽力したいと言う彼の考えは、彼らの現実生活から遊離した空論に過ぎないものであると言えよう。

既述したように、パリでの生活体験はクリムにとっての反面教師となり、彼はエグドンの自然やそこに住む人々の実直で地に根を下ろした生き方に気付くことができた。この意味において、パリは彼にとって人生の学びの場であったとすることができるだろう。そして、パリで人生経験を積んだり、愛他主義の倫理観に感化されて彼が身につけたものは、昔ながらの風習に固執しているエグドンの住人たちを啓蒙するという高慢な考えであった。新しい思想に共感したものの、村人たちの暮らしの現実を尊重せず、彼らへの理解に欠けた独善的な考えに陥っていたクリムは、文明のエピゴーネンと化してしまったのである。したがって彼は、文明と縁遠いエグドンという地にあっては異質な存在として、人々の拒否反応の対象となる。このように、多感な一時期、フランスに傾倒し、フランスに住み、フランスの知的文化の影響を受けたクリムだが、彼は帰郷を決意してそれを実行したあと、フランスで得たものによって村人たちを教化しようと考えようになった。このように、クリムはフランスと「メトニミー的關係」を持つ人物として読むことができる。

パリからエグドンに戻って3か月もたたないうちに、クリムはエグドンのミストーバー(Mistover)と呼ばれている所に、幼い頃に両親を亡くし、年老いた退役海軍軍人である祖父ドルー大佐(Captain Drew)とふたりで暮らしている美しい女性ユーステイシアに惹かれ、結婚することになる。彼女との結婚後、クリムはエグドンで教師の資格を取るために約半年間勉強をしたあと、バドマスに移り住むことにする。しかし、目の病いのために視力が衰えてしまった彼は、バドマスに行く計画を取りやめ、教師になるための勉強も中断することになる。それでは、クリムの目の疾患は、彼とエグドンとの関係にどのような変化をもたらすことになるのであろうか。

ある日、クリムは母親ヨーブライト夫人の屋敷があるブルームズ・エンドの近くで、農民のハンフリー(Humphrey)が荒野に生えているハリエニシダをさかんに刈り取っている姿に気付く。ハンフリーのこの作業に興味を持ち始めた彼は、健康の回復と生計を立てるために、ハンフリーと共にハリエニシダ刈りの仕事を始めた。次の引用は、その時のクリムの様子を描写した箇所である。

He was a brown spot in the midst of an expanse of olive-green gorse, and nothing more. Though frequently depressed in spirit when not actually at work, owing to thoughts of Eustacia's position and his mother's estrangement, when in the full swing of labour he was cheerfully disposed and calm. (247).

彼は一面のオリーブ・グリーン色のハリエニシダの真ん中では、褐色のひとつの点であり、それ以外のなにものでもなかった。ユーステイシアの立場と母親との仲違いのことを考えると、実際に仕事の手を休めている時、しばしば精神がめいることがあるにしても、仕事に熱中している時には、楽しく仕事に励む気になっていたし、気持ちが落ち着いてもいた。

この引用からわかることは、農作業を通じて、クリムが心の平穏を取り戻しているということである。血気盛んな頃、エグドンに馴染むことができずフランスに渡り、そこで文明の洗礼を受けて、故郷の改革を夢見て帰って来たクリムは、視力の衰えをきっかけに始めたハリエニシダ刈りという肉体労働を通じて、エグドンの人々の日常生活を体感し、その地に新たな自分の生きる道を見出すようになっていったということになる。

目が不自由になることで、逆説的に真実が見えるようになったクリムという人物は、シェイクスピアの4大悲劇のひとつである『リア王』(*King Lear*, 1605-06)に登場するグロスター伯(Earl of Gloucester)を想起させるところがある。グロスター伯は、愛人が産んだ庶子であるエドモンド(Edmund)の術策にはまり、嫡子エドガー(Edgar)を勘当してしまう。しかし、エドモンドに裏切られ、両目を潰されてしまった彼は、見捨てたはずのエドガーに助けられ、心眼によって見出した真実によって、自分が犯した過ちを悔い改めてエドガーと和解するに至る。また、ギリシア神話の『オイディプス王』では、それとは知らずに父親を殺害し、神託にあったとおりの産みの母親と結婚していたことをのちに知ったオイディプス王が、その真相を知ることにより苦悩する。そして、この事情を見抜くために役に立たなかった己の両目を自ら抉り取って盲になり、王位を退いた後、見えてきた己の現実を受け入れ、乞食となって放浪の旅に出る。さらにまた、ギリシア神話に登場するテーバイの予言者ティレーシアス(Tiresias)は、視力と引き換えに予言の能力を与えられた。これらの前例にみるように、グロスター伯が両目を失ってはじめて自分の浅はかさに気付いたり、オイディプス王が両目を潰してはじめて本当の自分の姿を見出したり、ティレーシア

スが視力を失うことと引き換えに、未来の状況を見抜くことのできる能力を身に付けたように、クリムもまた、視力の衰えに苦しむ体験を通して、パリではなくエグドンという生地にこそ自分のあるべき姿があることに目覚めていったと言える。

一方でクリムは、母親ヨーブライト夫人と妻ユーステイシアのふたりが相次いで亡くなるという悲劇に見舞われ、彼女たちの死に対して責任を痛感し、絶望の日々を送るようになっていく。クリムを襲うひとつ目の不幸な出来事は、ユーステイシアとの結婚に反対していたヨーブライト夫人が、疎遠になっていた彼らの自宅を訪ねてきた際に起きた。息子夫婦の家の扉をノックしても応答がなかったため、彼らに会うことができなかったヨーブライト夫人は、ブルームズ・エンドにある自分の家に戻る途中、荒野でマムシにかまれて命を落としてしまう。のちにクリムは、夫人の来訪中、ユーステイシアが村でパブを経営している元恋人デモン・ワイルディーヴ(Damon Wildeve)と自宅で密会していたため、ヨーブライト夫人を自宅に招き入れることができなかったことや、厳しい農作業による疲れのため、眠ってしまっていた自分が母親の訪問に気付かなかったという事実を知ることになる。そして彼は、ヨーブライト夫人の死の責任をユーステイシアに転嫁し、激しい口論となった末、ふたりは別れてしまう。

クリムを苦しめるふたつ目の事件は、彼と口喧嘩をしたあと、ミストーバーに戻って祖父と暮していたユーステイシアが、パリ行きを決心して自宅を出た夜に、エグドンを流れる川の堰で溺死してしまうというものである。ユーステイシアを亡くしたクリムは、もともとをただせば母親と妻の死の原因は、自分にあったのだという自責の念に駆られる。この一件を通じて、「彼の心はしわがよってしまった」(“he had a wrinkled mind”)(372)とあるように、ふたりの女性の死によって、クリムは大きな精神的打撃を受ける。そして、母親と妻を失ったクリムは、視力がやや回復したあと、最終的にエグドンやその他の町や村を回り、野外で説教を行う巡回説教師(おそらくメソジスト派と思われる)となる決心を固める。

巡回説教師となったクリムは、どのような生き方をするのだろうか。ある日、エグドンでは「5月祭」が催され、住民たちは「メイポール」を囲んでダンスに興じ、祭りを楽しんでいるが、クリムはひとりの傍観者として彼らの様子を自宅の窓から眺めるだけで、その祭りに参加することはない。さらにまた、巡回説教師になってはみたものの、エグドンの人々はクリムが説教をしている間中、シダを抜いたり小石を転がしたりしており、彼の言葉にほとんど耳を傾けることはない。次の引用は、彼と住民たちの間の心理的距離を明らかにするものである。

Some believed him, and some believed not, some said that his words were commonplace, others complained of his want of spiritual doctrine; while others again remarked that it was well enough for a man to take to preaching who could not see to do anything else. But everywhere he was kindly received, for the story of his life had become generally known.(396)

彼の言うことを信じる人々もいれば、信じない人々もいた。彼の言葉はありふれていると言う人々もいれば、彼には霊的教えが欠けていると不平を言う人々もいた。他方では、目が見えずほかのことができない人が伝道を始めるのは結構なことだ言う人々もいた。しかし、彼はどこでも親切に迎え入れられた。というのも、彼の半生についての話が、広く知れわたっていたからである。

住民たちは、クリムを全面的に無視しているわけではない。しかし、藤井繁が指摘しているように、彼の説教が村人たちの魂を打つことはない(242)。エグドンの地で、巡回説教師として新たな道を歩み始めたクリムではあるが、故郷エグドンの人々に完全に受け入れられているわけではないのである。しかしながら、村人たちは、故郷のエグドンを去ってパリの宝石店で働いたあと故郷に戻って来たクリムが学校を建設するという野心を捨て、目を病むことでエグドンの農作業に打ち込み、さらには、母と妻の死に対する贖罪の意味を込めて巡回説教師になり、改心したことを知っている。そして彼らが、家族の死に打ちのめされ、自責の念にかられるクリムを憐れみ、同情していることを考えると、彼と住民たちの間にあった精神的隔たりは、以前に比べて縮まっていると言えるだろう。

ジリアン・ビア(Gillian Beer)は、故郷と折り合いが付かないクリムは、エグドンを説教師としてさすらう「放浪者」(“the wanderer”)(523)となったと述べている。さらにまた、ジョナサン・ベイツ(Jonathan Bates)は、クリムがエグドン対して「帰属意識」(“sense of belonging”)(554)を持つことはできないだろうし、そのような彼は、故郷において「アウトサイダー」(“an outsider”)(554)であり続けるであろうと指摘している。しかし、クリムが選んだ巡回説教師という職業が、彼の精神的な支えとなっている点を見逃がすことはできない。そこで次に、巡回説教師になったクリムの精神的変化に注目し、その責務が彼にとってどのような意味を持っているかについて考えていく。

テキストでは、クリムが、エグドンやその周辺の村の人々に対して、「簡単な言葉」(“simple language”)(396)を遣って説教するのに対して、それ以外の場所では「もっと洗練された言い回しで」(“in a more cultivated strain”)(396)行っていると記されている。つまり彼は、聞き手に合わせて説教に使う言葉を選んでいるというわけである。ここで、クリムがエグドンに住むような人々にはわかりやすい言葉を使っている点や、「彼は所定の信条や哲学体系に触れないでいた」(“He left alone set creeds and systems of philosophy”)(396)と記されている点に着目すれば、クリムはエグドンの村人たちの現実を直視できるようになったと理解できる。住民たちに「簡単な言葉」を使えるようになってくるクリムには、彼らを無理やり教化しようという気負いはもはや感じられず、むしろ、エグドンの人々の目線に自分を合わせるように思考回路を修正したと言えるだろう。

さらに、クリムが巡回説教師を「天職」(“vocation”)(396)と呼んでいることを考えれば、ローズマリー・サムナー(Rosemary Sumner)が指摘するように、彼が住民たちに向けて行う説教は、母親と妻に対する良心の呵責に苛まれる彼の心を癒すセラピー的役割を果たしていると考えられる(114)。つまり、巡回説教師の職責を全うすることで、クリムは、母親と妻の死によって失ってしまった心の平安を取り戻していくことができると思われるのである。したがって彼は、故郷エグドンで、彼なりに自分の生きるべき新たな道を見出したと言えよう。

エグドンを去ったあと、再び故郷に戻って来たクリムは、エグドンの住民たちとの間に新しい関係性を完全に築き上げるということはできなかった。彼は、村の人々を高圧的に教育してやるという思いが傲慢な独りよがりであることに気付き、結婚に失敗し、巡回説教師という天職を見出す経緯を通じて、エグドンという生地に真の自分を見出し、その過程で、人間的に再生することができた。彼は故郷に戻り、その地においてフランスと「メトニミー的關係」にある存在であることを越えて、彼独自の人生を掴むことができた人物として造型されていたと言えるだろう。ここからは、「グレート・ブリテン島」の世界に通底するエグドンには、人間本来の精神性と生命力を回復させる治癒力があつたとする作者のメッセージを読み取ることができるのである。

第3節 エグドン・ヒースとユーステイシア

この節では、ユーステイシアがエグドンという土地において、どのような人生を辿るこ

とになるかについて論じていく。

ユーステイシアはエグドンに伝わる風習に従い、その土地で催されるさまざまな行事に参加するなど、エグドンの伝統文化を村人たちと共有している。一方で、彼女には、港町バドマスで生まれ、両親の死後、祖父のドルー大佐に引き取られ、エグドンに移住してきた過去がある。そのような中で、ユーステイシアが抱いている願望はエグドンでの刺激のない生活から離れ、憧れのフランスで暮らすことにある。さらにまた、華やかで人目を引きつける美しい彼女の容姿は、貧しく寂れたエグドンとは不釣り合いであり、住民たちの中には、そのような彼女に警戒心を持つ者もいる。ノーマン・ページ(Norman Page)が、ユーステイシアを「分裂した人物」(“a divided figure”)(*Oxford Reader's Companion to Hardy* 378)であると評するように、彼女の言動と本音は分裂し、自己矛盾に陥っている。

まずはじめに、ユーステイシアがエグドンの風習を享受していることを示すために、彼女が村の「ジプシング」に参加するシーンに着目したい。憧れのクリムと結婚したものの、ふたりで都会暮らしをするという願いがかなわず、憂鬱な気分を陥っていた彼女は、気分転換をはかるために、荒野で開催される「ジプシング」に出かけることにする。そこでかつて交際していたワイルディーヴと再会したユーステイシアは、彼と共に住民たちに混じって踊りの輪に加わる。この時、ダンスをしている「彼女の顔はうっとりとして、彫刻のようだった」(“her face rapt and statuesque”)(256)と描出されている。そしてまた、祭りに参加するふたりの心には「異教信仰が蘇った」(“Paganism was revived”)(256)。第1節で述べたように、「ジプシング」は、「フローラ祭」と「ベルテーン祭」がひとつになった「5月祭」の流れを汲んでいる。したがって、そのような祭事に夢中になるユーステイシアは、エグドンの村人たちと同じく、異教の神々や自然を崇める風習に従い、それを受け入れることに抵抗のない人物であることがわかる。

その一方で、ユーステイシアがエグドンという土地柄に対して拒否反応をみせる場面もある。彼女は、「熱愛されること—それが大いなる彼女の願望であった」(“To be loved to madness—such was her great desire.”)(71)とあるように、愛に生きることに強く憧れる情熱的な女性である。ヨーブライト夫人が彼女とクリムとの結婚に反対していることを知っても、彼女はクリムに対して、「今しているように続けていきましょう—またの日に心を煩わすことなく、逢瀬を重ねて暮らしましょう」(“Still go on as we do now—just live on from meeting to meeting, never minding about another day”)(203)と言って、恋を恋として今を楽しもうと「カルペディエム」(Carpe diem)を実践する。ユーステイシアは自分

の感情や本能を抑えることはせず、それらに従って忠実に生きていこうとするため、エグドンの住民たちの貧しい暮らしとエグドンに漂う沈んだ雰囲気は、彼女を「憂鬱」(“depression”)(144)な気分陥れ、「体験したことのない孤立状態」(“a strange state of isolation”)(73)に置くことになる。そして彼女は、「ヒースの荒野は私の十字架なの、私の苦しみの」(“‘Tis [Heath is] my cross, my misery”)(86)と言って、「どんなことがあっても、ここから逃げだしたいの」(“I want to get away from here at almost any cost”)(102)と、エグドンには馴染めない本心を吐露するのである。

このような心理状態にあるユーステイシアは、エグドンとは何もかも対照的であると夢想する都会や外国に強い憧れを感じている。例えば彼女は、ウィリアム征服王やナポレオンといった人物に魅了されている。ユーステイシアは「都会好み」(“town tastes”)(117)でもあり、軍楽隊、将校達、伊達男連中などで活況を呈する港町バドマスにも憧れを抱いている。そしてこの町は、「カルタゴの喧騒」(“a Carthaginian bustle”)(95)に例えられているように、異国の雰囲気が漂う港町である。ユーステイシアの異国に対する好奇心は、彼女の愛情の対象が、ワイルディーヴからパリ帰りのクリムに移っていくところにも読み取ることができる。ユーステイシアはクリムと出会う前、トマシンと婚約中であったワイルディーヴと密会を重ねていた。ところが、第2部「到着」(The Arrival)第1章「来訪者の知らせ」(Tiding of the Comer)において、クリムがクリスマスあたりにパリから戻ってくるといふ噂は、「彼女にとって大きな関心事となっていた」(“had been keenly interesting to her”)(110)のである。さらに、ユーステイシアの心の中では、パリからやってくるクリムは、「天国からやって来る男のように」(“like a man coming from heaven”)(110)神々しい存在となり、彼女は彼の帰郷のニュースに密かに心を躍らせる。しかし、次の引用にあるように、彼女が惹かれているのはクリムという人物そのものではなく、パリの雰囲気を漂わせて帰国してきた者であれば、誰でもよかったのである。

During the greater part of the afternoon she had been entrancing herself by imagining the fascination which must attend a man come direct from beautiful Paris—laden with its atmosphere, familiar with its charms. (117)

その日の午後のほとんどの間、美しいパリから直行して来る—それ故、パリの雰囲気を漂わせて、その魅力をよく知っている—男に伴っているに相違ない魅力を心に思い

描いて、彼女は陶然としていた。

以上のことから、ユーステイシアは貧しく寂れた土地であるエグドンで暮らしながら、胸の内には、華やかで洗練された外国文化に強い憧れを抱いている。この意味において、彼女は既述したように、「分裂した人物」であると言うことができる。

次に、ユーステイシアの容姿と出自に注目し、彼女がどのように人物造型されているかを明らかにしていく。先述のように、ユーステイシアは時代から取り残されたエグドンの地であって、異国情緒あふれる外国人を思わせるような容姿をした女性である。そのような彼女の目についての記述に注目すると、彼女の「下まぶたのほうは、並のイングランド女性のそれより、ずっとふっくらとしていた」(“under lid was much fuller than it usually is with English women”)(68)と記されている。また、ユーステイシアの唇に関しては、以下のように描出されている。

It was felt at once that that mouth did not come over from Sleswig with a band of Saxon pirates whose lips met like the two halves of a muffin. One had fancied that such lip-curves were mostly lurking underground in the South as fragments of forgotten marbles. (69)

その口は、マフィンをつたつに割って重ねたような唇を持つサクソン族の海賊の一行と共に、シュレスウィヒ地方から来たものではないことがすぐに感じられた。こういう唇の曲線は、忘れられた大理石彫刻物の破片として、そのほとんどが南部地方の土中に埋もれていると思われていた。

さらにまた、ユーステイシアの肌の色について、ヨーブライト夫人は姪であるトマシンとユーステイシアを比較して、ユーステイシアは「トマシンより色が黒い」(“Darker than Thomasin”)(177)と語っている。そのような彼女の風貌は、ギリシア神話に登場する女神たちのようだとされている。これらユーステイシアの外見に関する情報から、彼女の中に外国人の血、それも南欧の人種と思われる血が流れていると考えることができる。この点からも、彼女はエグドンにあって、当地の人々と異なり、エキゾチックな雰囲気漂わせている人物として造型されていることがわかる。

次に、ユーステイシアの祖父であるドルー大佐が、実在したイングランドの貴族の名家フィッツアラン(Fitzalan)や、ドゥ・ヴィア(De Vere)と血縁関係にあるとされていることに着目したい。それらの中のひとつであるドゥ・ヴィア家の祖先は、「ノルマン征服」を成し遂げたウィリアム1世の時代の貴族オーブリー・ドゥ・ヴィア(Aubrey de Vere)である。つまり、ドゥ・ヴィアは、「ノルマン征服」の際にイングランドに渡って来た実在の名家である。このドゥ・ヴィア家のヴィアという名前は、ノルマンディー地方にある地名に由来していることから、ユーステイシアにはフランスのノルマン人の血が流れていると解釈できる(*Dictionary of National Biography*)。また、もうひとつの名門貴族であるフィッツアランは、フランスのブルターニュ地方に住むケルト系ブルトン人を祖先に持つ家系である。このようなところから、ノルマンディーとブルターニュ地方からやって来たと思われるふたつの名家の血を受け継いでいると思われるユーステイシアは、フランス人の血が流れている人物とみることができる。

ユーステイシアはイングランド南部のバドマスで生まれ、母親はイギリス人という設定になっており、彼女の父親については、ドルー大佐が彼の娘と旅行に行ったバドマスで出会った軍楽隊長とされている。その父親の出身地に関して、作者ハーディは何回かの変更を行っている。順を追ってみていくと、『ベルグレイヴィア』誌における連載では、ユーステイシアの父親はベルギー人となっている。そして、本論文が使用している1878年にスミス、エルダー社から出版された初版本では、父親の出身地は明記されておらず、バドマスに駐屯していた軍楽隊長とのみ記されている。しかし、1895年のユニフォーム版と1912年に出版されたウェセックス版では、父親は現ギリシアのコルフ島出身と改められ、さらに、ユーステイシアの祖父であるドルー大佐の名前がヴァイ(Vye)大佐に変更され、妻の苗字をユーステイシアの父親が継いだということになっている(Slade 401-02)。このような何回かに及ぶユーステイシアの父親の国籍変更は、ユーステイシアのルーツを国際的にどこに位置づけるかに、作者ハーディが腐心していたことを明らかにするものである。

それでは、これらの改訂を通して、作者はどのようなユーステイシア像を描き出そうとしているのであろうか。1878年の連載版の場合、ベルギー国籍の父親を持つユーステイシアは当然、ベルギーの文化と歴史に取り込まれている人物とすることができるであろう。ベルギーの歴史を辿ると、ベルギーは常にオランダ、フランス、プロイセン、オーストリアなどの侵略を受け、併合されながら、1830年に永世中立国となり、19世紀末にはイギリスに次ぐ工業国家へと成長していった。つまり、ユーステイシアの父親が人種や文化が

複雑に混合するベルギーの出身者であることにより、その娘ユーステイシアもまた、ヨーロッパ大陸を形成する多民族・多文化につながる人物としてみる事ができる。

1878年の初版では、父親の出身地は明示されていないが、1895年のユニフォーム版以降の版になると、ユーステイシアの父親はイオニア諸島のコルフ島出身と明記される。コルフ島は19世紀初頭まで、フランスやオスマン・トルコの管理下におかれていたが、1815年にイギリスの保護領となり、1864年にギリシア領となった。このようなこの島の歴史から、ブルース・ジョンソン(Bruce Johnson)の指摘にあるように、ユーステイシアはヘレニズム文化圏の人物として描出されていると言える(115)。このことは、彼女の名前から首肯できる。「ユーステイシア」(Eustacia)という人名から連想される意味内容についてみると、“eu-”という接頭辞はギリシア語に起源を持ち、「良い」(“good”)、「うまく」(“well”)を意味する。さらにこの語は、「アナスタシア」(Anastasia)を思い起こさせる。これは、ギリシア語で「復活」を意味する“anástasis”を語源としている(『ヨーロッパ人名語源事典』142)。このように、「ユーステイシア」の名の由来に目を向ければ、ハーディはヨーロッパ文化の発祥の地であるギリシアを想起させるように、この登場人物を造型しているということもできるだろう。

既述したように、ユーステイシアはエグドンに古くから伝わる行事に自ら参加し、その土地の風習を遵守している人物である。彼女が享受しているこれらの伝統文化は、元来「グレート・ブリテン島」の時代まで遡る類のものであり、ケルト人やローマ人やアングロ・サクソン人らの間で、キリスト教の伝播以前に広まっていた文化である。この点に注目するならば、ユーステイシアはその「グレート・ブリテン島」と「メトニミー的關係」にあると言える。しかし、前述したように、ユーステイシアの身体的特徴と出自から、彼女がヨーロッパ大陸からやって来た祖先の血を引いていると判断することもできた。そのような理由から、ユーステイシアは他の登場人物とは異なり、いくつかの民族の血と文化の混合の上に成立したヨーロッパの歴史と血統を想起させる汎ヨーロッパ的人物であると言える。したがって、彼女は「グレート・ブリテン島」を想起させる人物である以上に、人種的、文化的に、さらにDNA的にみると、ヨーロッパ大陸と「メトニミー的關係」にある人物としても捉えることができる。

ここで、グレート・ブリテン島の地史について概観しておきたい。約1万年以上も前、グレート・ブリテン島と大陸は陸続きであったが、この大陸は紀元前6000年頃に地殻変動を起こし、イギリス海峡を挟んで今日のイギリスという島国と現在のヨーロッパ大陸に

分かれた(André Maurois¹⁴)。かつて、ひとつかふたつであった地球上の大陸が分裂、移動し、現在の状態になったという大陸移動説は、1912年にドイツ人の気象学者アルフレッド・ロータル・ヴェゲナー(Alfred Lothar Wegener)が提唱したものである。しかし、大陸移動説は大陸を動かす原動力が何であるか説明ができなかったため、それについての当時の評価は様々であった。ウェゲナーが唱えた大陸移動説より前に、この小説を執筆していたハーディが、このような地理学的知識に精通していたかどうかは定かではない。しかし、今日の地史的な視点を交えてユーステイシアという人物をみていくと、彼女は、「グレート・ブリテン島」とヨーロッパ大陸を地理的に陸続きであった頃のように、精神的・人種的にひとつに結び合わせる役割を果たしている人物として読むことができるだろう。

第4節 エグドン・ヒースにおけるユーステイシアの死と再生

パリに憧れ、そこで暮らすことを夢想するユーステイシアは、パリからエグドンに戻って来たクリムと恋に落ち結婚するが、彼との結婚生活はすぐに破綻する。それは、彼女の期待に反してクリムが、ハリエニシダ刈りという肉体労働に従事することだけで満足するようになっていく上に、彼から義母であるヨーブライト夫人が亡くなったのは彼女に原因があると、一方的に決めつけられたからである。夫と別れ、ドルー大佐の住むミストーバーの屋敷に戻った彼女は、トマシンと結婚したあと、カナダで亡くなった叔父の遺産を相続して大金持ちになったワイルディーヴから、彼女をエグドンから外の世界に解放し、パリでの生活を実現させることができると告げられる。そして、このワイルディーヴの申し出を受け入れ、彼にバドマスまで送ってくれるよう頼み、そこからは自力でパリに行くことにする。

パリに出発する夜、ワイルディーヴと約束した場所に向かうため夜中にこっそりと屋敷を抜け、エグドンの荒野を歩いていると、ユーステイシアに心境の変化が起こる。激しく雨が降りしきる暗闇の荒野で、ユーステイシアは、ワイルディーヴから経済的な援助を受けなければ、バドマスにも、あるいはパリにも行くことができないことに「不快な」(“distasteful”)(346)感情を抱き、それを「屈辱」(“humiliation”)(346)と感じる。そして、たとえパリに行くことができたとしても、そのことが「私にとってどんな慰めになるのだろうか？」(“what comfort to me?”)(346)と、パリ行きを疑問視するようになっていく。こうしてユーステイシアは、金銭の力の裏に隠されたワイルディーヴの思惑に対して嫌悪感を

抱き、パリ行きへの強いこだわりから抜け出すことになるのである。

このあと、ユーステイシアはエグドンを流れる川で溺死体となって発見される。彼女が遺体となって見付かるまでの経緯を辿ると、ヨーブライト夫人の死の一件で喧嘩別れしてしまったユーステイシアに謝罪し、彼女との関係を修復しようとミストバーの屋敷に向かったクリムは、ドルー大佐からユーステイシアが屋敷から姿を消してしまったと聞かされる。妻を探すため、嵐の中、荒野を歩くクリムは、待ち合わせをしていた場所に姿を現さないユーステイシアを心配するワイルディーヴと偶然出くわす。間もなくしてふたりは、近くを流れる川に何かが落ちる水音を耳にする。そして、シャドウォーター(Shadwater)と呼ばれる、雨で増水した川の堰へと流されていくユーステイシアの姿を目にする。彼女を救助するため、クリムとワイルディーヴは川に飛び込むが、結局、クリム以外、ユーステイシアとワイルディーヴのふたりは激流に飲まれてしまう。そして、しばらく経ってから、トマシンと共に救助にやって来たヴェンにより、ユーステイシアとワイルディーヴの水死体が川から引き上げられる。

ここで、ユーステイシアが亡くなる前に、スーザン・ナンサッチ(Susan Nunsuch)が蠟人形を火の中に投げ入れる行為と、ユーステイシアが亡くなった時の堰の様子に着目し、彼女の死との関連を検討していくことにしたい。スーザンは、寂れたエグトンとは対照的に、華やかな雰囲気と美しい容姿を持ったユーステイシアに反感を抱く村人のひとりである。ユーステイシアが川に落ちる少し前のスーザンと彼女の息子ジョニー(Johnny)の言動を描いた場面では、スーザンは自分の家の近くを歩くユーステイシアを目撃する。この時、ジョニーが体調を崩したことから、彼女は息子の病気をユーステイシアの仕業だと思い込む。そこで彼女は、ユーステイシアそっくりの蠟人形を作ってそれに針を約 50 本突き刺し、火の中に投げ込む。燃える人形を見つめる彼女の口からは、「ぶつぶつという呟き」(“a mummer of words”)(323)がもれる。小説の展開からみて、このスーザンの行動のあとに、実際にユーステイシアは溺死体となって発見されている。ここで、蠟人形を燃やすスーザンの行為は、「ウィッチクラフト」(witchcraft)にあたるものと思われる⁷。ローズマリ・エレン・グイリー(Rosemary Ellen Guiley)によると、「ウィッチクラフト」についての普遍的定義はなく、それは時代や文化によって異なる意味を持ってきた(378)。さらにまた、「ウィッチクラフト」は「ソーサリー」と等しいものであり、「呪縛」(spells)をかけるなどして人知では測りがたい力を魔術的に操ることであることから、スーザンの呟きは「呪縛」に相当するものと考えられる⁸。「呪縛」の目的は、成功や愛情を獲得すること、不運や凶

事を避けること、戦いで勝利することなど多岐にわたるが、スーザンが行った「呪縛」は、敵に死をもたらすものである。さらにまた、「ウィッチクラフト」の起源は、キリスト教以前の異教信仰などにあった(Mircea Eliade 79; Pennethorn Hughes 44-45)。ここで、スーザンがドルイドの儀式であった火祭りに興じる住民のひとりであった点に注目すると、彼女が行ったことは船水直子の指摘にあるように、ドルイド教における生贄の儀式に相当すると思われる(17)。ドルイド教では、「コロソソ」と呼ばれる小枝で編んで人間に見立てた巨像に、人間や動物を生贄として押し込んで火を放つ人身供犠があった(Stuart Piggott 199)。この宗教儀礼が行われていた理由は現在も謎に包まれたままであるのだが、生贄に火をつけるドルイド教の儀式は、スーザンがユーステイシアの蠟人形を投げ入れる炉の火を連想させる。したがって、ユーステイシアの体を飲みこんだ堰の「沸きあがる渦巻」(“boiling hole”)(361)は、スーザンが蠟人形を溶かすのに使用した炉の火に置き替えることができ、そうすると、ユーステイシアは人身御供となったと考えられる。このことに加えて、ユーステイシアが水死した川の水が持つ働きについて着目するならば、ドルイド教では、豊穡と再生を願って、水をはった大釜に生贄として人間を逆さまにして溺死させることがあった(Piggott 140)⁹。したがって、ドルイド教の大釜の祭儀にあたるユーステイシアの溺死には、彼女の再生が暗示されていると読むことができる¹⁰。また、ドルイド教には、死んだものと一緒に、家族や奴隷などが共に埋葬や火葬される「殉死」(sati)と呼ばれる儀式があった(Miranda Jane Green 126)。ユーステイシアを助けようとして川に飛び込み、彼女と共に溺死した元恋人ワイルディーヴの死は、この「殉死」にあたりと解釈することができる。このようなところから、ユーステイシアの死には「ウィッチクラフト」とドルイドの儀式が関わっており、そして、後者は彼女を再生させる役割を担っていると考えられる。

では、ユーステイシアの死が、どのようなかたちで具体的な再生に繋がっていたのだろうか。トマシンは、自分と婚約しているにもかかわらず、ユーステイシアと密会を繰り返すワイルディーヴの不誠実な行動にも目をつぶり、彼と結婚する。間もなくして、ワイルディーヴとの間に女の赤ん坊を生んだ彼女は、小説の中では理由は述べられていないが、その子にユーステイシアという名前を付ける。そしてトマシンは、ワイルディーヴがシャドウォーターの堰でユーステイシアと共に水死したあと、トマシンのことを以前から思い続けていたヴェンと結婚し、ふたりでその赤ん坊を育てていくことになる。つまり、亡くなったユーステイシアと同じ名前がつけられた赤ん坊は、ユーステイシアの生まれ代わり

と受け取ることができるのである。ここに、2代目ユーステイシアの誕生という形で、彼女の再生が果たされたとみることができる。

2代目ユーステイシアの誕生と、彼女を引き取り、育てる決心をした若いカップルを歓迎するのがエグドンの人々である。彼らは、ふたりのために手作りの羽毛布団を作って贈るのだが、この布団は子宝と豊穡を暗示させるものである(船水 20)。そして、トマシンとヴェンの結婚の祝宴の際には、村人たちは大いに飲んで陽気にダンスを踊り、ふたりの結婚を祝福する。エグドンの住民たちに温かく見守られるトマシンとヴェンの新生活は、エグドンに残る異教的な伝統と風習が、次世代に引き継がれていくことを暗示するものだろう。そして、若いふたりのもとの娘として育てられる2代目ユーステイシアもまた、そのようなエグドンの世界を継承する人物として成長していくと思われる。文明の進歩と繁栄を謳歌する時代に執筆されたこの小説が、新しい家族によって古いエグドン文化が伝承されるように閉じられる意図には、かつての「グレート・ブリテン島」を彷彿とさせる生命力がみなぎる世界が、文明による侵食のはなはだしい時代にあっても存続し続けてほしいとするハーディの世界観が反映されているとみることができる。

おわりに

以上の分析から、作者ハーディがエグドンを、「火祭り」や「5月祭」、そして「ジプシング」といった古くから受け継がれてきた異教的な風習を忠実に遵守する「グレート・ブリテン島」的世界が広がる土地として描いていることが、明らかとなった。そして、そのような時代の変遷と無縁のエグドンにパリから帰郷してきたクリムは、当初、フランス滞在から得た時代をリードする思想の影響を受け、住民たちに教育することで、自分と、自分が馴染めなかったエグドンとの間にあった精神的乖離を埋めようとした。しかし、眼病を患ったことをきっかけに始めた肉体を酷使する農作業を通じて、彼は村人たちを教化しようとする考えの愚かさを悟ることができた。さらにまた、そのようなクリムは、母親と妻ユーステイシアというふたりの死に対する自責の念に駆られ、キリスト教の巡回説教師になった。そして、その「天職」を通じて、彼は母と妻を亡くした心の傷を癒すだけでなく、エグドンで生きる意味を見出すことができるようになったのである。最終的にエグドンに戻って来たクリムは、住民たちとの距離を完全には埋めることはできなかったものの、彼は生地への帰郷を通じて、真の意味において自己と出会い、人生を立て直すことができ

た。ここに、人生のある時期において、フランスと「メトニミー的關係」にある人物とみることのできたクリムは、その殻を脱ぎ捨てて、エグドンに回帰していったというわけである。

これに対してユーステイシアは、「グレート・ブリテン島」的風習を受け継いでいる反面、ヨーロッパ大陸から移住して来たと思われる祖先の血を引いていたことから、彼女は文化的だけでなく血統的にも、「グレート・ブリテン島」とヨーロッパ大陸の属性を併せ持った人物として造型されていることが明らかになった。さらにまた、ドルイド教徒が生贄を水死させた祭儀に相当するユーステイシアの溺死は、トマシンとワイルディーヴの娘である2代目ユーステイシアの誕生へと結び付いていった。つまり、「グレート・ブリテン島」でみられていた異教的な風習を保持し続けているエグドンの地は、クリムの人間性を回復させただけでなく、死というひとつの生命現象を介して、再び新たな命を生み出す活力が内在する野性的な生命力に溢れる土地として読むことができた。

以上のことから、作者ハーディはエグドンの地を、瑞々しい生命力が躍動するトポスに仕上げたと考えられる。そして、生来の人間性を回復させる「グレート・ブリテン島」の世界が発散するエネルギーは、ヴェン夫妻と、ふたりによって育てられる2代目ユーステイシア家族により引き継がれていく予感を読者に与える。つまり、『帰郷』という作品では、その結末で、誕生した赤ん坊に初代ユーステイシアと同じ名前を付けることにより、ストーリーの展開は振り出しに戻るのである。この点に着目すれば、紆余曲折を経て、故郷に回帰したクリムと同様に、ユーステイシアはその死を通じてエグドンに回帰していくのであり、この点でこの小説は、ふたつの帰郷を描いた作品として読むことができよう。

注

1 本章における引用は、Thomas Hardy, *The Return of the Native* (London: Penguin, 1999) によるものである。

2 ノーマン・ページ(Norman Page)によると、エグドンのモデルとなった荒野は、ドチェスターの東部からエイヴォン・ヴァリー(Avon Valley)に広がる地域にあったものとされている(*Oxford Reader's Companion to Hardy* 123)。エグドンは、『カスターブリッジの町長』や短編小説「萎えた腕」(“The Withered Arm”, 1888)などにも言及されている地名である。

3 「ヴィア・イケニアーナ」は、イースト・アングリアからドーセットを結ぶ街道のこと

である(Tony Slade 398)。

⁴ “May Day 2015: History and Traditions of the Ancient Spring Festival.”
International Business Times, 30 April, 2015
(<http://www.ibtimes.co.uk/may-day-2015-history-traditions-ancient-spring-festival-1499123>)

⁵ 第2章『ラッパ隊長』と「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」の注2で説明したとおり、ハーディは1895年のウェセックス小説版で、小説の中でウェイマスとされていた町の名前をバドマスに変更した。『帰郷』の場合、雑誌に連載されていた頃から、既に町の名前はバドマスとされていた。

⁶ クリムの職業については何回かの変更が加えられており、原稿の段階と雑誌に連載されたものでは、クリムは宝石店の「支配人のアシスタント」(“a manager’s assistant”)となっている。そして1895年の版では、「ダイヤモンド貿易商の支配人」(“Manager of a Diamond Merchant”)とされている(Slade 412)。

⁷ ハーディの作品には、しばしば「魔女」(witch)や「コンジュラー」(conjuror)が登場する。『緑樹の陰』(*Under the Greenwood Tree*, 1872)のファンシー・デイ(Fancy Day)は、恋人ディック・デューイ(Dick Dewy)との交際を父親に反対され、魔女だと噂されるエリザベス・エンドアフィールド(Elizabeth Endorfield)の元をこの件で訪れる。テキストでは、エリザベスは「魔術」を使わないが、ファンシーにディックとの交際を父親に認めてもらう方法を教えている。本論文第5章で扱った小説『カスターブリッジの町長』のヘンチャードが、農作物の収穫時期を知るために訪れた相手は、「天気予報士、つまり、天気占い師」のフォール氏である。フォール氏は第7章で取り上げる作品『ダーバヴィル家のテス』の中で、酪農場の従業員たちが、搾乳機が動かなくなった原因を知るために訪れたことのある「コンジュラー・フォール」(Conjuror Fall)としても登場している。「しなびた腕」の場合、農場主ロッジ(Lodge)のもとに嫁いだガートルード(Gertrude)は、結婚直後から、自分の左腕がやせ細っていくことに悩まされる。その原因がわからない彼女は、エグドンにいるコンジュラー・トレンドル(Conjuror Trendle)の元を訪問する。そしてトレンドルは、腕に現れた異常はガートルードを恨んでいる人物によって引き起こされていると指摘する。さらにまたトレンドルは、その人物の顔を卵が入った水に映し出すことに成功し、ガートルードに腕を元に戻す方法を教えている。このような例にみるように、ハーディの小説世

界は、「魔女」や「コンジュラー」の出没を可能にする側面も持っているということである。

⁸ “witchcraft”と“sorcery”には「妖術」、「呪術」、「魔術」など様々な訳があるため、本論文では前者を「ウィッチクラフト」、後者を「ソーサリー」と表記することにする。「ウィッチクラフト」と「ソーサリー」の違いは曖昧で、両者とも歴史上、様々な意味を持たされ、定義を受けてきた。ヨーロッパのルネサンス期に起きた魔女ヒステリー期では、両者は異なるものとみなされたが、多くの場合、「ウィッチクラフト」と「ソーサリー」は交換可能な用語として使用されてきた(R.E.Guiley 325)。

⁹ キリスト教のバプテスト教会で行われる洗礼のひとつの形式である、全身を水に浸す浸礼もまた、水によって死んで、新たな命に生まれ変わるための儀式である。

¹⁰ 船水も、ユーステイシアの溺死を、ドルイド教の大釜の祭儀と結びつけて解釈している(16-17)。

第7章 『ダーバヴィル家のテス』

ーテスとエンジェルの和解

はじめに

『ダーバヴィル家のテス』(*Tess of the D'Urbervilles*)は1891年に『グラフィック』誌に連載され、その後、いくつかの場面や表現に修正が施されたあと、同年12月にオズグッド、マキルヴェイン社から3巻本として出版された。この作品には、行商と運送業を営む貧しい両親の元に生まれたテス・ダーベイフィールド(Tess Durbeyfield)が、家族を支えるために働きに出た裕福なダーバヴィル家(the D'Urbervilles)の息子アレック・ダーバヴィル(Alec D'Urberville)によって凌辱され、その結果、未婚の母になってしまうという内容が作品の前半に盛り込まれている。さらにまた、テスは洗礼を受けることができないでいる我が子に自らの手で洗礼を施したり、子供の父親であるアレックを最終的には殺害してしまうのである。これらのエピソードは、特にヴィクトリア朝時代の道徳的見地からは決して許されないものであったため、出版の際、幾度となく書き換えが求められた。しかし、この作品は各国で翻訳され、おおむね好評を得ることになった。

テスがアレックの情欲の犠牲者となり、そのアレックをテスが殺害するという悲劇の原因については、様々な解釈や論評がなされてきた。その1例をあげるならば、アレックのテスに対する強姦とテスによるアレック殺害という暴挙を、テスの祖先であるダーバヴィル家の末裔のひとりが、かつて少女に行った強姦と殺人に関連付けてなされる解釈がある。つまり、テスは祖先たちが犯した罪の償いを、同じ痛みを受けることにより身をもって行っているのであり、さらにまた、アレックを殺害してしまう加害者として一族の罪を継承している人物であるとする見方である。例えばリンダ・M.シャイアーズ(Linda M. Sires)は、“The Radical Aesthetic of *Tess of D'Urbervilles*”の中で、ダーバヴィル家の血を引くテスが、彼女の家系に引き継がれてきた罪と報復という一族の歴史的サイクルに組み込まれていると分析している(150)。

この論考が代表するように、テスは一般的に、ダーバヴィル家の罪と報復の歴史を背負った人物であると解釈されている。しかし、マーロット(Marlott)村で生まれ、アレックを殺害した廉で処刑される彼女の生涯に着目すると、テスというヒロインに対する新たな解釈がうまれてくると思われる。本章ではまず、テスに性的暴力を加えたアレックの人物像

について検討していく。そのあとで、マーロット出身の彼女がどのような女性に成長し、そして、どのような最後を迎えるかを考察し、従来のテス解釈とは異なる新たなテス像を提示していく。そして次に、テスが恋に落ちて結婚することになるエンジェル・クレア (Angel Clare) という人物に焦点を移し、論を展開していく。女性の貞節を重要視する道徳観に固執する中流階級の出であるエンジェルが、テスとアレックとの結婚前の事情を知り、彼女を見捨てて単身ブラジルに移住していったあと、当地での生活体験を積むことによってテスという女性の真価に気付き、帰国して彼女と和解していくまでの経緯を明らかにしていく。そして最後に、彼の精神的成長にブラジルという外国の地がどのような役割を果たしたかについて考察する。

第1節 アレックの家系とテスの子ソロー：ユダヤ人の血

アレックは、彼の屋敷であるスロープ(the Slope)邸近くのトラントリッジ(Trantridge)に住む女たちに見境なく誘惑の手を伸ばす、性的に放埒な男である。そして、このアレックの性的被害者のひとりとなるのがテスである。彼女は、マーロット村に住む父ジャック(Jack)と母ジョウン(Joan)との間に生まれたダーベイフィールド家(the Durbeyfields)の長女であり、生活力のない両親と幼い弟や妹たちの暮らしを支えるために、スロープ邸に労働者として雇われてやって来た。ある日、アレックはトラントリッジの近くにあるチェイスバラ(Chaseborough)村で、仕事仲間とともに休日を過ごしているテスを見かける。以前から、美しい容姿のテスに目を付けていたアレックは、夜になって、酒に酔った仲間に絡まれて困っている彼女に声をかけ、彼女をスロープ邸に送り届けることを申し出る。そして、村から屋敷に戻る途中、彼は「チェイス」(the Chase)と呼ばれる森で当時まだ16歳であったテスの体を奪う。“chase”という語が人や物を「追跡する」、しつこく「つきまとう」という意味を持つように、森での出来事のあと、アレックは彼を嫌悪するテスに付きまとい、ついに自分の情婦にしてしまう。1891年12月31日付の『ポール・モール・ガゼット』(Pall Mall Gazette)紙のレビュー欄で、アレックが「テスの悲劇のきっかけとなる主な者」(“a prime instrument of Tess’s tragedy”)(Cox 182)であると評されているように、アレックには「悪魔と化した」(“demonised”)(Harvey 86)人物のイメージが付与されている。実際、アレックも彼自身、森で起きたテスへの凌辱事件のあと、故郷のマーロットに帰ることになったテスに向かって、「僕は悪人だと思うよーひどい悪人だとね。僕は

悪人として生まれ、悪人として生きてきたし、多分、悪人として死ぬだろう」(“I suppose I am a bad fellow—a damn bad fellow. I was born bad, and I have lived bad, and I shall die bad in all probability.”)(77)¹と居直り、自分が悪しき人間であることを明言している。このアレック自身の発言から、彼が世間一般の道徳的規範からみて悪者であるということは、この作品を字義通りに読み進めるだけでも容易に納得できる。

しかし、彼が悪者であるとする人物評価の背後には、彼がユダヤ人であるという人種問題が関わっているものと思われる。とはいえ、作者ハーディは、あからさまにアレックがユダヤ人であるとわかるようには書いていない。だが、テキストを注意深く読み込んでいくと、彼がユダヤ人の血を引く人物であることが仄めかされていることに気付く²。もしこの見方が首肯されるならば、アレックという人物に対する読み方は、単なる悪者とするだけでは済まないことになる。したがって以下、テキストから読み取ることのできるアレックの出自などを精査していく。

チェイスの森でアレックに乱暴されたテスは、間もなくスロープ邸を去り、故郷に戻る。そして、未婚のまま子供を産むものの、その赤ん坊は間もなく病気で死んでしまう。これを機に新生活をスタートさせようと決心した彼女は、トールボットヘイズ(Talbothays)の酪農場で仕事をみつける。そして、ここで乳搾の仕事をしている時、青年エンジェルと親しくなり、彼と結婚する。しかし、結婚式を挙げた日の夜に、彼女がエンジェルに対してアレックとの間に起きた出来事や、未婚のままに出産していたことを打ち明けると、エンジェルは一転してテスを妻として受け入れられなくなり、彼女の元を去ってしまう。「転身者」(The Convert)と題された第6部では、エンジェルと別れたあと、ひとりで極貧生活を送るテスが、数年ぶりにエヴァーズヘッド(Evershead)村で、牧師として活動するアレックと再会するシーンが描かれている。本文中には、テスと初めて出会った頃の彼がどのような職業に就き、どんな信仰を持っていたかは記述されていない。しかし、テスと久しぶりに村で出会った時のアレックは、エンジェルの父で福音主義者の牧師クレア氏(Mr. Clare)と偶然知り合い、彼の導きにより、放蕩三昧の暮らしに終止符を打つことができていた。そして、改悛の情を深めたアレックは、プロテスタントの「メソジスト派の牧師」(“Methodist Pa’son”)(318)に転身するのである。

ところが、牧師として熱心に説教する彼は、テスの目には聖職者とは言い難い人物として映っている。彼女はアレックの牧師への転身について、「それは改心と言うよりは変貌であった」(“It was less a reform than a transfiguration”)(305)と評している。そして、彼

が口にする聖書の言葉に、「ぞっとするような奇抜さ」(“a ghastly bizarrerie”)(305)と「はなはだしい一貫性の欠如」(“a grim incongruity”)(305)があったことを読み取っている。さらにまた、牧師になったアレックの表情については、「顔だちそのものが不満を表しているようだった」(“The lineaments, as such, seemed to complain.”)(306)とも記されている。アレックについてのこれらの記述は、キリスト教が彼にとって新しいぶどう酒を入れる「新しい革袋」(「マタイによる福音書」9:17)とはならず、不自然で不似合な宗教であることを暴露している。このことは、テスとの再会を契機に、一転して再びテスの魅力の虜になってしまったアレックが、牧師の職を放棄し、貧しい暮らしを送っているテスの家族を経済的に援助するからと言って彼女に同棲を迫り、テスを情婦にする行為に表われている。つまりアレックは、何の精神的葛藤もみせないまま牧師の仕事に見切りをつけてしまうのである。このようにみると、彼の牧師への転身は全くの自己欺瞞であると同時に、一時的でないわば熱病のようなものであったことは明白であり、結局、彼はキリスト教徒、ましてや聖職者として生きるようには人物造型されていないのである。

次に、アレックの母親であるダーバヴィル夫人(Mrs. D'Urberville)に着目する。夫人は、かつて人が住んでいた立派な屋敷を趣味のための養鶏場に造り替え、そこで育てた鶏の卵や鶏肉を収入源にしている。このエピソードからは、「マタイによる福音書」の第26章74節から75節に記されている、イエスに対するペトロの裏切り行為が想起される。これは、ピラトの役人たちがイエスを逮捕した時、イエスに同行していたペトロが、人々からイエスと一緒にいたことを指摘されると、「そんな人は知らない」とイエスとの関わりを否定した時に、鶏の鳴き声が3回聞こえてくるという場面である。「マタイによる福音書」26章34節には、イエスがペトロの裏切りをあらかじめ預言するシーンが記されていることから、ペトロのエピソードは、イエスの預言能力を証明するひとつの出来事として解釈することができる。しかしながら、聖書においては鶏が予言能力を持っていて、神秘的な場面に登場しているにもかかわらず、ダーバヴィル夫人は養鶏に没頭していることから、キリスト教に対して無関心な人物だと言える。そして、こうしたダーバヴィル夫人に関する人物造型は、アレックにユダヤ人の血が流れていることを読み手に読み取らせる工夫のひとつと思われる。

それでは、この時点ですでに亡くなっているアレックの父であるサイモン(Simon)の名の意味と、彼の経歴について検討していく。『ヨーロッパ人名語源事典』によると、「サイモン」という名は、ギリシア語“symeón”が、ギリシア語“sīmós”から派生したあだ名“Sīmōs”

の影響を受けて生まれたものである(72)。そしてまた、ギリシア語“*symeón*”を経て出来上がった名として、「シメオン」(Simeon)をあげることができる。「シメオン」は、ヘブライ語で「彼は聴いた」という意味の“*shāmá*”から生まれた名“*Shim'ón*”を語源とするものであり、“*symeón*”を経て成立した名である(『ヨーロッパ人名語源事典』72)。つまり、ここで明らかなことは、「シメオン」は古代ユダヤに由来した人名だというわけである。そして、「シメオン」と「サイモン」が、本来同じ名であることを考えると、アレックの父はユダヤ人の血を受け継いでいると考えられる。

サイモンの略歴を追うと、彼はかつてイングランド北部の商人であり、その苗字は「ストーク」(Stoke)であった。一財産を築き上げたあと、サイモンはそれまでの商いをやめ、「イングランド南部の名士」(“a county man in the South of England”)(39)になろうと決心し、北部から南部に引っ越し、苗字を「ストーク」から「ダーバヴィル」へと変更した³。新天地にやって来た彼の改名に言及しているくだりは、次の通りである。

Conning for an hour in the British Museum the pages of words devoted to extinct, half-extinct, obscured, and ruined families appertaining to the quarter of England in which he proposed to settle, he considered that D'Urberville looked and sounded as well as any of them: and D'Urberville accordingly was annexed to his own name for himself and his heirs eternally. (39)

彼は大英博物館で1時間、自分がこれから住もうと思っているイングランドの地域に属する、主として、絶えたり、半ば絶えかけたり、曖昧になってしまったり、没落したりした家系について書かれた書物のページを精査した。その結果、ダーバヴィルが他のものに劣らず見かけも響きもいいと思った。というわけで、ダーバヴィルという名が自分自身とその子孫のために永遠に付けられたのだった。

上記の引用から、サイモンが改名するにあたり、イングランドに古くからあった由緒正しい苗字にこだわって「ダーバヴィル」を選んだことがわかる。

ここで、サイモンが行っていた商売と、商人として成功していた彼が、住み慣れた故郷を離れて「南部」に移動して、そこで苗字を変更した理由と、「イングランド南部の名士」になろうとした彼の意図について考えていく。まずひとつ目として、作中にはサイモンの

商いについての説明はない。しかし、野村も指摘しているように、彼の職業についてダブル・クオテーションマーク付きで、「金貸しという人もいた」(“some said money-lender”)(39)と書き入れられている点は見逃せない(『ダーバヴィル家のテス』異者化されたアレック像」274)。レオン・ポリャコフ(Leon Poliakov)は、イギリスにおけるユダヤ人に対するイメージは、シェイクスピアの『ヴェニス商人』(*The Merchant of Venice*, 1596-97)に登場する金貸しのシャイロック(Shylock)から大きく影響を受けてきたと述べている(428)。そして、エドゥアルト・フックス(Eduard Fuchs)が指摘するように、古くから一般的に金貸しとユダヤ人は同一のものとしてイメージ化されてきた(99)。このような根拠から、ダブル・クオテーションで括られた「金貸しという人もいた」は、サイモンがユダヤ人であることを示唆するものとして読むことができる⁴。

それでは、サイモンが「南部」へ引っ越して、「ダーバヴィル」へと改名した理由は何であったのだろうか。作中では、「南部」にやって来たサイモンが、「当地でそれほどよく思い出されない名前を付けて再出発する必要性を感じた」(“he felt the necessity of recommencing with a name not quite so well remembered there”)(39)と記されている。作者は、サイモンが改名の必要性を感じていた理由について述べていない。しかし、金貸しを生業としていたと噂されるサイモンの素性から、彼の「南部」への旅立ちと「ダーバヴィル」への改名は、イギリス国内にあった反ユダヤ人感情を考慮にしたうえでのものであると推察できよう。ユダヤ人たちがグレート・ブリテン島に渡って来たのは、「ノルマン征服」後だと言われている。スチュアート・フィリッパ(Stewart Philippa)によると、イングランドを統治する際に、城の建築費や、忠誠を誓ってイングランドに同行して来た家臣に対して報酬を支払うために、多額の資金が必要だったウィリアム1世は、彼の故郷であるノルマンディーに住んでいた裕福なユダヤ人たちに、彼らの生活を保護することを条件に、自分と一緒にイングランドに渡って来て、経済的に援助してくれるよう依頼したとされている(8)。そして、これをきっかけにして、「ノルマン征服」後、ユダヤ人たちが次々とイギリスにやって来ることになったのである。しかし、ヘンリー8世がカトリック教会から独立して、プロテスタントの英国国教会を国教とする宗教政策を取ってから、イギリス社会ではユダヤ教を信奉するユダヤ人たちは差別と迫害の対象となってきた。例えばこの作品が出版された頃のイギリスでは、反ユダヤ主義の動きが台頭していた。1881年から1914年の第1次世界大戦勃発までの間、帝政ロシアで迫害を受けた大勢のユダヤ人たちは、様々な国に向けて脱出し、その一部のおよそ10万人から15万人のユダヤ人たちが、

グレート・ブリテン島にやって来たとされている(Colin Holmes 318-19)。そして、大勢のユダヤ人たちが持ち込んだ文化や風習も含めて、住宅不足や失業への懸念から、イギリス社会ではユダヤ人たちに対して反感を持つ者も多くいたのである(Holmes 319)。このような史実を踏まえると、作者は「南部」に移り住み、一家の苗字を「ダーバヴィル」へと改めるといふサイモンの行為が、身許と職種を隠したいという彼の思いに由来するものであると読者に思わせるように書いていると考えられる。したがって、彼の転居と改名から、ストーク家がユダヤ人の家系であったと解釈することができると思われるのである。

最後に、サイモンの「イングランド南部の名士」になろうとする目論見について考えていく。既述したように、「南部」の紳士になるためにサイモンが行ったことは、軌道に乗っていた商売(金融業)をたたんで故郷を去り、新天地で「ダーバヴィル」という歴史ある苗字を名乗ることだった。このような彼の行動には、現実社会において、イギリス社会に溶け込もうとする当時のユダヤ人たちの動静を、作中に反映させようとする作者の意図があるものと思われる。事実、18世紀中期以降、経済力を手にしたユダヤ人社会の上層部の中には、イギリス社会に同化しようとする傾向がみられた。例えば彼らは、社会的地位を獲得してジェントルマンとして認められることを願ったり、カントリー・ハウス付きの所領や家紋を金銭で購入するなどしたのである(佐藤唯行 163)。ストーリーの展開において、サイモンが棄教したかについては述べられていないが、当時の豊かなユダヤ人たちが、イギリス社会の中に生活の場を求めていた上記のような状況を考えると、土地の名士になるために、豪商サイモンによる「南部」への引っ越しと「ダーバヴィル」への改名は、イギリス社会に適応し、それに順応しようとするユダヤ人サイモンの思惑に由来するものであると理解することができる。そして、この父親サイモンについての情報から判断して、土地や財産を受け継いだアレックは、ユダヤ人の家系の人間であると結論付けてもおかしくないのである。

以上の考察から、ストーク家がユダヤ人の家系であることは明らかであると言える。そしてハーディは、ユダヤ人たちを脅威の対象とみる当時の社会風潮を、アレックという人物を通して作中に描きこんでいると思われる。そのようなところからテスとアレックの関係を解釈すると、作品の意味の表層を形成する後者による前者に対する凌辱行為は、単なる道徳的視点から考察の対象とするだけではなく、テキストの深層では、ユダヤ人によるイギリス社会に対する暴挙のひとつをフィクション化した例として読むことができるだろう。

イギリス国内におけるユダヤ人に対する反発は、アレックによって乱暴されたテスが、未婚のままで出産した赤ん坊ソロー(Sorrow)の描かれ方にも反映されていると思われる。第2部「乙女に非ず」(Maiden No More)第14章において、テスは病で死にかけている赤ん坊ソローを霊的に救うべく、洗礼の秘跡を授ける資格がないにもかかわらず、自らの手によって洗礼を施している。しかし、見逃せないのは、ソローはテスの愛情を一身に受けてはいるものの、この子供は客観的、または社会的には「望まれない子ソロー」(“Sorrow the Undesired”)(96)、「あの邪魔者」(“that intrusive creature”)(96)と書き記されている点である。テスの祈りもむなしく、子供の病気は回復することはなかった。テスはソローをキリスト教徒と同じ様に葬ってくれるよう牧師に頼み、この彼女の願いに心を動かされた牧師もまた、彼女によって施されたソローへの洗礼が神学的には無効ではあるが、心情的には有効であると認めることになる。それにもかかわらず、この赤ん坊が埋葬された場所は、「神の所有地のあのみすぼらしい一角で……そこは洗礼を受けていない幼児や、酒癖の悪い酔っ払い、自殺者、その他、地獄落ちと思われる者が埋められている所」(“in that shabby corner of God’s allotment . . . where all unbaptized infants, notorious drunkers, suicides, and others of the conjecturally damned are laid.”)(97)なのである。ソローは教会の敷地内ではあるものの、洗礼を受けなかった幼児や、罪深い者たちが埋葬されていた場所に葬られるのであり、このような赤ん坊を貶めるような扱いは、父親を通してユダヤ人の血を受け継ぐソローが、キリスト教社会にあっては、差別を受ける存在とみなされているからだと考えられる。つまり、教会墓地の片隅に埋葬される赤ん坊は、イギリス社会にとって侵入者として白眼視されていたユダヤ人の姿を表象していると解釈できるのである。そして、そのような赤ん坊に、「悲しみ」という意味を持つソローという名前が付けられているところには、ユダヤ人アレックの血を引く赤ん坊に対する憐憫の情が潜んでいるとも読めなくもない。

第2節 テスと「グレート・ブリテン島」的世界

テスの生家であるダービフィールド家は、彼女がアレックの屋敷で奉公して一家を経済的に支えなければならないほど極貧にあえいでいる。しかし、テスの父ジャックの祖先は、騎士の称号を何世代にもわたって受け継いできた名家ダーバヴィル家の末裔であり、その祖先は、「征服王ウィリアムに従ってノルマンディーから渡ってきたあの有名な騎士サー・

ペイガン・ダーバヴィル) (“Sir Pagan D’Urberville, that renowned knight who came from Normandy with William the Conqueror”)(8)とされている。歴史上では、ウィリアム征服王は1066年に「ノルマン征服」を成し遂げた人物であることから、テスの家系は少なくとも、その時代にまで遡ることができるほど由緒ある家柄と格式を持った名家として設定されていることになる⁵。さらにまた、作品のタイトルとして、テスの苗字である「ダーバイフィールド」ではなく「ダーバヴィル」が使用されているが、これは、彼女が「サー・ペイガン・ダーバヴィル」の子孫であることをアピールするためだけのものではないと思われる。「サー・ペイガン・ダーバヴィル」の名前に注目すると、「ペイガン」には「異教徒」、「多神教徒」という意味がある。そして、テスの祖先である「サー・ペイガン・ダーバヴィル」がノルマンディーから島にやって来た時、そこは「グレート・ブリテン島」の雰囲気が多分に残されていた土地であった。したがって、作品のタイトルでその苗字が「ダーバヴィル」とされているテスという登場人物は、「グレート・ブリテン島」を思い起こさせる世界に属する人物として読むことができるのである。

次に、このような読みを実証するために、テスの故郷マーロット村について考察していく。第1部「乙女」(The Maiden)第2章には、村で「5月祭」が催されている場面がある。第6章第1節で「5月祭」について言及したように、この祭りはローマ帝国に支配されていた頃に持ち込まれた「フローラ祭」と、ケルト人の「ベルテーン祭」が混じり合ったものである。また、マーロット村では「5月祭」を祝う中、テスと村の娘たちが白い服を身にまとい、隊列を組んで教区を練り歩くという村に古くから続いている「地元のケレアリア」(“the local Cerealia”)(13)祭りが開かれている。この「ケレアリア祭」は、ローマ神話に出てくる豊穡の女神「ケレス」(Ceres)であり、ギリシア神話では「デメテル」(Demeter)にあたる女神を祝うもので、グレート・ブリテン島がローマ帝国に支配されていた時に伝播したものである。つまりマーロットは、古くから綿々と続く自然を敬うローマの支配下にあった頃の文化が、まだ生活に深く根付いている村とされている。そして、そこで生まれ育ったテスもまた、その文化によって育まれた人物として造型されている。

それでは、マーロットで生まれ育ったテスは、どのような人物と解釈したらよいのだろうか。この問いを多面的に考察していくために、酪農場トールボットヘイズで親しくなった青年エンジェルに対する彼女の思いを追っていく。

先述したように、ソローを病気で失ったテスは、故郷を離れたあと、新生活を始めたトールボットヘイズで、牧師の家に生まれながら農業で身を立てようとするエンジェルと出

会い、彼から求婚される。しかし彼女は、処女を喪失し、未婚の母になってしまった過去の経緯を伏したままエンジェルと一緒にすることは、彼を騙すことになると考え、彼のプロポーズを断るのである。しかし、エンジェルを愛する気持ちが高じたテスは、彼と結婚することに踏み切る。そして、結婚初夜に、エンジェルからお互いに隠している秘密があったら正直に打ち明けようと言われた彼女は、彼にアレックとの間の出来事の一部始終を話すのである。ところが、テスが処女ではないことを知ったエンジェルは、一転して彼女を「一種の詐欺師」(“a species of impostor”)(229)、「無邪気な女を装った罪深い女」(“a guilty woman in the guise of an innocent one”)(229)とみなすことになる。つまり彼は、テスを非難する言葉を口にするのである。これに対しテスの方は、エンジェルから彼がかつてロンドンにおいて放蕩生活を送っていたことを告白されたにもかかわらず、何のこだわりもなく彼の過去を赦している。そして、テスの告白を聴いた結果、彼女を批判するエンジェルに対し、彼女は、「私、あなたを幸福にしてあげたいと望み、願い、祈りもしてきました！」(“I have been hoping, longing, praying, to make you happy!”)(228)と、彼を深く愛していることを訴えるのである。さらにまた、「私、あなたを永久に愛します—どんなに変わったとしても、どんな屈辱を受けても。だって、あなたがあなたであることに変わりはないんですもの」(“I love ‘ee for ever—in all changes, in all disgraces, because you are yourself.”)(228)と言って、テスはありのままのエンジェルを受け入れることを明言する。この場面からテスという女性は、多くの困苦を体験しているにもかかわらず、一途で純粋無垢な心の持ち主であることがわかる。

テスのエンジェルに対するこの思いは、テスの告白を聴いた結果、彼女としばらく距離を置いて暮らす決意を固めたエンジェルが彼女のもとを去り、ブラジルに渡ってからも続いている。テスは、エンジェルが彼女に渡したわずかな金も、彼からいただいたものだからと思い、遣うことを惜しむ。しかし、貧しい暮らしに耐え切れず、エンジェルの両親に助けを求めようとするものの、彼女の経済的窮状が彼の両親に知られることになれば、ふたりの結婚生活が上手くいっていないことが明らかになってしまうのではないかと悩む。さらに、ふたりが別れて暮らしていることが判明した場合、別居している理由を説明するのに夫エンジェルが苦心すると考えたテスは、彼らに事情を打ち明けることを躊躇する。つまりテスは、貧困にあえぎながらも、エンジェルのことを最優先に考えて、彼を気遣う人物として造型されている。

さらに、エンジェルと別れたテスが生活を支えるために、劣悪な労働条件で知られるフ

リントクム＝アッシュ(Flintcomb-Ash)の農場で働き始める場面に目を転じてみる。雨や雪が激しく降り、霜が降りる期間が長いこの農場は、“Ash”が「灰」を意味するように、白亜層の中にある石が地上の表面にむき出しになっている荒涼とした土地にある。テスはそこで唯一取れる作物であるカブラカン(カブ)を鋤で掘り起こす作業に従事していた時に、何の前触れもなくアレックの訪問を受ける。アレックは現在の状況に彼女を追い込んだ張本人はエンジェルであると罵り、彼女に再び交際を迫る。これに対しテスは、エンジェルの「度量の大きさ」(“magnanimity”)(287)を信じていることを主張し、彼に対する尊敬の念を抱き、彼の「忠実さ」(“faithfulness”)(321)を信頼しているので、アレックに2度と自分の前に姿を現さないよう懇願するのである。

テスは、自分を置き去りにしたエンジェルではあるが、心の底から彼を受け入れることができ、ブラジルに滞在している彼を煩わせまいと、貧困と孤独に耐える強い精神力と独立心に富んでいる女性である。彼女は、かつてアレックの暴力によって、その肉体を汚されてしまった。しかし、この作品の副題が作者自身によって「清純な女性」(“A Pure Woman”)と付されていることから、彼女は体を汚されても、心根は清らかなままであることを作者は読み手に印象付けようとしていると言えよう。そして、テスの「清純な」心は、自然の生きとし生ける存在を崇拜する、素朴で純粋なままの状態にあるマーロット村の風土と結びつくところがあることから、この意味において、テスという人間の精神風土とマーロット村という村の自然風土はリンクしていると読める。極論すれば、テスはマーロット村の風土が作り上げた作品であるとすら言えるだろう。

最後に、テスが「グレート・ブリテン島」的世界と一体化する第7部「成就」(The Fulfillment)の第58章の検討に移る。フリントクム＝アッシュに現れたアレックから、彼女の家族の窮乏状態について聞かされたテスは、家族の面倒をみることに引き換えに、彼の情婦になるよう迫られる。一家のためを思ってアレックの要求を飲んだテスは、アレックとサンドボーン(Sandbourne)という土地で同棲生活を送っている間、彼女に冷たい態度を取ったことを後悔し、彼女ともう1度やり直そうとテスを探しにブラジルから帰国したエンジェルと、これもまた偶然に再会する。しかしこのあと、エンジェルと自分に対して罵声を浴びせたアレックに逆上しナイフで彼を殺害したテスは、殺人罪で警察に追われる身となり、彼女はエンジェルと共に逃亡する。気が付くと先史時代の巨大遺跡であるストーンヘンジの廃墟にいたテスは、疲れ果てて動けなくなってしまったため、エンジェルにそこで休ませてほしいと頼む。そうしてテスは、ストーンヘンジの石の上に横たわり、「私

は今、我が家に帰ったの」(“So now I am at home.”)(393)、「私はここにいるのがとても好きなの」(“I like very much to be here”)(393)と呟いて、そこで寝入ってしまう。歴史上、ストーンヘンジが造られた時期と理由は正確にはわかっていない。しかしそれは、作中に記されているところによると、紀元前 500 年頃に渡って来たケルト人の信奉していたドルイド教の礼拝堂や、太陽崇拝のための空間として使われてきたものであり、そして、テスが身を横たえた石は、その生贄用の「祭壇」(“an altar”)(393)であった。つまりここで、ストーンヘンジを「我が家」と呼んで、生贄の祭壇の上で眠ることにこの上ない精神的安らぎを得たテスは、時間を超えて「グレート・ブリテン島」の地に安住の地を見出し、そこに回帰し、それと一体となったとみることができる。このあと、警察に逮捕されたテスは、アレック殺害の罪で絞首刑に処せられる。テスはこの章のタイトル「成就」が示すように、ストーンヘンジに回帰して、そこで生を終えることにより、彼女の人生は完結したと言えよう。

以上の分析から、マーロット村は「グレート・ブリテン島」を席卷していた風土を未だ色濃く留めている土地であることがわかる。そして、そのような生活環境で育ったテスは、そのような世界の申し子の存在として最後まで近代化の波に飲みこまれることなく、副題にあるように「清純な」人物として造型されていたのである。そして最後に、結局、死を通じて古代に建造されたストーンヘンジと一体化したテスは、「グレート・ブリテン島」そのものと融合する登場人物として造型されていると言える。

第 3 節 エンジェルにとってのブラジル

テスにとって最初の異性との出会いは、前述したように不幸なものであった。しかし、彼女をさらなる悲劇に追い込んだもうひとりの人物は、テスの過去を語り聞かされたあと、妻となったばかりの彼女を見捨ててブラジルへ渡航していったエンジェルである。

エンジェルの生い立ちに目を向けると、彼は第 1 節で述べたように、福音主義者であるクレア氏を父に持つ、中流階級出身の青年である。しかし彼は、ケンブリッジ大学に進んで聖職者になった兄たちのような生き方を拒み、父親の期待に背いて宗教家としての道を選ばず、農業で生計を立てようとしている。このようなエンジェルは、次の引用にあるように、ヴィクトリア朝時代の社会制度や因習に縛られない、リベラルな若者として描かれている。

He spent years and years in desultory studies, undertakings, and meditations; he began to evince considerable indifference to social forms and observances. The material distinctions of rank and wealth he increasingly despised. (116)

彼は取り留めのない学問や仕事や、そして思索などに何年も費やした。そして彼は、社会形式としきたりにかなりの無関心ぶりを示し始めた。階級や富という世俗的な差別を彼はますます軽蔑するようになった。

ところが、彼の価値観と彼が志す農業との関係についてみていくと、エンジェルが金銭に全く興味を示さない、理想だけを追い求める青年であるとは言い難い。エンジェルは父や兄たちが身を置く教会という権威に反感を抱き、彼らのような生き方に疑問を抱いている。したがって、父や兄たちの生き方を継承することを潔しとしない彼は、彼らが生きる世界から自己を解放しようとする。そして彼は、「知的自由」(“intellectual liberty”)(117)を謳歌し、自立した生き方を送るために、理念の上だけで農業の道を選ぶのである。つまりエンジェルは、『カスターブリッジの町長』に登場する、穀物商店の経営方法や作物の育て方とその管理に心得があるファーfreyとは異なり、農業そのものを消去法的に選択し、その分野に対する技量の裏付けは持っていない人物であり、農業を安易な生業としてみていることがわかる。そして、そのようなエンジェルは、「植民地か、アメリカか、あるいは国内で」(“in the Colonies, America, or at home”)(117)農業を始めるつもりであると述べている。10代のテスが作中で、1870年に施行された初等教育法によって始まった小学校教育を受けているところからみて、小説の時代背景は1880年代と考えられる。そしてこの時代、イギリスで消費される小麦をはじめとする農作物や畜産物の多くは、植民地やアメリカからの輸入に頼るようになっていた。この状況からわかるのは、海外で農場を開き、そこでイギリス向けに輸出する農作物や畜産物を生産すれば、経済的繁栄を享受することができるということである。すると、海外で農業を行うことも検討しているエンジェルには、イギリスの農作物や畜産物の輸入動向を考えて、海外に移住し、土地を開墾して農場を運営することにより経済的に余裕のある暮らしができるという打算があったとも考えられるのである。次に、彼が将来、「裕福で成功した酪農家、地主、農業家、そして畜産家」(“a rich and prosperous dairyman, landowner, agriculturalist, and breeder of

cattle”)(125)や、「大地主」(“gentleman-farmer”)(255)になりたいと述べている点に注目したい。19世紀のイギリスでは、商業や金融業、製造業で成功した人々が社会的名声を得るために、その生活様式をジェントリらしく変えようとしたり、ジェントリのようになろうと努力した(Martin J. Winer 218)。例えばある者は、ジェントルマンになるための教育を受けさせようと子息をパブリック・スクールに入れたり、ロンドン郊外や田舎に広大な土地を買ってそこで趣味的な時間を過ごしたりした。このように、商業や金融、製造の分野で経済的に成功した人々がジェントリ化する傾向は農業の分野にもみられ、アラン・ホーキンス(Alan Howkins)によると、ある裕福な農場経営者は舞踏会を催すなど、地元では貴族のような暮らしを送っていたという(44)。そして、そのような農場経営者と地主と小規模なジェントリとの間には、経済的な格差はみられなかったのである(Howkins 44)。ここで作中の人物エンジェルに目を向けると、彼は経済的豊かさや伝統的な階級制度に批判的な考えを持つ人物と描出されている。その一方で、海外に渡ることも視野に入れて、裕福な「酪農家」や「農場経営者」や「畜産家」、あるいは「大地主」になろうと考える彼は、社会的・経済的には彼が属していた中流階級とは変わらない暮しか、あるいは、それよりも良い生活に憧れを抱いていたといえるのである。このようなところから、エンジェルはむしろ、経済力や社会的地位に固執している人物であると考えられる。

さらにまた、彼が女性に対して保守的な考えを持っていたと思われる。トールボットヘイズでテスと出会い、彼女を見初めて結婚したエンジェルは、既述したように、テスとアレックの過去の経緯を、新生活を始めた最初の夜に彼女の口から語りきかされると、彼女に対する態度を一変させる。ハウが、「アレックは肉体的にテスに暴行を加え、エンジェルは精神的に彼女を凌辱した」(“Alec assaults Tess physically, Angel violates her spiritually.”)(*Thomas Hardy* 122)と述べているように、エンジェルはテスを「罪深い女」と責めて、彼女をイギリスに残したままブラジルに旅立ってしまう。つまりエンジェルは、イギリス社会の人間観や因習を口先では批判しながら、本音は女性の貞操を重んじる中流階級の道徳観の持主であるというわけである。そして、その道徳観に則って、自分の妻となったテスを「墮ちた女」(fallen woman)とみなし軽蔑する彼は、彼を愛し、気遣い、尊敬するテスの人間性を見抜くことができず、彼女を受け入れることができない視野の狭い人物として造型されている。

次に、テスと別れて暮らすことを決めたあとのエンジェルの言動についてみていく。彼は両親の家に戻る途中、たまたま「ブラジル移住」(“Brazil movement”)(340)と呼ばれる

当地への移住を推奨するプラカードの文字を目にする。この時、エンジェルは、「おそらく、風景も、ものの考え方も、習慣も対照的なあの国でなら、ここで彼女との暮らしを不可能にしているように思えるしきたりは、それほど作用しないだろう」(“perhaps in that country of contrasting scenes and notions and habits the conventions would not be so operative which made life with her seem impracticable to him here.”)(260)と、将来的にテスと共にブラジルでなら生活することができるかもしれないと判断する。そして彼は、まず自分が先にブラジルに渡って農業の仕事の目途をつけ、環境が整ったら彼女をブラジルに呼び寄せ、その地で人生を再出発させようとする。ここで、エンジェルが、ブラジル移住を決断させるプラカードの宣伝を見る場面は、野村が指摘するように、ブラジル政府が政策として掲げた移民誘致運動のひとつコマである(『テス』におけるブラジル表象」40-41)。19世紀のブラジルでは、コーヒー産業が拡大する一方で、1850年の奴隷輸入禁止発令により、農場で働く奴隷の数が減少していた。そこで、当時のブラジル政府は奴隷数の減少に伴って起こる労働力不足を解消するため、ヨーロッパからの移民を積極的に受け入れるようになる。そのような中、サンパウロのコーヒー地帯では1871年以降、サンパウロ県が移民労働者を導入する農園主に融資を行ったり、移民募集の際には渡航費の助成を移民のために準備していたのである(Boris Fausto 167)。実際にイギリスからブラジルへ渡った移住者の数をみていくと、1818年から1947年の間では約3万人となっており、その数は少ない(金七紀男, et al. 137)。しかしながら、エンジェルがそこへ渡航することを決める背景には、ブラジルがヨーロッパ諸国に対して行っていた移民誘致運動があったことが理解される。

エンジェルが移住を決めたブラジルとは、どのような土地として描かれているのであろうか。現地に着いた後、エンジェルは当地の厳しい自然環境に苦しめられ命を落としていく、イングランドからやって来た移民たちの姿を目の当たりにする。その場面を示す1例として、以下の箇所がある。

The crowds of agricultural labourers who had come out to the country in his wake, dazzled by representations of early independence, had suffered, died, and wasted away. He would see mothers from English farms trudging along with their infants in their arms, when the child would be stricken with fever and would die; the mother would pause to dig a hole in the loose earth with her bare hands, would

bury the babe therein with the same natural grave-tools, shed one tear, and again trudge on. (339)

早い段階で独立が果たせるという文言に惑わされて、彼のあとにその国にやって来た農業労働者たちの群れは、苦勞したり、命を落としたり、衰弱していった。彼はイングランド人の農場から、母親が腕の中に赤ん坊を抱いてとぼとぼと歩いているのをよく目にした。その子は熱病にかかり死んだのだ。母親は素手でもろい大地に穴を掘るために立ち止り、自分が持っている五本指という埋葬道具を使ってそこに赤ん坊を埋め、1粒の涙を流し、再びとぼとぼと歩いていったものだった。

さらにまた、ブラジルの内陸部を移動している途中、雷雨にうたれたエンジェル自身も熱病に罹り、しばらくの間、闘病生活を余儀なくされる。そして、その病から回復したあとに、彼がブラジルで出会って、共に旅をした見知らぬひとりの「イングランド人」(“an Englishman”)(340)もまた、熱病に罹って命を落としてしまうのである。これらの経験を通じて、エンジェルは農業への情熱を失っていくばかりか、当地での生活がイギリス人に耐えうるものであるというブラジル政府による宣伝文句が、偽りであったことに気付くのである。そして、エンジェルが目撃した移民たちが陥っている苦境、移住してきた人々が罹る風土病、ブラジル政府による事実とは異なる内容を含んだ宣伝文などは、ページによると、1872年から1873年にかけて『タイムズ』(*The Times*)紙に載っていた、イギリスからブラジルに渡った移住者たちの実体験を記した記事と一致しているということである(“Hardy and Brazil” 319-20)。ブラジルへ向かったヨーロッパ移民の実情に目を転じると、彼らの現地での生活は困難を伴うものであった。移民の多くは、サトウキビやコーヒーを栽培する農園でそれまで奴隷が行っていた農作業を行ったり、農園の拡張や土地の開墾のために原生林を伐採するという危険な仕事に就いた(伊藤秋仁 86)。ブラジルは手付かずの自然を残した土地であり、そこでの移民の暮らしは過酷なものであった。そして、このようなブラジルとそこに移住した人々の状況が、エンジェルの体験談に反映されているのである。

エンジェルにとってブラジルでの生活は厳しいものであった。一方でエンジェルは、既述したように、あるイングランド人と出会い、彼と一緒にブラジル奥地を移動しているうちに、彼から精神的感化を受ける。テスの身に起こった出来事や、妻との別居生活をその

男に打ち明けたエンジェルは、彼から自分とは全く異なるテスという女性に対する見解を聞かされる。それは次のようなものであった。

The stranger had sojourned in many more lands and among many more peoples than Angel; to his cosmopolitan mind such deviations from the social norm, so immense to domesticity, were no more than are the irregularities of vale and mountain-chain to the whole terrestrial curve. He viewed the matter in quite a different light from Angel; thought that what Tess had been was of no importance beside what she should be, and plainly told Clare[Angel] that he was wrong in coming away from her. (341)

その見知らぬ男はエンジェルよりももっと多くの土地に滞在し、もっと多くの人々の間で暮らしてきた。彼の国際的な精神にとって、自国生活にとっては計り知れない社会的規範からのそのような逸脱も、大地の全曲線に対する谷や山脈の凹凸にすぎなかった。彼は、その事柄を、エンジェルとはまったく異なった観点でみていた。彼は、テスがこれまで何であったかは、テスがこれからどうなるだろうかということに比べると全く重要な問題ではないと考えた。そして、クレア(エンジェル)が彼女から離れ去ったことは間違いであると、クレアに明言したのである。

この引用から、「見知らぬ男」が長年にわたる外国暮らしにより、イギリス一般の価値観や社会的な因習に囚われない、より自由で相対的な考え方を身に付けている人物であることがわかる。そして、そのような価値観を持つ彼は、テスの過去より彼女の未来に目を向けるべきだと論ずるのである。この男のこのような人間観は、エンジェルの女性に対するこれまでの道徳観に新風を吹き込むことになる。ブラジルまでやってきて、それまでは思いもつかなかった考え方があることを知ったエンジェルは、「いま彼は、これまでよしとされてきた道徳を疑い始めていた」(“He now began to discredit the old appraisements of morality.”)(340)。テスに対する「彼の早まった判断に対する後悔の念が、彼の上に重くのしかかり始めた」(“a regret for his hasty judgment began to oppress him.”)(340)。そして、「この次第に大きくなっていく彼女の思い出への愛着」(“This growing fondness for her memory”)(340)を持ち始めた「彼は彼女の支持者となった」(“He grew to be her

advocate.”)(341)。これを契機にエンジェルは、テスの身に降りかかった過去の出来事を非難するのではなく、テスという人間を全面的に受け入れ、彼女の愛に応える方向に向かうことになる。このようなエンジェルの心境の変化は、彼に新しい人間観が芽生えたことを示すものであり、彼はブラジル滞在を通じて、当時のイギリスの中流階級の価値観を彼なりに疑問視するようになったと言える。こうしてエンジェルは、ブラジルの未開の地での体験を通じて、人間の本質的な生き方を学び、生き生きとした生命力に溢れたひとりの人間として生まれ変わることができた。このようなところから、エンジェルは、ブラジルと「メトニミー的關係」を持つ人物であるのだ。

ブラジルから帰国したエンジェルは、テスと共に結婚生活を再び始めようとするが、彼女がサンドボーンの豪華な下宿先でアレックと同棲していることを知ることになる。テスを訪ねたエンジェルは、彼からの連絡が途絶えたままひとりで生きてきたテスから「遅すぎるわ！」(“It is too late!”)(378)と言われ、ショックのあまりその場を立ち去るしかなかった。しかし、そのあとでテスはアレックを刺殺し、エンジェルのあとを追いかけてくる。「私やってしまったの—どうやったかはわからないけど」(“I have done it—I don’t know how”)(384)と告げて、アレック殺害を口にし、取り乱すテスを見たエンジェルは、彼女を優しくなだめる。そして彼は、「僕は君を見捨てたりはしない！君がどんなことをしたにせよ、しなかったにせよ、僕は力の限り、あらゆる手段で君を守る」(“I will not desert you! I will protect you by every means in my power, dearest love, whatever you may have done or not have done!”)(386)と断言して、テスを全力で守り抜くことを誓う。つまりエンジェルは、テスのすべてを受け入れ、真の意味において、彼女の夫となったのである。このあと、テスが警察に逮捕されるまでの約1週間、ふたりは本当の夫婦として至福の時間を過ごす。逃亡中にある空き家にたどり着き、そこで約5日を過ごしている間、テスはエンジェルと幸せな時間を過ごし、彼らはそこで初めて愛情と信頼で結ばれた夫婦になることができた。しかし、その空き家を出たあと、ふたりは警察に追い詰められてストーンヘンジで捕まり、テスはアレック殺害の罪により法律に則って処刑される。その結果、テスと、新たな人間観に目覚めて生きようとするエンジェルの思いは、テスの死によって断ち切られてしまうことになる。

しかし、最終章である第59章で、ウィントンセスター(Wintoncester)で行われるテスの処刑現場を丘の上から眺めるエンジェルと、テスによく似たテスの妹ライザ・ルー(Lisa-Lu)が連れ立って旅立つ決心をして、町を去っていくシーンに注目したい⁶。外見的

にテスに生き写しのライザ・ルーは、処刑された彼女の姉の人生を継承する存在として読むことができる。その読みに立つならば、作者ハーディはこのシーンで、エンジェルがテスとは実現できなかった結婚生活をライザ・ルーと送ることで、当時の社会規範に囚われることなく、ブラジルの地で習得した人間性を重要視した生き方を実現していくというメッセージを送っていると解することができる。さらにまた、ブラジルと「メトニミー的關係」にあるエンジェルと、「グレート・ブリテン島」と「メトニミー的關係」にあるテスの妹ライザ・ルーとによるカップル誕生は、新しい人間観で結ばれた夫婦像を暗示するものとして読むことができるだろう。

おわりに

以上の論述から明らかになったことは、アレックの性的欲望の対象となったテスの身に起こった悲劇は、作品の字義通りの意味では、テスがアレックの肉体的・精神的暴力を受けて傷つき、人生の辛酸を嘗めるというストーリーであった。しかし本論文では、アレックの出身を分析することで、彼がユダヤ人の流れを汲むことを読み取り、悪人として描かれたアレックには、イギリス人の間に広がっていた反ユダヤ人感情が反映されているとみることができた。

一方、マーロット村で幼少期を過ごしたテスは、エンジェルをひたむきに愛し、彼のすべてを受け入れる寛容さと愛情深さを兼ね備えた女性へと成長した。彼女の人格を形成したマーロットが、「グレート・ブリテン島」時代の世界に通底する場所であることから、そのような世界もまた、ブラジルの奥地と同様に、純粹無垢な人間性を育む力が備わっているということになる。テスについては、彼女はストーンヘンジにおいて心の安らぎを見出したあと、死を通じてはるか昔の「グレート・ブリテン島」に回帰したとみることができた。

エンジェルは結婚当初、アレックから受けた凌辱事件から、女性としてのテスの生き方を疑問視する道徳規範に縛られていた。しかし、テキストでは未開の地とされているブラジルが、彼の女性観を改めさせる力を持った土地として描かれていたことから、当地で新しい人生観を獲得したエンジェルは、ブラジルと「メトニミー的關係」を持つ人物であると言えた。そしてまた、野性味と生命力があふれるブラジルは、法律や因習や伝統に縛られている文明社会イギリスよりもたくましい、健全な生命が躍動する空間とみられていた

のである。

以上のことから、マーロットとストーンヘンジの廃墟とブラジルが、文明化された当時のイギリスよりも、人間の根源的な生命を生み出す力に満ちているとする作者ハーディのメッセージを読み取ることができた。そして小説の最後で、テスという女性を外見的にも、内面的にも継承しているとみられる妹ライザ・ルーとエンジェルというカップルの誕生は、そのような活力に溢れた世界の住人として彼らが生きていくことを予感させるのであった。本論文の第6章で取り上げた『帰郷』において、ユーステイシアが亡くなった後、ヴェン夫妻と2代目ユーステイシアという家族が誕生した時点で作品世界が閉じられていたように、『ダーバヴィル家のテス』もまた、テスが亡くなった後も、彼女の妹とエンジェルのカップルが生命力に富んだ世界を受け継ぎ、未来に向けてそれを守り続けていくであろうことを実感させる形で終わっているのである。

注

1 本章における引用は、Thomas Hardy, *Tess of the D'Urbervilles* (London: Penguin, 2003)によるものである。

2 野村も同様に、アレックに付与された悪人のイメージから、ユダヤ系イギリス人が抱えた人種の問題が浮上してくることを指摘している(『ダーバヴィル家のテス』異者化されたアレック像」274)。

3 小説には、サイモンがどの土地からやってきたかは明記されていない。しかし、「ストーク」という苗字は、イングランド北部のスタッフォードシャー(Staffordshire)州にある、陶磁器産業で有名な町「ストーク・オン・トレント」(Stoke-on-Trent)と関連付けることができる。19世紀後半、帝政ロシアやプロシアから迫害を逃れてやって来たユダヤ人たちの一部が、スタッフォードシャー北部に移住してきた。そして、「ストーク・オン・トレント」は、そのような彼らが住み着いた州の北部に位置しているのである。こうしたところから、当時の読者は、ユダヤ人の血を引いていると思われるサイモン・ストークと、「ストーク・オン・トレント」を結び付けたとも考えられる。

4 野村もこれと同様のことを指摘している(『ダーバヴィル家のテス』異者化されたアレック像」274)。

5 “D'Urberville”の“D'Urber”という語から連想されるのは、イングランド南部に位置する町「ドーバー」(Dover)だろう。「ノルマン征服」を成し遂げたギョームはヘイスティング

ズでの戦いの後、フランスに最も近く、海峡を越えるうえで重要な町であったドーバーに向かい、そこを鎮圧した。“D’Urberville”の“ville”についてだが、それには「市」や「町」という意味があり、その語源はフランス語である。また、“ville”はフランス語で「都市」という意味がある。つまり、「ダーバヴィル」という名前は、ノルマン人によるイングランド征服を意識して、作りだされたものであると考えられるのである。

6 ウィントンセスターは、ウインチェスター(Winchester)をモデルにした町である。小説では、前者について詳しく説明されていないが、ウインチェスターは、ローマ時代以前のものとする遺跡が残る町である。「グレート・ブリテン島」の雰囲気を留めた町をモデルにしたウィントンセスターで、テスが死を迎える点からも、彼女が「グレート・ブリテン島」に回帰していったと言える。

結章

本論文では、トマス・ハーディの小説世界を読み解くために、14編の長編小説と2編の短編小説における登場人物たちの言動に着目し、彼らが生まれ育った場所や、移住した先の国や植民地、さらには、祖先や両親がやって来た元の国と本国イギリスとの間のさまざまな関わり方について、当時の国際事情という観点から考察してきた。しかし、それだけではハーディの上記の小説群すべてを十分に説明することはできないため、もうひとつの視点を取り入れることになった。それは、国外だけではなく、同時代のイギリス国内に目を向けて作品世界を読み解くという視点であった。そして、母国イギリスの国内に未だ残っている「グレート・ブリテン島」的世界と作中におけるその役割を通して、ハーディがそれをどのようにみていたかをめぐって論証を重ねてきた。

第1部第1章では、彼の3作目の小説『狂乱の群れをはなれて』を論じた。この作品はトマス・グレイの最もよく人口に膾炙している詩作品であり、主として農村に生きる人々の素朴な暮らしぶりを瞑想的に歌った「田舎の墓地で読んだ挽歌」の中の1行である、「あさましく争い狂う群れをはなれて」からそのタイトルを取ったこともあって、長い間、パストラル小説の系譜に入れられて論じられてきた。しかし、本論文では、そのような系譜から論じるのではなく、作品の中で展開されるバスシバとオウクとボールドウッドとトロイの4人の人間関係を中心に分析した。イングランドの「ミニチュア」として読むことができるウェザベリ村において、かつてマナー・ハウスとして使用されていた屋敷を所有し、ウェザベリ農場を経営する有能なバスシバは、当時のフェミニズム運動が目指した自立した女性として描き出されており、村では、男性が果たすリーダーとしての役割を担っていた。そのようなバスシバの最初の夫トロイは、女性関係が奔放で定職にもつかず、結婚後も農場の管理には手を抜く生活能力の乏しい人物であった。彼はフランス人の母親を持つことの他に、フランス語に堪能であることを見せつけたり、フランス産のブランデーを農場の人々に強要するところもあり、フランスと「メトニミー的關係」に位置づけられた人物として解釈することができた。この点を踏まえると、バスシバをめぐる、トロイとバスシバの農場で働く羊飼オウクとのライバル関係は、第2次100年戦争から続くイギリスとフランスとの間の政治的緊張状況から生まれた、フランスに対するイギリスの国民感情の反映するものとして読むことができた。小説の結末では、トロイと結婚していたバスシバの気持ちはオウクに傾き、夫であるトロイの死後、彼女はオウクと結婚し、農場の実権

はオウクに渡る。ハーディはこのエンディングを通じて、女性が経済的・社会的に自立した人生を歩もうとしても、男性と同等の役割を任されて独立して生きることができない状況を描き出していたのである。さらにまた、フランスの属性を持つトロイの死と、イギリス人オウクが農場を管理するようになる結末は、フランスと対立していたイギリスの人々にカタルシスを感じさせるストーリー展開と捉えることができた。以上の論考の結果、『狂乱の群れをはなれて』は単なる牧歌的な農村社会を描いている作品ではなく、作品の意味の表層下には、イギリスとフランスの対立関係から生じた、イギリス人の対フランス意識を織り込んだ作品であると結論付けることができた。

第1部第2章においては、ナポレオン戦争時代を背景にした『ラッパ隊長』と「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」を取り上げ、そこに登場するアンとフィリスと外国人兵士たちの交流に論点を絞って考察した。ハーディは両作品に外国人兵士たちが属していた実在の部隊を登場させていたが、それらの部隊は編制や活動時期、及び着用していた軍服などの点からみて、必ずしも事実にもとづいて描かれているわけではなかった。一方で、ハーディは現実社会において、イギリス軍所属の兵士として戦地に赴いた外国人兵士たちが置かれていた国際的状況や彼らの複雑な心情を、小説の中の兵士たちのそれらに反映させていた。まず『ラッパ隊長』の舞台は、フランス軍による侵略の脅威に怯えていたウェイマスとその近隣地域に設定されていた。作品のいくつかの場面では、ハノーヴァーやヨーロッパ諸国の出身で、それらの地域や国と「メトニミー的關係」にある外国人兵士たちが、イギリス人のアンに会釈をもって丁寧に挨拶を送り、彼女を敬うような仕草を見せた場面に注目した。つまり、構図的にみれば、兵士たちに対するアンの立ち位置や彼らが彼女に対して取った言行は、イギリスとハノーヴァーの同君連合の關係や、フランスと戦争状態にあったイギリスとヨーロッパ諸国の同盟關係の描出として読み替えることができた。さらにまた、そこにはイギリスとヨーロッパ諸国の間にある国際的ヒエラルキーが表されてもいた。「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」では、外国人兵士マテウスとクリストフが、それぞれの出身地ザールブリュックとアルザスの属性を身に付けていた。そして、フィリスの父親であるグローヴ氏が、マテウスを含めた外国人兵士たちに示す嫌悪感には、同時代のイギリス人が持っていた「ゼノフォビア」が反映されていた。イギリス人女性フィリスは、打算抜きで愛するマテウスとではなく、現実に妥協する形でイギリス人であるグールドとの結婚に踏み切る。そして、所属していた部隊からの脱走を図ったマテウスとクリストフは捕えられ、脱走兵として処刑されてしまう。この一連のストーリー展開の中で、フィリスがグールドを選ぶ

に至る決断と、マテウスとクリストフの処刑には、イギリス社会には一般的に対フランス意識のみならず、外国に対する警戒心が強かったことが表出されているとみることができた。

第1部第3章で取り上げた『日陰者ジュード』は、植民地オーストラリアと、そのオーストラリアと宗主国イギリスの関係を、ハーディがどのようなものとして捉えていたかを読み取ることのできる作品であった。アラベラはイギリスで結婚したジュードと喧嘩別れしたあと、彼とは法的に結婚状態にあるまま自らの意志でオーストラリアに移住し、その地の法律に従ってオーストラリア人カートレットと結婚した。そして、その国の法律を遵守するアラベラは、オーストラリアの属性を持つ人物と解釈した。またさらに、そのような彼女の生き方と、彼女とカートレットとの円満な結婚生活からは、作者がオーストラリアを単なる植民地としてではなく、ひとつの自立した国家として尊重していたことが明らかとなった。ジュードとアラベラとの間に生まれた子供ファーザー・タイムは、アラベラが妊娠期間中に渡航したオーストラリアで誕生し、その地で育った人物である。ヴィクトリア朝期には、植民地の現地人女性とイギリス白人男性との間に生まれた混血児には、一般的に身体的な異常があると考えられていた。そして本論文では、この偏見を拡大解釈して、ファーザー・タイムがオーストラリア生まれであることを根拠に、作者がこの少年を老人のような風貌を持つ人物として造型したと考えた。そして、以上の点から、ファーザー・タイムも、オーストラリアと「メトニミー的關係」に位置づけられていることがわかった。すでに「事実婚」状態にあったジュードとスーは、彼らの家族にファーザー・タイムを息子として迎え入れる。しかし、そのことにより、彼らは世間の人々から好奇の目で見られるようになり、ファーザー・タイムは自己の存在意義に悩んだ末に異母弟妹殺人事件を起こし、その結果、一家は離散することになってしまう。イギリス人であるジュードとスー、及びその子供たちと、オーストラリア人であるファーザー・タイムによって構成されていた家族の崩壊には、イギリスとオーストラリアが対等なパートナーとしての関係性を構築していくことを理想としながらも、現実としては、それは極めて難しいと考えるハーディの見解が示唆されていると読むことができた。ここで見逃せない点は、子供たちの死をきっかけにジュードとスーは別れることになるが、ふたりは本音においては、彼らの「事実婚」という結婚の形態に納得していたということである。さらに、スーと別れたジュードは、カートレットと死別していたアラベラと再び結婚する。ふたりが振り出しに戻るようにストーリー展開を構築したハーディは、単に表面的な面白さを演出するだけで

なく、意味の深層部において、イギリスとオーストラリアが切っても切れない深い絆で結ばれているということを暗示していたと考えられるのであった。以上の分析から、ハーディはイギリスとオーストラリアの共生の難しさを認めつつも、両国がそれぞれにとって必要不可欠な存在であるとみていたと解釈することができた。

続く第2部第4章では、短編小説「運命と青いマント」を取り上げ、イギリスのエリート官僚であるインド高等文官の資格を取り、インドに赴く希望がかなったオズワルドと、彼をめぐる恋人アガサと彼女の叔父ハンフリーの言動を中心に、イギリスがハーディによってどのような国として捉えられているかを検証した。オズワルドが庶民でありながら、インド高等文官の試験に合格するストーリー展開には、出自ではなく能力を重視する官僚制度がイギリス社会に根付きつつあった現実が反映されていた。つまり、彼が高級官僚になる資格を得たところには、階級の壁が取り去られていくイギリス社会の現実的变化が示唆されていた。オズワルドは植民地インドを支配するイギリスの官僚としてインドに赴任する強い意思を持っていたが、この意味において、彼はイギリスと「メトニミー的關係」を持っていた。さらにまた、彼は結婚の約束を交わしていたアガサからは、経済的成功を収めてインドから帰ってくるであろうと信じられていた。しかし、一方で、叔父のハンフリーは、出世したオズワルドが帰国して、村娘にすぎないアガサと結婚することは非現実的だと考えていた。このようにアガサとハンフリーそれぞれの思惑の対象となっていたオズワルドは、植民地インドを搾取することで、その経済力を高め、国家の繁栄の礎を築いたイギリスの国家体制を表している登場人物と言えるのであった。小説の結末部では、オズワルドの帰村が間に合わず、アガサは彼女よりもかなり年上のラヴィルと不本意にも結婚式を挙げることになる。その上、実際には、病気のために1年間インドへ赴任していなかったオズワルドが、インドに滞在していることを装ったうえでアガサと文通していたことが明らかになる。このような登場人物たちの言動を通してみると、オズワルドとアガサが迎えた破局には、イギリスとインドの脆弱な関係性が、この短編の意味の深層部に描き込まれていると考えられた。

第2部第5章で取り上げた『カスターブリッジの町長』では、カスターブリッジの町長であり、穀物商として活躍していたヘンチャードが、時代の変化を読み取ることができなかったため、経営に失敗して店を失い、その上、町長の地位から退くことを余儀なくされた。その一方で、彼の店の支配人であり、スコットランド出身でスコットランド訛りの方言を話すことから、スコットランドの属性を持つファーレイが、ヘンチャードに代わっ

て町長の座に就くことになった。カスターブリッジにおけるヘンチャードとファーフレイによるこの政権交代は、イングランドとスコットランドが競い合う中で、前者を凌ぐ実力を、後者が発揮しつつある経緯を物語るものであった。さらにまた、作者は国際的な諸事情を登場人物たちの人生に描きこんでいた。例えば、夫ヘンチャードによって、見知らぬ船員ニューソンに売り渡されたあと、カナダに渡り、再びイギリスに戻って来たスーザンと、彼女とニューソンの間に誕生した 2 代目エリザベス＝ジェインの場合、彼女たちがカナダで経験した悲惨な生活は、イギリスの危うい移民政策の現実を反映するものであった。特に、カナダで生まれ育ったために、イギリス社会特有の階級意識を身に付けていないエリザベス＝ジェインは、カナダの属性を持つ人物であった。さらにまた、フランスの文化が根深く残るジャージー島の出身であり、フランス語を得意とするヘンチャードの元恋人ルセッタは、フランスと「メトニミー的關係」に置かれていた。したがって、彼女に対するカスターブリッジの住民の冷淡な態度は、同時代のイギリスとフランスの政治的対立を投影するものとして捉えることができた。ストーリーの後半では、カスターブリッジを長い間牛耳っていたヘンチャードが、自ら町を去る決意を下した。彼の引退は、古き良きイングランドの時代が終焉を迎えたことを意味するものであった。そして、彼の代わりに、カスターブリッジの新たな実力者となるファーフレイとエリザベス＝ジェインのカップルの誕生は、ふたりが「メトニミー的關係」にあるスコットランドとカナダが、イングランドを支える重要な地域であり、国であるとするハーディの国際感覚の表出として捉えることができた。

続いて、第 3 部第 6 章では、『帰郷』に登場するクリムとユーステイシアという人物たちが、エグドン・ヒースと呼ばれる荒野に住む人々との精神的乖離を縮めていく道程を検討することで、ハーディがエグドンをどのようにみていたかを明らかにした。小説の舞台であるエグドンは、「グレート・ブリテン島」の名残を多分に留めている手付かずの自然を享受し、ケルトとローマとゲルマンの時代の名残を残している土地であった。このような風土の生地エグドンに帰郷して来たクリムは、憧れの滞在先であったフランスのパリで、コントの愛他主義という高尚な思想に感化され、故郷に学校を建設し、地元の人々を教化しようと考えた。このようなところから、クリムはフランスの属性を持つ人物とみることができた。しかし、間もなくして、彼は目を患うが、自ら申し出たエグドンでの肉体を酷使する農作業を通じて、エグドンの農民たちのたくましい生命力に感化され、彼らに教育を施すという傲慢な考えを改めていった。そして、キリスト教の巡回説教師へと轉身する

ことにより、故郷における自分の使命を見出し、それを「天職」と受け取り、人間的に立ち直っていった。クリムのこのような半生をみると、紆余曲折を経た結果、結局彼は、「グレート・ブリテン島」の風土を未だ大いに留めているエグドンに回帰していったとみることができた。一方、ユーステイシアの場合、ヨーロッパ大陸からやって来たと思われる祖先の血を引く彼女は、エグドンの風習を受け入れ、それに順応していた。この意味において、彼女はヨーロッパ大陸と「グレート・ブリテン島」の属性を合わせ持っている人物であると捉えることができた。さらにまたユーステイシアは、この小説の意味世界において、かつて地理的に陸続きであった「グレート・ブリテン島」とヨーロッパ大陸を、精神的・人種的にひとつに結び付ける役割を果たす人物として読むことができた。エグドンの川で水死した彼女の存在は、トマシンとワイルディーヴとの間に生まれ、ユーステイシアと名付けられた赤ん坊に引き継がれていった。「グレート・ブリテン島」の面影を色濃く残したままのエグドンには、文明に染まったクリムの人間性を涵養したように、新たな命のリレーを実現させるエネルギーが潜んでいたことがわかるのであった。以上の論考から、クリムとユーステイシアがエグドンで歩む人生を検証すると、ハーディは「グレート・ブリテン島」的世界が広がるエグドンには、1度見失ってしまった人間の精神を回復させ、人生を再び生き直すことを可能にする、神秘的な力が内在していると考えていたことが明らかとなった。

第3部第7章の『ダーバヴィル家のテス』では、テスを辱めたあと、金の力で彼女を強引に情婦にしてしまうアレックという人物には、ユダヤ人の血が流れていることがわかった。それによって、財力に物を言わせる人非人として描出されているアレックという人物造型の背景には、当時のイギリス人にあった反ユダヤ感情が反映されていたとすることができた。次いで、テスにとって「グレート・ブリテン島」を彷彿とさせるところのあるマーロット村は、純真無垢な彼女の性格を育む土地であった。アレックとの関係を知ったエンジェルが、彼女のもとを去ったあと、経済上の理由からアレックの情婦になってしまっていたテスは、ブラジル奥地での生活体験によって改心し、帰国したエンジェルと再会するのであった。そして、彼らの復縁を知ったアレックが、エンジェルを罵倒したことに激怒したテスは、ほとんど無意識のうちに、ナイフでアレックを殺害してしまう。警察による逮捕を恐れ、エンジェルと共に逃亡したテスは、逃げ延び、たどり着いたストーンヘンジの廃墟において、彼女をはじめ「我が家」にいるような精神的安らぎを体感した。この直後、テスは警察に捕えられ、死刑宣告を受けて処刑されるが、彼女の場合、死を通し

て「グレート・ブリテン島」時代の世界に回帰していったと言えるのであった。一方で、エンジェルに目を向けると、彼は結婚直後に知ったテスとアレックとの過去の出来事を赦すことができず、新妻である彼女をひとり残して単身ブラジルへ移住してしまう。ところが彼は、近代文明に汚されていないブラジル生活を通して自己啓発され、それまでこだわっていた道徳観を改め、テスを赦し、彼女と再出発することを決心するのであった。この点において、ブラジルに渡り、そしてその地において新しい自己に開眼したエンジェルは、ブラジルと「メトニミー的關係」に位置づけられていると解することができた。そして小説の最後で、外見だけでなく、内面までテスと酷似している妹ライザ・ルーとエンジェルが結ばれるという結末は、母国イギリスに未だ残存している「グレート・ブリテン島」的世界が受け継がれ、存続し続けてほしいという作者ハーディの願望の表明として読むことができた。

本論文では、ハーディの小説世界の登場人物たちが、何らかの点で彼らが関わりを持つ国や地域と「メトニミー的關係」にあることを解明し、そこにハーディが読み取った同時代の国際事情が描き込まれていたことを明らかにした。さらにまた、国内的には、「グレート・ブリテン島」に通底する諸地域に対する彼の見方も解き明かすことができた。そして、そこからは、同時代のイギリスとフランスの国際的な対立が、微妙な形で作中に描き込まれていることが明らかとなった。加えて、植民地インドとヨーロッパ諸国に対する大英帝国イギリスの覇権主義を憂慮するハーディの見解も読み取ることができた。またさらに、植民地オーストラリアやカナダを、祖国イギリスにとって必要不可欠な国とみなす作者の見解も小説の意味の深層部に表出されていたことがわかった。一方、国内に目を向けると、ハーディは「グレート・ブリテン島」の名残を留める土地には、人間の根源的で野性味あふれる生命力を取り戻してくれる力が満ちていることを発見し、人間性を取り戻すために、そこへ回帰していく人物たちを作品世界の中に登場させていた。これが意味するのは、ハーディが同時代のイギリス帝国主義社会にはびこっている悪弊を憂慮し、それに警鐘を鳴らしていたということなのである。そして、それを克服するためのひとつの処方箋として、未文明の状態を留めている「グレート・ブリテン島」時代を彷彿とさせる世界への回帰を提示したと言える。以上の論述から、ハーディの小説世界の登場人物たちの言動や人間性には、彼が描出したイギリスとイギリス植民地と諸外国との国際事情が反映されているのである。それと同時に、『帰郷』と『テス』にみたように、人間本来の瑞々しい生命力を取り戻すためには、「グレート・ブリテン島」的世界への回帰が求められていた。そして、総

括的に言えば、ハーディの小説世界には、同時代の国内外を視野に入れたグローバルな国際事情と、危うい国内問題が小説化されていると結論付けることができる。

主要参考文献一覧

I. 第一次資料

(1)長編小説

Hardy, Thomas. *Under the Greenwood Tree*. 1872. London: Penguin, 1999.

---. *Far From the Madding Crowd*. 1874. Oxford: Oxford UP, 1998.

---. *The Hand of Ethelberta*. 1876. London: Penguin, 2006.

---. *The Return of the Native*. 1878. London: Penguin, 1999.

---. *The Trumpet Major*. 1880. London: Penguin, 1997.

---. *The Mayor of Casterbridge*. 1886. London: Penguin, 2003.

---. *The Woodlanders*. 1887. London: Penguin, 1998.

---. *Tess of the D'Urbervilles*. 1891. Oxford: Oxford UP, 1998.

---. *Jude the Obscure*. 1895. London: Penguin, 1998.

(2)短編小説

Hardy, Thomas. "Destiny and a Blue Cloak." 1874. *The Withered Arm and Other Stories 1874-88*. London: Penguin, 1999. 3-26.

---. "The Withered Arm." 1888. *The Withered Arm and Other Stories 1874-88*. London: Penguin, 1999. 329-57.

---. "The Melancholy Hussar of the German Legion." 1890. *The Fiddler of the Reels and Other Stories 1888-1900*. London: Penguin, 2003. 3-21.

(3)詩集

Hardy, Thomas. *Thomas Hardy: The Complete Poems*. Ed. James Gibson. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2001.

(4)手紙

Purdy, Richard Little, and Michael Millgate, eds. *The Collected Letters of Thomas Hardy*. 8 vols. Oxford: Clarendon Press, 1978-2012.

(5)伝記

Hardy, Florence Emily. *The Life of Thomas Hardy: 1840-1928*. London: Macmillan, 1962.

(6)序文・エッセイを集めたもの、メモ集

Orel, Harold, ed. *Thomas Hardy's Personal Writings: Prefaces, Literary Opinions, Reminiscences*. London: Macmillan, 1967.

Taylor, Richard H, ed. *The Personal Notebooks of Thomas Hardy*. London: Macmillan, 1978.

Ⅱ. 第二次資料

(1)英語資料

Altick, Richard D. *Victorian People and Ideas: A Companion for the Modern Reader of Victorian Literature*. New York: Norton, 1973. リチャード・D.オールティック
要田圭治ほか訳『ヴィクトリア朝の人と思想』音羽書房鶴見書店、1998年。

Angus, Joseph. *Handbook of the English Tongue for the Use of Students and Others*. London: The Religious Tract Society, 1872.

Atkinson, C. T. "The Foreign Element in the British Army, 1793-1815." *The Journal of the Royal United Service Institution* 433(1914): 289-320.

Austen, Jane. *Pride and Prejudice*. 1813. London: Penguin, 2002.

Babb, Howard. "Setting and Them in *Far From the Madding Crowd*." *Thomas Hardy Critical Assessments*. Ed. Graham Clarke. Vol.4. Mountfield: Helm Information, 1993. 31-41.

Bates, Jonathan. "Culture and Environment: From Austen to Hardy." *New Literary History* 30(1994):541-60.

Baines, Dudley. *Emigration from Europe, 1815-1930*. Basingstoke: Macmillan, 1991.

Beer, Gillian. "Can the Native Return?" *The Return of the Native*. By Thomas Hardy. Ed. Phillip Mallett. New York: W.W. Norton, 2006. 504-23.

Bownas, Jane L. *Thomas Hardy and Empire: The Representation of Imperial Themes in the Work of Thomas Hardy*. Surry: Ashgate, 2012.

Brady, Kristin. *The Short Stories of Thomas Hardy: Tales of Past and Present*. Basingstoke: Macmillan, 1982.

---. Introduction. *The Withered Arm and Other Stories 1874-88*. By Thomas Hardy. London: Penguin, 1999. xviii-xxxvii.

---. Notes. *The Withered Arm and Other Stories 1874-88*. By Thomas Hardy. London:

- Penguin, 1999. 358-94.
- Breen, T. H. "Interpreting New World Nationalism." *Nationalism in the New World*. Ed. Don. H. Doyle and Marco Antonio Pamplona. Georgia: U of Georgia P. 41-59.
- Brown, Douglas. *Thomas Hardy*. Westport: Greenwood Press, 1980.
- Brontë, Emily. *Wuthering Heights*. 1847. London: Penguin, 1995.
- Burke, Kathleen. "Canada in Britain: Returned Migrants and the Canada Club." *Emigrant Homecomings: The Return Movement of Emigrants, 1600-2000*. Ed. Marjory Harper. Manchester: Manchester UP, 2005. 184-96.
- Cecil, David. *Hardy the Novelist: An Essay in Criticism*. London: Constable, 1954.
- Chambers, J.K. "Canadian English 250 Years in the Making." *Canadian Oxford Dictionary*. Ed. Katherine Barber. Oxford: Oxford UP, 1998. ix-x.
- Chappell, Mike. *The King's German Legion (1)*. Oxford: Osprey, 2009.
- Chartrand, René. *Émigré and Foreign Troops in British Service (2) 1803-15*. Oxford: Osprey, 2000.
- Clarke, I. F., ed. *The Tales of the Next Great War, 1871-1914*. Liverpool: Liverpool UP, 1995.
- Cobbett, William. *A Grammar of the English Language, in a Series of Letters: Intended for the Use of Schools and of Young Persons in General, but More Especially for the Use of Soldiers, Sailors, Apprentices, and Plough-Boys*. New York: Clayton and Kingsland, 1818.
- Colley, Linda. *Britons: Forging the Nation*. Oxon: Routledge, 1990. リンダ・コリー 川北稔監訳『イギリス国民の誕生』名古屋大学出版、2000年。
- Cox, R.G. ed. *Thomas Hardy: The Critical Heritage*. London: Routledge and Kegan Paul, 1970.
- Cunningham, Gail. *The New Woman and the Victorian Novel*. London: Macmillan, 1978.
- Dalziel, Pamela. "Hapless 'Destiny': An Uncollected Story of Marginalized Lives." *The Thomas Hardy Journal* 8(1992): 41-49.
- "Deus ex machine." *A Dictionary of Literary Terms*. Martin Gray. Harlow: Longman York Press, 1984.

- Dickens, Charles. *David Copperfield*. 1849. London: Penguin, 2004.
- Duffin, H.C. *Thomas Hardy: A Study of the Wessex Novels, the Poems, and the Dynasts*. Manchester: Manchester UP, 1937.
- “Earth Mysteries.” *Britannia*. 12 Feb. 2016.
 〈<http://www.britannia.com/wonder/druids.html>〉 .
- “Eu.” *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. New York: Oxford UP, 1989.
- “Falmouth Packet Service.” *Official Town Website Falmouth*. 4 Mar. 2015.
 〈<http://www.falmouth.co.uk/discover-falmouth/history/packet-service>〉 .
- Fielding, Henry. “The Grub-Street Opera.” *The Complete Works of Henry Fielding*. Vol.2. London: William Heinemann, 1903. 207-78.
- Firor, Ruth. *Folkways in Thomas Hardy*. New York: A. S. Barnes, 1962.
- Fishberg, Maurice. “Physical Anthropology of the Jews II.--Pigmentation.” *American Anthropologist*. 5.1(1903): 89-106.
- Gatrell, Simon. *Hardy the Creator: A Textual Biography*. Oxford: Clarendon Press, 1988.
- “Georgian Walk.” *Weymouthwalks.co.uk*. 20 Mar. 2015.
 〈<http://www.weymouthwalks.co.uk/sample-page/georgian-walk-part-two/>〉 .
- Gilbert, Pamela K. *Cholera and Nation: Doctoring the Social Body in Victorian England*. Albany: State U of New York P, 2008.
- Gilmartin, Sophie and Rod Mengham. *Thomas Hardy's Shorter Fiction: A Critical Study*. Edinburgh: Edinburgh UP, 2007.
- Girouard, Mark. *Life in the English Country House: A Social and Architectural History*. Harmondsworth: Penguin, 1980.
- Gray, Thomas. “Elegy Written in a Country Churchyard.” *The Works of Thomas Gray, in Prose and Verse*. Ed. Edmund Gosse. Vol. 1. New York: AMS Press, 1968. 71-80.
- Gregor, Ian. *The Great Web: The Form of Hardy's Major Fiction*. London: Faber & Faber, 1974.
- Guiley, Rosemary Ellen. *The Encyclopedia of Witches, Witchcraft, and Wicca*. New York: Facts On File, 2008.
- Hardy, Evelyn. *Thomas Hardy: Critical Biography*. London: The Hogarth Press, 1954.

- Harper, Marjory. Introduction. *Emigrant Homecomings: The Return Movement of Emigrants, 1600-2000*. Ed. Marjory Harper. Manchester: Manchester UP, 2005. 1-15.
- Harper, Marjory, and Stephen Constantine. *Migration and Empire*. Oxford: Oxford UP, 2010.
- Harvey, Geoffrey. *The Complete Critical Guide to Thomas Hardy*. London: Routledge, 2003.
- Hawkins, Desmond. *Hardy: Novelist and Poet*. London: Macmillan, 1976. デズモンド・ホーキンス 前川哲郎ほか訳『小説家・詩人ハーディ評伝』千城、1981年。
- Haydon, Colin. “‘I love my King and my Country, but a Roman Catholic I hate’: Anti-Catholicism, Xenophobia and National Identity in Eighteenth-Century England.” Ed. Tony Claydon and Ian McBride. *Protestantism and National Identity: Britain and Ireland, 1650-1850*. Cambridge: Cambridge UP, 2007. 33-52.
- Holland, Clive. *Thomas Hardy's Wessex Scene*. New York: Haskell House Pub Ltd, 1948.
- Holmes, Colin. “Hostile Images of Immigrants and Refugees in Nineteenth and Twentieth-Century Britain.” *Migration, Migration History, History: Old Paradigms and New Perspectives*. Ed. Jan Lucassen and Leon Lucassen. Bern: Peter Lang, 1997. 317-34.
- Hoppen, K. Theodore. *The Mid-Victorian Generation 1846-1886*. Oxford: Clarendon Press, 2008.
- Howe, Irving. “A Note on Hardy’s Stories.” *The Hudson Review* 19(1966): 259-66.
---. *Thomas Hardy*. New York: Macmillan, 1967.
- Howkins, Alan. *Reshaping Rural England: A Social History 1850-1925*. Oxon: Routledge, 1991.
- Hughes, Geoffrey. *Political Correctness: A History of Semantics and Culture*. West Sussex: Wiley-Blackwell, 2009.
- Hunt, Peter. *A Brief History of Jersey*. Sussex: Société Jersiaise, 1998.
- Hutton, Ronald. *The Pagan Religions of the Ancient British Isles: Their Nature and*

- Legacy*. Oxford: Basil Blackwell Ltd., 1991.
- “Indian Mail.” *Ships-worldwide.com*. 25 July. 2015.
 <<http://www.trains-worldexpresses.com/webships/400/402.htm>>
- Ingham, Patricia. *Thomas Hardy*. Oxford: Oxford UP, 2003.
- “The Invasion That Wasn’t.” *Dorsetlife.co.uk*. 23 Mar. 2015.
 <<http://www.dorsetlife.co.uk/2007/01/the-invasion-that-wasnt/>> .
- Johnson, Bruce. “Pastoralism and Modernity.” *Thomas Hardy’s The Return of the Native*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House, 1987. 111-36.
- Johnson, Samuel. *A Dictionary of the English Language*. 1755. London: Penguin, 2007.
- Joyce, Patrick. *Visions of the People: Industrial England and the Question of Class, 1848-1914*. Cambridge: Cambridge UP, 1993.
- Kay-Robinson, Denys. *The Landscape of Thomas Hardy*. Exeter: Webb & Bower, 1984.
- Kennedy, Catriona. *Narratives of the Revolutionary and Napoleonic Wars: Military and Civilian Experience in Britain and Ireland*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2013.
- Kettle, Arnold. “*Tess of the d’Urvilles*.” *An Introduction to English Novel*. Vol.2. London: Hutchinson University Library, 1967. 45-56.
- “The King’s Arms, Dorchester.” *Victorianweb.org*. 6 Mar. 2015.
 <<http://www.victorianweb.org/photos/hardy/20.html>> .
- Lanning, George. “Hardy and the Hanoverian Hussars.” *Thomas Hardy Journal* 6(1990): 69-73.
- Linn, Andrew. “English Grammar Writing.” *The Handbook of English Linguistics*. Ed. Bas Aarts and April McMahon. Malden: Blackwell publishing, 2006. 72-92.
- Lockyer, Herbert. *All the Women of the Bible*. Michigan: Zondervan, 1967. 48-50.
- Lodge, David. *The Modes of Modern Writing: Metaphor, Metonymy, and Typology of Modern Literature*. Ithaca, N.Y. : Cornell UP, 1977.
- Mallet, Phillip V. “Thomas Hardy: An Idiosyncratic Mode of Regard.” *A Spacious Vision*. Newmill: The Patten Press, 1994. 18-32.
- Martin, Ged. “Canada from 1815.” *The Oxford History of the British Empire: The Nineteenth Century*. Ed. Andrew Porter. Oxford: Oxford UP, 1999. 522-45.

- “Metonymy.” *A Dictionary of Literary Terms*. Martin Gray. Harlow: Longman York Press, 1984.
- Meyer, Susan. *Imperialism at Home: Race and Victorian Women’s Fiction*. New York: Cornell UP, 1996.
- Millgate, Michael. *Thomas Hardy: A Biography*. New York: Random House, 1982.
- Milward, Peter. *Seasons in England*. Ed. Kazuo Tamura. Tokyo: NAN’UN-DO, 1976.
- Morgan, Rosemary. *Cancelled Words: Rediscovering Thomas Hardy*. London: Routledge, 1992.
- Morgan, Rosemary and Shannon Russell. Notes. *Far from the Madding Crowd*. By Thomas Hardy. London: Penguin, 2003. 354-91.
- Morrell, Roy. “A Novel as an Introduction to Hardy’s Novels.” *Thomas Hardy: Three Pastoral Novels*. Ed. R. P. Draper. London: Macmillan, 1987. 116-37.
- Murray, Lindley. *English Grammar Adapted to the Different Classes of Learners; with an Appendix, Containing Rules and Observations, for Assisting the More Advanced Students to Write with Perspicuity and Accuracy*. 1795. Hallowell: Goodale Grazier & Co. and C. Spaulding, 1823.
- “Obscure.” *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. New York: Oxford UP, 1989.
- “Obtaining a Divorce.” *Parliament. uk*. 27 Feb. 2013.
 < <http://www.parliament.uk/about/living-heritage/transformingsociety/private-lives/relationships/overview/divorce/> > .
- Ogilvie, John. *Imperial Dictionary of the English Language*. 1847-55. Charleston: Nabu Press, 2010.
- Page, Norman. “Hardy and Brazil.” *Notes and Queries* 30(1983): 319-20.
- . *Oxford Reader’s Companion to Hardy*. Oxford: Oxford UP, 2000.
- “P&O History.” *P&O Heritage. com*. 25. July. 2015.
 <<http://www.poheritage.com/our-history/timeline>>
- Paterson, John. “*The Mayor of Casterbridge as Tragedy*.” *Victorian Studies* 3(1959): 151-72.
- . *The Making of The Return of the Native*. Westport: Greenwood Press, 1978.
- Piggot, Stuart. *The Druids*. New York: Frederick A. Praeger, 1968.

- Purdy, Richard Little. *Thomas Hardy: A Biographical Study*. Oxford: Clarendon Press, 1954.
- Ray, Martin. *Thomas Hardy: A Textual Study of the Short Stories*. Aldershot: Ashgate, 1997.
- Richardson, Charles. *A New Dictionary of English Language*. 1836-37. Charleston: Nabu Press, 2010.
- Said, Edward W. *Orientalism*. 1978. New York: Penguin, 1995. エドワード・W.サイード 今沢紀子訳『オリエンタリズム』全2巻 平凡社、1993年。
- . *Culture and Imperialism*. 1993. London: Vintage, 1994. エドワード・W.サイード 大橋洋一訳『文化と帝国主義』全2巻 みすず書房、1998-2000年。
- Shakespeare, William. *The Merchant of Venice*. 1596-97. Walt-on-Thames: Thomas Nelson and Sons, 2010.
- . *Hamlet*. 1603. Walt-on-Thames: Thomas Nelson and Sons, 1982.
- . *Othello*. 1604. Walt-on-Thames: Thomas Nelson and Sons, 1997.
- . *King Lear*. 1605-06. Walt-on-Thames: Thomas Nelson and Sons, 1997.
- Shelley, Edward. *The People's Grammar, or English Grammar without Difficulties for 'The Million'*. Huddersfield: Bond & Hardy, 1848.
- Shires, Linda M. "The Radical Aesthetic of *Tess of the D'Urbervilles*." *The Cambridge Companion to Thomas Hardy*. Ed. Dale Kramer. Cambridge: Cambridge UP, 1999. 145-63.
- Showalter, Elaine. "Syphilis, Sexuality, and the Fiction of the Fin de Siècle." *Sex Politics, and Science in the Nineteenth-Century Novel*. Ed. Ruth Bernard Yeazell. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1986. 88-115.
- "Skimmington." *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. New York: Oxford UP, 1989.
- Slade, Tony. Notes. *The Return of the Native*. By Thomas Hardy. London: Penguin, 1999. 397-428.
- Smiles, Samuel. *Self-Help*. 1859. New York: Thomas Y. Crowell & Co., [n.d.].
- Sneidern, Maja-Lisa von. "Wuthering Heights and the Liverpool Slave Trade." *ELH* 62(1995): 171-96.
- Southerington, F. R. *Hardy's Vision of Man*. London: Chatto and Windus, 1971.

- Southey, Robert. "The Battle of Blenheim." *The Poetical Works of Robert Southey, Collected by Himself*. Vol.6. London: Longman, Orme, Brown, Green, & Longmans, 1838. 151-53.
- Spangenberg, Bradford. *British Bureaucracy in India: Status, Policy and the I.C.S., in the Late 19th Century*. New Delhi: Manohar, 1976.
- Spiers, Edward M. *The Army and Society, 1815-1914*. London: Longman, 1980.
- Springer, Marline. *Hardy's Use of Allusion*. Kansas: UP of Kansas, 1983.
- Squires, Michael. *The Pastoral Novel: Studies in George Eliot, Thomas Hardy, and D. H. Lawrence*. Charlottesville: UP of Virginia, 1974.
- Stave, Shirley A. *The Decline of the Goddess: Nature, Culture and Women in Thomas Hardy's Fiction*. Westport: Greenwood Press, 1995.
- Steel, Gayla R. *Sexual Tyranny in Wessex: Hardy's Witches and Demons of Folklore*. New York: Peter Lang Publishing, Inc., 1993.
- Stoler, Ann Laura. *Canal Knowledge and Imperial Power: Race and the Intimate in Colonial Rule*. Berkeley: U of California P, 2002. アン・ローラ・ストラー 永渕康之・水谷智・吉田信訳『肉体の知識と帝国の権力』以文社、2010年。
- Sumner, Rosemary. *Thomas Hardy: Psychological Novelist*. London: Macmillan, 1981.
- Varouxakis, Georios. *Victorian Political Thought on France and the French*. New York: Palgrave, 2002.
- "Vere." *Dictionary of National Biography*. London: Oxford UP, 1917.
- Wadsworth, Frank W. "'Rough Music' in the Duchess of Mulfi: Webster's Dance of Madmen and the Charivari Tradition." *Rite, Drama, Festival, Spectacle: Rehearsals toward a Theory of Cultural Performance*. Ed. John J. MacAloon. Philadelphia: The Institute for the Study of the Human Issue, 1984. 58-75.
- White, Heyden. *Metahistory: The Historical Imagination in Nineteenth-Century Europe*. Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1975.
- . *Tropics of Discourse: Essays in Cultural Criticism*. Baltimore: The John Hopkins UP, 1978.
- Widdowson, Peter. *Hardy in History: A Study in Literary Sociology*. London: Routledge, 1989.

- . "Hardy and Critical Theory." *The Cambridge Companion to Thomas Hardy*. Ed. Dale Kramer. Cambridge: Cambridge UP, 1999. 73-92.
- Wilden, Anthony. *The Rules Are No Game: The Strategy of Communication*. London: Routledge and Kegan Paul, 1987.
- Williams, Merryn. *Thomas Hardy and Rural England*. London: Macmillan, 1972.
- Williams, Raymond. *The Country and the City*. New York: Oxford UP, 1973.
- Wilson, Keith. Notes. *The Mayor of Casterbridge*. By Thomas Hardy. London: Penguin, 2003. 323-70.
- Wilson, Keith, and Kristin Brady. Introduction. *The Fiddler of the Reels and Other Stories*. By Thomas Hardy. London: Penguin, 2003. xx-xlvi.
- . Notes. *The Fiddler of the Reels and Other Stories*. By Thomas Hardy. London: Penguin, 2003. 277-319.
- Winfield, Christine. "Factual Sources of Two Episodes in *The Mayor of Casterbridge*." *Nineteenth-Century Fiction* 25(1970): 224-31.
- "Wood." *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. New York: Oxford UP, 1989.
- Wollstonecraft, Mary. *A Vindication of the Rights of Woman*. 1792. London: Penguin, 2004.
- Wotton, George. *Thomas Hardy: Towards a Materialist Criticism*. Totowa: Barnes & Noble Books, 1985.

(2)日本語資料

- 「アナスタシア」梅田修『ヨーロッパ人名語源事典』大修館、2002年。
- 鮎沢乗光『トマス・ハーディの小説の世界』開文社出版、1984年。
- 伊藤秋仁「19世紀のサン・パウロの発展とイタリア人移民」*Cosmica: area studies* 第43号、京都外国語大学国際言語平和研究所、2013年、75-100頁。
- 井野瀬久美恵編『大英帝国という経験』講談社、2007年。
- 今井宏編『イギリス史』第2巻 山川出版社、1990年。
- ウィーナ、マーティン・J. 原剛訳『英国産業精神の衰退:文化史的接近』勁草書房、1984年。
- 内田能嗣「はしがき」藤田繁・内田能嗣監訳『人生の小さな皮肉』大阪教育図書、2002年、317-19頁。

- エリアード、ミルチア 中村恭子訳『世界宗教史』第6巻 筑摩書房、2000年。
- 風間末起子「*The Mayor of Casterbridge*における劇的瞬間」『ハーディ研究』第35号、
日本ハーディ協会、2009年、35-50頁。
- 北脇徳子「カスターブリッジと町の人たち」『京都精華大学紀要』第27号、2004年、214-28
頁。
- 木畑洋一「イギリス近代国家とスコットランド、ウェールズ」柴田三千雄他編『世界の構
造化』岩波書店、1991年、171-72頁。
- キャンブル、R.H. 「ヴィクトリア時代の変容」富田理恵・家入葉子訳『スコットランド
史：その意義と可能性』未来社、1998年、168-86頁。
- 金七紀男・住田育法・高橋都彦・富野幹雄 『ブラジル研究入門—知られざる大国の500
年の軌跡—』昇洋書房、2000年。
- グリーン、ミランダ・ジェーン 井村君江・大出健訳『図説ドルイド』東京書籍、1997
年。
- 「サイモン」梅田修『ヨーロッパ人名語源事典』大修館、2002年。
- 坂田薫子「ハーディとカントリーハウス—ジェイン・オースティンとの比較を通して」『ハ
ーディ研究』第37号、日本ハーディ協会、2011年、1-14頁。
- . 「『微熱の人』と大英帝国—ポストコロニアル批評で読むトマス・ハーディ」『ハーデ
ィ研究』第38号、日本ハーディ協会、2012年、31-49頁。
- 定松正『イギリス児童文学紀行』玉川大学出版部、2004年。
- 佐藤唯行『英国ユダヤ人：共生を目指した流転の民の苦闘』講談社、1995年。
- シェリントン、ジョフリー 加茂恵津子訳『オーストラリアの移民』勁草書房、1985年。
- 「シメオン」梅田修『ヨーロッパ人名語源事典』大修館、2002年。
- 鈴木淳「魔女は溺死するのか？—『帰郷』を政治的視点から再読する」『ハーディ研究』第
35号、日本ハーディ協会、2009年、68-81頁。
- 『聖書』日本聖書協会、1993年。
- ソフォクレス 藤沢令夫訳『オイディプス王』岩波書店、1967年。
- 田中亮三『図説英国貴族の城館：カントリー・ハウスのすべて』河出書房新社、1999年。
- 丹治愛『ドラキュラの世紀末—ヴィクトリア朝外国恐怖症の文化研究』東京大学出版、1997
年。
- 都留信夫「ハーディとウェセックス」日本ハーディ協会編『トマス・ハーディ全貌』音羽

- 書房鶴見書店、2007年、668-86頁。
- 野内良三『レトリック入門』世界思想社、2002年。
- 野村京子『『ダーバヴィル家のテス』異者化されたアレック像』日本ハーディ協会編『トマス・ハーディ全貌』音羽書房鶴見書店、2007年、270-87頁。
- . 『『テス』におけるブラジル表象—破壊と再生—』『ハーディ研究』第36号、日本ハーディ協会、2010年、37-54頁。
- 浜渦哲雄『英国紳士の植民地統治—インド高等文官への道』中公新書、1991年。
- ピゴット、スチュアート 鶴岡真弓訳『ケルトの賢者「ドルイド」：語りつがれる「知」』講談社、2000年。
- ヒューズ、P. 早乙女忠訳『呪術：魔女と異端の歴史』筑摩書房、1968年。
- ファウスト、ボリス 鈴木茂訳『ブラジル史』明石書店、2008年。
- フィリップ、スチュアート 山岸勝栄・日野寿憲訳『イギリス少数民族史』こびあん書房、1988年。
- 深澤俊編『ハーディ小事典』研究社出版、1993年。
- 福岡忠雄『読み直すトマス・ハーディ』松籟社、2011年。
- 藤井繁『黄昏』千城、1998年。
- フックス、エドゥアルト 羽田功訳『ユダヤ人カリカチュア—風刺画に描かれた「ユダヤ人」—』柏書房、1993年。
- 船水直子「ユーステイシアを捕らえたもの」『ハーディ研究』第34号、日本ハーディ協会、2008年、12-23頁。
- 星名定雄『イギリス郵便史文献散策』郵研社、2012年。
- ポリアコフ、レオン 菅野賢治訳『反ユダヤ主義の歴史—ヴォルテールからヴァーグナーまで—』筑摩書房、2005年。
- 村岡健次『近代イギリスの社会と文化』ミネルヴァ書房、2002年。
- 村岡健次・木畑洋一編『イギリス史』第3巻 山川出版社、1991年。
- メトカーフ、バーバラ・D、トーマス・R・メトカーフ 河野肇訳『インドの歴史』創土社、2006年。
- 森田由香「僕たちは多すぎた—リトル・ファーザー・タイム再考—」『「ジュード」についての11章』英宝社、2003年、55-78頁。
- 森松健介『テキストたちの交響詩：トマス・ハーディ 14の長編小説』中央大学出版部、

2006年。

モロワ、アンドレ 水野成夫・小林正訳『英国史』上巻 新潮社、1957年。

初出一覧

第 2 章：口頭発表「『ラッパ隊長』と「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」における意味の二重構造
—主に外国人兵士たちを中心にして」

日本ハーディ協会第 55 回大会、2012 年 10 月 13 日、於：武庫川女子大学

「『ラッパ隊長』と「憂鬱なドイツ軍軽騎兵」における意味の二重構造—主に外国
人兵士たちを中心にして」

『ハーディ研究』第 39 号、日本ハーディ協会、2013 年、15-33 頁。

第 3 章：口頭発表「『日陰者ジュード』にみられるトマス・ハーディの国際感覚—イギリ
スとオーストラリアを巡って」

第 114 回十九世紀英文学研究会、2013 年 12 月 21 日、於：同志社女子大学

「トマス・ハーディの『日陰者ジュード』—登場人物を通して見るイギリスとオ
ーストラリア」

『研究論集』第 99 号、関西外国語大学・関西外国語短期大学部、2014 年、21-38
頁。

第 4 章：口頭発表「トマス・ハーディの短編小説「運命と青いマント」—オズワルドとイ
ンド高等文官」

シルフェ英語英米文学会年次大会、2011 年 6 月 11 日、於：明治学院大学

「トマス・ハーディの短編小説「運命と青いマント」—オズワルドとインド高等
文官」

『シルフェ』第 51 号、シルフェ英語英米文学会、2012 年 2 月 1 日発行、1-10
頁。

第 5 章：「トマス・ハーディの『カスターブリッジの町長』—カスターブリッジに投影さ
れた大英帝国」

田村一男監修『英米文学の地平：W.ワーズワスから日系アメリカ人作家まで』、
金星堂、2012年、63-81頁。